

具同中山遺跡群 V

県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書

2001.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



調査区遠景（西上空より）



SX2 木製品出土状態（北より）

序

高知県西部の幡多地域では、公共事業の進展及び開発に伴いこれまでに多くの発掘調査が行われてきました。近年では四万十川支流の中筋川流域で、河川改修・道路建設に伴う調査が継続的に行われ、縄文時代から中世にかけての貴重な資料が出土しています。その中でも中筋川左岸に位置する具同中山遺跡群は、高知県内最大規模の祭祀遺跡として従来より周知されており、これまでに数度の発掘調査が行われてきました。

今回調査を行いました具同中山遺跡群Ⅴは、広大な遺跡の北東部にあたります。旧地形の微高地から後背低地へと落ち込む地点に当たり、微高地上では弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての祭祀跡と考えられる遺構・遺物が検出されています。また低地部では木製品を用いた遺構が見つかっており、当時の土地利用のあり方を考える上でも重要な資料を得ることができました。この報告書が埋蔵文化財の保護及び今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施、報告書作成にあたりまして、高知県中村土木事務所の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力を賜りましたことに心から謝意を表するとともに、発掘調査に従事していただいた作業員の皆様をはじめ、多大なご指導とご教示をいただいた関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成13年 3月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 門田 伍朗

例 言

- 1 本書は、県道中村下ノ加江線道路建設に伴う具同中山遺跡群Vの発掘調査報告書である。
- 2 具同中山遺跡群は中村市具同に所在する。
- 3 発掘調査は高知県の委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。具同中山遺跡群の試掘調査は、平成9年11月から平成10年1月まで実施した。本調査は平成10年10月から平成11年3月まで実施した。調査面積は、1,419m²（2面で2,838m²）である。
- 4 発掘調査は以下の体制で行った。

総 括 財団法人高知県埋蔵文化財センター所長 古谷 碩志（平成10年度）、河崎 正幸（平成11年度）、門田 伍朗（平成12年度）

総 務 一同次長兼総務課長 津野 洲夫（平成10年度）、島内 信雄（平成11・12年度）、
同主任 山本 三津子（平成11・12年度）、同主幹 石川 馨（平成10年度）、大原 裕幸、
同臨時職員 山崎 詠子

調査総括一同課長 西川 裕（平成10・11年度）、重森 勝彦（平成12年度）

調査担当一同第5係長 松田 直則（現第5班長）、同調査員 小野 由香、高知県文化振興課文化財保護室社会教育主事 松田 知彦、技術補助員 川村 健一、測量補助員 岡崎 真紀
- 5 本書の執筆、編集は、小野由香が行った。
- 6 遺構についてはP（ピット）、SX（性格不明遺構）、炭化物集中跡、円礫集中、土器集中、遺物集中ブロックに分け表示している。遺構番号は各遺構ごとの通し番号とした。
- 7 遺構、遺物の測量及び写真撮影は各調査員、補助員が行った。2区の遺物出土状態の測量及び図化、航空写真についてはアジア航測株式会社に委託した。
- 8 自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に、木製品の保存処理及び樹種同定については、株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 9 遺物については、原則として土器、石器類は縮尺1/3で、木製品は適宜縮尺を変更している。遺物番号は、通し番号で写真図版の番号と一致している。
- 10 現地調査及び本報告書執筆にあたり、高知県埋蔵文化財センターの森田尚宏氏、前田光雄氏、出原恵三氏、小島恵子氏、名木郁氏をはじめとする、同センターの諸氏から貴重な助言を賜った。また、発掘調査参加者をはじめ、整理作業で協力していただいた方々は下記のとおりである。記して感謝する次第である。

発掘調査参加者

秋森 広松 岡本 定美 岡本 覚 岡本 寿美子 岡本 弘美 岡本 芳子 沖 和子
川村 勉 沢田 建男 宗崎 重孝 長崎 竹美 中山 末子 野並 廬 橋田 逸於
浜田 昌一 平地 五月 前田 耕作 森本 勝一

整理作業については、以下の方々にご協力頂いた。

井澤 久未 岡崎 正子 竹村 延子 原 美智代 松村 文枝 山中 美代子 山本 裕美子
吉本 由香
- 11 出土遺物は、「98-3GN」と注記し、高知県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

第Ⅰ章 調査の契機と経過	1
第1節 契機と経過	1
第2節 調査日誌抄	1
第Ⅱ章 地理的、歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 調査の概要	9
第1節 調査の方法	9
第2節 調査区の概要	10
1. 1区	11
2. 2区	14
第Ⅳ章 遺構と遺物	16
第1節 1区	16
1. 弥生時代後期～古墳時代初頭	16
2. 古墳時代	49
第2節 2区	57
1. 古墳時代初頭	57
第Ⅴ章 まとめ	97
1. 調査成果から	97
2. 出土土器について	97
3. 具同中山遺跡群Ⅴにみられる礫の特徴	102
4. 四万十川流域の祭祀遺跡－主に石を用いた祭りについて－	106
5. 具同中山遺跡群Ⅴの位置付け	111
付論	
1. 具同中山遺跡群Ⅴの自然科学調査(パリノ・サーヴェイ株式会社)	114
2. 具同中山遺跡群Ⅴ出土木製品の樹種調査結果(株式会社吉田生物研究所)	123

挿図目次

第1図	発掘調査風景 1	2
第2図	発掘調査風景 2	2
第3図	発掘調査風景 3	3
第4図	発掘調査風景 4	3
第5図	発掘調査風景 5	4
第6図	発掘調査風景 6	4
第7図	中村市位置図	5
第8図	周辺の遺跡分布図(S=1/50,000)	7
第9図	調査区設定図(S=1/5,000)	9
第10図	調査区周辺の地形図(S=1/10,000)	10
第11図	1区東壁セクション図	12
第12図	1区北壁セクション図	12
第13図	1区グリッド及び遺物集中ブロック1～6設定図(S=1/400)	13
第14図	2区北壁セクション図	14
第15図	2区グリッド及び遺物集中ブロック7～12設定図(S=1/400)	15
第16図	P1半裁セクション図	16
第17図	炭化物集中 1～10	17
第18図	炭化物集中11～19	19
第19図	小礫集中 1・2	21
第20図	1区出土遺物の平面及び垂直分布図(S=1/400)	22
第21図	遺物集中ブロック1位置図	23
第22図	遺物集中ブロック1出土遺物実測図 1	24
第23図	遺物集中ブロック1出土遺物実測図 2	25
第24図	遺物集中ブロック1出土遺物実測図 3	26
第25図	遺物集中ブロック1出土遺物実測図 4	27
第26図	遺物集中ブロック1出土遺物分布及び接合関係図	29～30
第27図	遺物集中ブロック2位置図	31
第28図	遺物集中ブロック2出土遺物実測図 1	32
第29図	遺物集中ブロック2出土遺物実測図 2	33
第30図	遺物集中ブロック2出土遺物実測図 3	34
第31図	遺物集中ブロック3位置図	34
第32図	遺物集中ブロック2出土遺物分布及び接合関係図	35
第33図	遺物集中ブロック4位置図	36
第34図	遺物集中ブロック3出土遺物実測図 1	37
第35図	遺物集中ブロック3出土遺物実測図 2	38
第36図	遺物集中ブロック3出土遺物分布及び接合関係図	39～40
第37図	遺物集中ブロック4出土遺物実測図 1	41
第38図	遺物集中ブロック4出土遺物実測図 2	42
第39図	遺物集中ブロック4出土遺物実測図 3	43

第40図	遺物集中ブロック5 位置図	44
第41図	遺物集中ブロック5 出土遺物実測図	45
第42図	遺物集中ブロック4 出土遺物分布及び接合関係図	46
第43図	遺物集中ブロック5 出土遺物分布及び接合関係図	47
第44図	遺物集中ブロック6 位置図	48
第45図	土器集中1・2 平面図及び遺物実測図	50
第46図	高杯142・143 出土状態模式図	51
第47図	土器集中3 平面図及び遺物実測図	51
第48図	1区第XV層出土遺物実測図	53
第49図	1区第XV・XVI層出土遺物実測図	54
第50図	1区第XVI・XVII・XXII層出土遺物実測図	55
第51図	1区遺構分布図(S=1/400)	56
第52図	炭化物集中20～23	57
第53図	小礫集中3・4	58
第54図	SX1・2 南壁セクション図	60
第55図	SX1～2 中央トレンチ南壁セクション図	60
第56図	SX1・2 検出状態図	61
第57図	SX1 遺物出土状態図	61
第58図	SX2 遺物出土状態及び断面図	63
第59図	SX1・2 出土木製品実測図	64
第60図	SX2 出土木製品実測図 1	65
第61図	SX2 出土木製品実測図 2	66
第62図	SX2 出土木製品実測図 3	67
第63図	SX2 出土木製品実測図 4	68
第64図	SX2 出土木製品実測図 5	69
第65図	2区出土遺物の平面及び垂直分布図(S=1/400)	70
第66図	遺物集中ブロック7 位置図	71
第67図	遺物集中ブロック8 位置図	71
第68図	遺物集中ブロック7 出土遺物実測図	72
第69図	遺物集中ブロック8 出土遺物実測図	73
第70図	遺物集中ブロック8・9 出土遺物実測図	75
第71図	遺物集中ブロック9 位置図	76
第72図	遺物集中ブロック9 出土遺物実測図	77
第73図	遺物集中ブロック10 位置図	78
第74図	遺物集中ブロック11 位置図	78
第75図	遺物集中ブロック10～12 出土遺物実測図	79
第76図	遺物集中ブロック12 位置図	80
第77図	2区第Ⅲ～Ⅳ層・Ⅵ層出土遺物実測図	81
第78図	2区遺構分布図	81

図版14 1区遺物集中ブロック出土土器(壺・甕)

図版15 1・2区遺物集中ブロック出土土器
(壺・甕)

図版16 2区遺物集中ブロック出土土器
(壺・甕・鉢)

図版17 1区遺物集中ブロック出土土器(壺・甕)

図版18 1区遺物集中ブロック出土土器
(甕・鉢・甗・高杯)

図版19 1区土器集中・第XV層出土土器
(甕・鉢・高杯・手捏土器)

図版20 1区遺物集中ブロック出土土器(鉢)

図版21 1区遺物集中ブロック、土器集中、包
含層出土遺物

図版22 2区遺物集中ブロック出土土器
(壺・鉢・高杯)

図版23 1・2区遺物集中ブロック、包含層出土
石器

図版24 SX1・2出土木製品

図版25 SX1・2出土杭・木製品

図版26 SX2出土杭

図版27 1・2区遺物集中ブロック、包含層出土
木製品

図版目次

- 巻頭図版 **1** 調査区遠景(西上空より)
 SX2 木製品出土状態(北より)
- 図版 **1** 調査区遠景(香山寺山腹より)
 調査区遠景(東上空より)
- 図版 **2** **1** 区第 XVII 層遺物出土状態(西より)
 1 区第 XVII 層遺物出土状態(東より)
- 図版 **3** 遺物集中ブロック **1** (**8、44**)
 1 区完掘状態(西より)
- 図版 **4** **2** 区第Ⅲ～Ⅳ層遺物出土状態(東より)
 2 区第Ⅵ層遺物出土状態(東より)
- 図版 **5** **SX1** 木製品出土状態(南より)
 2 区完掘状態(東より)
- 図版 **6** **1** 区東壁セクション(西より)
 1 区北壁セクション・東部(南より)
 1 区北壁セクション・中央部(南より)
 1 区北壁セクション・西部(南より)
 P1 検出状態(西より)
 P1 半裁セクション(西より)
 炭化物集中 **1** (北より)
 炭化物集中 **1** 半裁セクション(東より)
- 図版 **7** 炭化物集中 **10** (北より)
 炭化物集中 **15** (西より)
 炭化物集中 **11** 半裁セクション(西より)
 柱根検出状態 (**181**)
 土器集中 **3** (東より)
 土器集中 **3** (西より)
 1 区第 XVII 層遺物出土状態(西より)
 遺物集中ブロック **1**・全体(北より)
- 図版 **8** 遺物集中ブロック **1** (南より)
 遺物集中ブロック **2** (北より)
 遺物集中ブロック **4** (東より)
 遺物集中ブロック **4** (北より)
 遺物集中ブロック **5**・全体(南より)
 遺物集中ブロック **6** (北より)
- 1** 区第 XXII 層遺物出土状態(西より)
1 区第 XXII 層甕出土状態 (**184**)
- 図版 **9** **2** 区北壁セクション・東部(南より)
 2 区北壁セクション・中央部(南より)
 SX1 検出状態(南より)
 SX1・**2** 検出状態(西より)
 SX1・**2** 南壁セクション(北より)
 SX1～**2** 中央トレンチ南壁セクション **1**
 (北より)
 SX1～**2** 中央トレンチ南壁セクション **2**
 (北より)
 炭化物集中 **21** (南より)
- 図版 **10** 炭化物集中 **22** (南より)
 炭化物集中 **22** 半裁セクション(西より)
 炭化物集中 **23** (北より)
 円礫集中 **3** (南より)
 円礫集中 **4**・遺物集中ブロック **11** (東より)
 SX2 木製品出土状態 (**189、190、204、207**)
 SX2 木製品出土状態 (**208**)
 SX2 杭出土状態 (**200、203、204、207**)
- 図版 **11** **2** 区第Ⅲ～Ⅳ層遺物出土状態(東より)
 遺物集中ブロック **8** (東より)
 遺物集中ブロック **8** (南より)
 遺物集中ブロック **8** (東より)
 石製品出土状態 (**260**)
 2 区第Ⅵ層遺物出土状態(北より)
 遺物集中ブロック **11** (北より)
 SX2 下完掘状態(西より)
- 図版 **12** **1** 区遺物集中ブロック出土土器(壺・甕)
 1 区遺物集中ブロック出土土器(鉢)
- 図版 **13** **1** 区遺物集中ブロック出土土器(甗)
 1 区遺物集中ブロック出土土器(甗)

図版14 1区遺物集中ブロック出土土器(壺・甕)

図版15 1・2区遺物集中ブロック出土土器
(壺・甕)

図版16 2区遺物集中ブロック出土土器
(壺・甕・鉢)

図版17 1区遺物集中ブロック出土土器(壺・甕)

図版18 1区遺物集中ブロック出土土器
(甕・鉢・甗・高杯)

図版19 1区土器集中・第XV層出土土器
(甕・鉢・高杯・手捏土器)

図版20 1区遺物集中ブロック出土土器(鉢)

図版21 1区遺物集中ブロック、土器集中、包
含層出土遺物

図版22 2区遺物集中ブロック出土土器
(壺・鉢・高杯)

図版23 1・2区遺物集中ブロック、包含層出土
石器

図版24 SX1・2出土木製品

図版25 SX1・2出土杭・木製品

図版26 SX2出土杭

図版27 1・2区遺物集中ブロック、包含層出土
木製品

第Ⅰ章 調査の契機と経過

第1節 契機と経過

具同中山遺跡群は中筋川左岸に所在し、昭和20年代の堤防工事の際偶然に発見されて以来、県内最大規模の古墳時代の祭祀遺跡として周知されている。これまでの発掘調査で、具同中山遺跡群からは古墳時代のほか、地点を変えて縄文時代から近世に至る遺物も出土しており、当地域が長期にわたって人々に利用されていたことが窺える。

これまでも中筋川下流域の具同地区では、建設省の河川改修、及び高規格道路建設計画によって数度の発掘調査が行われている。県道中村下ノ加江線工事は高規格道路建設に付随して計画されたもので、その第一回の発掘調査は平成9年度に行われている。今回の調査は県道中村下ノ加江線の二回目の発掘調査となる。

具同中山遺跡群Ⅴは平成9年度に行われた試掘調査の結果、弥生時代終末～古墳時代初頭の包含層が確認されており、当該期の遺物が今回の調査の主体を占めることが予測できた。遺跡の推定範囲は43万㎡で、今回調査対象となったのは高知県が計画している県道中村下ノ加江線整備事業で、影響を受けるとみられる約1,419㎡（2面で2,838㎡）の範囲である。

調査は平成10年度に高知県の委託を受け、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターによって実施された。調査期間は平成10年10月1日～平成11年3月19日までである。

第2節 調査日誌抄

1998年10月1日から1999年3月19日

- | | |
|---|--|
| <p>10. 1 廃土置き場の清掃など、調査前の作業を行う。</p> <p>10. 2 昨日に引き続き、調査前の作業として水路設置予定地の整備などを行う。また基準杭のレベル測量を行った。</p> <p>10. 4 調査前準備。表土層から包含層直上までの重機掘削を行う。</p> <p>10. 5 引き続き包含層直上までの重機掘削を行う。</p> <p>10. 6 包含層直上までの重機掘削を行う。</p> <p>10. 7 雨天のため作業中止。</p> <p>10. 8 調査区に沿って排水用の側溝を設置するなど、調査前の作業を行う。並行して重機掘削を行う。</p> <p>10. 9 昨日に引き続き、調査前作業と重機掘削を並行して行う。</p> <p>10.12 雨天のため作業中止。</p> <p>10.13 包含層上層までの重機掘削が終了する。</p> <p>10.14 本日より本格的な発掘調査を開始する。細長い調査区の東半部を1区、西半部を2区とし、1区から調査を行う。既に遺物包含層で</p> | <p>あるXV層上面で出土していた遺物の取上げを行う。</p> <p>10.15 降雨による排水作業、仮設道の整備を行う。</p> <p>10.16 雨天のため調査は中止したが、台風対策を行う。</p> <p>10.19 1区矢板際に水路を設置する作業を行う。</p> <p>10.20 1区東壁のセクション写真の撮影を行う。調査区の北側に矢板に沿って、土層確認用のトレンチを設定する。</p> <p>10.21 昨日に引き続き、土層確認用のトレンチ掘削を行う。これにより包含層が2面あることが土層断面からも確認できた。</p> <p>10.22 トレンチ掘削により、XV層の遺物は少量であることが判明したため、包含層の掘削を主に重機で行うことにし、重要な部分は人力掘削を行った。まとまりのある遺物は写真撮影、実測を行い取上げ、そうでないものは光波測距器を使って取上げた。</p> <p>10.23 雨天のため作業中止。</p> <p>10.26 先週に引き続き、XV～XVI層の掘削作業を行う。また現場周辺の水路の整備を行う。</p> |
|---|--|



第1図 発掘調査風景1

- 10.27** 雨天のため作業中止。調査区内の排水作業を行う。
- 10.28** XV～XVI層の重機掘削とともに、東部からXVII層の人力掘削を行う。またXV層の遺物の調査を行う。
- 10.29** 引き続き重機、人力での包含層掘削を行う。調査区内のグリッド杭を設置した。
- 10.30** 重機、人力掘削を行う。
- 11. 2** 先週に引き続き、XV～XVI層の重機掘削とXVII層の人力掘削を行う。調査区南部では植物根の密集部が認められた。
- 11. 3** 調査区南部で検出された柳と思われる根の密集は断面観察を行い、自然のものであることを確認した。全体の調査としては、包含層の掘削作業を行う。
- 11. 4** XVII層の人力掘削を西に向かって行う。掘削作業と並行して、順次遺物の実測を行った。
- 11. 5** 引き続きXVII層の人力掘削作業を行う。午後からは明日の写真撮影に備え、調査区東半部の清掃を行った。
- 11. 6** 調査区東半部の遺物出土状態の写真撮影を行う。撮影終了後、遺物の取上げ作業を行う。
- 11. 7** 炭化物集中部の調査を行う。土層観察、実測を行った。また炭化物の残りの良いものは、自然科学分析用のサンプルとして採取した。
- 11. 9** 引き続き炭化物集中部の調査と、調査区西半部の遺物包含層（XVII層）の人力掘削を行う。
- 11.10** 終日XVII層の人力掘削を行う。
- 11.11** 引き続き、XVII層の掘削を行う。また、遺物の実測作業を順次行った。
- 11.12** 終日XVII層の調査を行う。
- 11.13** 昨日に引き続き、終日XVII層の調査を行う。
- 11.16** 終日XVII層の調査を行う。調査区の西端部で検出された木の根の集中は、トレンチ確認を行い、柵などの遺構ではないことを確認した。
- 11.17** 調査区南端部のXVII層の掘削作業を行う。また出土遺物の実測を行った。
- 11.18** 調査区西半部の遺物出土状態の写真撮影に備えて、調査区全体の清掃を行う。
- 11.19** 引き続き調査区の清掃を行う。
- 11.20** 調査区西半部の遺物出土状態の写真撮影を高所作業車を使って行う。
- 11.24** 出土遺物の個別写真を撮影する。撮影終了後、遺物のレベル測量、取上げを行う。
- 11.25** 遺物のレベル測量後、取上げを行う。炭化物集中部の調査を行う。
- 11.26** 炭化物集中部の調査を行う。土層確認、実測を行った。また炭化物の残りの良いものは、自然科学分析用サンプルとして採取した。調査区東半部の遺構検出を行う。遺構は、中央部でピットを1個確認するにとどまった。
- 11.27** 調査区西半部の遺構検出を行う。
- 11.28** 炭化物集中部、及び前日検出されたピット状遺構の調査を行った。断面観察の結果人為的な遺構ではなく、地震の際の砂脈であることが確認された。
- 11.30** 引き続き炭化物集中部の調査を行う。
- 12. 1** 残っていたXVII層の調査が終了したため、調査区東部より弥生時代後期土器の出土したXXII層までの重機掘削を行った。出土遺物は僅少で、分布も稀薄であった。
- 12. 2** 雨天により作業中止。
- 12. 3** 降雨により作業は午前中で中止した。
- 12. 4** 重機掘削、人力掘削を行う。
- 12. 5** 降雨のため、全体の作業は中止。XXII層～XXV層までの重機掘削を行う。
- 12. 7** 雨天のため作業中止。
- 12. 8** 調査区東西トレンチの精査、写真撮影及びセクション図の作成を行う。調査区西部はXXIV層までの重機掘削を行うが、遺物は出土しな



第2図 発掘調査風景2

かった。

- 12. 9 調査区全景の写真撮影に備え、清掃を行う。
- 12.10 1区の完掘状態の写真撮影を行う。
- 12.11 本日で1区の調査を終了する。



第3図 発掘調査風景3

- 1.22 本日より2区の発掘調査に入る。既に表土層から包含層直上までの重機掘削が終了しているため、地表下2.9mから調査を行う。1区と同様、矢板に沿って調査区の東西方向に土層確認のトレンチを設定した。
- 1.23 終日トレンチ掘削を行う。
- 1.25 午前中は降雨により作業中止。午後から引き続きトレンチ掘削を行う。
- 1.26 トレンチによる土層の観察により、遺物包含層が2層確認できた。遺物包含層とみられるⅢ層上面まで、重機及び人力掘削を行った。
- 1.27～30 引き続きⅠ～Ⅱ層の掘削を重機、人力で行う。調査区西半部では酸化鉄が溝状に2条堆積する層が確認され、遺物はそれより東のみで出土することが確認された。酸化鉄の堆積を東からSX1、SX2とする。
- 2. 1 雨天のため午前中で作業中止。
- 2. 2 Ⅰ～Ⅱ層の重機、及び人力掘削を行う。調査区の中央部で木の根の集中を確認したが、土層の断面などから自然のものと考えられる。
- 2. 3 降雪のため作業中止。
- 2. 4 降雪のため作業中止。
- 2. 5 Ⅲ層の人力掘削と、SX1とした酸化鉄が溝状に堆積する部分の調査を行う。
- 2. 6 東西に設定した北壁セクションの写真撮影を行う。Ⅲ層の人力掘削を行う。
- 2. 8 SX1の検出写真を撮影した。
- 2. 9 Ⅲ層の人力掘削と、SX1の調査を行う。
- 2.10 引き続きSX1の調査を行う。出土遺物は写真撮影を行い、取り上げた。

- 2.11 雨天のため作業中止。
- 2.12 SX1の調査を行う。
- 2.15 SX1・2の調査を行う。
- 2.16 写真撮影に備えて、調査区全面の清掃を行う。
- 2.17 午前中清掃を行う。午後から第Ⅲ層遺物出土状態の写真撮影を行う。
- 2.18～20 アジア航測による遺物のデジタル測量を行う。
- 2.22 デジタル測量終了。その後、遺物の取上げを行う。
- 2.23 遺物の取上げを行う。炭化物集中部の調査を行う。
- 2.24 雨天のため作業中止。
- 2.25 調査区東から遺物包含層（Ⅵ層）の人力掘削を行うとともに、炭化物集中部の調査を行う。
- 2.26 引き続きⅥ層の人力掘削を行う。
- 3. 1 Ⅵ層の人力掘削を行う。
- 3. 2 引き続き、包含層の人力掘削を行う。並行して炭化物集中部の調査を行う。
- 3. 3～5 Ⅵ層の人力掘削を行う。
- 3. 8 SX2の杭列の調査を行う。並行して明日の写真撮影に備え、調査区の前清掃を行った。
- 3. 9 Ⅵ層の遺物出土状態の写真撮影を行う。撮影終了後、重機でSX2の西側の掘り下げを行った。
- 3.10 SX2の西側で出土した木製品の調査を行う。
- 3.11 ラジコン飛行機を使った調査区の航空写真撮影を行う。その後デジタル測量を行う。
- 3.12 終日デジタル測量を行う。
- 3.13 降雨により、作業は午前中で中止した。
- 3.15 雨天により作業は中止。
- 3.16 デジタル測量の終わったⅥ層出土遺物の取上げを行う。また、SX2西側出土の木製品の



第4図 発掘調査風景4

写真撮影、及び取上げを行った。

3.17 引き続きⅥ層出土の遺物の取上げを行った。

昨日取り上げた**SX2**の木製品の下から、更に木製品が出土したため、写真撮影、遺物実測を行い取上げた。

3.18 午前中に調査区の清掃をし、**2**区の完掘写真の撮影を行う。撮影終了後、重機で下層調査を行った。まず、**SX1～2**中央トレンチを



第5図 発掘調査風景 5

設定し、セクション図の作成を行う。また**SX1**の酸化鉄の堆積に沿った状態で、木製品が列ねて置かれているのが確認された。写真撮影の後、遺物実測、レベル測量を行って取り上げた。

3.19 昨日で現場の調査が終了したため、現場の撤収作業を行う。本日で具同中山遺跡群Ⅴの調査を終了した。



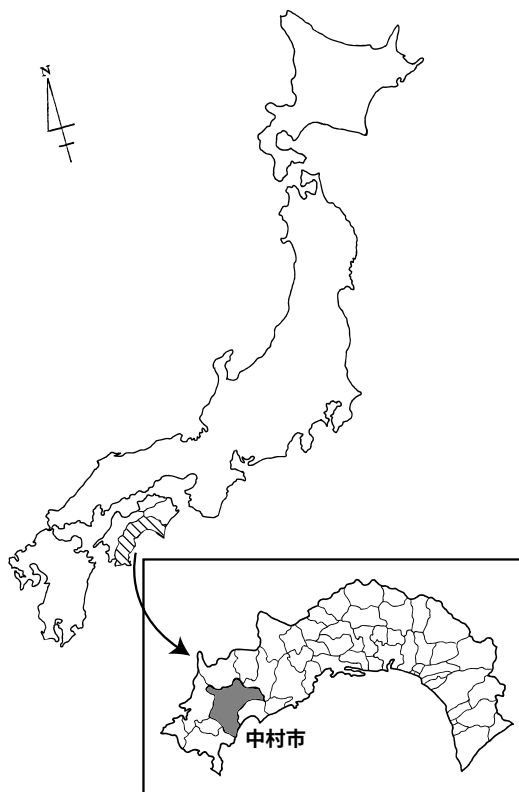
第6図 発掘調査風景 6

第Ⅱ章 地理的、歴史的環境

第1節 地理的環境

具同中山遺跡群の所在する中村市は、面積約**385**km²、人口約**35,400**人を数え、古くから政治、文化の起点として県西部の中心的存在であった。市街地の西方には全国的に有名になった、清流四万十川が蛇行を繰り返しながら流れ、美しい景観をつくっている。中村～宿毛間を結ぶ交通動脈として四万十川河口には**2**本の大橋が掛けられていたが、近年土佐くろしお鉄道の通る橋も掛けられ新しい交通の足として利用されている。具同中山遺跡群は中村駅から宿毛方面に一駅目の、具同駅の南に広がる広大な遺跡群である。

中村市及びその周辺の基盤地質は、中村市より海岸沿いでは古第三紀の地層が、中筋川流域や中村平野では第四紀の洪積層が比較的小面積で分布する。四万十川はこれらの基盤岩類を浸食しながら、その浸食した土砂を運搬している。こうして運搬された堆積層は厚く、しかも泥質層が勝っているため、一度地震が起こると大きな被害をもたらすことになる。また「四万十の青き流れ」は毎夏、周辺地区に大きな洪水被害をもたらす暴れ川へと豹変した。小出水で低地部が浸水し、中規模の出水では市街（旧中村町など）が浸水、大洪水ともなると堤防は決壊し街は水没流失すると言われ、中村市の歴史は治水の歴史でもあった。幡多の俗諺に「月のうち**35**日雨が降る」と言われるほど、最多雨地域であるため、昔から洪水が頻繁に起こっていたことは文献からも明らかである。



第7図 中村市位置図

不入山から端を発する四万十川にはいくつも支流があり、具同中山遺跡群の位置する中筋川も四万十川の支流の一つである。また中筋川沿いには自然堤防が発達しており、四万十川に向かって高くなっている。そしてその背後には後背湿地性の沖積低地が広がっている。こうした地形は、四万十川の氾濫時には中筋川沿いに逆流現象が生じることを意味しており、当遺跡周辺は氾濫原として、毎夏洪水の度ごとに水底に没していたとみられる。また湿地帯であったため、作付け作物として主にイ草などを栽培していたようである。これは稲を植付けても、収穫できるのは**10**年に**1**度の干ばつの年しかないと言われる自然環境のためであろう。

具同中山遺跡群のうち本調査区は、これまでの調査成果や微地形図の作成などによって、丁度自然堤防である微高地から、後背低地への落ち際になると考えられる。それは調査区での土層の堆積状態、及び標高の推移からも明らかである。

第2節 歴史的環境

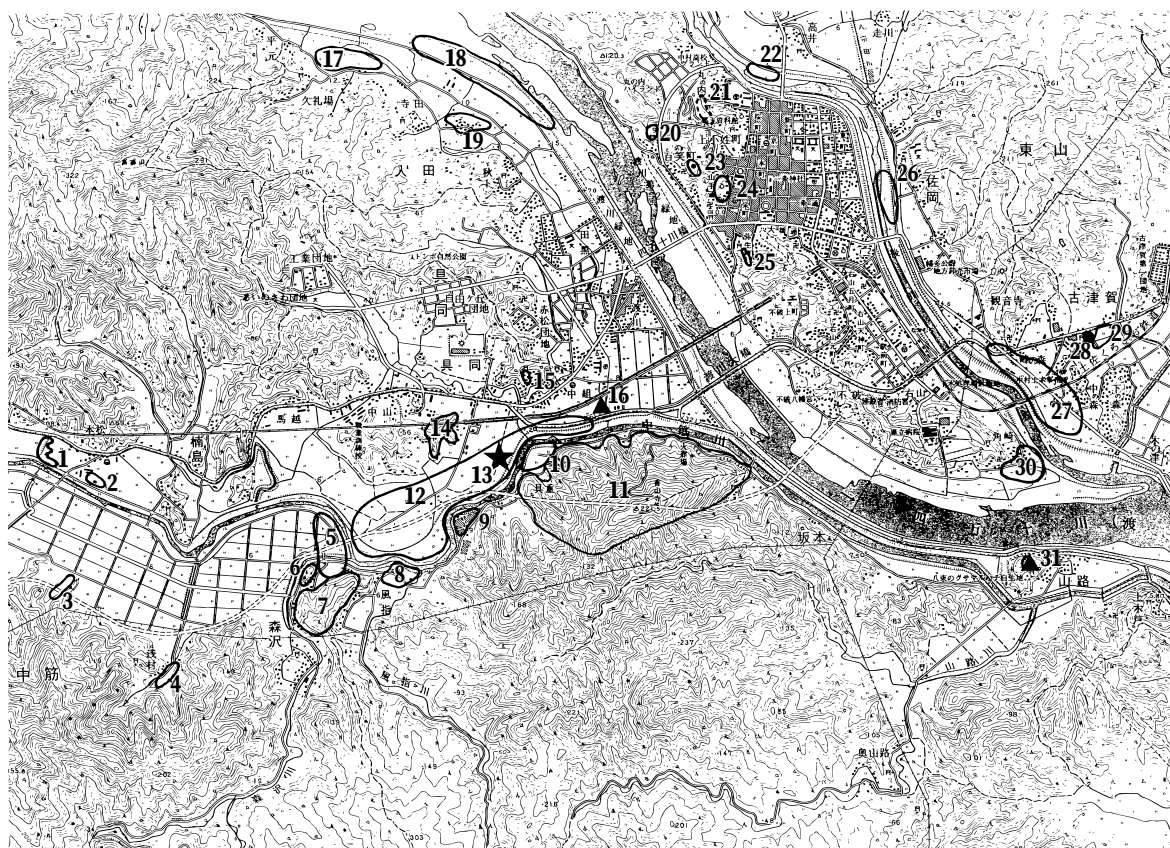
中村市は幡多地域の市町村の中で、最も多くの遺跡が確認されている。それらの遺跡の多くは四万十川流域、特に支流の中筋川流域に分布する傾向がある。以下、中筋川流域を中心に各時代について述べていくこととする。

旧石器時代の遺跡としては、中村市内では海岸段丘上に所在する双海中駄場遺跡が上げられるのみである。双海中駄場遺跡は後期旧石器～縄文時代の遺跡とみられ、ナイフ形石器が採集されている。また中村市周辺では、近年大月町ナシヶ森遺跡、宿毛市池ノ上遺跡などで旧石器時代の遺跡調査が行われ、良好な資料が出土している。

縄文時代になると遺跡数は増加し、早期以降の遺跡が四万十川下流域でもみられるようになる。国見遺跡では早期～後期の遺物が、初崎遺跡では早期・後期、間崎遺跡では中期の遺物が発掘調査、または表面採集によって確認されている。更に縄文時代後期になると遺跡数は急増する傾向がみられる。三里遺跡は四万十川左岸の自然堤防上に立地する後期の代表的な遺跡で、三里式の標式遺跡である。中津式、宿毛式、三里式、片粕式の後期土器の他、中期の船元式も出土している。また土器とともに多くの石錘も出土しており、当時の生業を解明する上で重要な遺跡である。その他、大用遺跡、踊落山遺跡、鳥打場の下遺跡などがある。縄文時代晩期になると、それまでの河岸段丘上の立地から、遺跡が低地へと移動する傾向がみられる。晩期の代表的な遺跡として、中村貝塚、ツグロ橋下遺跡、入田遺跡があげられる。これらは全て突帯文期の遺跡であり、晩期突帯文出現以前の遺跡は中村市内ではまだ確認されていない。中村貝塚は中村Ⅰ・Ⅱ式の、入田遺跡は入田**B**式の標式遺跡である。また具同中山遺跡群からも、若干ではあるが晩期の遺物が出土している。

弥生時代前期の遺跡として、縄文時代晩期に引き続き入田遺跡があげられる。入田遺跡では突帯文深鉢と遠賀川式土器が共伴するとともに、打製石斧、局部磨製石斧、石庖丁などが出土している。その他前期の遺物が出土する遺跡には国見遺跡、三里遺跡、久保畑遺跡、島の宮遺跡、江ノ村遺跡、有岡遺跡があげられる。これらの遺跡の多くは、縄文晩期の遺跡がみられる低湿地から、河岸段丘などに移動している。弥生時代中期には、観音寺遺跡、吹越山遺跡、古城山遺跡などの高地性集落が出現する。また近年の古津賀遺跡群の発掘調査では、ナルザキ地区から弥生時代中期の集落跡が確認されている。弥生時代後期には源池遺跡、西和田遺跡、佐岡遺跡などが認められる。また石丸遺跡、山路遺跡のような銅矛埋納地もみられる。

古墳時代は本格的な古墳の築造が始められた時期にも関わらず、中村市内で確認されている古墳は**3**基のみである。古津賀古墳を含む**3**基の古墳は、いずれも四万十川左岸の半径**1.6**km圏内に分布する後期古墳である。前期の古墳は中村市にはみられず、具同中山遺跡群から中筋川を直線距離で約10km上流の宿毛市平田に高岡山**1・2**号墳、平田曾我山古墳が所在する。また四万十川下流域においては、具同中山遺跡群、具重遺跡、古津賀遺跡、佐岡遺跡、角崎遺跡など祭祀遺跡が集中するのが特徴である。河川のほとりで行われる祭祀は、具同中山遺跡群から古津賀遺跡へと時期的に推移しているとみられる。古津賀遺跡で盛んに祭祀が行われる後期に、古津賀古墳が築造されているのは興味深い。



第8図 周辺の遺跡分布図 (S=1/50,000)

表1 具同中山遺跡群周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	国見遺跡	縄文～古墳	12	具同中山遺跡群	縄文～中世	23	久山遺跡	弥生
2	東中筋小学校々庭遺跡	古墳	13	具同中山遺跡群V	弥生・古墳	24	中村貝塚	縄文
3	間城跡	中世	14	近沢城跡	中世	25	岩崎山遺跡	弥生
4	浅村遺跡	弥生～中世	15	西和田遺跡	弥生	26	佐岡遺跡	弥生・古墳
5	船戸遺跡	縄文～中世	16	石丸遺跡	弥生・古墳	27	古津賀遺跡	古墳～中世
6	森沢北ノ城跡	中世	17	源池遺跡	弥生・中世	28	古津賀古墳	古墳
7	森沢城跡	中世	18	入田遺跡	縄文・弥生	29	オツケバ遺跡	古墳
8	風指遺跡	弥生・古代・中世	19	秋トシ遺跡	弥生・中世	30	角崎遺跡	古墳・中世
9	アゾノ遺跡	中世	20	吹越山遺跡	弥生	31	山路遺跡	弥生
10	具重遺跡	古墳	21	古城山遺跡	弥生・古代			
11	香山寺跡	中世・近世	22	後川橋西遺跡	弥生			

律令体制下の中村は幡多郡に属し、『倭名類聚抄』には五郷についての記載がみられる。しかしながら発掘調査によって裏づけられたものはなく、文献史料にも不明な点が多い。これまでの発掘調査例としては、本遺跡群では掘立柱建物跡や遺物が検出されているほか、船戸遺跡でも搬入遺物などが出土している。また対岸に所在する風指遺跡は、律令的な官制の祭祀場の可能性が指摘されており、中筋川流域の祭祀の変遷を考える上で重要である。

中世の特徴としては城跡が非常に多い点があげられ、中村市内だけで約**70**を数える。その多くは山城で、扇城、ハナノシロ城、江ノ古城、間城などの発掘調査が行われている。また平地での調査では本遺跡群から掘立柱建物跡や遺物が、アゾノ遺跡では中世の地震跡などが確認されている。また応仁の乱を逃れ、応仁**2**年（**1468**）に荘園である中村に下向した一条氏関連の遺跡調査も近年行われ、集石遺構の他、貿易陶磁器や東播系須恵器などが出土している。

近世になると、土佐藩の支藩として山内氏が中村に入る。**17**世紀には藩政改革に乗り出した野中兼山によって、後川麻生堰、カイロク堰などの建設による当地域の基盤整備が行われた。しかし中村三万石は**17**世紀末には廃藩となる。

参考文献

- 岡本健児『日本の古代遺跡**39** 高知』保育社 **1989**
木村剛朗『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研 **1987**
木村剛朗『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研 **1995**
建設省四国地方建設局・中村工事事務所『渡川改修四十年史』社団法人四国建設弘済会 **1970**
中村市教育委員会『中村市の文化財一覧集編一』**1987**
前田光雄・松田直則・廣田佳久・江戸秀輝『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群 第**1**分冊』高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター **1992**
曾我貴行『国見遺跡』高知県中村市教育委員会 **1994**
出原恵三・松田直則・曾我貴行・坂本憲昭・武吉眞裕・竹村三菜『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ 船戸遺跡』高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター **1996**
松田直則・伊藤強・山崎正明・武吉眞裕・竹村三菜『中村宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群Ⅰ』高知県教育委員会 財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター **1997**
松田知彦・松田直則・竹村三菜『土佐中村一条氏遺跡確認調査 報告書一 小姓町地区一』高知県中村市教育委員会 **1997**

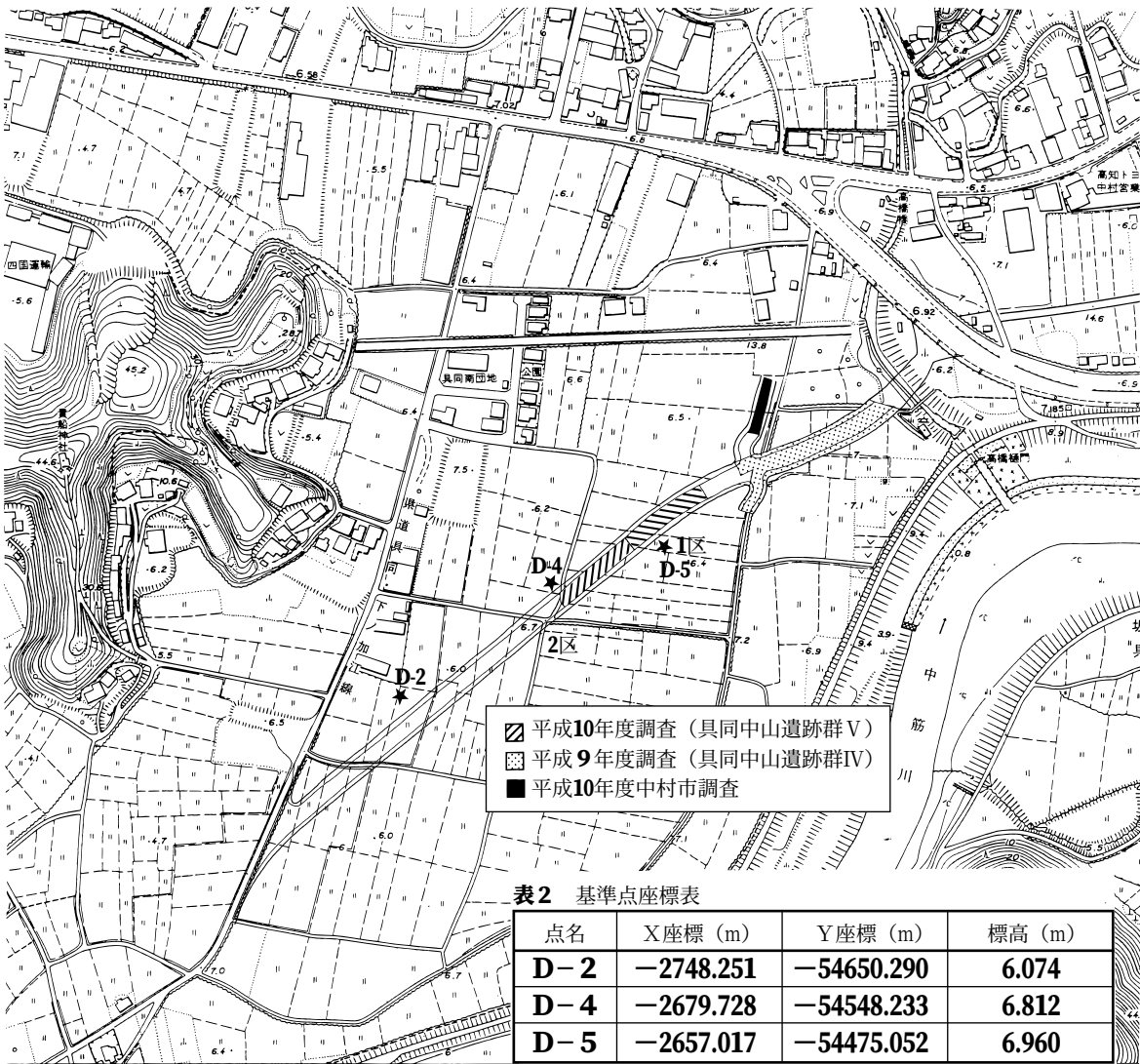
第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の方法

今回の調査対象地区は高知県が計画する県道の整備事業に伴うものである。調査区が東西に細長いことなどから、調査区を東西に2分して東半部を1区、西半部を2区として、1区から調査を行うこととした。平成9年度に行われた試掘調査により、弥生時代終末～古墳時代初頭の包含層が確認されていた。またこれまでの調査成果から遺物は掘り込み遺構に伴わず、古墳時代の遺物も点在している可能性が考えられた。重機掘削は包含層直上までとし、後は人力掘削を行った。

調査区のグリッドは、公共座標に沿って4m×4mに設定し、それに基づいて平面図等を作成した。

発掘対象面積は約1,419㎡で、1区は769㎡、2区は650㎡である。遺物包含層が各調査区とも2面確認されたので、最終的な発掘調査面積は2,838㎡であった。

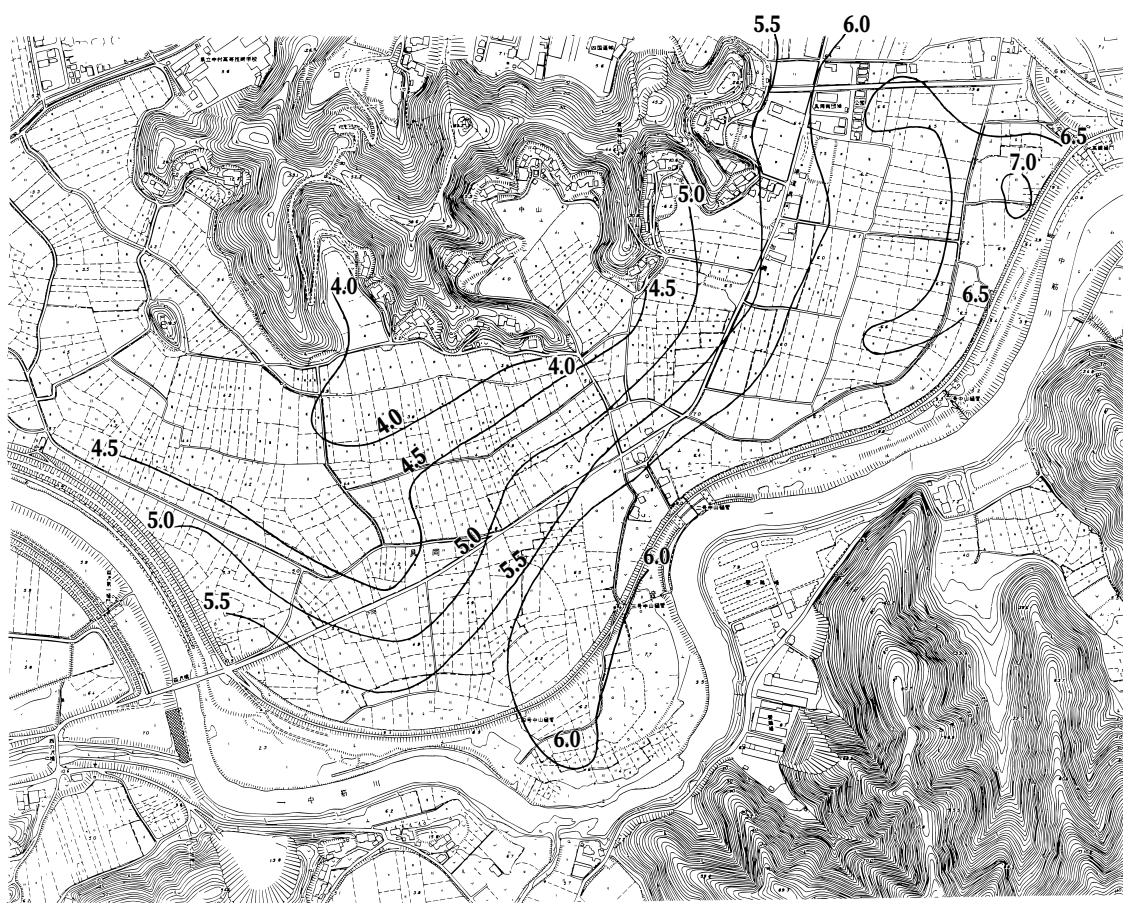


第9図 調査区設定図 (S=1/5,000)

第2節 調査区の概要

調査区周辺部の地図に等高線を入れ、地形を復原すると第10図のようになる。それによると本調査区の東は自然堤防によって微高地が形成されており、西の後背低地へと徐々に落ち込んでいくのが分かる。本調査区はその微高地から後背低地への落ち際に位置する。これは発掘調査の結果からも明らかであり、調査区を1区と2区に分け調査を行った結果、1区で標高3.7mで弥生時代終末～古墳時代初頭の包含層が確認できたのに対し、2区の中央部では3.1～3.2mの高さで古墳時代初頭の遺物包含層が確認されている。旧地形は1区から2区に向かって、つまり北東部から南西部に向かって落ち込んでいることが分かる。また土層も西に行くに従いグライ化が進み、土質もシルトから粘土へと変化する。

遺物の出土状態は両調査区とも掘り込み遺構には伴わず、水平にまとまりをもって分布している。遺物の分布密度は地形に対応するように、東の調査1区では高く、西に行くに従い遺物の出土密度は低くなる。



第10図 調査区周辺の地形図（S=1/10,000）

(1) 1区

1区は東西に細長い調査区の東半部である。地表下約2.7mで古墳時代の包含層を確認できた。調査区は矢板幅約12.5m、長さ約60.8mを測る。重機掘削により遺物包含層（第XV層）上層まで掘削し、その後人力で掘削を行った。

今回の調査では、確実な掘り込み遺構はピット1個を確認できたにとどまる。しかし祭祀と関連があると考えられる炭化物集中及び遺物の集中が認められた。

本調査区では弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代の二時期の遺構、弥生時代後期、弥生時代終末～古墳時代初頭、須恵器を伴う古墳時代の三時期の遺物が確認できた。

層序

確実に遺物包含層とみられるものは、第XV層と第XVII層、第XXII層である。第XV層は古墳時代の遺物包含層で、須恵器の甕が共伴している。第XVII層は弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての遺物包含層とみられる。また第XXII層からは弥生時代後期の遺物が僅かながら出土しており、遺物包含層と考えられる。

1区で確認された基本層序は以下のとおりである。

第I層	表土層	第XV層	灰色粘性シルト(遺物包含層)
第II層	灰色シルト(旧耕作土)	第XVI層	灰色粘性シルトで若干白色が強い
第III層	灰色シルトで若干褐色が強い	第XVII層	黒褐色粘性シルト(遺物包含層)
第IV層	灰色シルト	第XVIII層	暗灰黄色シルト
第V層	暗灰黄色シルト	第XIX層	黄灰色粘土
第VI層	暗灰黄色シルトで若干白色が強い	第XX層	灰色粘性シルト
第VII層	暗灰黄色シルト	第XXI層	灰オリーブ色シルト
第VIII層	灰色シルト	第XXII層	オリーブ黒色粘性シルト(遺物包含層)
第IX層	灰色シルト	第XXIII層	オリーブ黒色砂質シルト
第X層	灰色シルト	第XXIV層	暗オリーブ色砂質シルト
第XI層	灰色粘土	第XXV層	オリーブ黒色砂質シルト
第XII層	灰色粘土に灰オリーブ粘性シルトが混じる	第XXVI層	灰色粘性シルト
第XIII層	灰色シルト	第XXVII層	灰色粘土
第XIV層	灰色粘土に灰オリーブ粘土が混じる	第XXVIII層	灰色粘性シルト

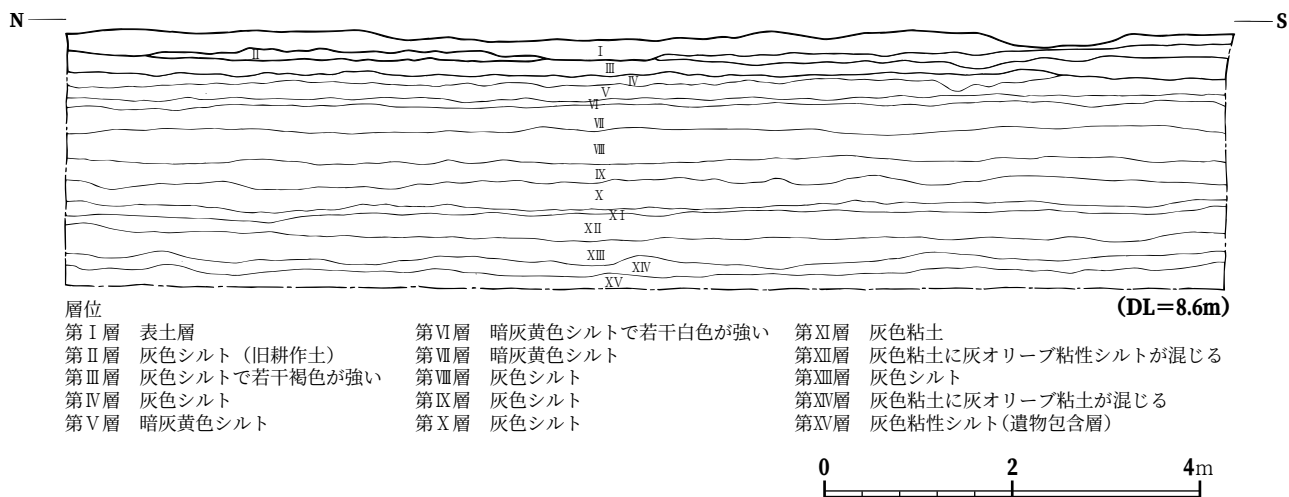
第I層の表土層は現在の耕作土であり、現況は水田であった。

第II層は旧耕作土である。

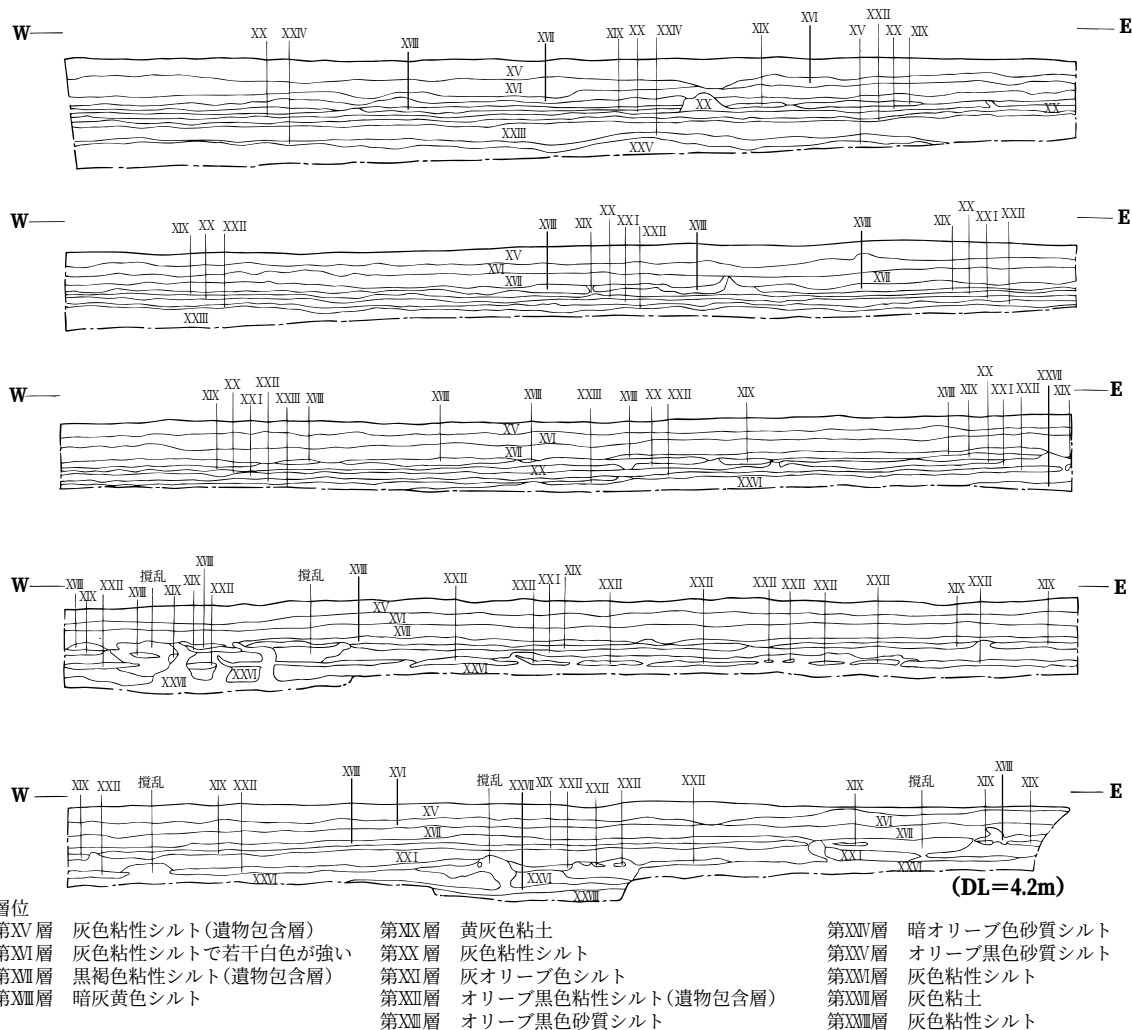
第III層～XIV層はシルトまたは粘土層で、中筋川の氾濫によって土砂が堆積したものと思われる。その中には水田として利用された層もあるだろうが、断面では確認できなかった。

第XV層は古墳時代の遺物包含層と考えられる。遺物は小さなまとまりで点在しているため、出土量は第XVII層に比べると少量にとどまる。だが遺物出土状態は比較的良好であった。

第XVI層は遺物包含層に挟まれた間層と考えられる。上下運動によって第XV層、第XVII層の遺物が混在しているとみられるため、この層自体が包含層である可能性は低い。



第11図 1区東壁セクション図



第12図 1区北壁セクション図

第XVII層は弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物包含層である。甕、鉢を主体とした遺物が多く出土しており、この層が本調査区の出土遺物の主体となる。

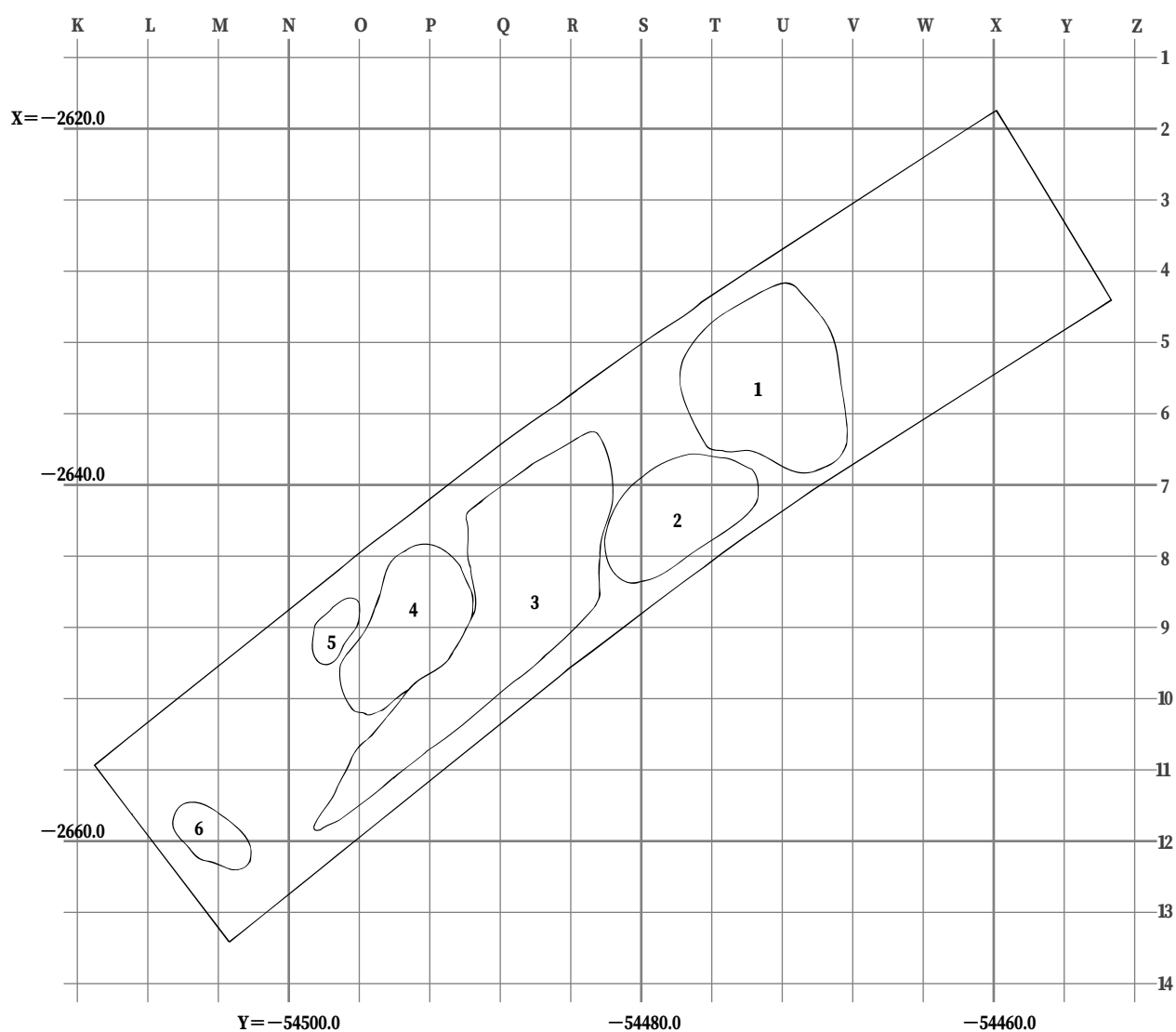
第XVIII層には遺物が若干混入するが、まともではなく上下移動によるものとみられる。

第XIX層は調査区東端から西端まで認められ、**2区**に続いていくとみられる。

第XX、XXI、XXIII～XXVIII層は無遺物層である。

第XXII層は弥生時代後期の遺物包含層であるが、遺物密度は非常に薄い。

また調査区の東半部を中心に、地震によるとみられる攪乱が確認できた。



第13図 1区グリッド及び遺物集中ブロック1～6設定図（S=1/400）

(2) 2区

2区は調査範囲の西半部にあたる調査区である。地表下約2.9mから調査を行った。調査区は矢板幅約12.5m、長さ約53mを測る。現地表面から調査の第一面である第Ⅰ層上層までは重機掘削を行い、その後は人力掘削を行った。

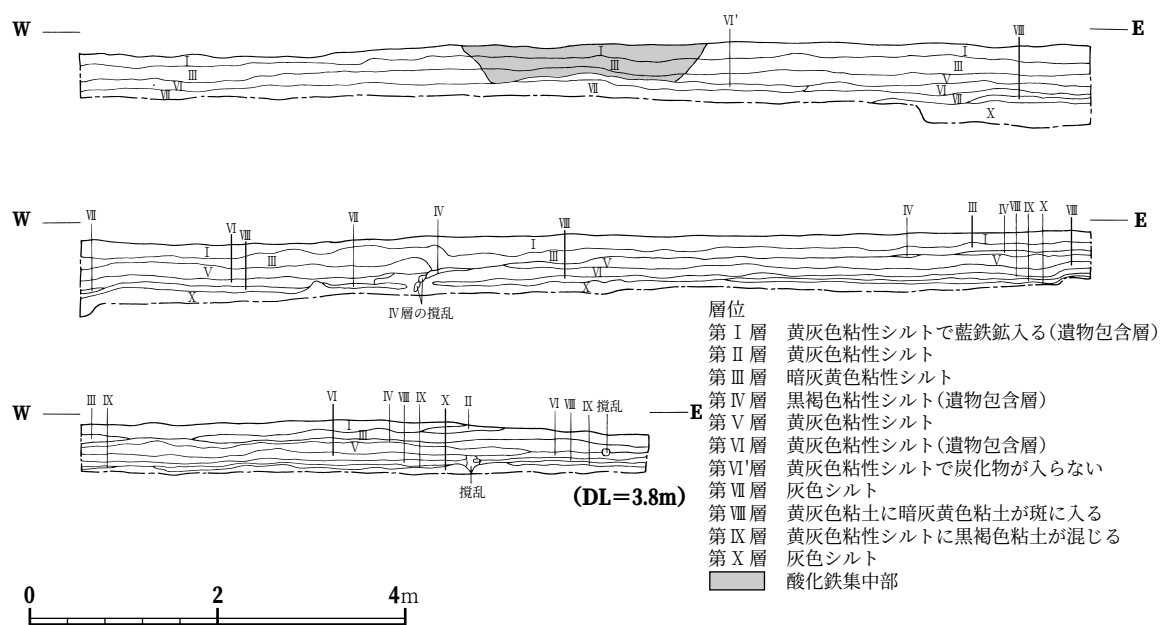
本調査区では古墳時代初頭の一時期の遺構、縄文時代晩期、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代の三時期の遺物を確認した。このうち古墳時代初頭の包含層は2面確認されており、更に時期の細分が可能と思われる。

層序

2区で確認された基本層序は以下のとおりである。表土層～第Ⅰ層上層については、1区の第Ⅰ～ⅩⅣ層と同じであるとみられる。遺物包含層は第Ⅰ層、第Ⅳ層、第Ⅵ層である。

第Ⅰ層	黄灰色粘性シルトに藍鉄鉱入る（遺物包含層）	第Ⅵ'層	黄灰色粘性シルトで炭化物は入らない
第Ⅱ層	黄灰色粘性シルト	第Ⅶ層	灰色シルト
第Ⅲ層	暗灰黄色粘性シルト	第Ⅷ層	黄灰色粘土に暗灰黄色粘土が斑に入る
第Ⅳ層	黒褐色粘性シルト（遺物包含層）	第Ⅸ層	黄灰色粘性シルトに黒褐色粘土が混じる
第Ⅴ層	黄灰色粘性シルト	第Ⅹ層	灰色シルト
第Ⅵ層	黄灰色粘性シルトに炭化物が入る（遺物包含層）		

第Ⅰ層は古墳時代の遺物がわずかに認められる。土層中には藍鉄鉱が入っており、藍鉄鉱は水分の多いところで認められることから、本調査区が湿地状を呈していた時期があったとみられる。遺物は調査区東部のみの出土で、少量にとどまる。



第14図 2区北壁セクション図

第Ⅱ層は無遺物層である。

第Ⅲ層～第Ⅳ層は古墳時代初頭のうち、やや新相にあたるとみられる包含層である。第Ⅲ層の出土遺物は僅少であるため、上下移動によって第Ⅳ層の遺物が混入している可能性が考えられる。

第Ⅴ層は遺物包含層に挟まれた間層である。遺物も僅少ながら出土しているがまとまりはなく、上下移動により第Ⅲ層、第Ⅴ層の遺物が混在しているものとみられる。

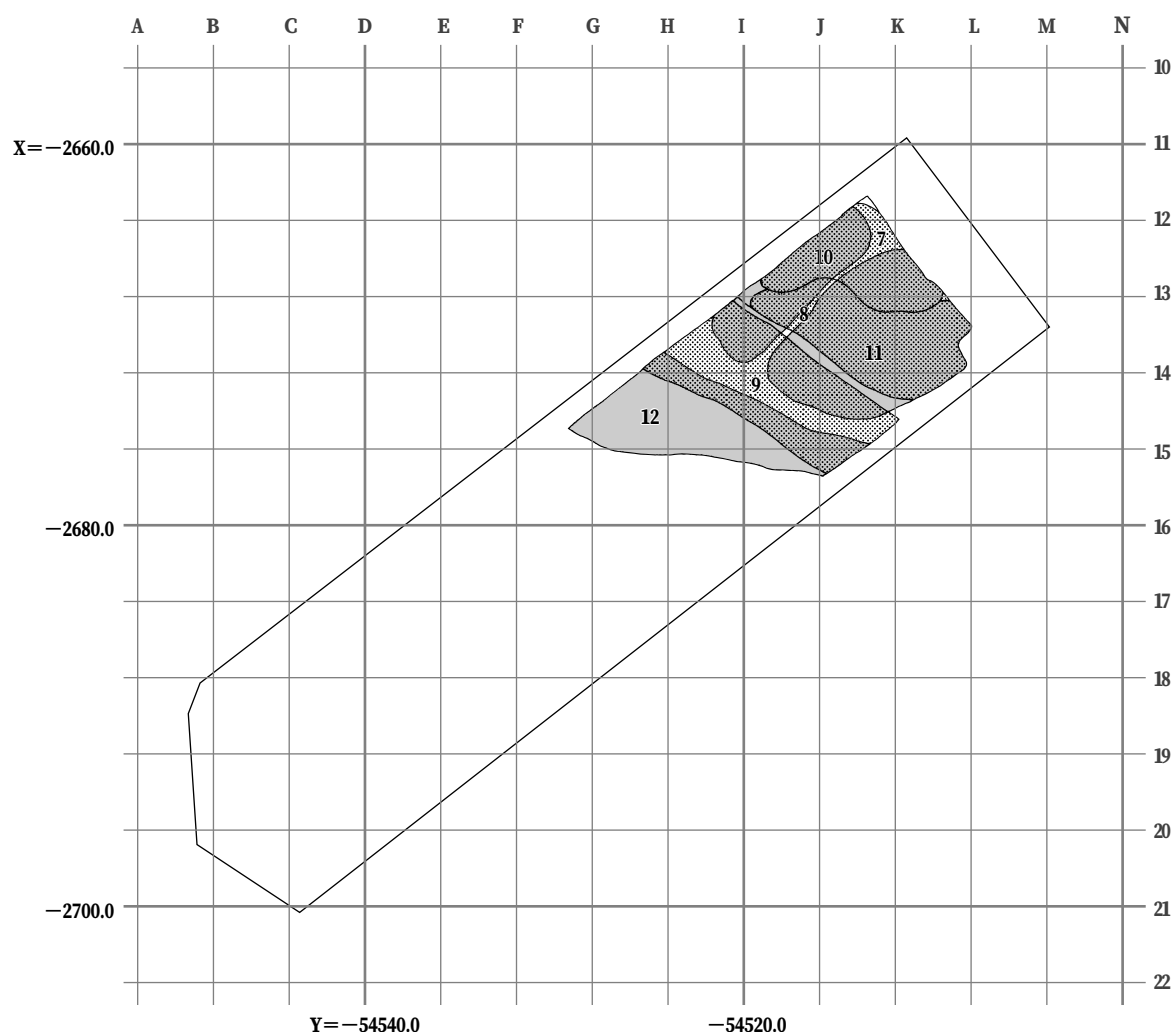
第Ⅵ層は第Ⅳ層と同じく古墳時代初頭の遺物包含層である。層位及び出土遺物の形態などからみて第Ⅲ～Ⅳ層よりも古相と考えられる。第Ⅵ'層とは色調は同一であるが、Ⅵ'層中にはⅥ層にみられる炭化物が入らない。

第Ⅶ層は**2**区西半部でみられる層である。Ⅵ'層の下層で、遺物・炭化物などは認められない。

第Ⅷ層は土質・色調から**1**区の第ⅩⅩ層と同一の層で、鍵層と考えられる。無遺物層である。

第Ⅸ・Ⅹ層は無遺物層である。

また調査区の東半部で**2**箇所、地震によるとみられる攪乱を確認した。



第15図 2区グリッド及び遺物集中ブロック7～12設定図 (S=1/400)

第IV章 遺構と遺物

本章では、調査区を**1**、**2**区に分け、ピット(**P**)、炭化物集中跡、小礫集中、土器集中、性格不明遺構(**SX**)の順に主だった遺構について記す。遺構番号、遺物のブロック番号は**1**、**2**区通し番号とする。第IV章の文中にみられる分類記号はそれに対応している。

また土器分類については、次章で項目を作り説明を行うこととし、ここで詳しくは触れない。

第1節 1区

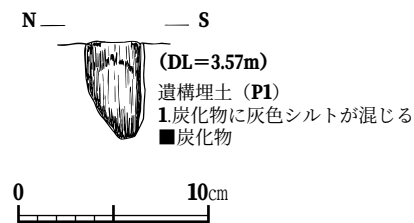
1. 弥生時代後期～古墳時代初頭

調査**1**区においては、この時期のものが主体を占める。明瞭な掘り込み遺構はほとんどなく、小ピットが**1**個確認されたのみである。また平面遺構として炭化物集中跡が**32**箇所、小礫集中部**2**箇所を検出した。

(1) ピット

P1

調査区中央部で確認された遺構である。ピットに分類したが柱穴とは異なり、直径**3.0**cmと非常に小さなものである。ピットの深さは**5.0**cmで、埋土は黒褐色粘性シルトに炭化物が多く混じったものであった。ピットの形状に沿って炭化物が入っており、断面からみて細丸い杭状のものが差し込まれた跡と考えられる。ピットの埋土はやや粘性が強く、炭化物が多く残っていることから杭が腐食したものと考えられる。出土遺物はみられなかった。



第16図 P1半裁セクション図

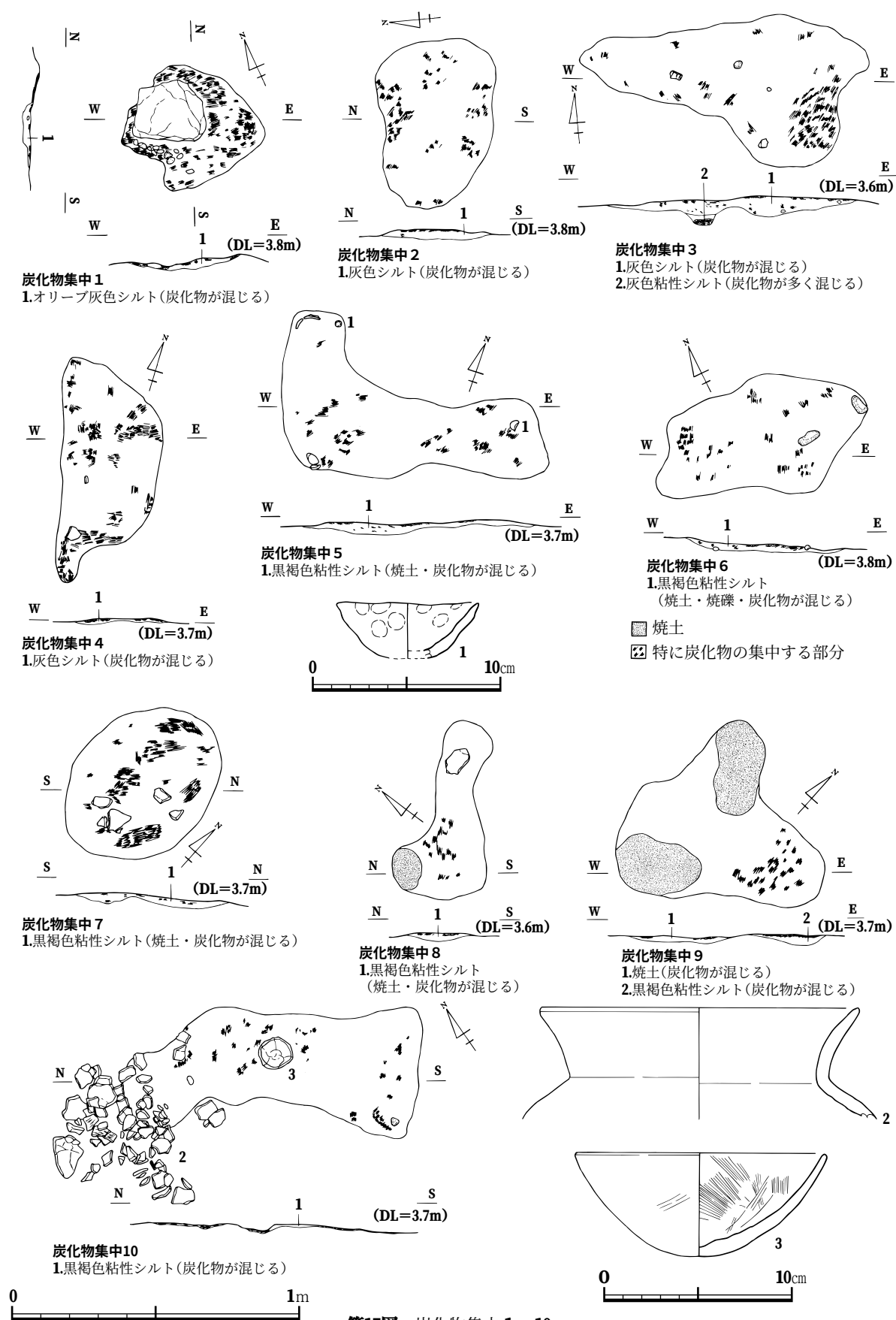
(2) 炭化物集中跡

炭化物集中1

調査区南東部の第XVIII層上面で検出された。直径約**40**cmの範囲に広がる。炭化物の厚みは**1**cmに満たない。炭化物集中部の上に、**27**cm大の泥岩とみられる円礫が乗った状態で検出された。炭化物中には、泥岩が被熱によって破碎したとみられる小片が確認されている。炭化物の集中密度は高く、若干の土器と**2～3**cm程度の円礫を含んでいた。下層の灰色シルト層は一部焼土化しており、この場所で火が焚かれたと考えられる。

炭化物集中2

調査区南東部の第XVII層中で検出された炭化物集中である。長軸約**60**cm、短軸約**40**cmの楕円形状に炭化物が広がるが、密度は比較的薄い。炭化物の厚みは**1**cmに満たない。しかしその下の灰色シルト層が若干白色化していることから、ここで火が使用されたと考えられる。また**10**g以下の砂岩の円礫が少量検出されている。



第17図 炭化物集中 1~10

炭化物集中 3

調査区東部、第 XVII 層中で検出された。長軸約 1 m、短軸約 55 cm の比較的広範囲に炭化物が集中する。断面観察によると、炭化物を多量に含む層が最厚で 7 cm あり、ピット状の掘り込みもみられ、人為的に掘り窪められた可能性も考えられる。ピット状掘り込み部は粘性が強く、炭化物を多く含んでいる。土器の細片、小円礫が若干出土したが、復元図示はできなかった。

炭化物集中 4

調査区中央部、第 XVIII 層上面で検出された。約 80 cm の範囲に炭化物が散在している。この遺構からは被熱により赤色化した小円礫が 3 点認められた。炭化物集中部の厚さは 1 cm 程度と非常に薄い。ただし炭化物下層の灰色シルト層がやや白色化しており、被熱による可能性が考えられる。この地点で火を用いたとみても良いだろう。

炭化物集中 5 (第 17 図-1)

調査区中央部の第 XVII 層中で検出された。長軸約 90 cm、短軸約 60 cm の範囲に多量の炭化物、焼土が集中する。炭化物の混じる層は黒褐色粘性シルトで、約 4 cm の厚みがある。炭化物に混じって、上面で手捏土器が検出されている。手捏土器は炭化物集中から約 80 cm 離れた東西両端で、半分に割られた状態で出土している。器形は浅い小皿状を呈し、使用後に意図的に破碎され廃棄されたものとみられる。

炭化物集中 6

調査区中央部、第 XVII 層上面で検出された。長軸約 60 cm、短軸約 40 cm の範囲に炭化物と、若干ではあるが焼土が集中する。しかし炭化物の密度は薄く、断面観察では掘り込みは認められなかった。炭化物を含む層は黒褐色粘性シルトであり、厚みは 3 cm と薄い。また 7 cm 以下の砂岩、泥岩の円礫が出土している。それらのなかには被熱し赤色化したものもみられる。

炭化物集中 7

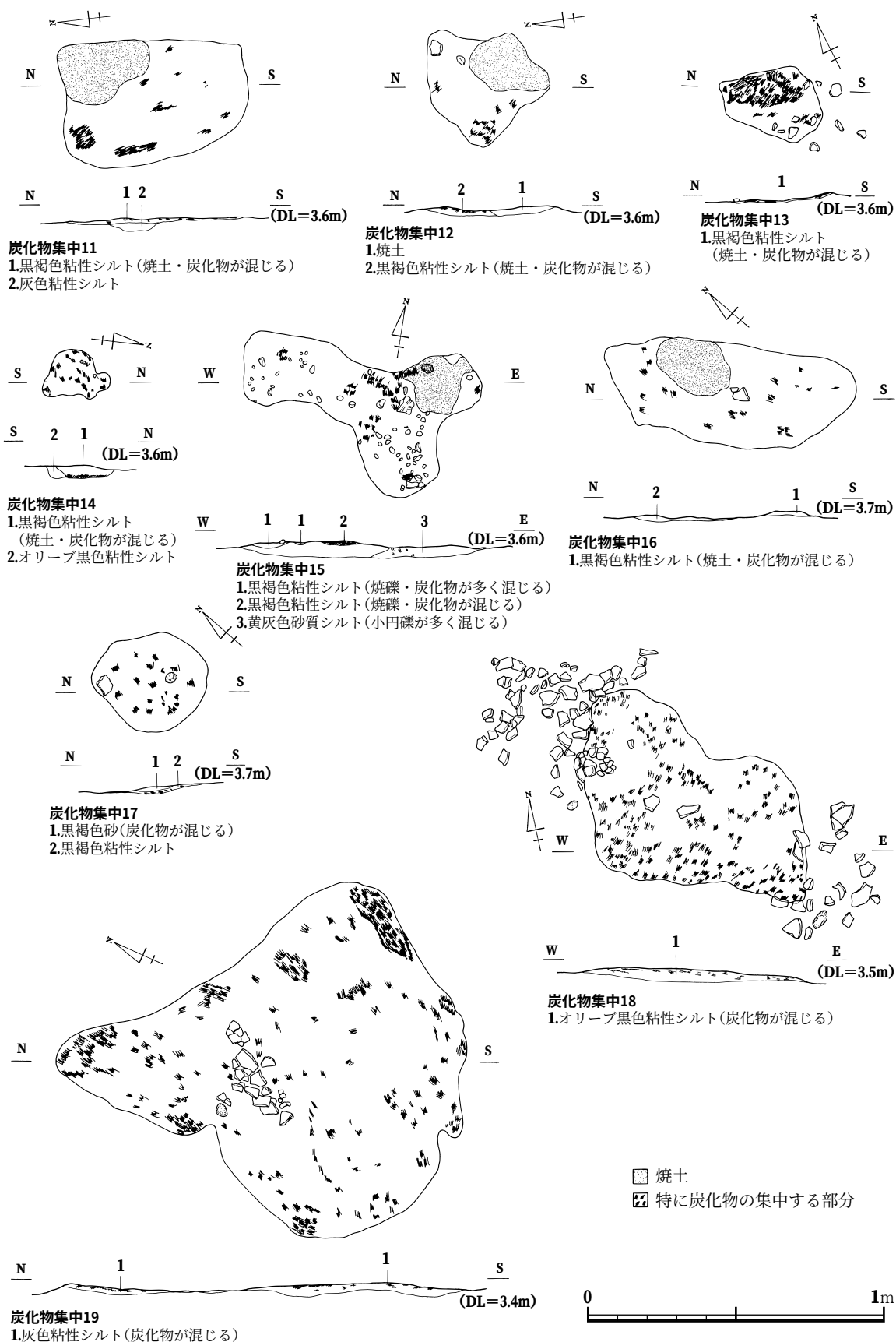
調査区中央部南端の第 XVII 層中で検出された。直径約 45～60 cm の範囲に炭化物、焼土が集中する。炭化物中に材の輪郭が若干残っており、板材を燃やしたものとみられる。調査 2 区出土の炭化材同定の結果、スダジイ、コナラ属などの長時間の煮炊きに適した広葉樹が使用されていることが明らかになっており、炭化物集中 7 でもこういった樹木が燃料材として用いられたと考えられる。炭化物の密度は高いが、厚みは 1 cm に満たない。上面では煤の付着した土器片が出土したが、復元図示はできなかった。

炭化物集中 8

中央部北寄りの第 XVII 層中で検出された。約 30 cm の狭い範囲での集中で、厚みは 3 cm を測る。焼土は直径約 12 cm の範囲に集中する。断面は窪み状を呈するが、人為的に掘り込まれたものかは不明である。円礫や遺物の出土はみられなかった。

炭化物集中 9

調査区中央部北寄りの第 XVII 層中で検出された。直径約 60～70 cm の範囲に焼土と炭化物が集中する。炭化物を含む層は黒褐色粘性シルトで、炭化物自体は検出面より 1 cm 程度の厚さにとどまる。断面は若干窪み状を呈する。



第18図 炭化物集中11~19

炭化物集中10（第17図－2・3）

調査区中央部北寄りの、第XVII層中で検出された。長軸約95cm、短軸約45cmの範囲に炭化物、焼土が集中する。炭化物の密度は高いものの、厚みは1cm程度と非常に薄い。炭化物の上面からは、甕、鉢があたかもその場で使用した後、そのまま廃棄されたような状態で出土している。2の甕は、頸部がくの字状に屈曲し、口縁部は緩く外反する。内外面とも煤は付着していないが、器面が剥落している。3は鉢で口縁部は外方に向かって広がる器形を持ち、口縁端部は丸くおさめる。鉢の内底部は窪む。内外面とも剥離、摩耗が著しく調整は不明である。2、3のどちらも器壁に剥離痕が認められるのは、火を受けたことによるものとみられる。また炭化物と共に砂岩の小円礫も出土している。

炭化物集中11

調査区中央部、第XVII層中で検出された。長軸約60cm、短軸約40cmの範囲に炭化物が集中する。ただし炭化物の密度は薄い。炭化物を含む層は黒褐色粘性シルトで、厚みは2cmと薄い。黒褐色粘性シルトは若干焼土化しているのが認められる。掘り込みは認められず、平地で火を使った跡と考えられる。

炭化物集中12

調査区中央部の第XVIII層上面で検出された。直径約40cmの範囲に、炭化物及び焼土が集中する。焼土に比べ炭化物の密度は薄い。明確な掘り込みは確認できなかった。炭化物上面で小円礫、土器片が出土したが、復元図示はできなかった。

炭化物集中13

調査区中央部の第XVII層中で検出された。直径25～35cmの範囲に炭化物と、若干の焼土が集中する。炭化物の密度は薄く、厚さも1cmに満たない。また炭化物内から小円礫、土器片が出土したが復元図示できるものはなかった。

炭化物集中14

調査区中央部南寄りの第XVII層中で検出された炭化物の集中で、直径26cm、深さ4cmを測る。埋土は多量の炭化物、焼土を含む黒褐色粘性シルトである。特に基底面から炭化物が層状を成して検出された。

炭化物集中15

調査区中央部の第XVII層中で検出された。長軸約75cm、短軸約55cmの楕円状に炭化物、焼土が集中する。炭化物を含む層の厚さは1～3cmと浅く、人為的に掘り込まれたものかは不明である。炭化物に混じって、焼砂、小円礫、土器片が出土した。小円礫は炭化物中より44個出土しており、そのほとんどが1g前後のものであった。そのうち被熱しているものは、砂岩の小円礫1点のみである。出土した土器片の復元図示はできなかった。

炭化物集中16

調査区中央部の第XVII層中で検出された。長軸約86cm、短軸約35cmの範囲に多量の焼土と炭化物が集中する。炭化物の密度は薄めで、焼土は最厚で2cmを測る。断面観察からは、明確な掘り込みは確認できなかった。

炭化物集中17

調査区西部南端の第XVII層中で検出された。直径約**18cm**の範囲に、炭化物と焼砂が集中して認められた。断面観察では若干窪み状になっているが、人為的なものかは不明である。炭化物の厚さは**3cm**を測り、黒色砂に粘性シルトが若干混じる。密度は非常に薄い。黒色砂は上面部分が被熱して赤色化している。また壺の頸部に貼付する粘土紐とみられる小片が、炭化物中から出土している。

炭化物集中18

調査区西南部の第XVIII層上面で検出された。長軸約**95cm**、短軸約**60cm**の比較的広範囲に炭化物が集中する。炭化物の厚みは**1～2cm**程度と薄めで、焼土は認められない。また炭化物に混じって多量の小円礫、土器片が出土したが、土器片の復元図示はできなかった。

炭化物集中19

調査区西端部の第XVIII層上面で検出された炭化物の集中である。直径約**1.1～1.3m**の比較的広い範囲に集中しており、炭化物は部分的に輪郭が分かるものがあり広葉樹などを燃料材に用いたとみられる。炭化物の厚みは約**2cm**と薄く、掘り込みも確認できないことから、平地で火が焚かれた跡と考えられる。また炭化物上面で外面に煤の付着した土器片が出土しているが、復元図示はできなかった。

(3) 小礫集中**小礫集中1**

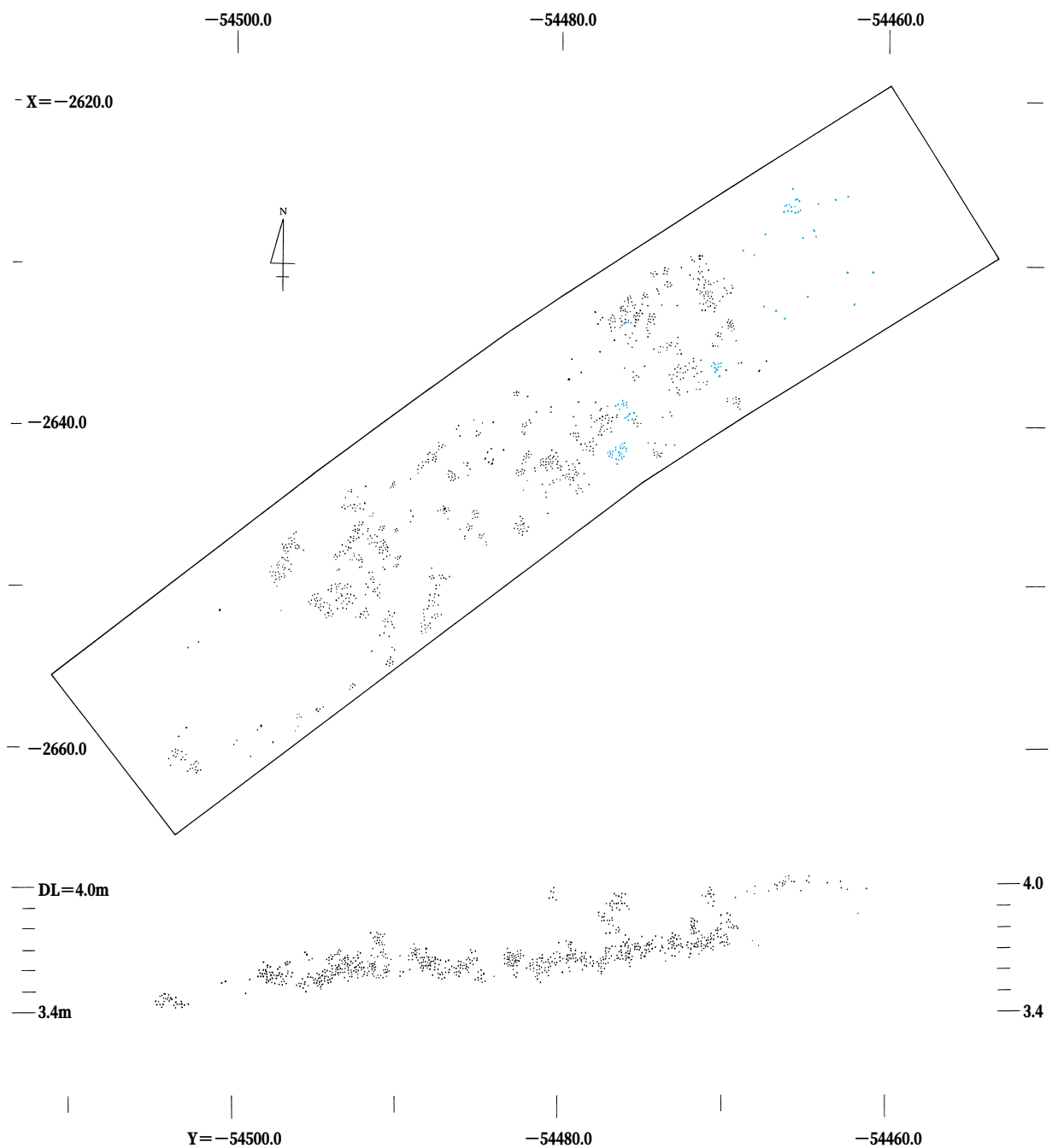
調査区中央部南端で検出された。直径**5cm**以下の円礫**30**点程が、南北約**2m**、東西約**70cm**の範囲から出土した。これらの礫はいずれも標高約**3.6m**から出土しており、同時期に何らかの理由でここに置かれたものとみられる。祭祀行為との関係も考えられることから遺構として取り上げた。礫の重量は最も重いもので**35.3g**、最軽量のもので**4.8g**を測る。砂岩が多いが、チャートも若干含まれている。全て円礫である。赤色化など被熱の痕跡は認められなかった。これらは丁寧に置かれたというよりも、散まかれた様な状態で出土した。



第19図 小礫集中1・2

小礫集中2

調査区西部の南端で検出された。**3** cm以下の礫約**35**個が、直径約**50**cmの範囲からまとめて出土した。これらの礫群も標高**3.6**m前後で出土しており、検出された礫群は同時期性が高いとみられる。礫の重量はいずれも**11** g以下で、砂岩、礫岩が確認された。被熱の痕跡は認められなかった。また小礫集中部より約**10**cmと近接する位置に炭化物の集中がみられる。これらの位置関係からも、小礫のあり方を検討するべきであろう。



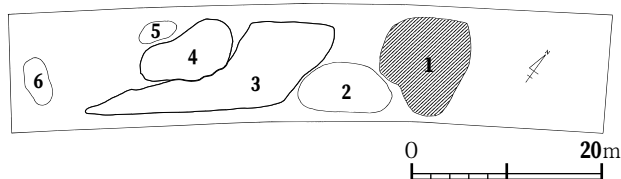
第20図 1区出土遺物の平面及び垂直分布図 (S=1/400)

(4) 遺物集中ブロック

当該期に属すると考えられる第XVII層出土遺物は、掘り込み遺構には伴わないが祭祀行為との関連が考えられるため、祭祀関連遺構として取り上げることにした。遺物は何箇所か特に集中する部分がみられることから、調査区内の遺物集中を1～6までのブロックに分けることとした。これらの遺物は、炭化物集中に伴うものと考えられる。

遺物集中ブロック1（第22・23・24・25図）

調査区東部で出土した遺物の一群で、東西約9.5m、南北約9mの範囲に集中する。ブロック内の遺物の出土状態には若干の差異が認められ、それらは大きく3つに分けられる。①ブロックの北側で、一団体とみ



第21図 遺物集中ブロック1位置図

られる甕が、その場で潰れたような状態で出土するもので、4例（30、32、33ただし167はXVI層出土）を数える。②主に一つの器種の破片が散在するもので、器面に煤が付着していることから甕と考えられる。ブロック1を半円状に回る。③甕を中心に鉢、高杯がわずかに混じり、それらが集中して出土するものである。また潰れた土器のそばからは、拳大の円礫が出土する例も4例ほどみられるが、どのような意図を持ったものかは推定の域を出ない。遺物は標高3.6～3.7mで出土しており、同じブロック内でも東の方が若干高い位置で出土する傾向がある。

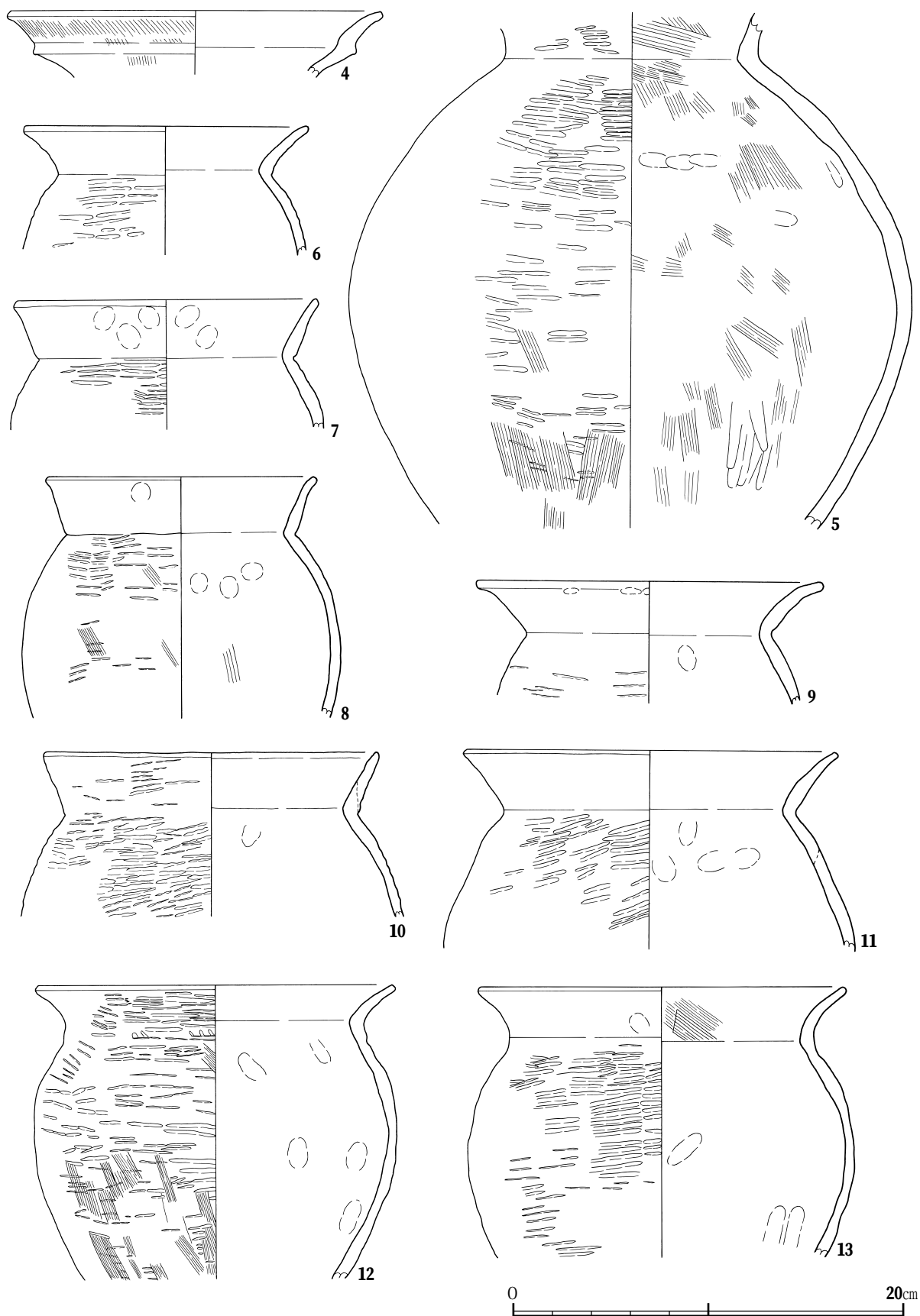
また炭化物集中跡が6箇所で確認されている。これらはブロック1の南西部に集中しており、ブロック2でも1との近接部分に炭化物集中跡を検出していることから、ブロック1・2を合わせて一つの大きな祭祀跡を形成する可能性もある。

出土遺物の器種は壺、甕、鉢、甑で構成される。また土器の胎土中にみられる赤色風化砂粒については、約3割のものに認められた。

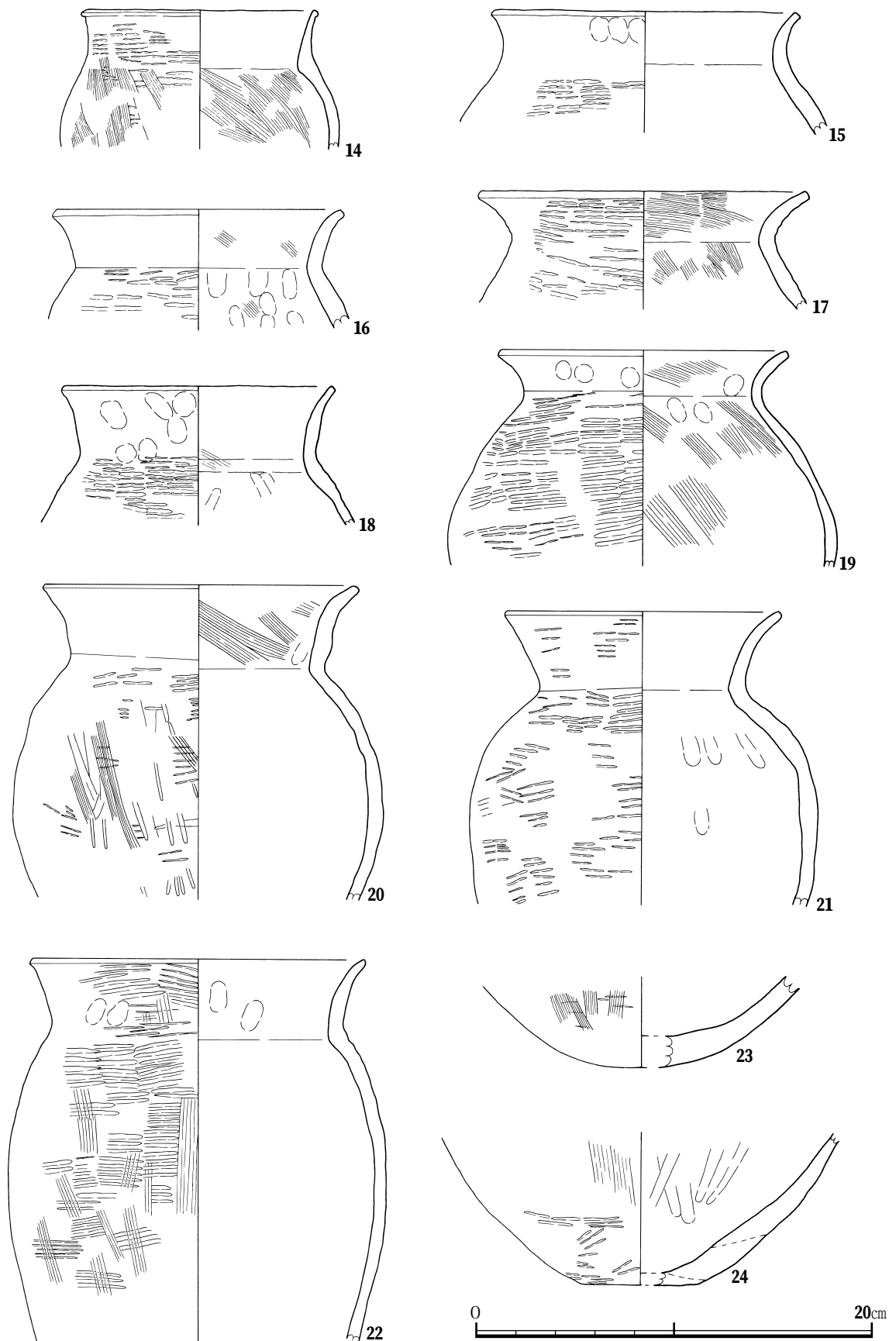
壺はD類の二重口縁壺が1点みられる。4は二重口縁壺で、口縁は屈曲部に稜を持ち大きく外反する。口縁端部は平らにナデで仕上げる。比較的丁寧な調整で、外面にはハケが残る。

5～33は甕である。甕はA-1類が主体を占め、A-2類、A-3類、B類が認められる。調整は器面外面にタタキ目、ハケ目が多く残り、ナデは部分的に若干施される程度である。また口縁部にもタタキ目の残るものが比較的多く認められる。タタキ目は横位その他、左下がり、右下がりのものがみられ、32のように二度以上タタキが施されたため、器面に方向の異なるタタキ目が残るものもある。タタキの方向に統一性はみられない。また甕の外面に煤が付着するものが多くみられ、これらは火を受けたものと考えられる。底部は平底、丸底、尖底があるが、量的には平底が若干多い。口縁部から底部まで復元できた32、33はA-1類に分類される甕で、底部は平底である。また30もA-1類に分類される尖底の甕で、最大径は胴部中位よりやや下にある。口縁部は外反し、端部は細まらずに丸くおさめる。尖底部には外底面より8mm～1cm上部に直径3mm大のあばた状の窪みが4箇所ほどみられる。これらの窪みは焼成前に付けられたものであり、成形時の支えの跡ではないかとみられる。23～29は甕の底部とみられるが、25は鉢の底部の可能性もある。

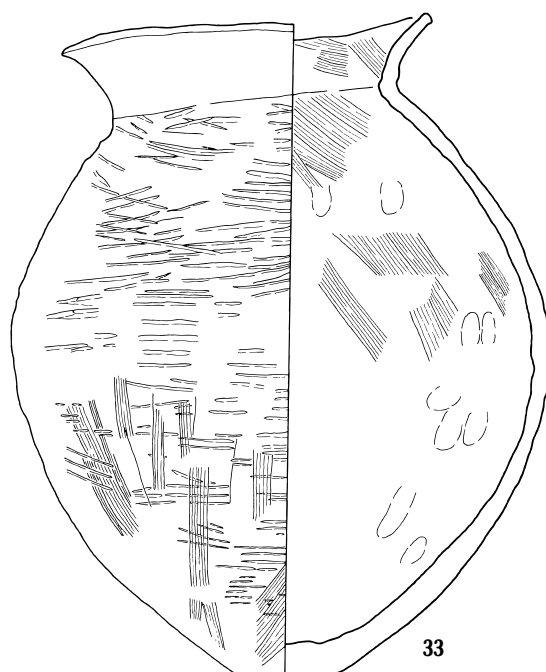
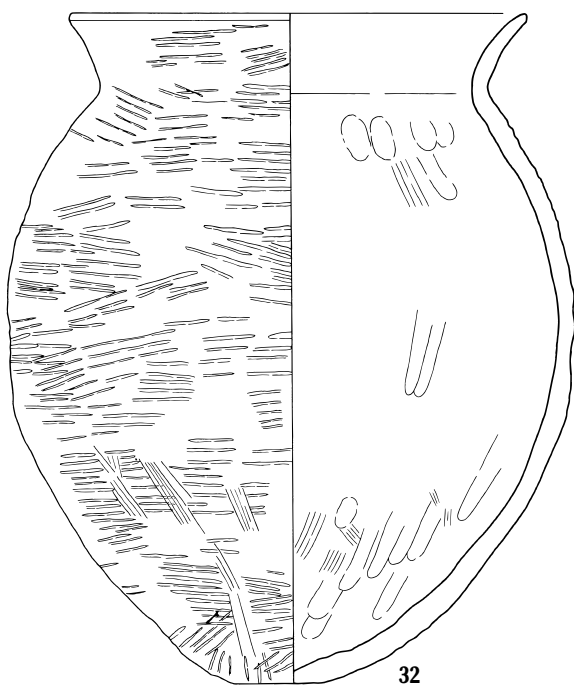
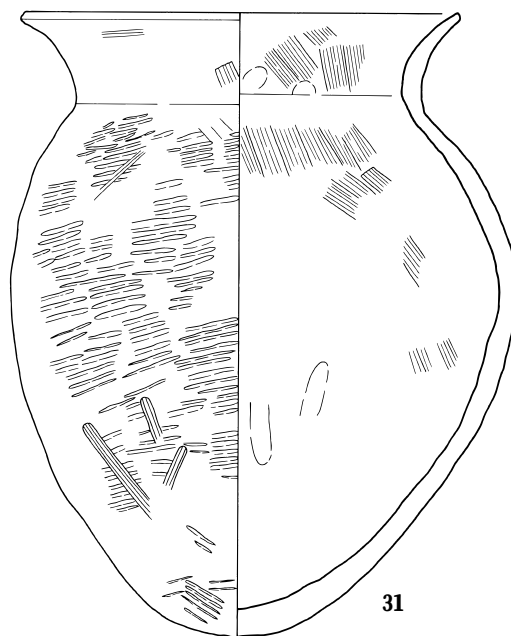
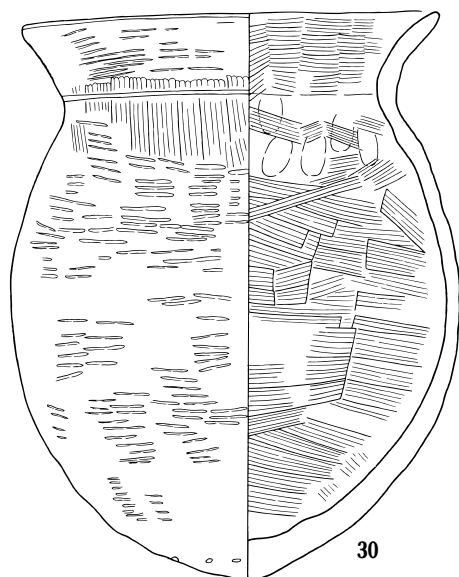
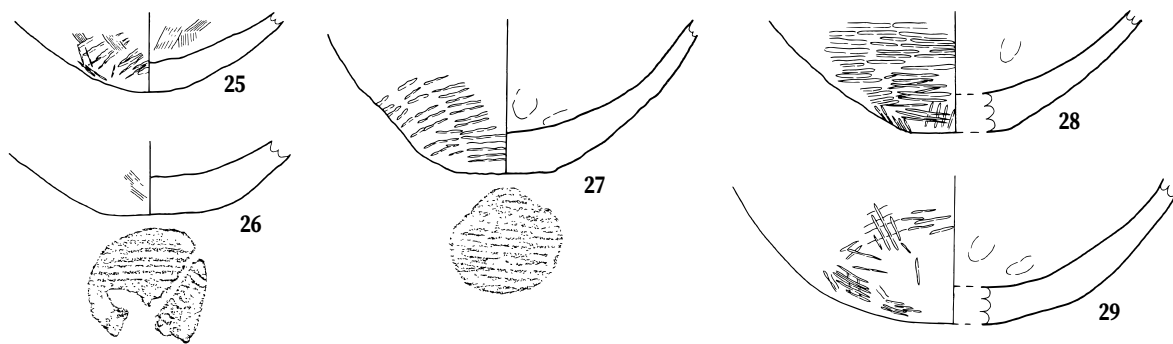
36～42は鉢である。鉢はA-1類の、器高÷口縁の比率が0.5以上の深めの器形が主体を占め、



第22図 遺物集中ブロック1出土遺物実測図1



第23図 遺物集中ブロック1出土遺物実測図2

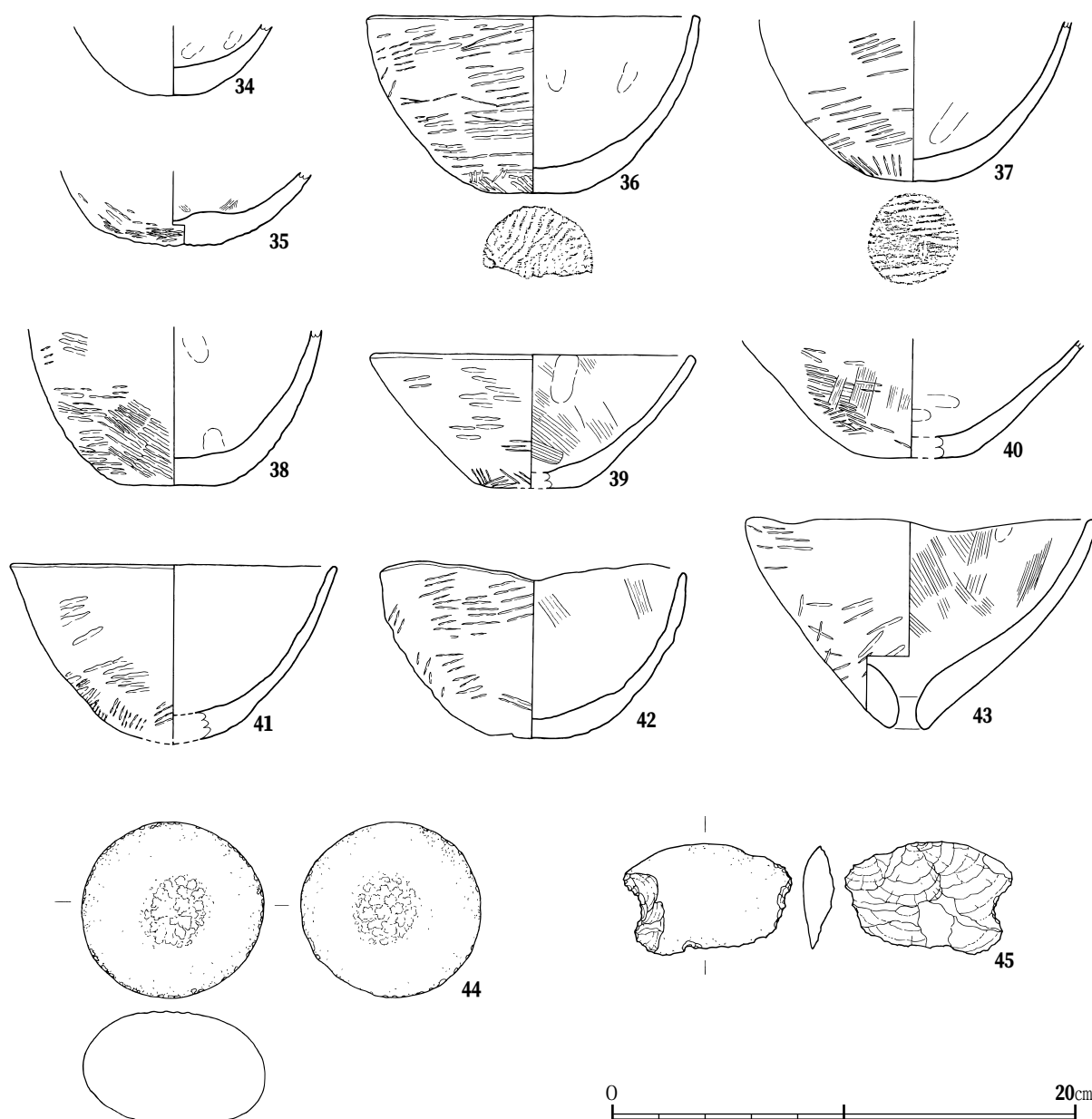


第24図 遺物集中ブロック1出土遺物実測図3

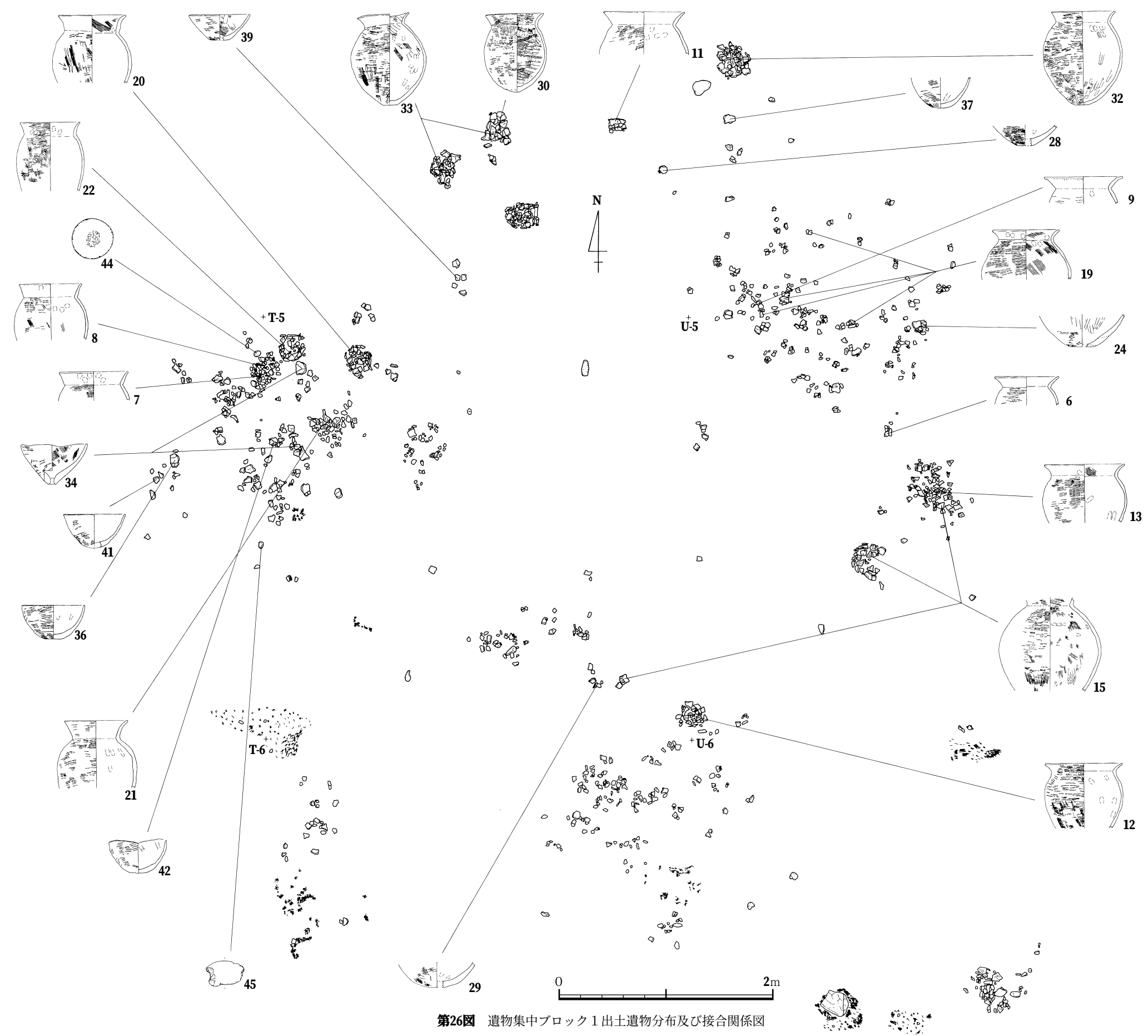
A-2類も認められる。調整は比較的外面にタタキ目残り、底部は回転させるようにしてタタキ成形を行っている。内面にはハケ目が残るものもある。**36**や**42**のように、口縁端部までタタキ目が残るものもみられる。**36**は**A-1**類に分類される深めの椀形を呈する。外面体部に煤がパッチ状に付着しており、同様に煤の付着している**20**、**22**の近くから出土している。**34**、**35**は鉢の底部とみられ、平底を呈する。

また甑も1点出土している。**43**は底部から開き気味に立ち上がり口縁部に至る器形で、端部は丸くおさめる。孔径は**0.8cm**を測り、焼成前穿孔で底部中央部に**1**孔開けられている。調整は外面に横位、左下がり、右下がりのタタキ目残り、内面はハケ、ナデ調整を施している。

44の叩石は砂岩の円礫が用いられ、両面に敲打痕がみられる。また集中部の南では**45**の石庖丁



第25図 遺物集中ブロック1出土遺物実測図4

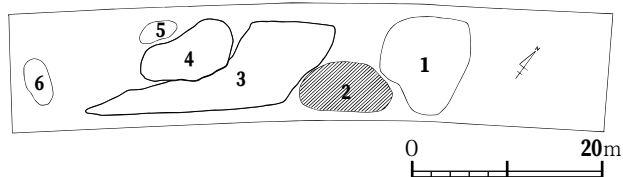


第26図 遺物集中ブロック1出土遺物分布及び接合関係図

とみられる石製品も認められる。

遺物集中ブロック2（第28・29・30図）

調査区東部で出土した遺物の一群で、遺物集中ブロック1の西側にあたる。東西約7m、南北約5mのやや細長い範囲に遺物の集中が確認された。掘り込み遺



第27図 遺物集中ブロック2位置図

構は小ピットが1個検出されたのみで遺物は伴わない。炭化物集中跡は4箇所検出されており、これらはブロック1と隣接する東側に集中する。遺物は標高3.6mの高さに水平分布している。ブロック内で検出された炭化物集中5からは、手捏土器が1点、炭化物集中7からは甕の破片が出土している。また礫がみられるものもある。遺物の集中は炭化物集中部付近と、その西側で特に認められる。遺物はその場で潰れたような状態で検出されており、甕が主体となる。またその中に僅かではあるが、壺、鉢、甑が含まれる。出土遺物の器種は壺、甕、鉢、甑、手捏土器で構成される。また土器の胎土中にみられる赤色風化砂粒については、約4割のものに認められた。

壺はD類の二重口縁壺1点が確認されている。46は内外面ともナデ調整を行う。胎土は在地のもので、弥生時代終末期のものとみられる。

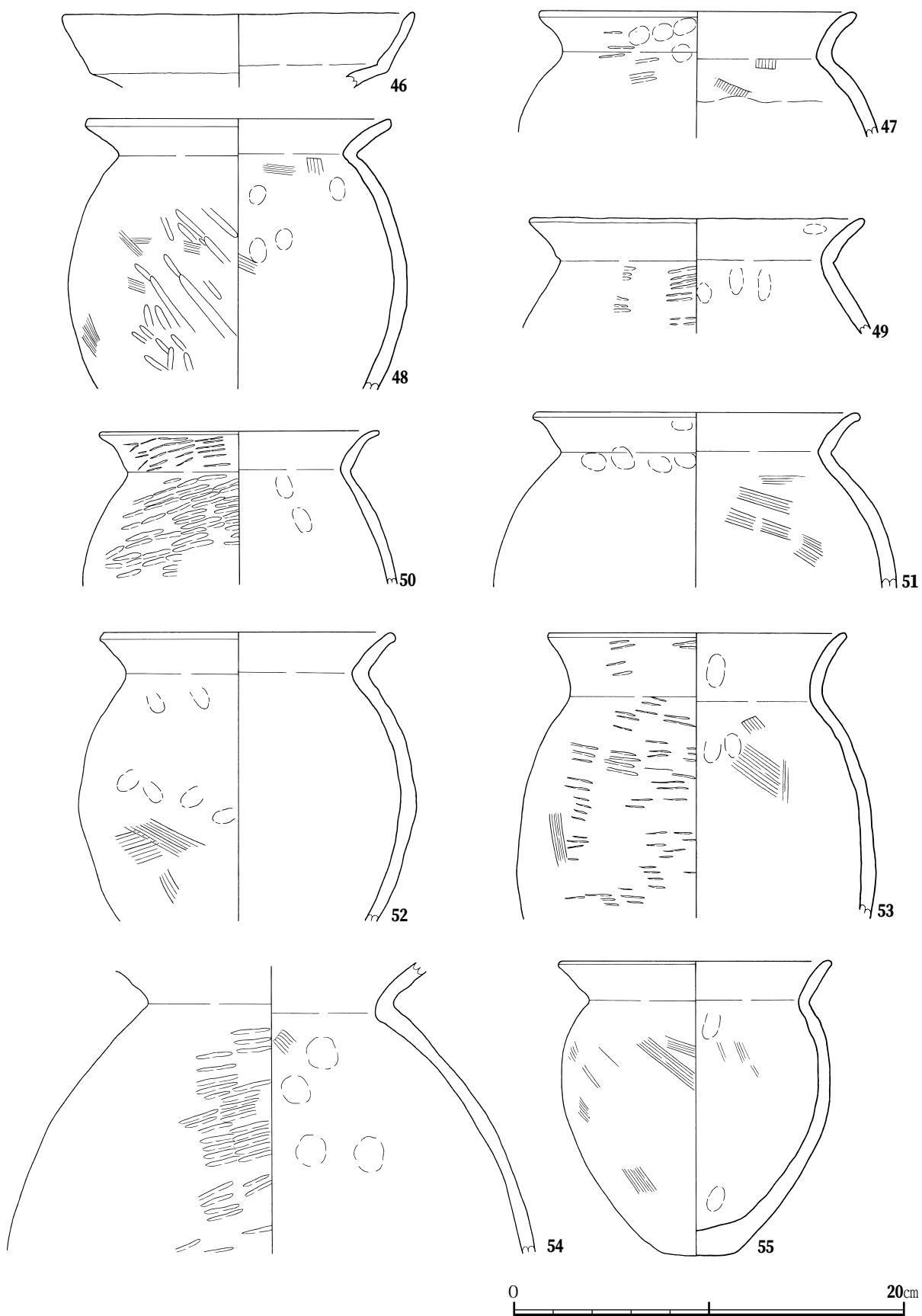
47～66は甕である。ただし58、63、64の底部は鉢、壺の可能性もある。甕はA-1類が主体を占め、僅かに51のようなB類が認められる程度である。A-1類の甕は外面にタタキ目が残るが、ブロック1に比べるとナデ調整が多用される傾向がある。口縁部のタタキもナデ消されるものが多い。タタキは横位、左下がりに施される。B類の51は内面に若干ハケが残るが、外面はナデ調整を施しており、タタキ目は認められない。甕の底部には平底と丸底があり、口縁部から底部まで復元できたのはA-1類の57である。57は丸底を呈しており、A-1類の底部には平底、丸底、尖底のいずれのものもあることは明らかである。

また55のような小型の甕も出土している。55は口縁部はくの字状に外傾し、底部は厚めの平底を呈する。内外面ともハケ調整の後ナデを施している。また外面には被熱による煤及び剥離痕が認められ、煮炊きに用いられたようである。

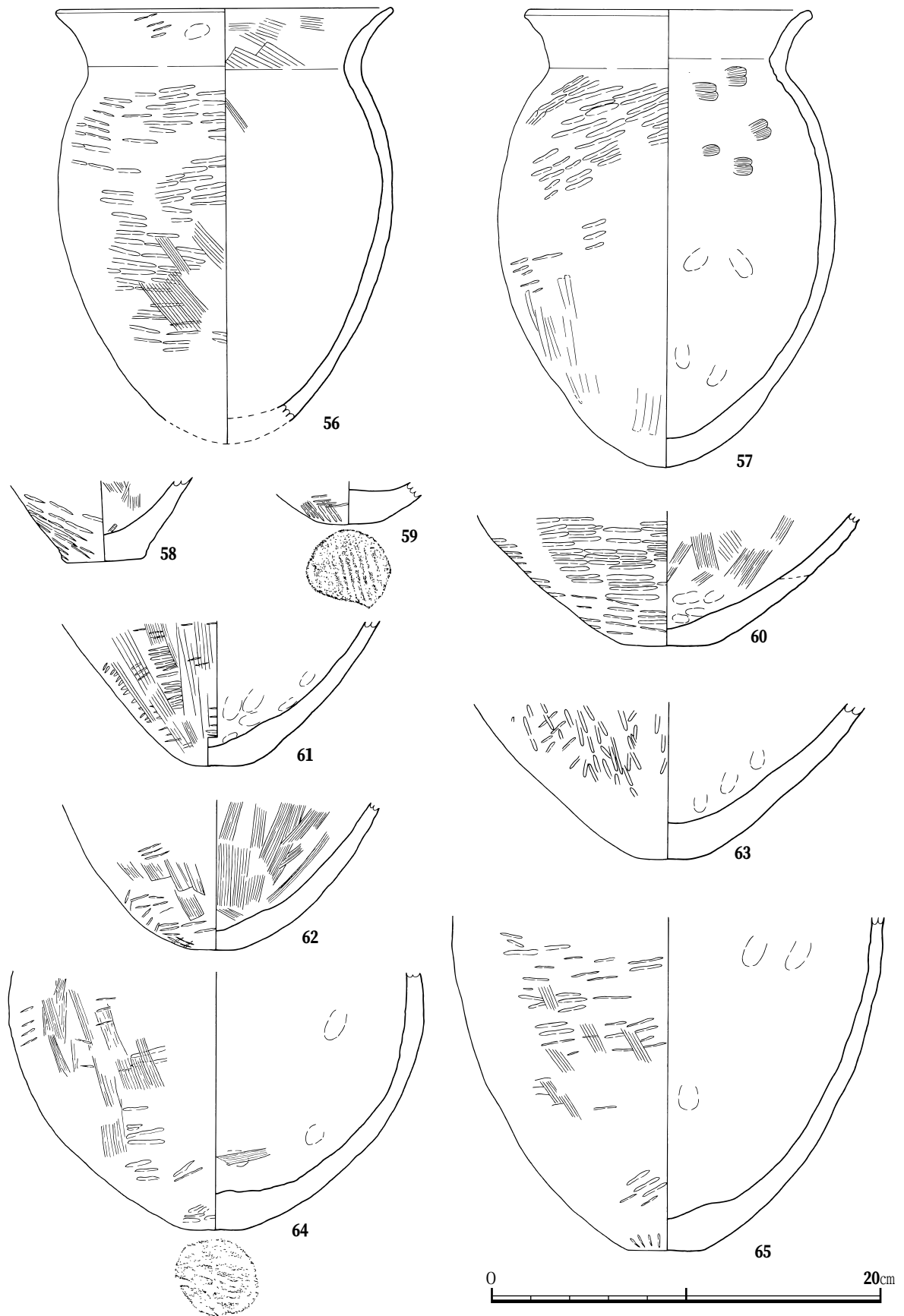
67～69は鉢である。鉢の出土は少なめであるが、A-1、A-2類、D類がみられる。69はA-1類に分類される深めの椀形の器形を呈する。外面にタタキ目、内面にはハケ目が残るが、68は甕の様相と同じく、内外面ともナデを施している。底部は平底と丸底風のものがみられる。67は口縁部の屈曲するD類で、器面はハケが若干残るがナデ調整を施している。

70は甑で、内湾気味に立ち上がり口縁部に至る深めの椀形を呈し、口縁端部は丸くおさめる。孔径は0.8cmを測り、焼成前穿孔によって底部中央部に1孔開けられている。遺物集中ブロック4で出土した125の甑と類似した器形である。

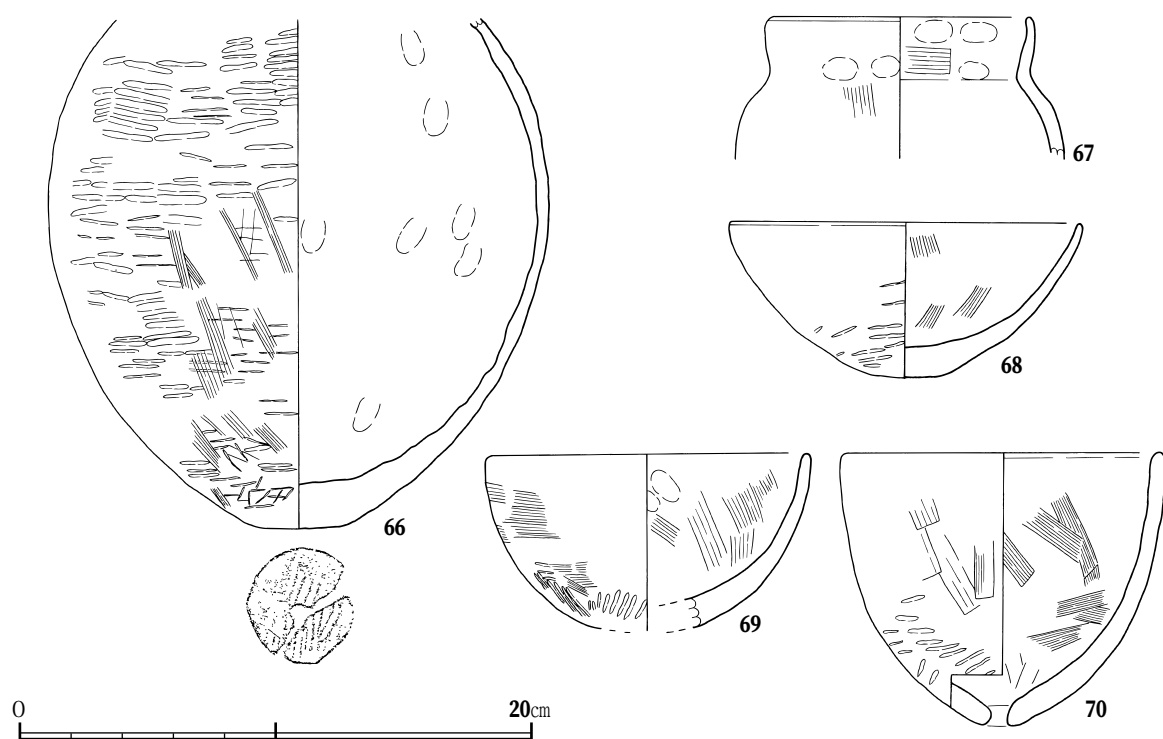
また今回の調査では搬入土器はほとんど認められなかったが、ブロック2からは東阿波型土器とみられる甕の胴部片が2点出土している。いずれも器壁に煤が付着しており、煮炊きに使用されたことが窺える。



第28図 遺物集中ブロック2出土遺物実測図1



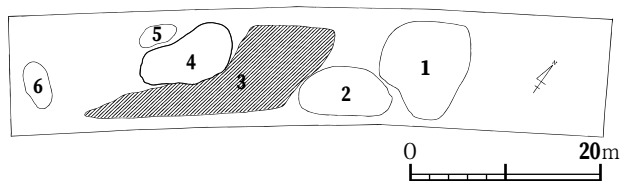
第29図 遺物集中ブロック2出土遺物実測図2



第30図 遺物集中ブロック2出土遺物実測図3

遺物集中ブロック3（第34・35図）

調査区中央部に集中する、遺物の一群である。これまでの遺物集中ブロックがサークル状に分布していたのに対し、ブロック3は北東から南西へと約8mの幅で、緩やかな弧状を描きながら調査区を縦断している。検出長は約22mを測る。



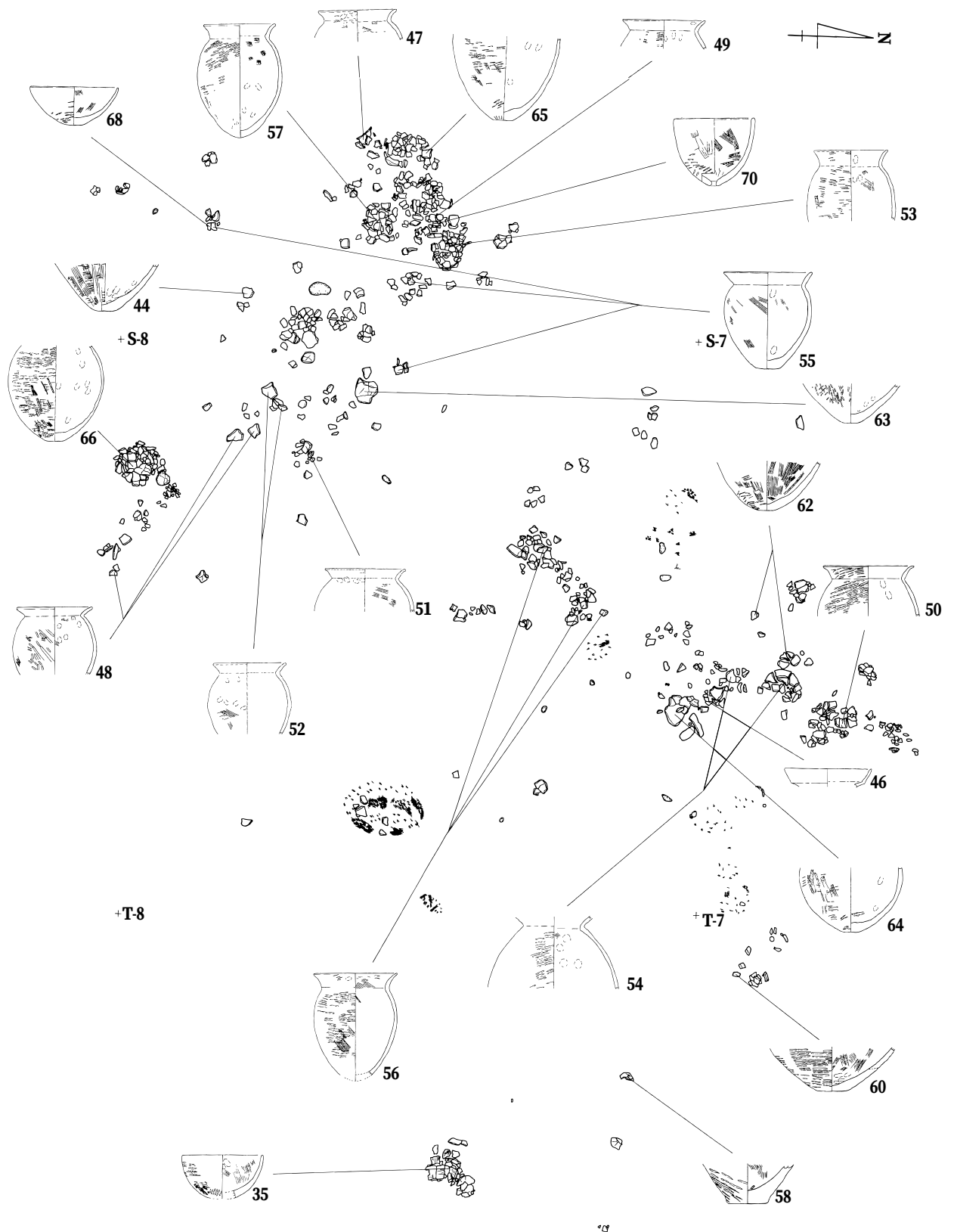
第31図 遺物集中ブロック3位置図

掘り込み遺構は確認されず、標高3.6mの高さに遺物が出土している。ブロックの北側に土器は多くみられ、南西に行くに従い少なくなっていく。そして土器の少なくなる南西部では小円礫の集中が2箇所確認されており、空間配置に何らかの意図があった可能性も考えられる。

炭化物集中は11箇所確認されており、甕を主体に1～3個程度の土器がまとまって、その周辺に散在している。遺物の密度は他のブロックよりやや低めである。これらの土器の多くは甕のみ、あるいは甕と鉢で1つのセットのような状態で検出されている。ただし復元図示の不可能なものも多く、どの分類のものがセット関係を持つのかについては不明である。また71の壺は、遺物の集中からやや外れた場所で出土している。

出土遺物の器種は壺、甕、鉢、高杯、砥石で、甕よりも鉢の出土数が多い。また胎土中に赤色風化砂粒が認められる土器は、ブロック3出土土器の約2割にあたる。

壺は71の1点が出土しており、壺分類のA類にあたる。くの字状に大きく外反し、口縁端部はヨコナデによって平らに仕上げる。内面は器壁が剥落しているため調整は不明だが、外面は丁寧



第32図 遺物集中ブロック2出土遺物分布及び接合関係図

なハケ調整を施す。

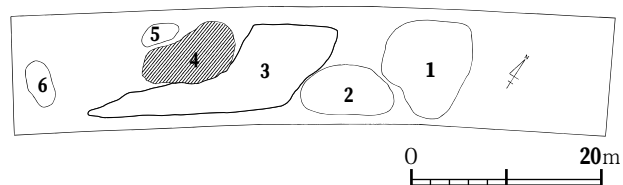
72～82は甕である。甕はA-1類、A-3類がみられる。調整は外面はタタキ成形後、部分的にナデ調整を施すもので、内面は74、76のようにハケ調整を施すものや、75のように指頭圧痕が多く残るものなどがある。ただしブロック1に比べるとナデ調整が多用される傾向がある。タタキ目は横位と左下がりなのがみられる。またブロック3では口縁部に最大径を持つとみられるA-3類が2点出土している。また77～81、83～85は甕の底部とみられる。底部は平底と丸底があり、甕の約半数には外面に煤が付着している。

86～96は鉢である。鉢はA-1～3類、D類があり、そのうち器高÷高さが0.4未満の浅めのA-3類が他のブロックに比べ多くみられる。外面調整はタタキ成形後、口縁部にヨコナデを施すものがほとんどである。また92の鉢のように、外面底部の器面が剥落し煤が付着しているものもあり、火を受けたためと考えられる。底部は平底、あるいはやや上げ底風のものがある。D類の口縁部が屈曲する器形は、1区では96の1点が出土するだけである。高杯は器形の分かるのは97の脚部1点のみであり、総じて高杯の出土数は僅少である。高杯は脚柱部が中実で裾部が屈曲せずに広がる器形を持つため、A類に分類できる。B類に比べ、やや大きめである。

これら土器の他、石器も出土している。98は荒砥石で、砂岩の円礫が使用されている。四面に使用痕があり、そのうちの一面は比較的細かな箇所研磨に使用されたらしく、三面に使い分けられている。また被熱により赤色化している。

遺物集中ブロック4（第37・38・39図）

調査区中央部から西部の、標高3.5～3.6mの高さで出土した遺物の一群である。東西約9m、南北約5mの楕円状に遺物が集中する。ブロックの北側は3.6mとやや高く、南西に向かって10cm程度地形的に落ち込んでいくとみられる。ブロック内には6箇所の炭化物の集中があり、そ

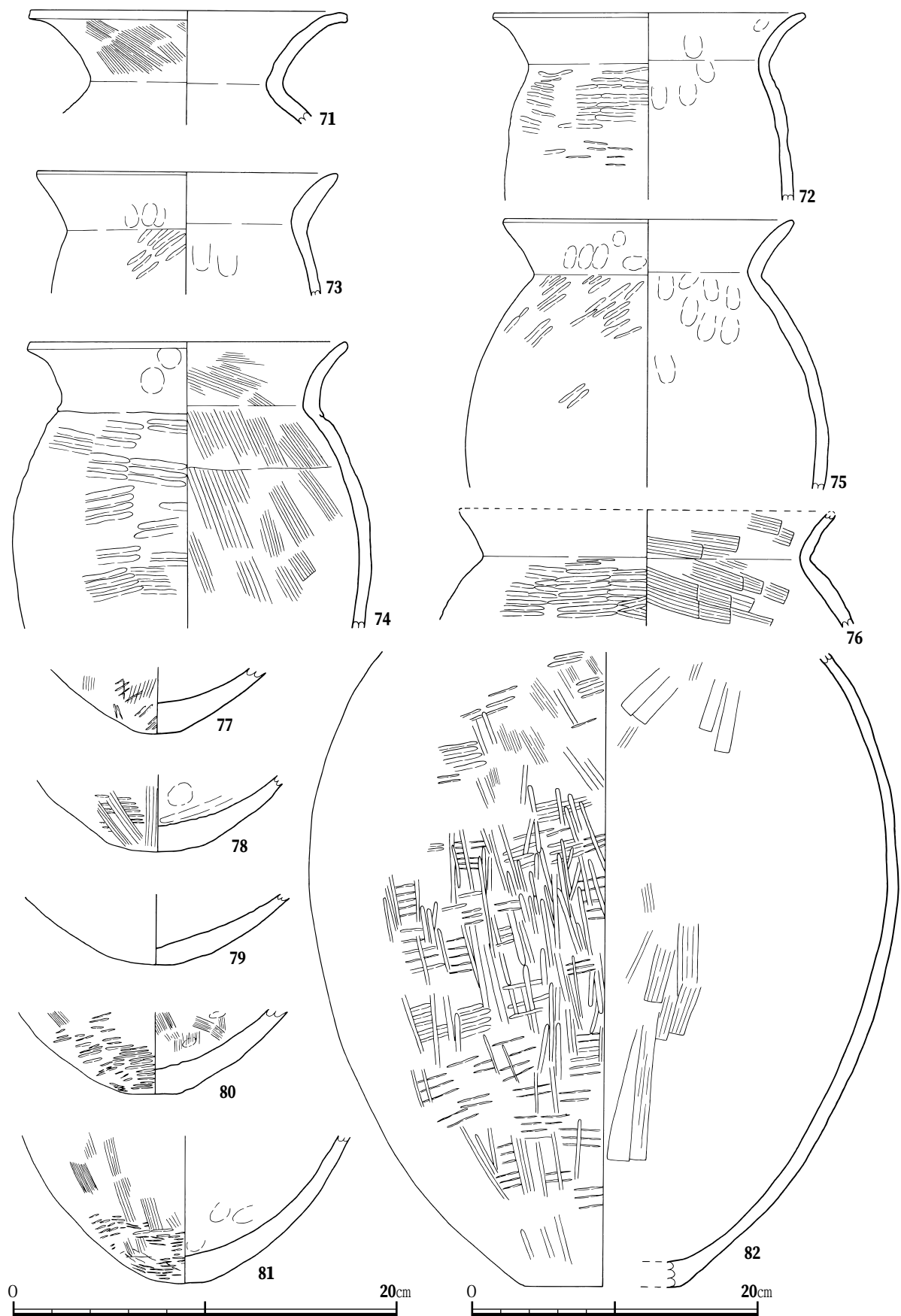


第33図 遺物集中ブロック4位置図

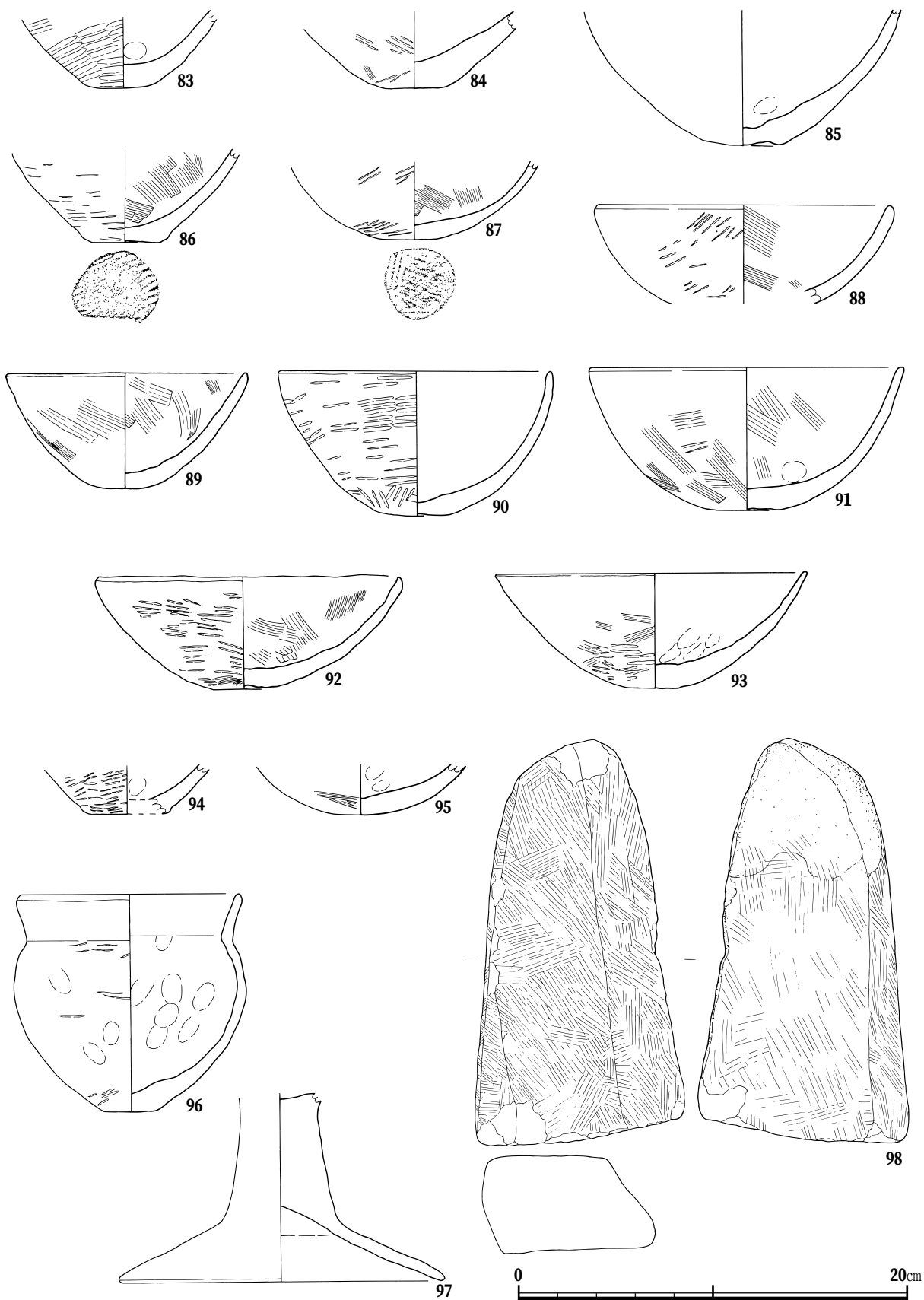
れらは2～4mの間隔で検出された。しかし何らかの規則性は認められない。また炭化物集中の上面では、土器が上に乗った状態で検出されている。これらの多くは鉢で、器面には煤などの火を受けたような痕跡は認められず、鉢として使用後に廃棄されたものとみられる。また110のように甕が炭化物集中の近くにみられる例もある。110の器表面には煤が付着しており、この甕は火にかけられ煮炊きに使われた後、そのまま廃棄されたものと考えられる。

遺物の出土状態は大きく二つに分けられ、①一個体の土器がその場で潰れた様な状態で出土するものと、②炭化物集中を伴って甕を中心に壺、鉢、高杯がわずかに混じり集中するものものが認められる。101、107、112、113の出土状態が①に、100、103～105、116、121、122、126などの集中は②に当てはまると考えられる。また②に赤色風化砂粒を胎土中に含む土器群が集中している。

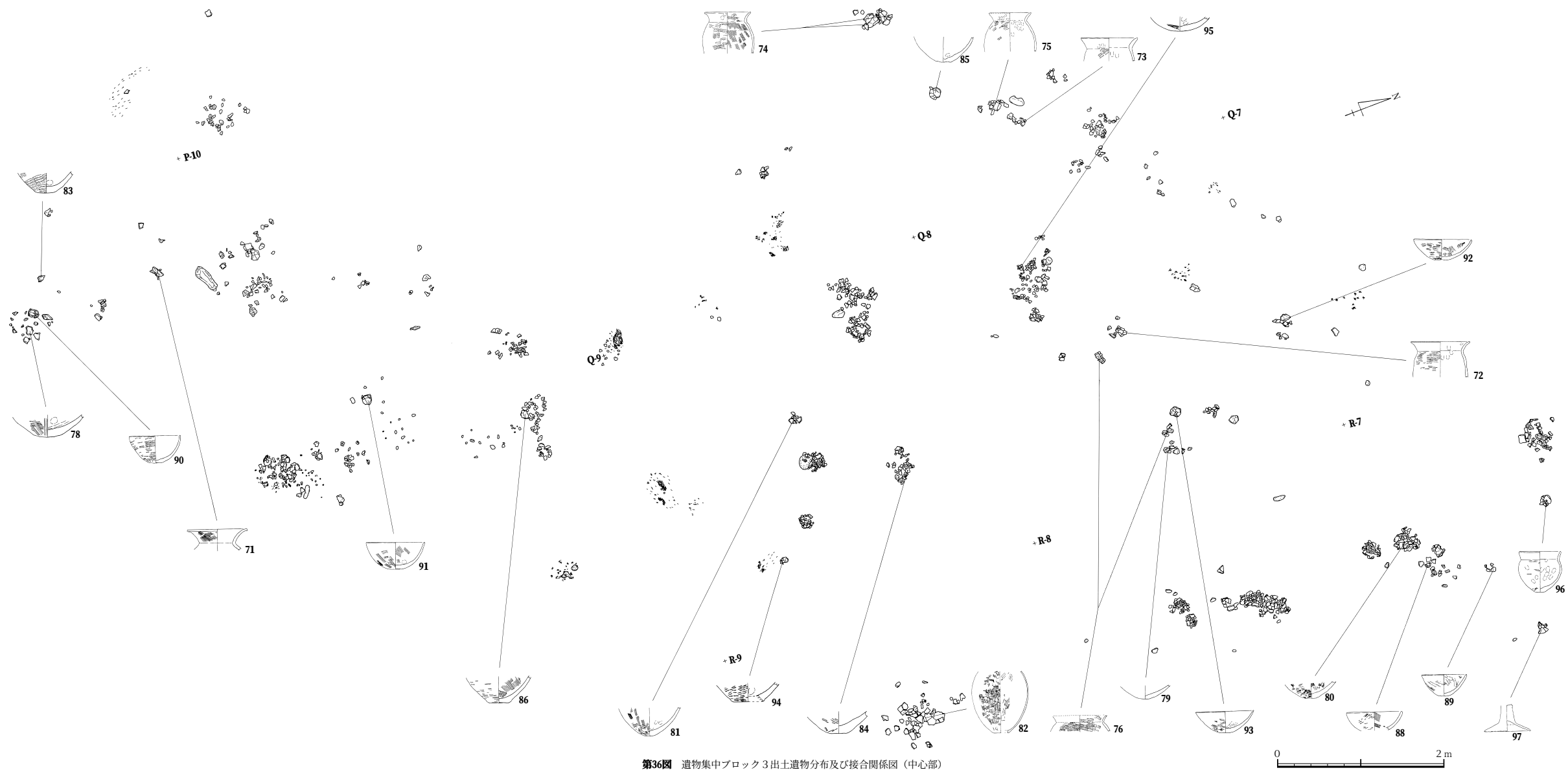
器種は壺、甕、鉢、甗、高杯で構成される。壺はB類、C類、D類が出土している。99はB類



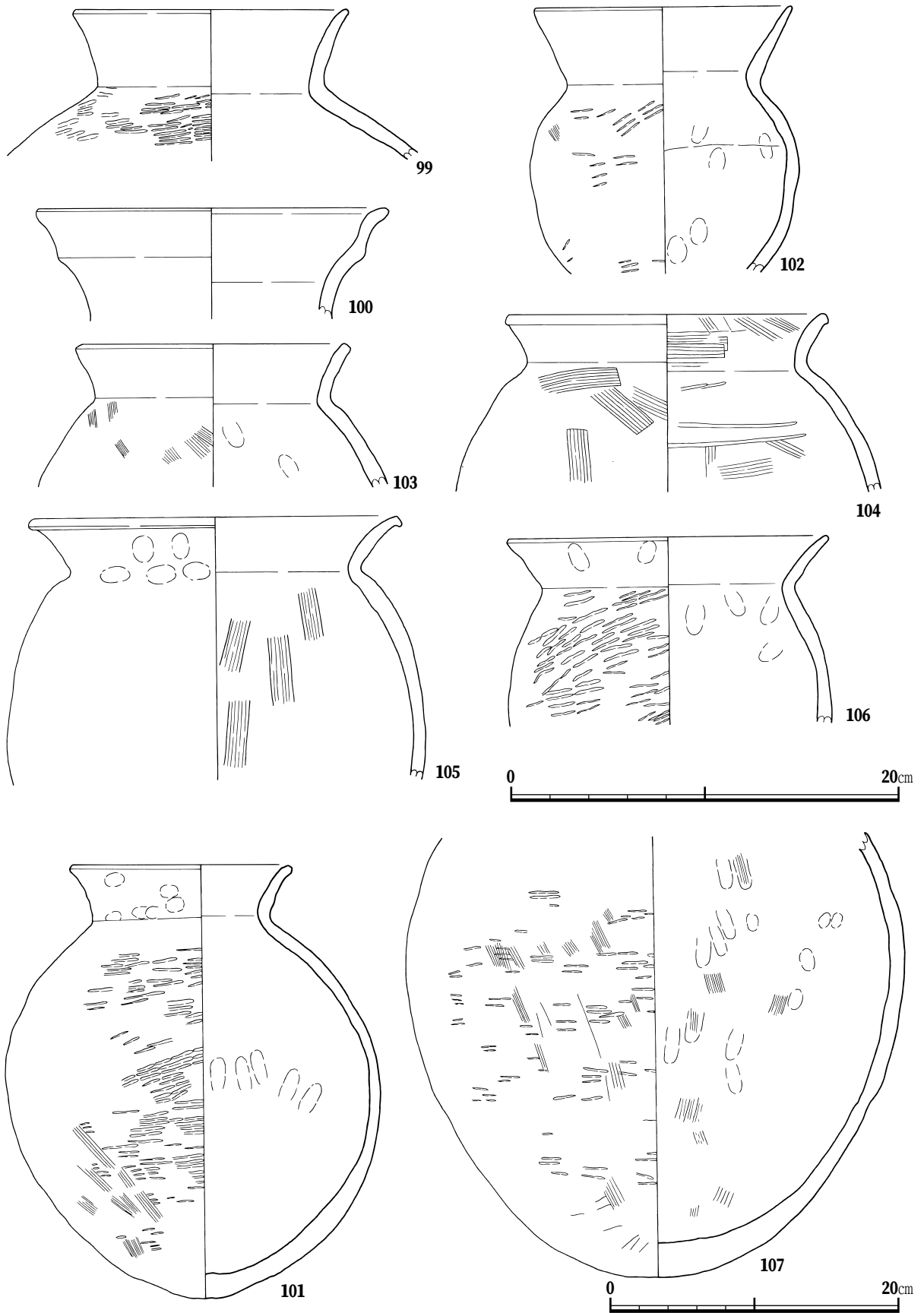
第34図 遺物集中ブロック3出土遺物実測図1



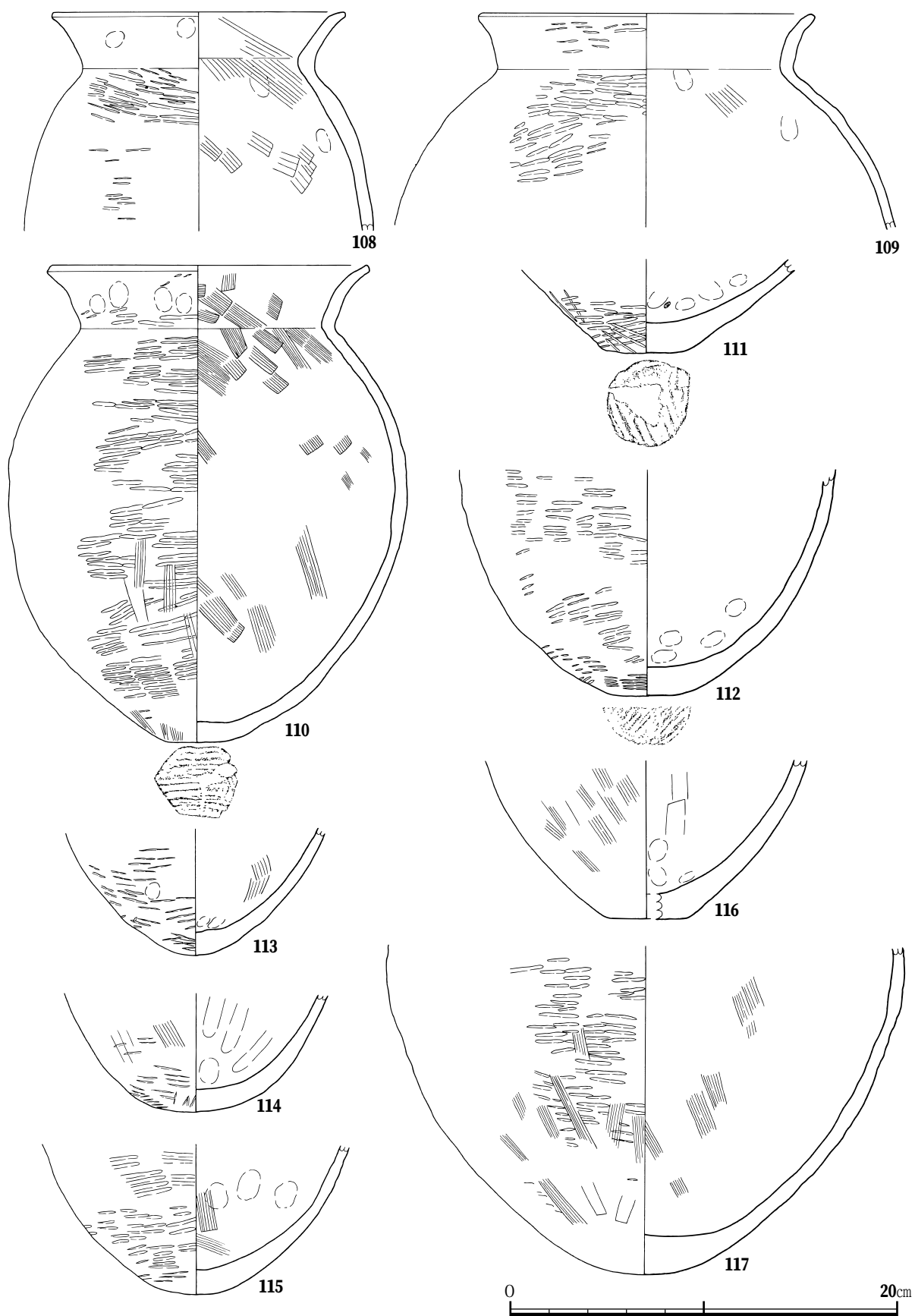
第35図 遺物集中ブロック3出土遺物実測図2



第36図 遺物集中ブロック3出土遺物分布及び接合関係図（中心部）



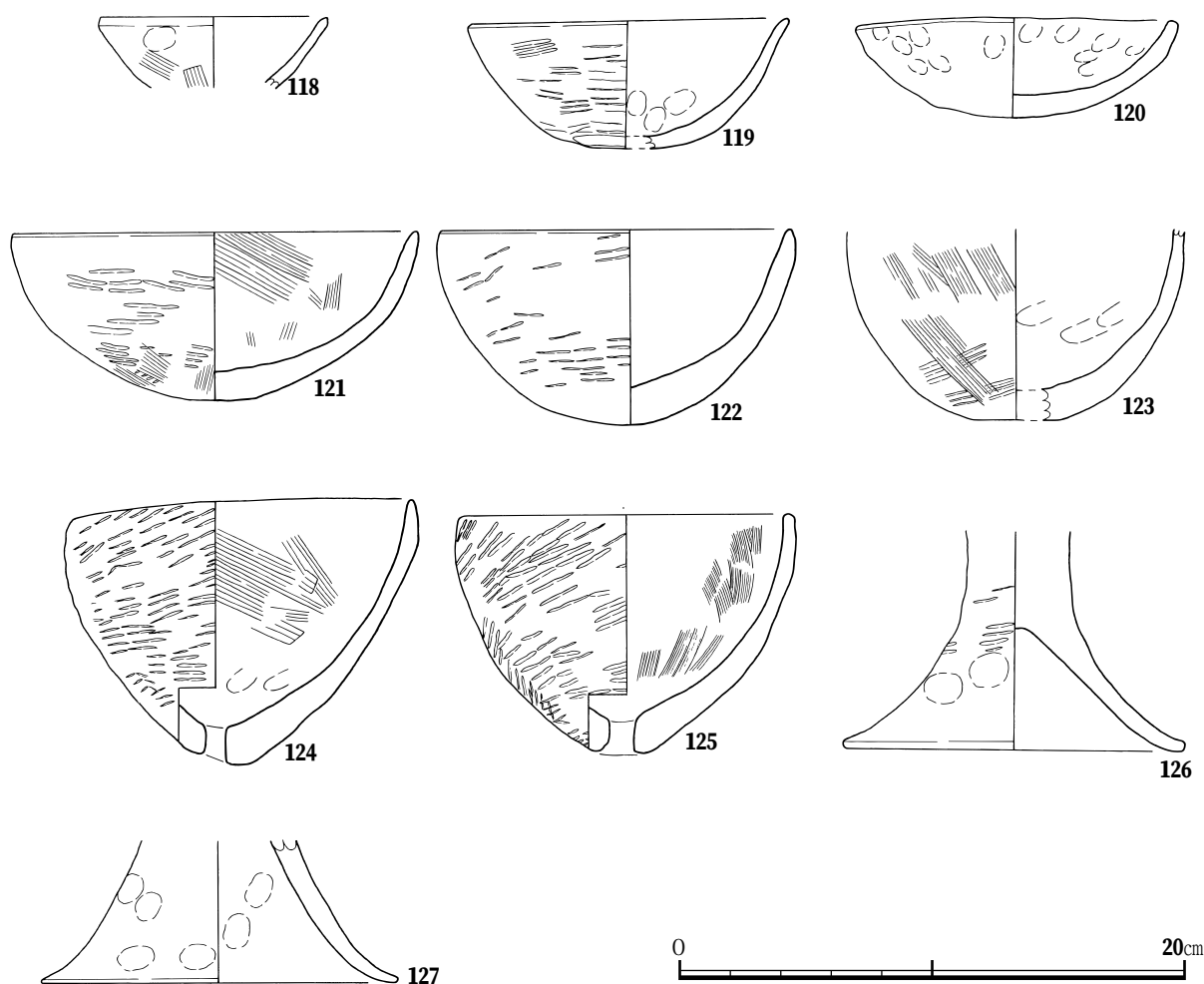
第37図 遺物集中ブロック4出土遺物実測図1



第38図 遺物集中ブロック4出土遺物実測図2

に分けられ、口縁部はくの字状に屈曲して外反し、胴部は球形を呈するとみられる。外面は横位のタタキ成形を行い、口縁部はナデ調整を施す。**100**は**D**類の二重口縁壺で、復元図示できたのは口頸部のみである。**101**は器形は甕に類似しているが、胴径値に比べ口径値が小さいことから**C**類として壺に分類した。調整は甕と同様に、タタキ成形後下胴部に部分的にハケ調整を施す。底部は丸底である。これらの壺は比較的近くから出土している。

102～**117**は甕である。甕は**A-1**類、**A-2**類、**B**類があり、数量的に突出した類はみられない。調整は**A-1**類はタタキ成形後、下胴部にハケ調整を部分的に施したものがほとんどであるが、**A-2**類はタタキ成形の後ナデを多用している。また**B**類には外面にタタキ目が残るものと、ハケ、ナデ調整を施すものがみられる。タタキ目は横位、または左下がりのものがあり、**110**のように方向を変えてタタキ成形が行われたものもみられる。また**111**～**117**は甕の底部とみられる。平底と、やや尖底に近い丸底がみられるが、主体となるのは平底である。



第39図 遺物集中ブロック4出土遺物実測図3

118～123は鉢である。鉢はA-1～3類、B類が出土した。ブロック1～3でもみられたA類の他に、器形が皿状を呈し指頭圧痕が多く残るのが特徴のB類の鉢が認められる。A類はタタキ成形後、部分的にナデ調整を施している。また118の小型鉢の外面にはハケ目が残る。鉢の底部は119、123を除き、全て丸底である。123は壺または甕の可能性もある。

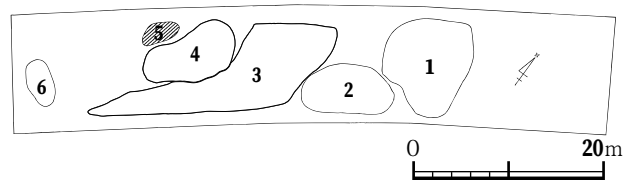
124、125は甗である。いずれも深めの椀形を呈し、底部に1孔、焼成前穿孔されている。どちらも炭化物集中10の近くから出土しており、煮炊きに使われた可能性も考えられるが、煤の付着はみられない。

126、127は高杯の脚部である。126は脚柱部が中実で、裾部が屈曲せずに広がる器形を呈しており、高杯のA類に分類される。脚柱部には成形の際についたとみられる横位のタタキ目が若干認められる。

これまでの遺物集中ブロックでは、約2～4割の土器胎土に赤色風化砂粒が認められた。ブロック4でも、約4割の土器胎土に赤色風化砂粒がみられるが、これらの土器はブロックの南西部に集中することが明らかとなった。先ほどあげた100、103、105、116、121、122、126の土器がそれにあたり、104を除く全ての土器の胎土に赤色風化砂粒が入る。また調整に関しても同じブロックのその他の土器より、ややナデ調整が多用される傾向がみられる。この小ブロック内では壺、甕、鉢、高杯とほとんどの器種が揃う。

遺物集中ブロック5（第41図）

調査区北西部の、標高3.5mの高さで検出された遺物の集中である。掘り込み遺構は確認されず、水平面で遺物が出土する。確認できたのは東西約4m、南北約2mの範囲での小さなまとまりであるが、遺物の広がりには調査区外に延びるものとみられる。遺物は半円を



第40図 遺物集中ブロック5位置図

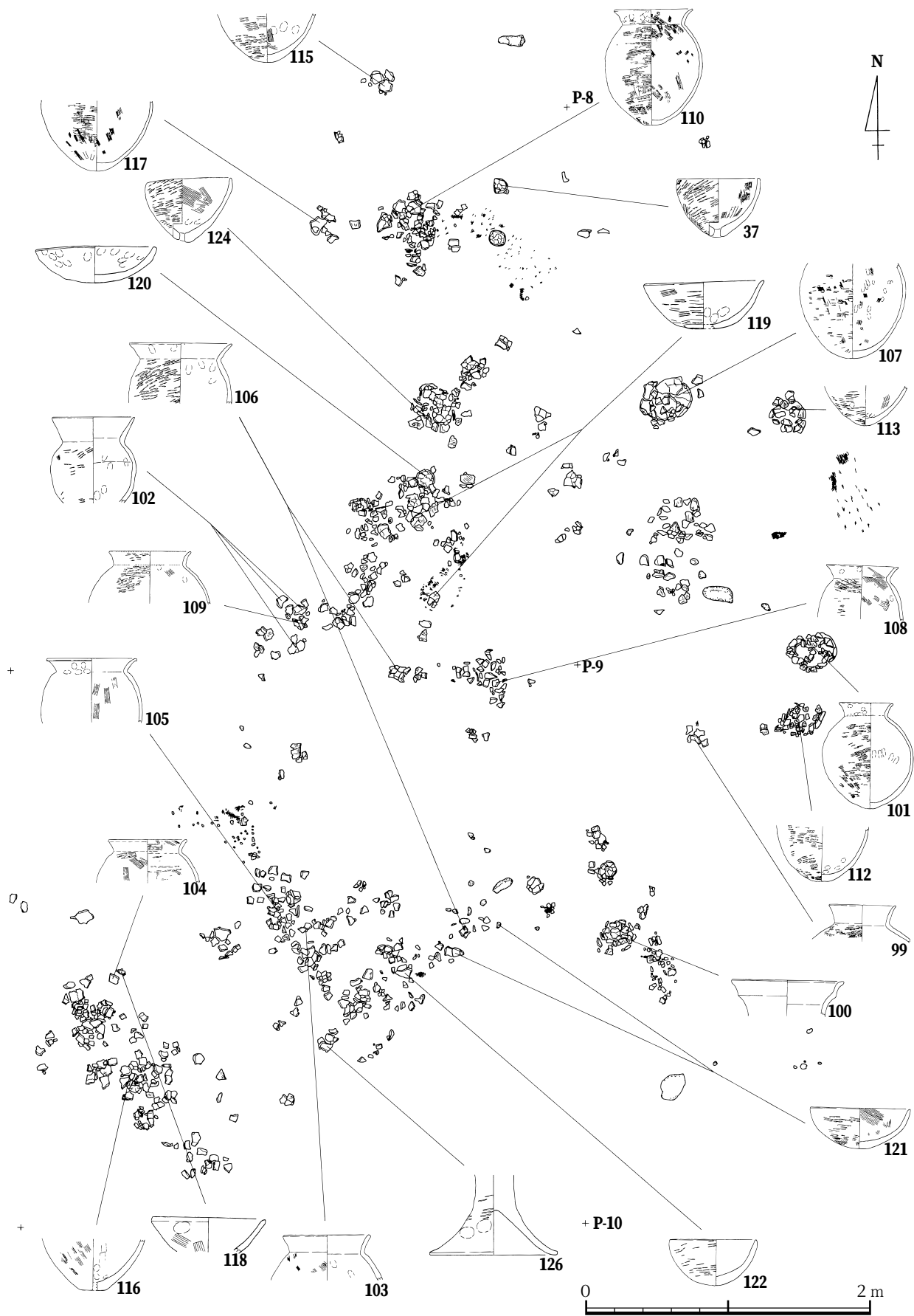
描いて出土しており、壺、甕で構成される。壺、甕の中には一個体が比較的大きなものがみられる。ブロック内では炭化物の集中は認められないが、これも調査区外に存在する可能性が高い。また土器胎土に含まれる赤色風化砂粒は、ブロック5出土土器には全く認められなかった。

128はA類の壺で、口縁部がラップ状に外反し胴部は球形を呈するとみられる。器面はタタキ成形後、部分的にハケ調整が施されるが、大部分はナデ消している。内面の粘土接合部には指頭圧痕が多く残る。

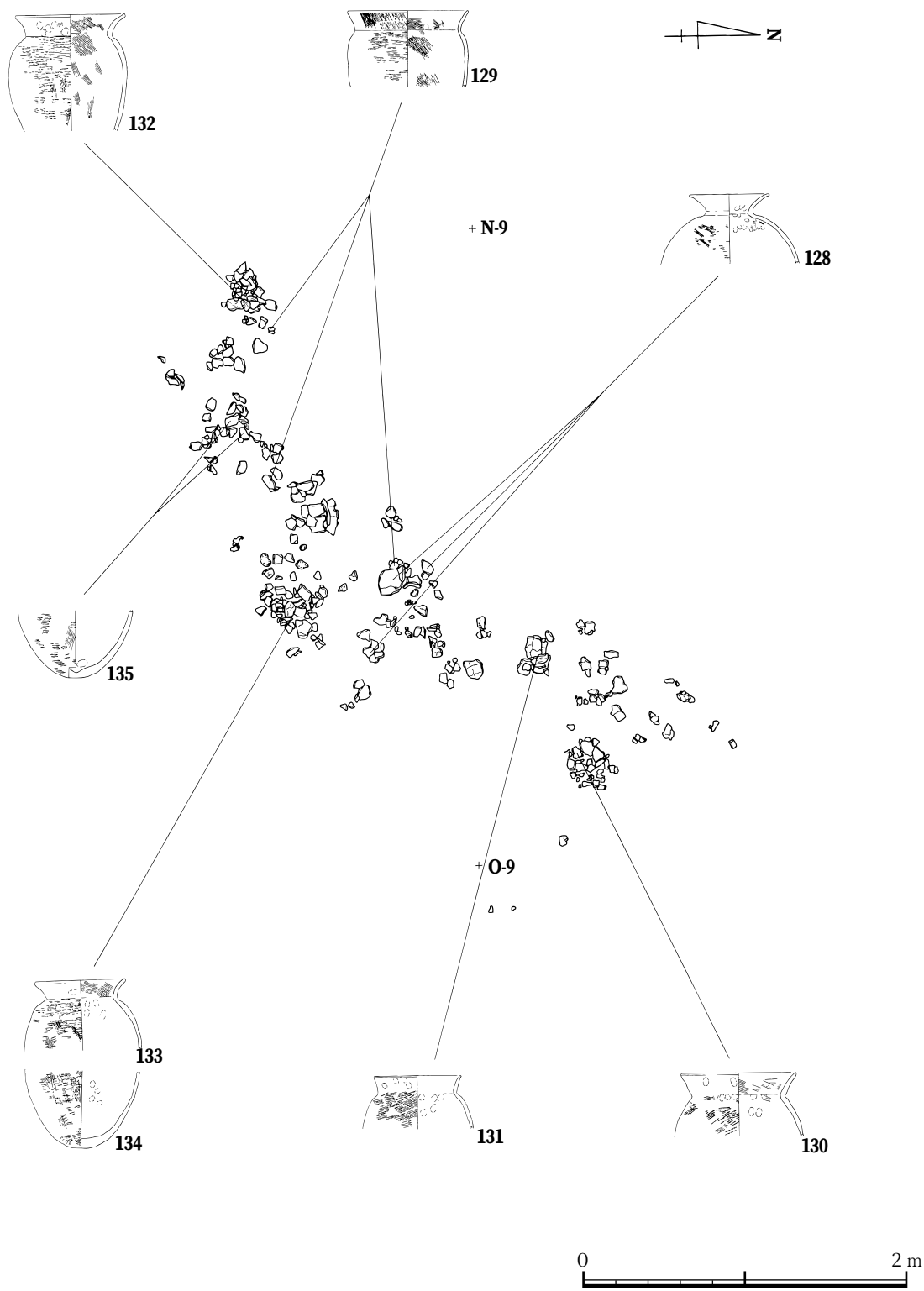
129～135は甕である。甕はA-1類とA-3類がみられる。いずれも調整はタタキ成形後に部分的にハケ調整を施している。また129、132は内面にハケ目がみられる。129はA-3類の大型の甕である。133、134は接合は不可能であったが、同一個体と考えられる。134、135は甕の底部で、平底と丸底がみられる。



第41図 遺物集中ブロック5出土遺物実測図



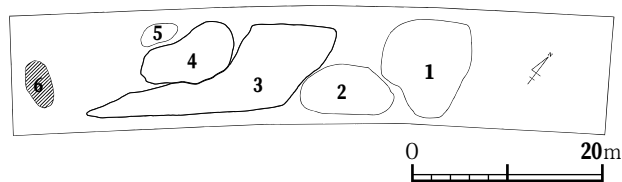
第42図 遺物集中ブロック4出土遺物分布及び接合関係図



第43図 遺物集中ブロック 5 出土遺物分布及び接合関係図

遺物集中ブロック 6

調査区西端部で検出されたブロックで、東西約 4 m、南北約 6 m の範囲に遺物の集中がみられる。遺物は水平堆積で、掘り込み遺構は認められない。また調査区の西端部にあたるため、遺物の広がり確認できなかったが、調査区外に延びる可能性が高い。



第44図 遺物集中ブロック 6 位置図

炭化物の集中はブロック内の 3 箇所で確認されており、炭化物集中18と19は1.3mの間隔で、北西～南東方向に並んで検出されている。また炭化物集中18の西側、約50cm離れた地点に長軸が35cm前後の小規模な炭化物集中がみられる。出土遺物の大半は炭化物集中18の付近で出土しており、これに伴うものの可能性が高い。遺物は土器のみで、煤の付着した器面からみて甕であったとみられる。土器の一つの破片はブロック1～5に比べ更に小さく、一個体になるとみられるが復元図示はできなかった。

ブロック 6 の遺物の出土レベルは標高3.4m前後で、ブロック 1 が検出された調査区東端に比べ、約20cm近く地形が西に向かって落ち込んでいることが分かった。またそれに伴い、土層も粘性が強くなっていく。

(5) 包含層出土遺物

1区出土遺物のうち、第 XVI 層、第 XVII 層の遺物集中ブロックから外れた地点で出土したもの、及び第 XVII 層出土遺物については包含層出土遺物として扱う。なお遺物実測図は、1区第 XV 層出土遺物とともに一括してまとめている。

第XVI 層出土遺物 (第49図-165～172、第50図-173～178)

第 XVI 層は古墳時代の遺物包含層である第 XV 層と、弥生時代終末～古墳時代初頭の包含層である第 XVII 層との間の層である。10cm前後の厚みで調査区全域で認められ、調査区の西に行くに従い土層は若干粘性に変わる。第 XVI 層出土遺物は少量にとどまり、明確な遺物のまとまりも認められなかった。遺物の上下移動によって上下の層の遺物が入り込んだ可能性も考えられる。甕、鉢、手捏土器などの器種が出土している。

165～167は甕である。165は口縁部がくの字状に屈曲し外反する。口縁端部はヨコナデによって面に仕上げられている。また粘土帯の接合部は器壁が厚いまで、ケズリなどの調整は行われない。外面は横位のタタキ成形を行う。内面は口縁部にハケが若干残るが、ナデ調整とみられる。166は口縁部は直立気味に立ち上がり外反する。口縁端部はヨコナデによって、面に仕上げられる。外面に横位のタタキ目、内面にはハケ目が残るが、全体的に摩耗が著しい。167は丸底の甕である。口縁部はくの字状に屈曲して外傾し、端部は丸くおさめる。外面は横位のタタキ成形後、下胴部には板状工具を用いたナデ調整を施す。内面はナデ調整とみられるが、粘土接合部には指頭圧痕が多く残る。168～171は平底の甕の底部である。

173～175は鉢で、いずれも上外方に直線的に開く器形を呈する。173は平底の鉢であるが、底部

はやや丸底化している。外面は全面左下がりのタタキ成形後、口縁部にヨコナデ調整を施す。内面はナデ調整で、口縁部内面には土器を重ねたような痕跡が認められる。**174**、**175**は小型の鉢である。

172は高杯の脚部である。脚柱部は中空で、裾部は屈曲して広がる。裾部の内外面には煤がベルト状に付着している。

176～**178**は手捏土器である。**176**は鉢形を呈し、内外面はユビによる成形・調整が行われる。**177**は平底の手捏土器である。深めの器形で、器厚は薄めである。**178**は平底を呈し、内外面ともユビによる成形を行う。

第XVI層出土遺物（第50図－179～182）

第XVI層出土遺物の大半は、祭祀との関係が想定されることから遺物集中ブロックとして取り上げることとし、ここではそれらから離れて出土したものを包含層出土遺物として扱う。

179は泥岩の剥片に、若干の調整を加えたものである。一面は自然面が残る。用途は不明であるが、石庖丁を意識して作られた可能性もある。

180～**182**は第XVI層中で検出された木製品である。**180**は杭先、**181**、**182**は柱根とみられるが、遺構とみられる掘形はなく、各々が関連性のない地点から出土したため、遺構に伴うものかその性格についても不明である。

第XVII層出土遺物（第50図－183・184）

遺物は第XVII層で僅少なが出土した。これらは調査区東端、及び北西部で出土したが、出土密度は非常に薄くまとまりはなかった。掘り込み遺構には伴わない。**183**、**184**はいずれも甕である。**183**は口縁部の粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。外面はナデ、内面はハケ調整を行っている。**184**は口縁端部外面を粘土帯によって肥厚させ、外面には煤が付着していた。これらは第XVI層出土遺物よりやや古く、弥生時代後期の遺物とみられる。

2. 古墳時代

調査区東半部の第XV層中から、古墳時代の遺物が少量ではあるがまとまって出土した。これらは標高**3.8**～**4.1**mの高さで出土しており、第XVI層同様、北東部から南西部に向かって低くなる地形であると考えられる。

古墳時代の遺物は調査区の東部～中央部までに水平分布しており、掘り込み遺構には伴わない。しかしながら遺物の出土状態、器種構成からみて、祭祀と関連する性格を持つと考えられることから、古墳時代の土器集中を遺構として扱うこととする。

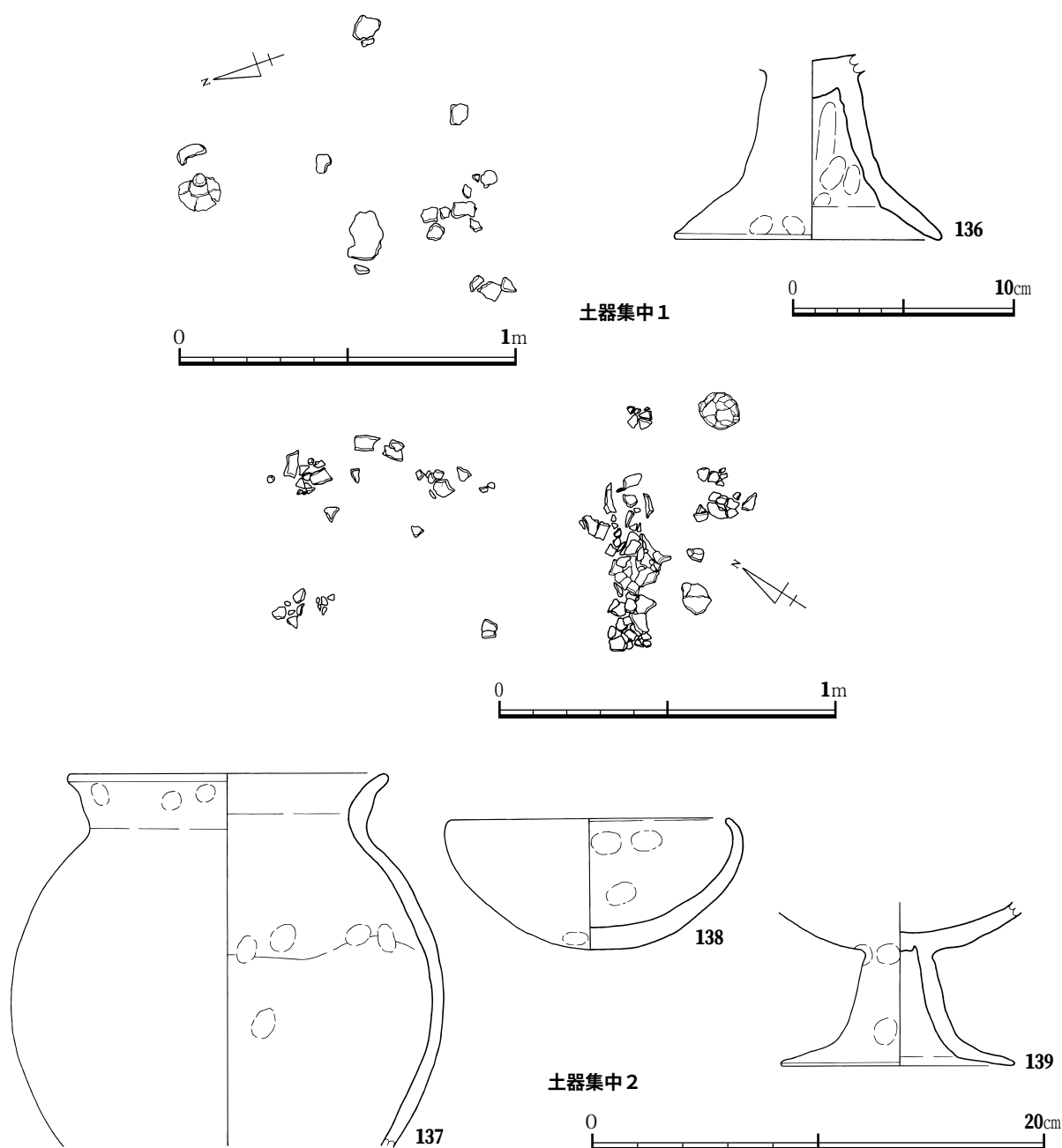
(1) 土器集中

土器集中1（第45図－136）

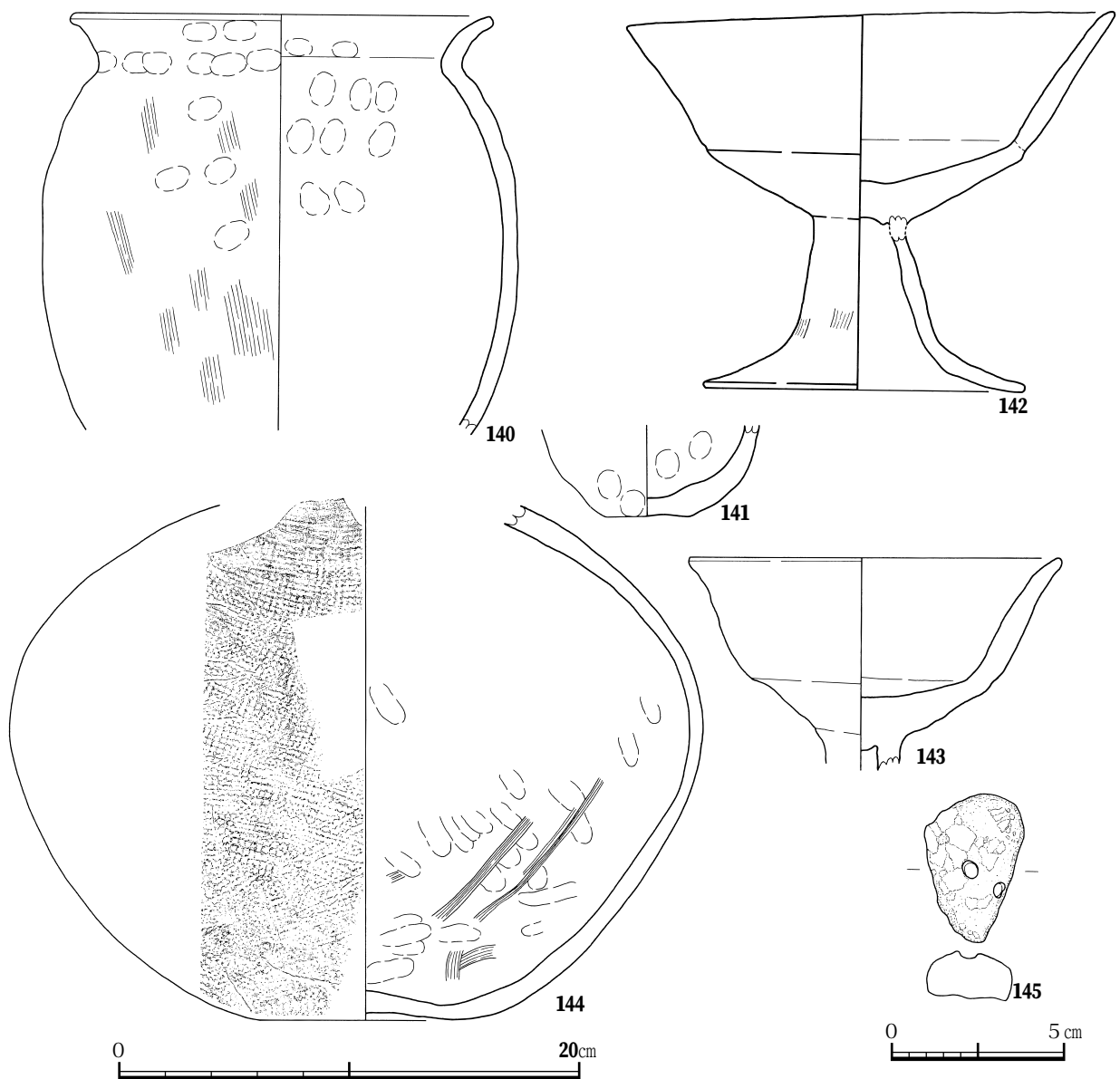
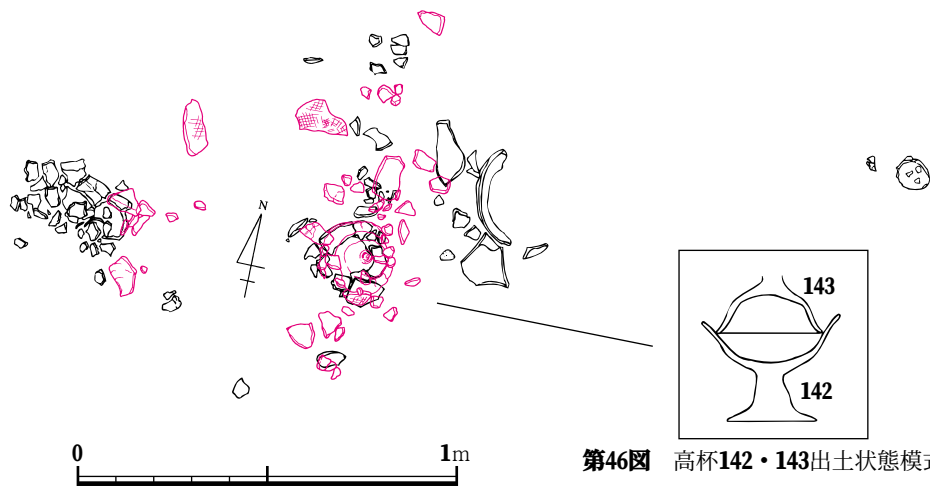
調査区東部、標高**4.0**～**4.1**mのレベルで検出された。土器の集中というよりは高杯一個体の出土状態とみられる。脚部は復元図示できたが、杯部は復元できなかった。**136**は高杯の脚部である。脚柱部は中空で、裾部はやや平坦に立ち上がる器形である。

土器集中2（第45図－137～139）

調査区中央部の標高3.8～3.9mで検出された土器の集中である。東西約1m、南北約1.5mの範囲で甕、鉢、高杯が各一個体出土した。これで一つのセット関係になるとみられるが、壺は確認されていない。**137**は甕で、やや球形状の胴部を持つ。口縁部は若干肥厚気味で、端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整を施す。内面には粘土接合痕がみられる。これは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器分類のうちの甕**B**類に類似している。**138**は鉢である。底部は丸底を呈し、口縁部は内湾する。内外面ともナデ調整である。**139**は高杯の脚部である。脚柱部は中空で裾部は平坦気味に立ち上がる。



第45図 土器集中1・2平面図及び遺物実測図



土器集中3（第47図）

調査区中央部南側、標高**3.8～3.9m**で検出された土器の集中で、東西約**1m**、南北約**2.5m**の範囲にまとまって出土した。遺物は土師器の甕、鉢、高杯、須恵器甕で構成され、中心となるのは土師器の高杯である。またいずれも胎土に赤色風化砂粒を含む。

高杯の**142**、**143**は、**142**の上に**143**が天地逆にして被さった状態で出土した。杯内部からは何も検出されなかった。**140**は甕で、口縁部はくの字状に屈曲し外反する。内面はナデ調整、外面はハケ、ナデ調整を施す。**141**は小型の鉢で、口縁部は残っていないが椀状を呈するとみられる。**142**、**143**は高杯である。**142**は比較的大型で、杯底部は有段で緩く外方向に開く。脚柱部は中空で、裾部は開いて立ち上がる。外面にハケ目が若干残る。**143**は杯部で杯底部に段を有する。口縁部はあまり開かない。**144**は須恵器の甕である。口頸部は欠損している。やや扁平で、最大径が胴部中位にある。内面は指頭圧痕及び工具痕が多く残る。

145は、平らな面に、若干加工痕がみられる用途不明石製品である。

(2) 包含層出土遺物

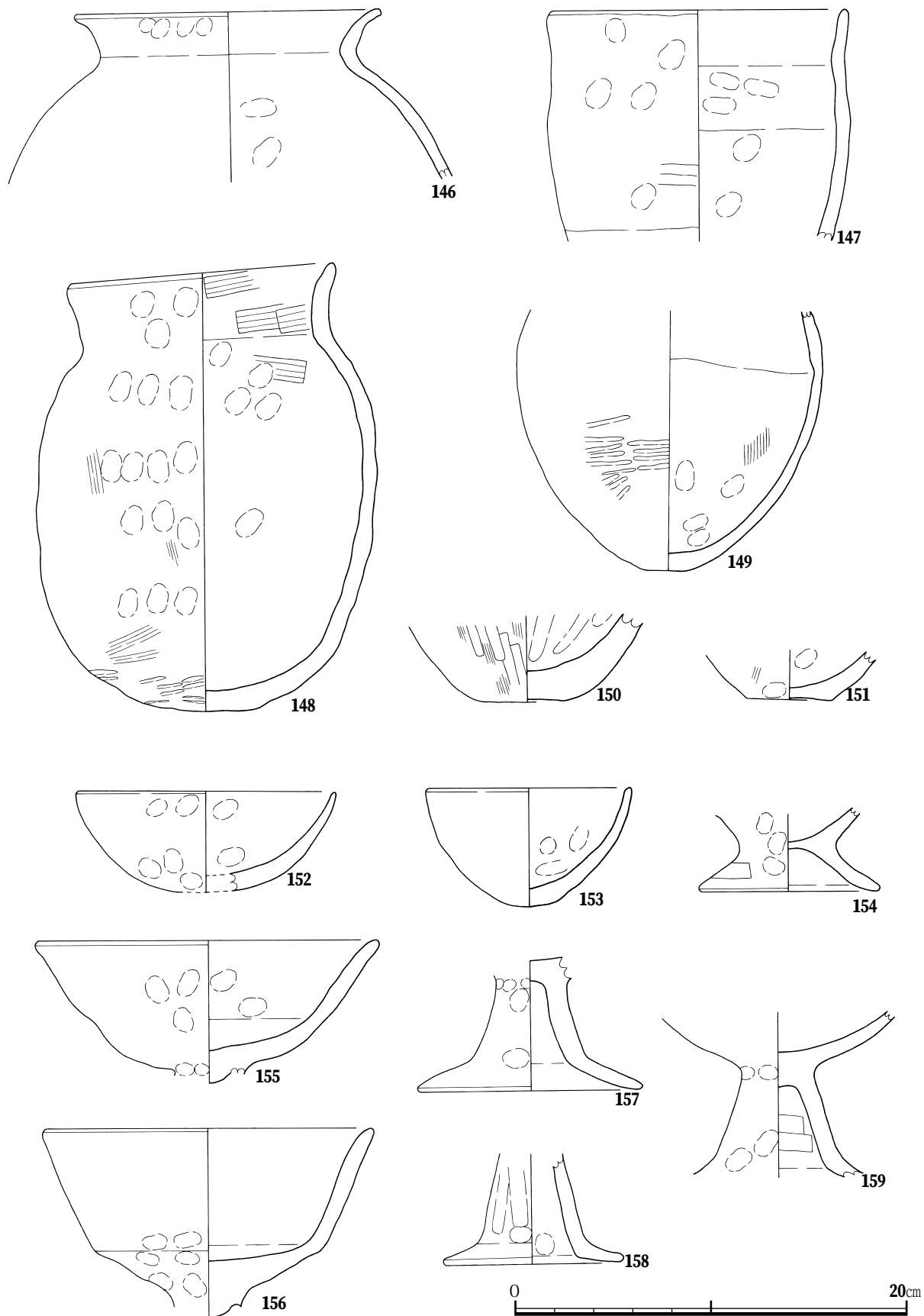
第XV層出土遺物（第48図・49図－160～164）

古墳時代の遺物包含層である。第XV層出土遺物は一部の土器集中部を除いては、ほとんどは点在して出土している。土器集中は何らかの行為の跡と考え遺構として取上げたが、それ以外の散発的に出土した遺物の中で復元図示が可能なものを包含層出土遺物として一括図示した。器種は甕、鉢、高杯で、前時期に比べ高杯の増加が看取される。

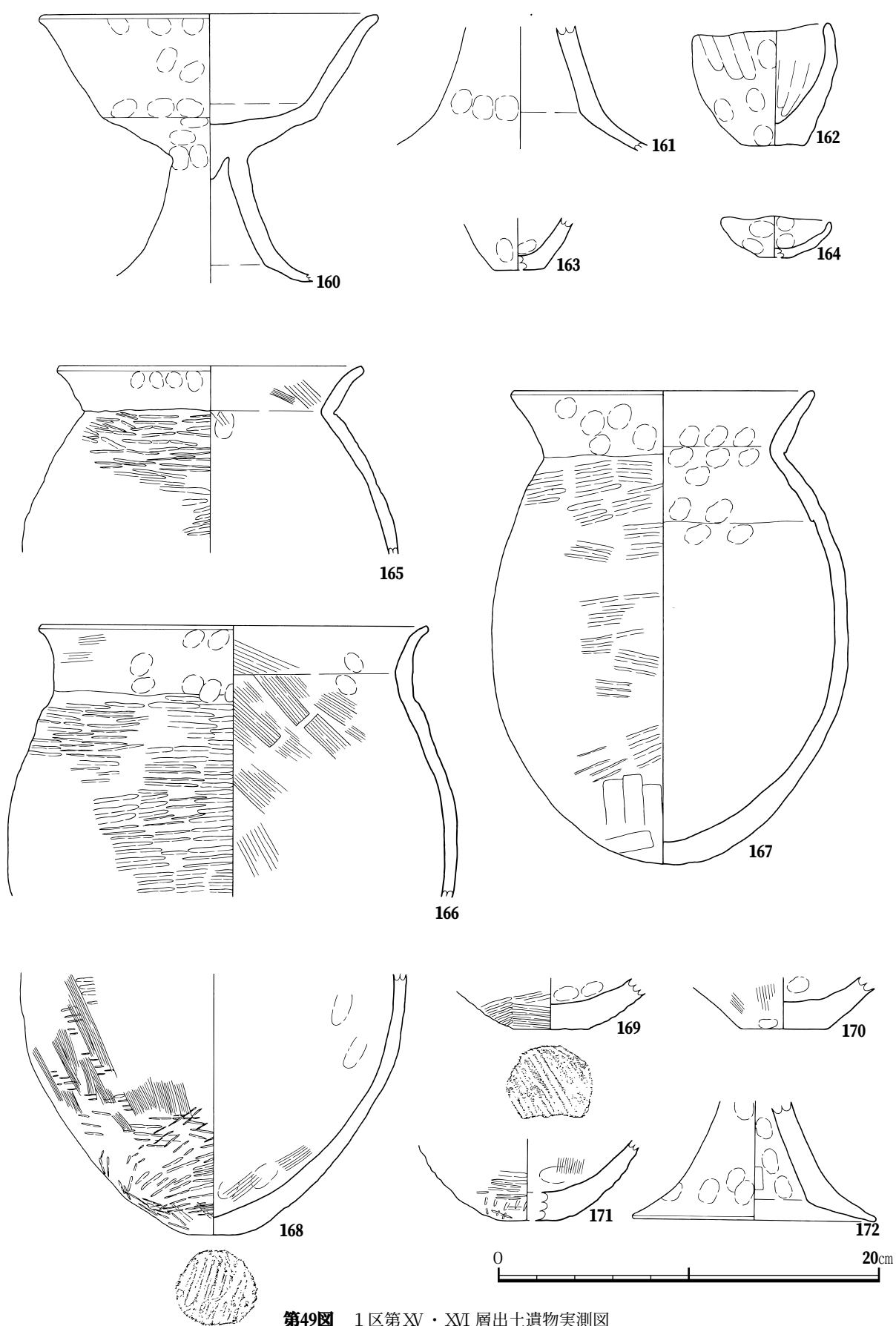
146～149は甕である。甕は器形から3種類に分けることができ、**146**は前時期の**B**類に、**147**は**C**類に当てはめることができる。底部は平底と丸底がみられる。**146**は口縁部が屈曲して外反する器形である。内外面とも摩耗が著しく、調整は不明である。**147**は口縁部が屈曲せずに上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。外面はタタキ目、ハケ目がわずかに残るが、大部分はナデ調整を施している。内面は粘土接合面と多くの指頭圧痕が残っている。**148**は前時期にはみられない器形である。胴部は肩部、下胴部が張る器形で、口縁部は屈曲し上方に立ち上がる。口縁端部がわずかに内湾気味に外に開く。器壁の厚みは、底部から口縁部までほとんど変わらず一定である。外面はタタキ成形後、ハケ、ナデ調整が施され、内面は口縁部～上胴部までハケが残る。内外面とも粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。底部は丸底が潰れたものとみられる。**150**、**151**は平底の甕または鉢の底部とみられる。

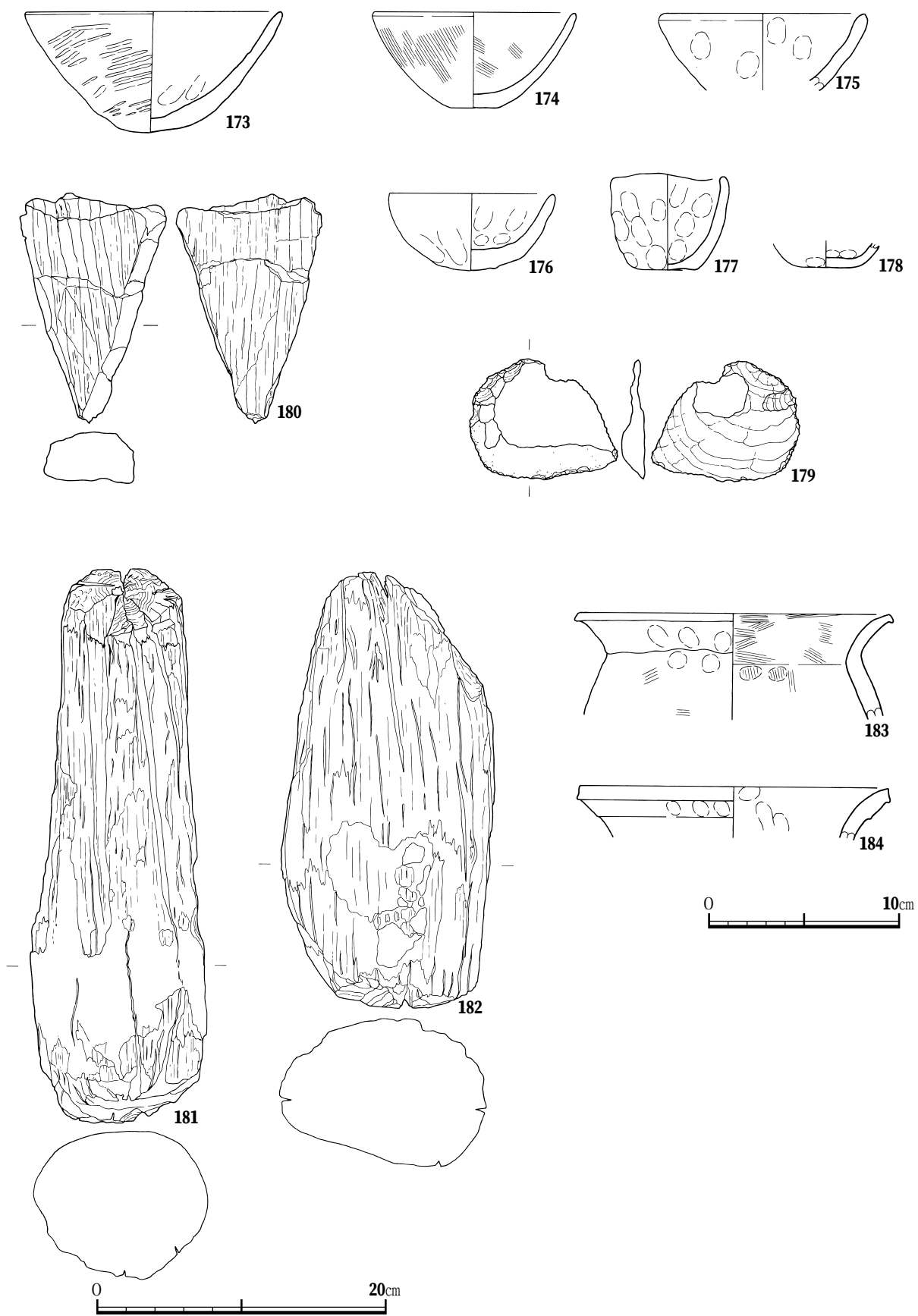
152～154は鉢である。深めの椀形のものと中間的なもの、そして台付鉢がみられる。また底部は平底と丸底が認められる。**152**はやや浅めの器形で、丸底を呈すると考えられる。内外面とも器壁が剥落しており、調整は不明である。**153**は平底の小型の鉢である。底部から内湾気味に立ち上がり口縁部に至る器形で、深めの鉢である。内外面とも摩耗が著しく、調整は不明である。**154**は台付鉢で、内外面ともナデ調整を施し、外面には板状工具によるナデが認められる。

155～161は高杯である。高杯の杯部には**155**のように段を持たずに緩やかに口縁部が広がるものと、**156**のように明瞭な屈曲部を持ち口縁部が直線的に立ち上がるものが認められる。また脚部は



第48図 1区第XV層出土遺物実測図

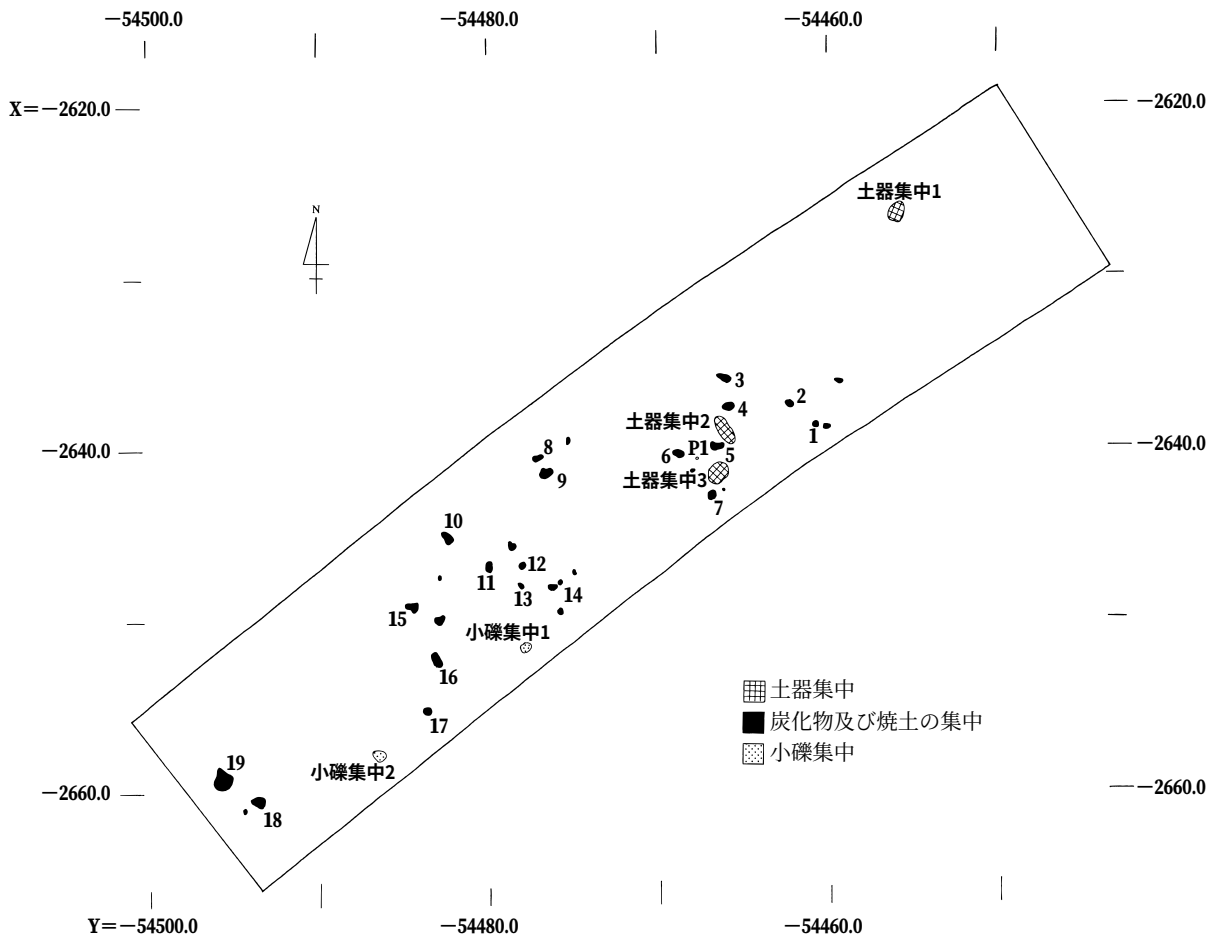




第50図 1区第XVI・XVII・XXII層出土遺物実測図

全て中空で、裾部が屈曲して広がる。調整は杯部はナデ調整で、指頭圧痕が多く残る。脚部は脚柱部内面に工具痕が認められるものがある他、粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。

162～164は手捏土器で、器形的に深めのものと皿状の**2**種類がみられる。



第51図 1区遺構分布図 (S=1/400)

第2節 2区

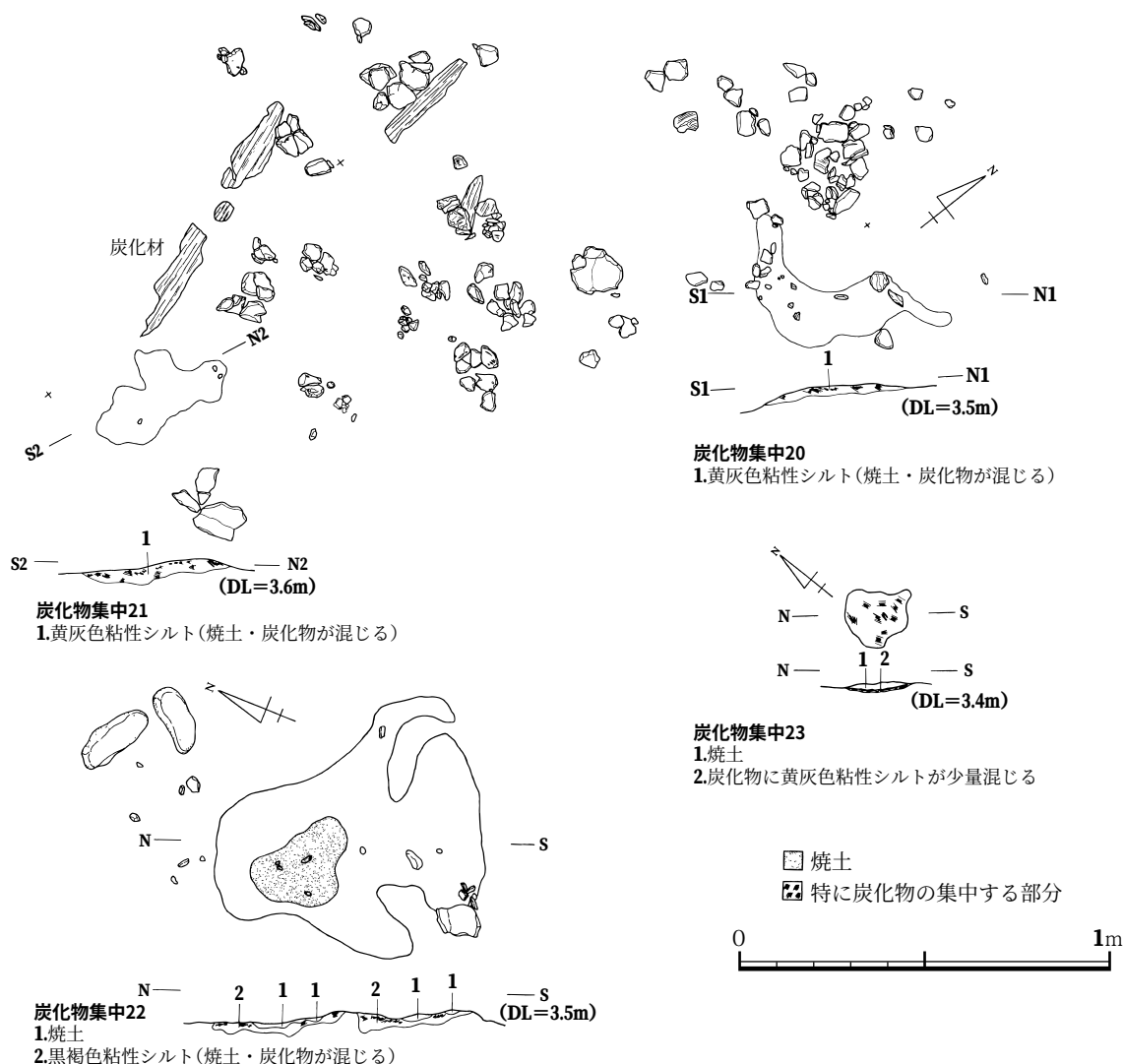
1. 古墳時代前期初頭

調査2区で検出された遺構は、出土遺物から判断して当該期のみと考えられる。遺物は第Ⅲ～Ⅳ層と、第Ⅵ層から出土しているが、これらは土器の形態・調整に差があまり認められず、時期的には近いとみられる。また遺構、遺物とも調査区の東半部に集中する傾向がある。掘り込み遺構は認められず、炭化物集中跡が8箇所、小礫集中が2箇所、性格不明遺構（SX）2条を検出した。

(1) 炭化物集中跡

炭化物集中20

調査区東部北端の第Ⅳ層上面で検出された。長軸約50cm、短軸約20cmの範囲に、炭化物及び若干の焼土が集中する。炭化物の密度は高いものの、厚みは1cm未満である。炭化物中からは、甕、鉢とみられる土器片が出土しているが、復元図示はできなかった。



第52図 炭化物集中20～23

炭化物集中21

炭化物集中20より約1.5m西の、第Ⅳ層上面で検出された。長軸約25cm、短軸約20cmの範囲に、炭化物・焼土が集中する。炭化物の密度は薄く焼土も少量で、厚みは1cmに満たない。断面観察の結果、掘り込みは認められなかった。付近には炭化材も検出されており、ここで火が用いられたと考えられる。また検出された炭化材は、材同定によって広葉樹のコナラ属であることが判明した。広葉樹は高温を発生し安定して燃えることから、料理の火に適した樹種であり、本調査区においても祭りの際の煮炊きに使われたものと考えられる。

炭化物集中22

調査区東部北端の第Ⅳ層上面で検出された。長軸約1m、短軸約70cmの範囲に炭化物と多量の焼土が集中する。焼土は最厚で3cmを測り、焼土の中からは、土器細片、被熱して煤の付着した円礫、少量の骨片が出土したが、復元図示できるものはなかった。骨片は白色化しており、火を受けた可能性が高い。

炭化物集中23

調査区南東部の第Ⅵ層中より検出された炭化物と焼土の集中である。直径25cmの狭い範囲で、炭化物の上に焼土が乗った状態で検出された。焼土の厚みは1cmを測る。炭化物中より少量の土器細片が出土したが、復元図示できるものはなかった。

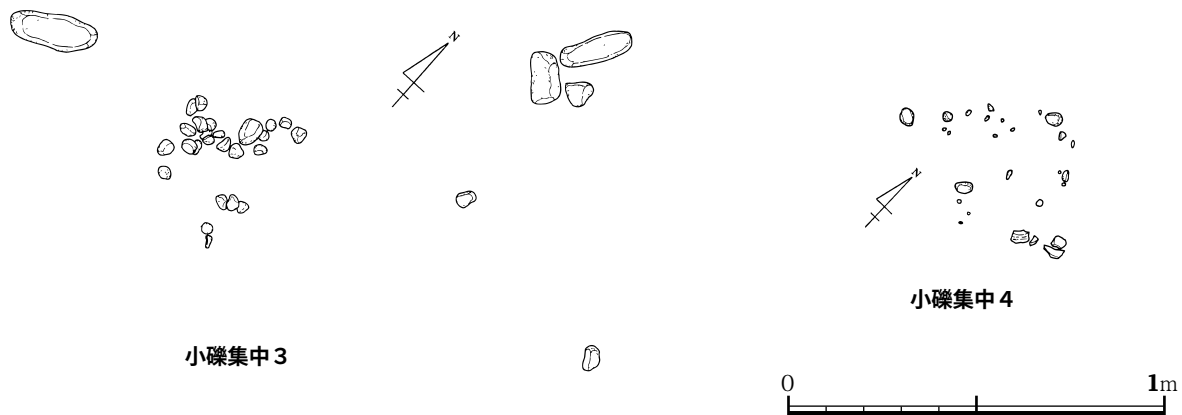
(2) 小礫集中

小礫集中3

調査区中央部の第Ⅲ～Ⅳ層中で検出されたもので、直径約60cmの範囲に約27個の卵形の円礫が集中する。これらは標高3.4mの、ほぼ同じ高さで出土している。礫は砂岩またはチャートで、重量19.9～46.3gと比較的重さをそろえた円礫が用いられる。火を受けたものは1点もみられず、炭化物集中跡から出土する礫とは意味合いが異なるだろう。本調査区に持ち込まれる際に大きさの選別が行われたと考えられる。

小礫集中4

調査区東部の第Ⅵ層中で検出されたもので、直径約50cmの範囲に33個程度の小円礫が集中する。



これらは標高**3.3m**前後で出土しており、礫には砂岩、チャート、軽石が認められる。重量は**1.0～14.5g**と非常に軽いものばかりである。また礫の半数が被熱により赤色化していたが、煤の付着したものはみられなかった。

(3) 性格不明遺構（以下 **SX**）

調査区西部で、酸化鉄を多く含む帯状の層が**2**条検出された。さらにこの下層からは、帯状の堆積とほぼ同じ方向に、木製品が列状に配されているのが確認された。これら木製品と酸化鉄の堆積には何らかの関係があり、人為的要因によるものと考えられることから、これらを性格不明遺構（**SX**）とし、東から**SX1**、**SX2**とした。また**SX1・2**の時期については時期決定できる遺物とは共伴していないが、古墳時代初頭の遺物包含層の下層で木製品が出土しており、**SX1**の酸化鉄集中部上面では土師器が出土しているという上下関係や、**SX2**の上層部で未調整の木が杭状に検出されたことなどから、同時期のものとして扱うこととする。詳しい時期については、類例の増加を待ちたい。

SX1・2は調査区南端部でほぼ直角に接することから、ここに東西トレンチを設定した（**SX1・2**南壁セクション）。また調査区の中央部にも東西方向にトレンチを設定し（**SX1～2**中央**TR**南壁セクション）、**SX1～2**の間の土層確認を行った。

各々のトレンチの層序は以下のとおりである。

SX1・2南壁セクション

- 第Ⅰ層 灰オリーブ色粘性シルトに鉄分が線状に入る
- 第Ⅱ層 灰オリーブ色粘性シルトに**8mm**以下のマンガン粒が入る
- 第Ⅲ層 灰色粘性シルトに暗オリーブ粘性シルトが混じる
- 第Ⅳ層 灰色粘性シルト
- 第Ⅴ層 灰色粘土に灰オリーブ色粘土が混じる
- 第Ⅵ層 オリーブ黒色粘土
- 第Ⅶ層 オリーブ黒色粘土

第Ⅰ～Ⅲ層に酸化鉄が帯状に堆積している。酸化鉄を多く含む層は、調査区東部に向かって潜り込んでいる。第Ⅰ層の**SX1**上面では、若干の土師器片が出土した。第Ⅱ・Ⅲ層は無遺物層である。

また鉄分の堆積から更に**35cm**下の、第Ⅲ層と第Ⅳ層の境では木片が検出された。

第Ⅳ層は、土層に畦畔状の緩い盛り上がりが見られ水田面である可能性も考えられたため、第Ⅱ～Ⅶ層まで自然科学分析のための土壌サンプルを採取した。また**SX2**からは多くの木製品が出土している。

第Ⅴ～Ⅶ層は無遺物層である。

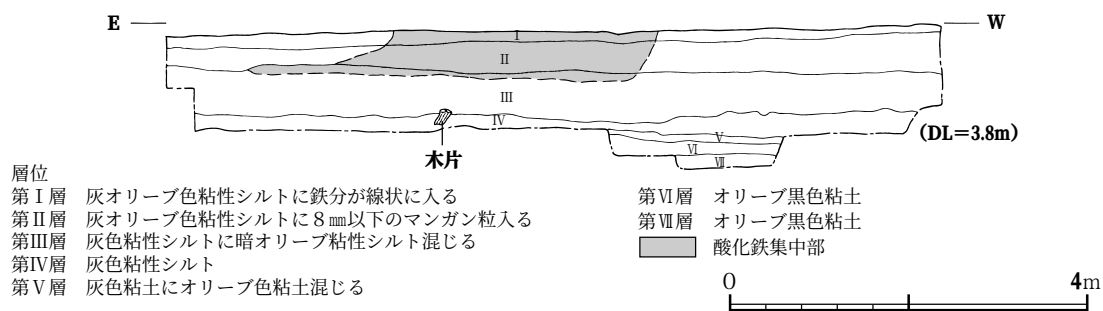
SX1～2中央TR南壁セクション

- 第Ⅰ層 灰色粘性シルト
- 第Ⅱ層 灰色粘性シルト
- 第Ⅲ層 灰オリーブ粘性シルト
- 第Ⅳ層 灰色粘性シルト

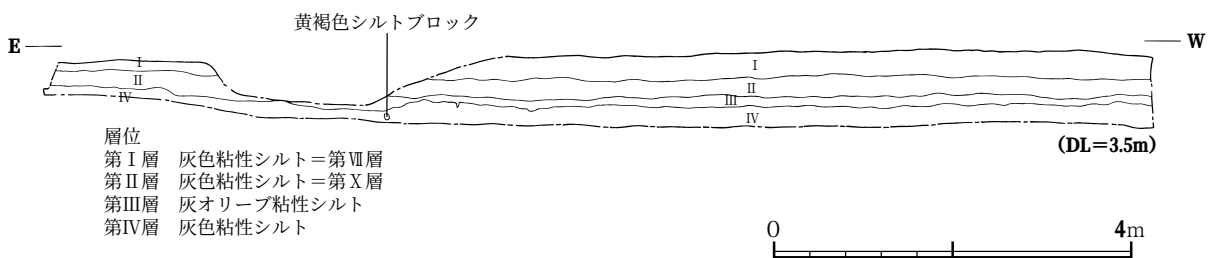
第Ⅰ・Ⅱ層は無遺物層である。鉄分を多く含む層は第Ⅰ・Ⅱ層で検出された。第Ⅰ層は**SX1・2**南壁セクションの第Ⅱ層、基本層序の第Ⅶ層と同一層、第Ⅱ層は**SX1・2**南壁セクションの第Ⅱ層、基本層序の第Ⅹ層と同一層であるとみられる。

第Ⅲ層では、**SX1**の方向にほぼ沿って木製品が列状に認められた。これら木製品の列は、**SX1・2**南壁セクションの第Ⅲ層とⅣ層の境で検出された木片につながると考えられる。

第Ⅳ層は土層に畦畔状の盛り上がりが見られることや、上面で酸化鉄が帯状に検出されたことなどから、水田面の可能性が想定された。また層中からは**5**cm大の黄褐色シルトブロックが検出されている。この黄褐色シルトは調査区内では確認されていない土色・土質で、外部から持ち込まれたものとみられる。ここが水田であったとすれば、害鳥などを追い払う際の飛礫のようにして使われた可能性も考えられる。土器、石器の出土は皆無である。



第54図 SX1・2南壁セクション図

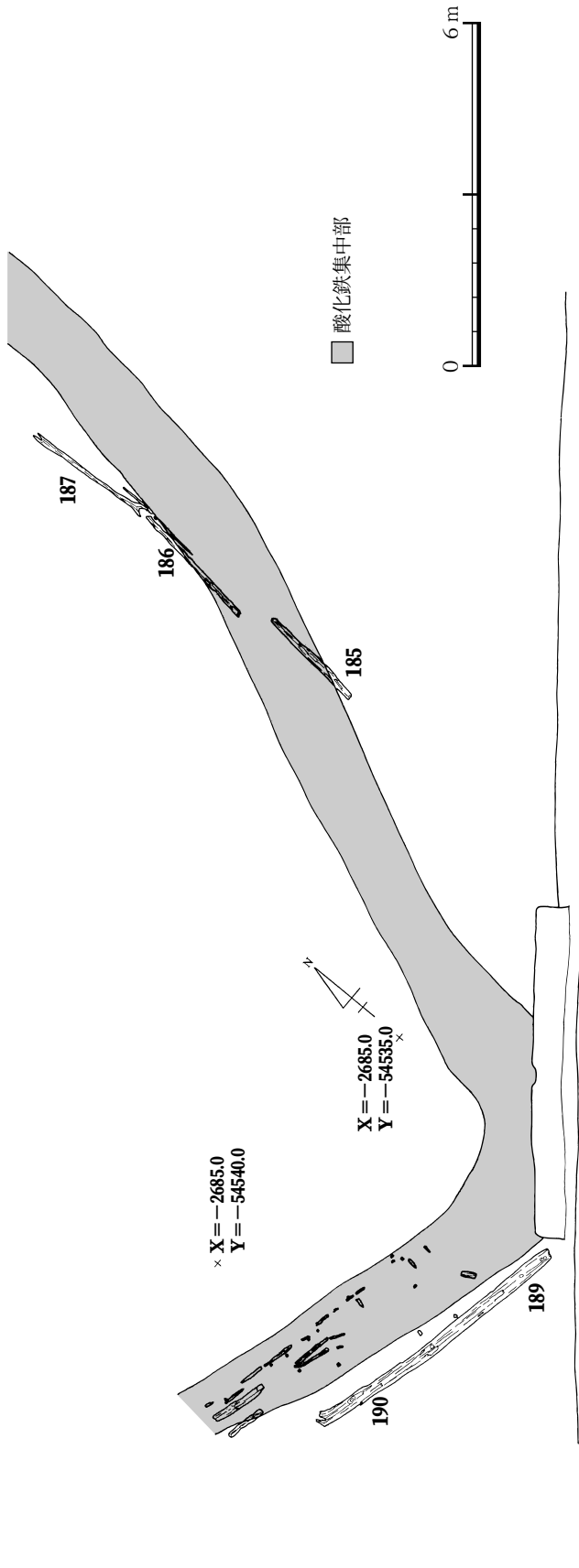


第55図 SX1～2中央トレンチ南壁セクション図

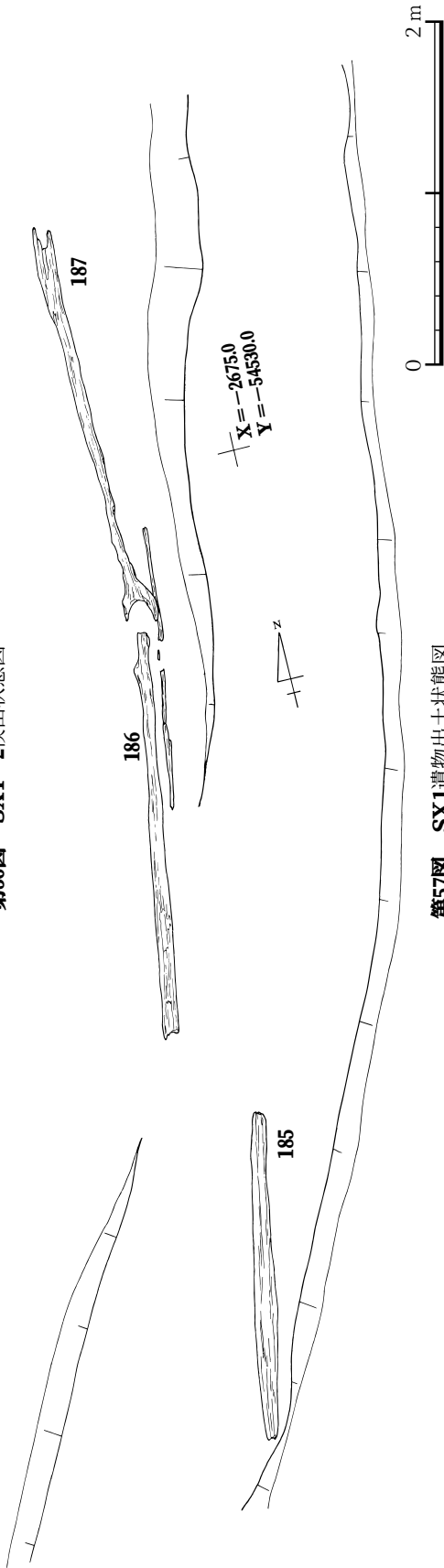
SX1 (第59図－185～187)

調査区西部で検出された、酸化鉄を多く含む帯状の層である。調査区を北東から南西に向かって横切るもので、北西から南東に向かう**SX2**と調査区南端部でほぼ直角に接する。検出長約**17.4**m、幅は北で**1.4**m、南で**2.9**mを測る。**SX1**は北側で検出面より約**40**cm、南側では約**50**cm下まで酸化鉄の堆積層が続き、更に東に**3**m程潜り込んでいるのが確認できた。**SX**の下土層はグライ化が著しく、標高**3.3**m付近が地下水レベルであったと考えられる。また土質も粘性が強くなる。

帯状の酸化鉄の堆積に沿って、標高**2.9～3.0**mの高さで木製品が出土した。これらの木製品は**185**、**186**、**187**の順で南西から北東方向に列状に並んで検出されている。**185**は全長**1.75**mで板状を、**186**は全長**2.34**mの丸木状を呈する。これは自然木のようなものであるが、木の瘤状部分を削り取ったような加工痕が若干認められ、本来は建築材として用いられたものとみられる。**187**は全長**2.33**



第56図 SX1・2検出状態図



第57図 SX1遺物出土状態図

mで丸木状を呈する。一端は二股に分かれており、建築材が転用されたものとみられる。また**186**と**187**に近接して**1.62m**を測る、細い棒状の木製品が出土している。

SX2（第59図―188、第60～64図）

調査区西端部で検出された酸化鉄を含む帯状の層で、北西から南東方向に調査区を横切る。検出長約**7.5m**、幅**1.3～1.4m**を測る。調査区の南側で深さ約**50cm**まで酸化鉄を多く含む層が堆積しているのが確認できた。また**SX2**の上層で、**SX**に沿って列状に**2**本の木片が縦に刺さった状態で検出されているが、これらの木片には明確な加工痕はみられなかった。

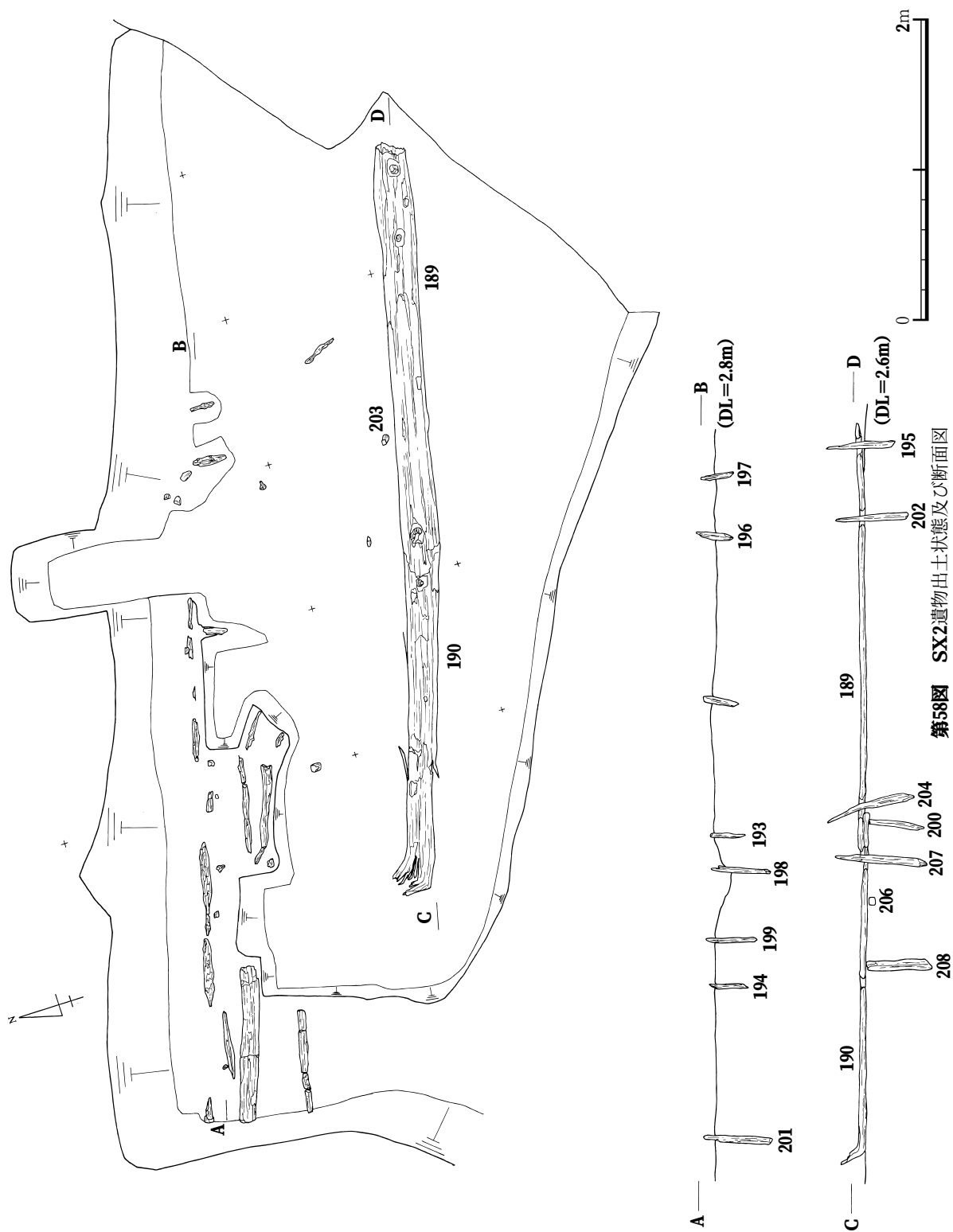
そして更に下層の標高**2.5～2.8m**の高さからは、木製品及び杭が出土している。地面と垂直方向に検出された木製品は杭とみられるが、**18**点のうち図示できたのは**12**点である。あとの**6**点は上端部のみしか確認できておらず、先端部は欠損している。標高**2.8m**の高さでは、杭の両際に丸木が横に寝かされた状態で置かれていた。

また、標高**2.5m**の高さからは杭の他、板状の木製品が**2**点列なった状態で検出されている。**189**、**190**は先端部が重ねられ、両者の孔を**204**、**207**の杭によって固定されていた。**204**は検出時には斜め方向に傾いた状態で検出されている。**189**は全長**2.85m**、**190**は全長**2.42m**を測るコウヤマキの板材である。いずれも板の中央部と一側縁近くには方形の孔が穿たれており、建築材が転用されたものとみられる。孔は断面の形状からみて、両面から斜方向に穿たれたとみられる。杭はこれらの孔を利用して、その中に打ち込まれていた。

SX2で出土した杭は半裁して土層の堆積を確認したが、しばしば本遺跡群でみられる地震による噴砂跡は確認できず、また杭を打ち込んだ際にみられる土層の乱れも認められないことから、これらの木製品は原位置よりも若干低いレベルで検出された可能性もある。

191、**192**は分割材であり、杭として使用された可能性が高いが、検出状態から用途を推測することはできない。**193～207**は杭とみられる。**193**、**194**、**199**、**205**、**206**などは分割材で、断面方形を呈する。**203**、**204**、**207**は丸木材を使用している。ほとんどのものは杭の先端部を加工して尖らせているが、**193～195**、**199～202**のように、杭の先端部が欠損しているものもみられる。これらの欠損の原因は不明である。**207**はヒノキ属の木材を用いた杭で、先端部は加工して尖らせている。**208**は全長**41.2cm**を測るコウヤマキの板材である。板の一端を両面から加工しており、表面は炭化している。**208**は縦に地面に刺さった状態で、**206**は横に寝かせた状態で、**189**、**190**の板材の下層から出土した。

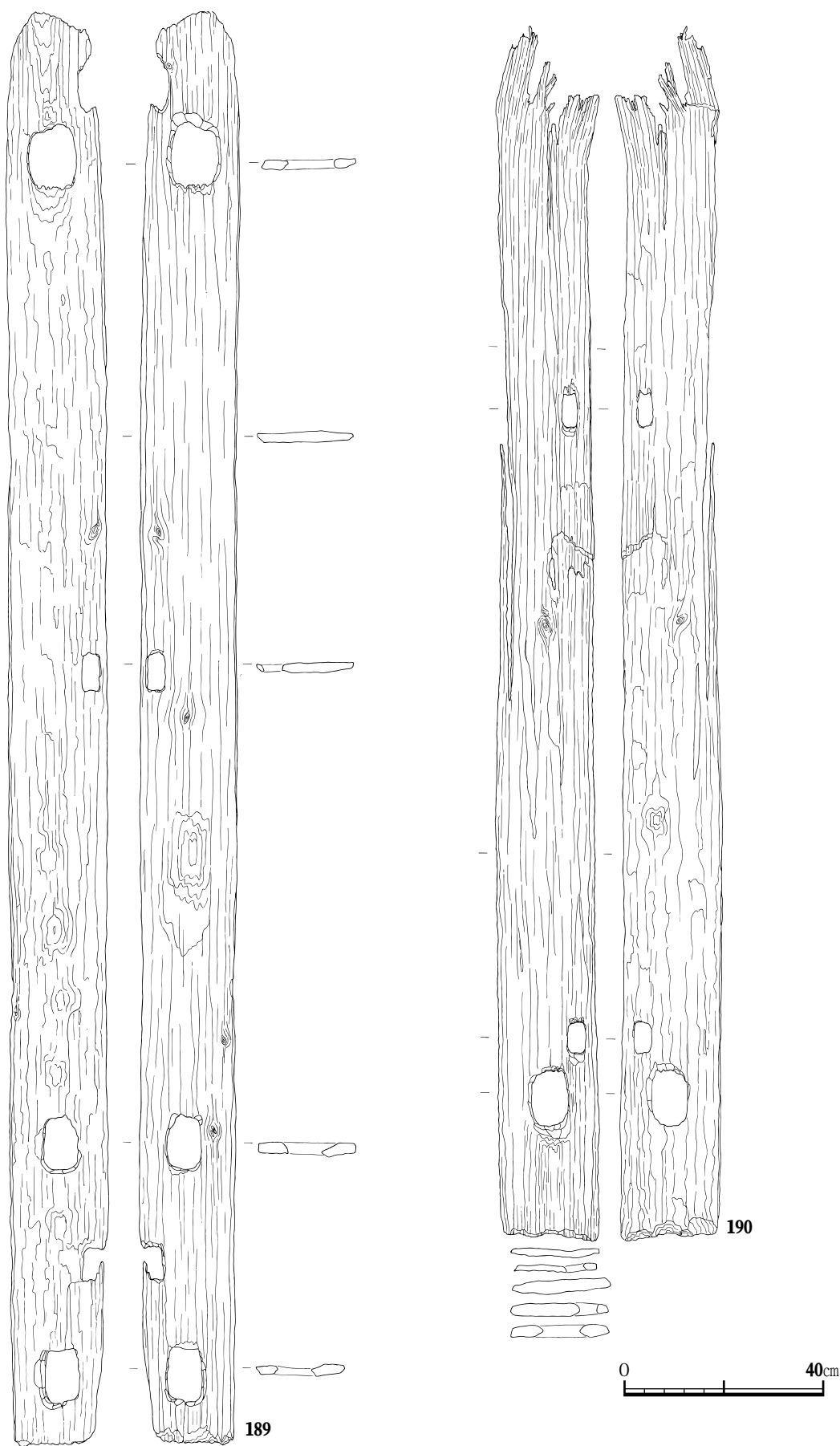
SX1・2では酸化鉄の帯状の堆積の下から木製品が検出されており、いずれも同様な性格を持つ遺構であった可能性が高い。**SX1**以西では遺物がほとんど出土しておらず、酸化鉄堆積層の下層では土質は粘土化し、グライ化が著しくなる。更に下層には補強材とみられる木製品を配している。自然科学分析の結果、酸化鉄のみられる第Ⅱ層からは特に多くのプラントオパールが検出されている。更に下層についても、僅かではあるがプラントオパールが検出されており、稲が存在したと考えられる。これらのことから現在想定できる**SX**の性格としては、木道あるいは畦畔の可能性が考えられるだろう。ただし畦畔であるとすれば、水田で使用されたとみられる農耕具は出土しておらず、今後の具同中山遺跡群での類例の増加を待って検討する必要がある。



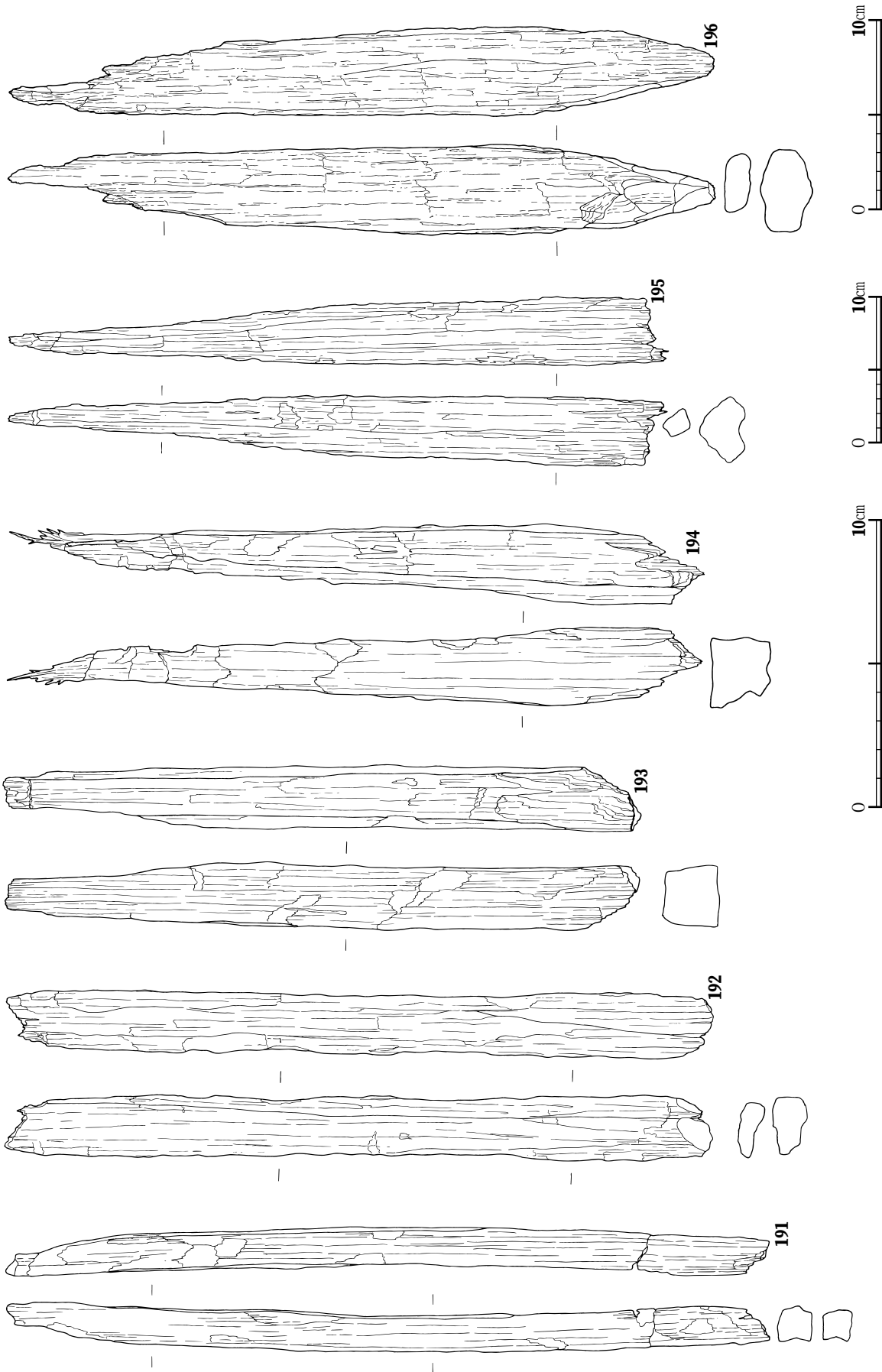
第58図 SX2遺物出土状態及び断面図



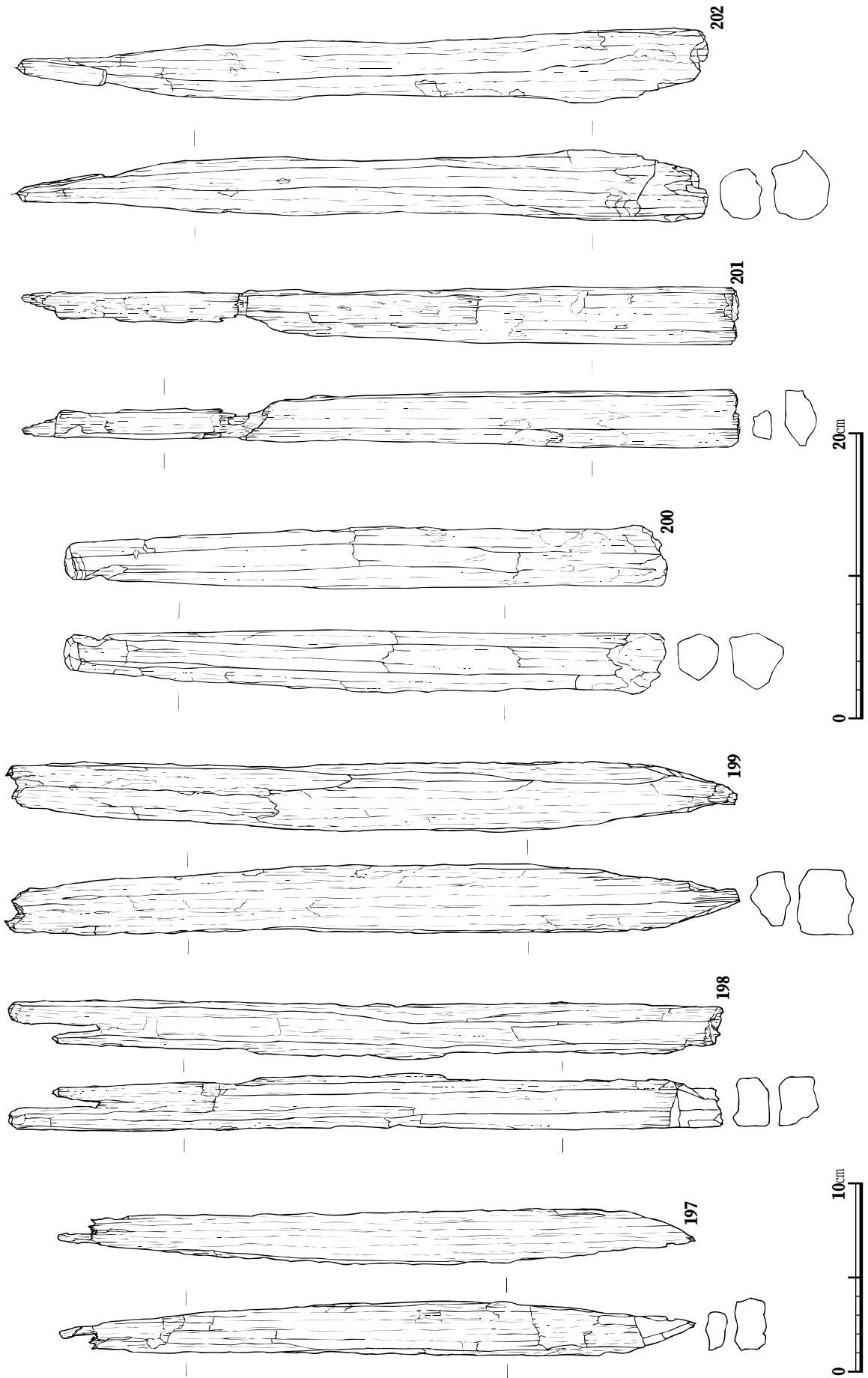
第59図 SX1・2出土木製品実測図



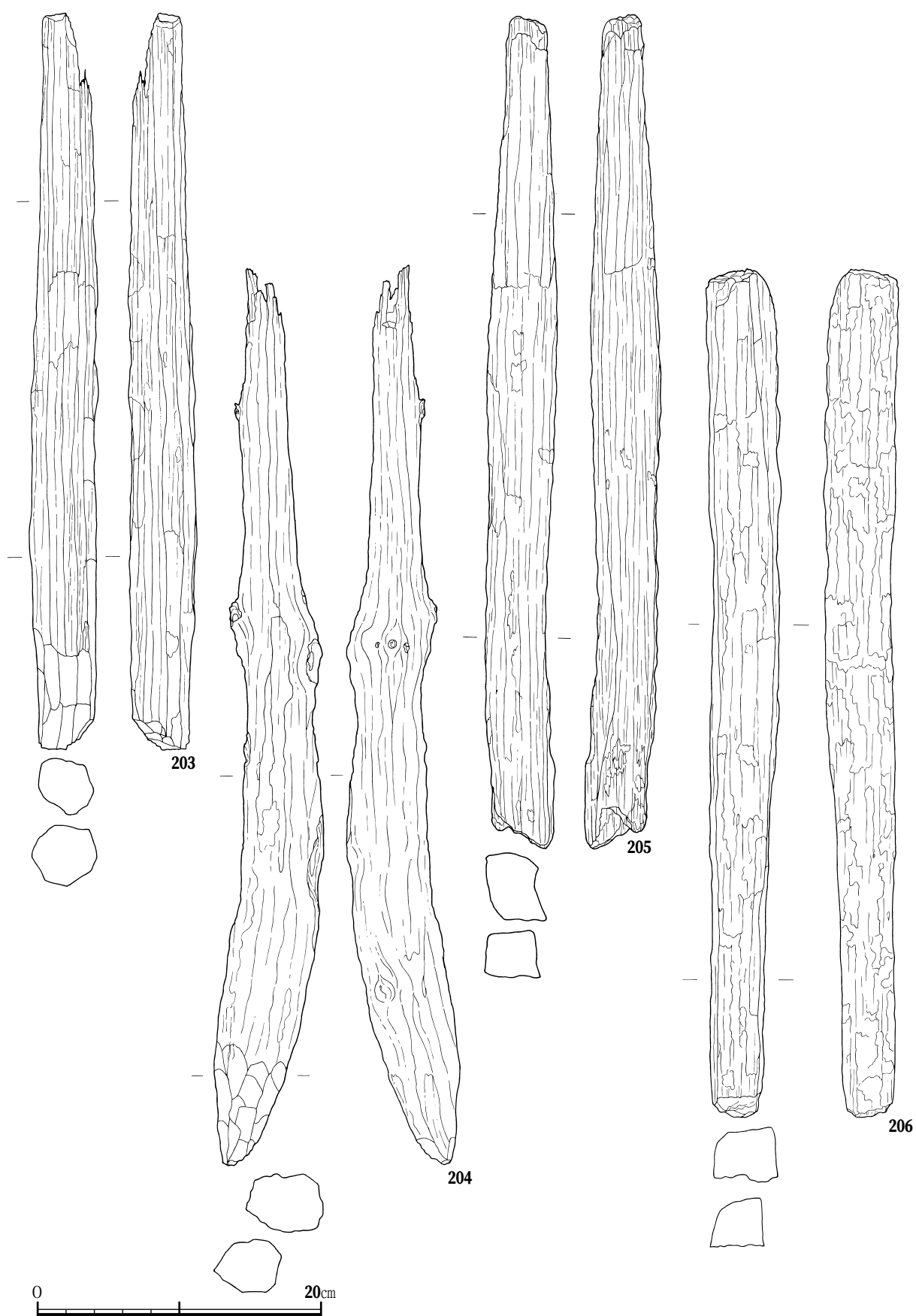
第60図 SX2出土木製品実測図 1



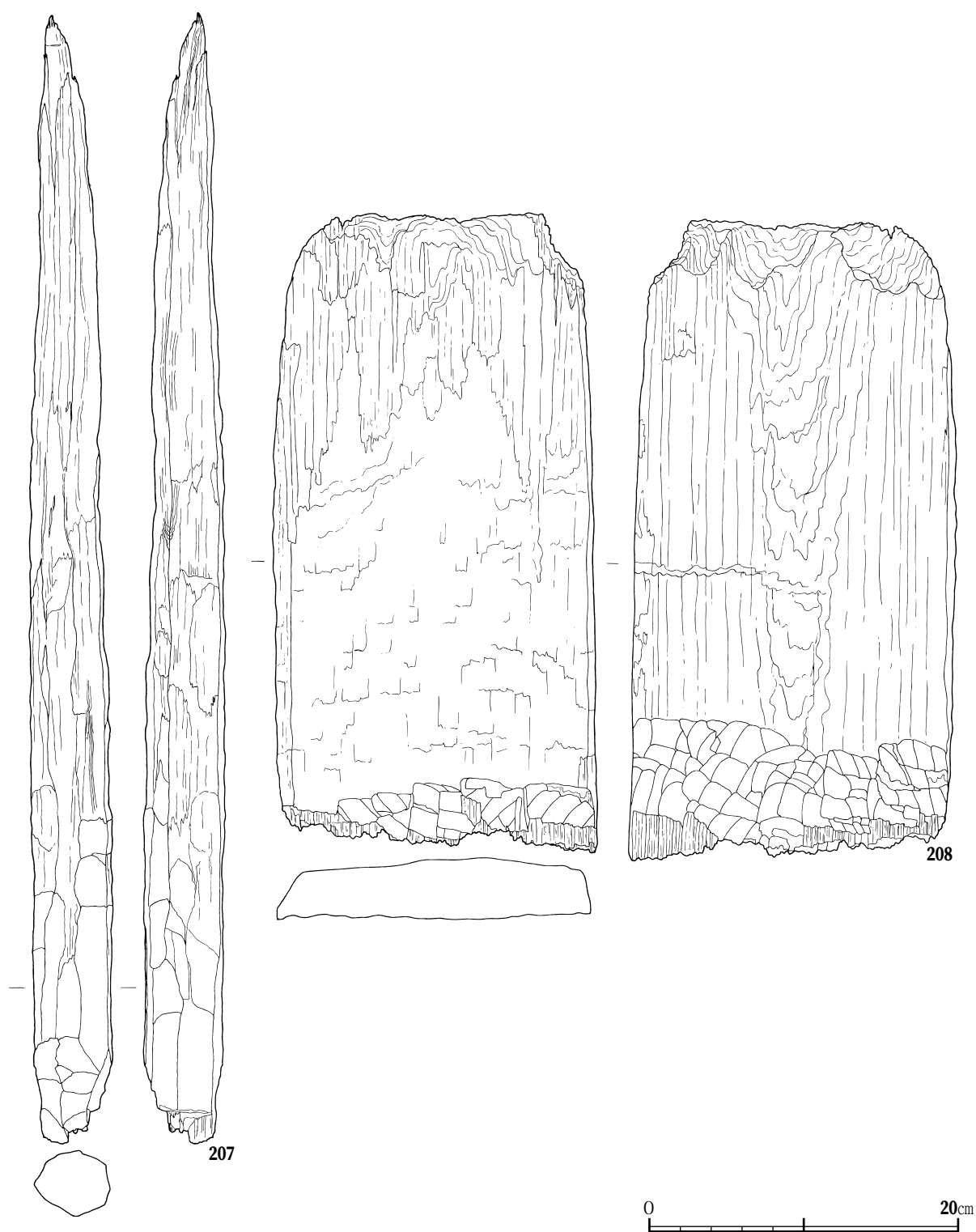
第61图 SX2出土木製品実測图 2



第62図 SX2出土木製品実測図 3



第63図 SX2出土木製品実測図4



第64図 SX2出土木製品実測図 5

(4) 遺物集中ブロック

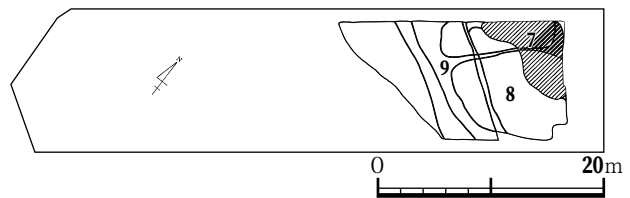
調査2区においても、掘り込み遺構に伴わない遺物の集中が確認された。これらはほぼ水平に堆積しており、遺物も元の位置から動いている可能性は低いとみられる。そのため当該期に属すると思われる遺物集中を、一つの遺構と考えブロック7～9（第Ⅲ～Ⅳ層）、ブロック10～12（第Ⅵ層）に分けてまとめることとする。



第65図 2区出土遺物の平面及び垂直分布図（S=1/400）

遺物集中ブロック7（第68図）

調査区の北東部隅に集中する遺物の一群で、標高**3.4～3.5m**の高さで検出された。ブロック**8**と併せて一つの大きな遺構になる可能性もあるが、出土状態からここでは二つに分けることとした。遺物の出土範囲は東西約**8m**、南北約**5m**で、更



第66図 遺物集中ブロック7位置図

に調査区外に続くものとみられる。炭化物の集中が**2**箇所と炭化材が検出された。遺物の集中密度は**1**区に比べ低いが、炭化物集中**20・21**付近では復元図示できる資料が多く出土している。器種は甕、鉢、高杯、手捏土器の他、石製品が認められる。ただし甕の占める比率は**1**区に比べ低く、鉢、手捏土器が目立つ。またブロック**7**で出土した土器のうち、**222**を除く全ての土器胎土に赤色風化砂粒が含まれているのが確認できた。

209～212は甕である。甕は**A-2**類、**A-3**類と**C**類がみられる。**210**は**A-2**類で、長めの口縁部は屈曲し直線的に外反する。底部は厚めの丸底を呈する。外面はタタキ成形後、ハケ、ナデ調整を施す。内面はわずかにハケ目が残る。**211**は**A-3**類、**212**は**C**類に分類される。どちらも頸部の屈曲が弱くなり、器面調整が雑になる傾向がみられる。**212**は内面はナデ調整を施すが、粘土接合部と指頭圧痕が残る。**214**、**215**は甕の底部とみられる。平底と丸底があるが、平底の底径は小さくなる傾向がみられ、**215**は底径**2.0cm**を測り、丸底に近くなる。**213**は甕または鉢の底部である。

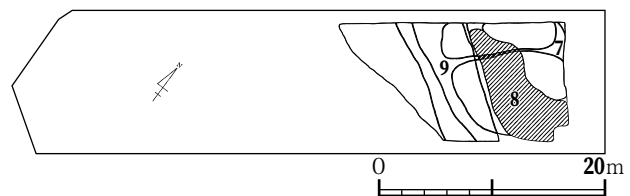
216～220は鉢である。**A-2**類、**C**類、**E**類がみられ、**E**類の台付鉢は**219**、**220**の他は、**1**区第XV層で**1**点出土しているのみである。調整は器面にタタキ目の残るものもみられるが、大半の鉢はタタキ目、ハケ目をナデ消している。また器面には指頭圧痕が多く残る。底部は平底と丸底がみられる。**219**は炭化物集中**21**に近接して出土しており、これらに伴うものである可能性が高い。

221は高杯の杯部である。やや小形で、体部に段を持ち、口縁部は上外方に内湾気味に広がる。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整を施し、粘土の接合部付近には指頭圧痕が多く残る。

222、**223**の手捏土器**2**点は、約**90cm**離れた比較的近い位置で検出された。炭化物集中跡からは約**1m**離れている。どちらも小皿状の器形で、指の痕が多く残る。また残りは良く、いずれも完形で出土している。

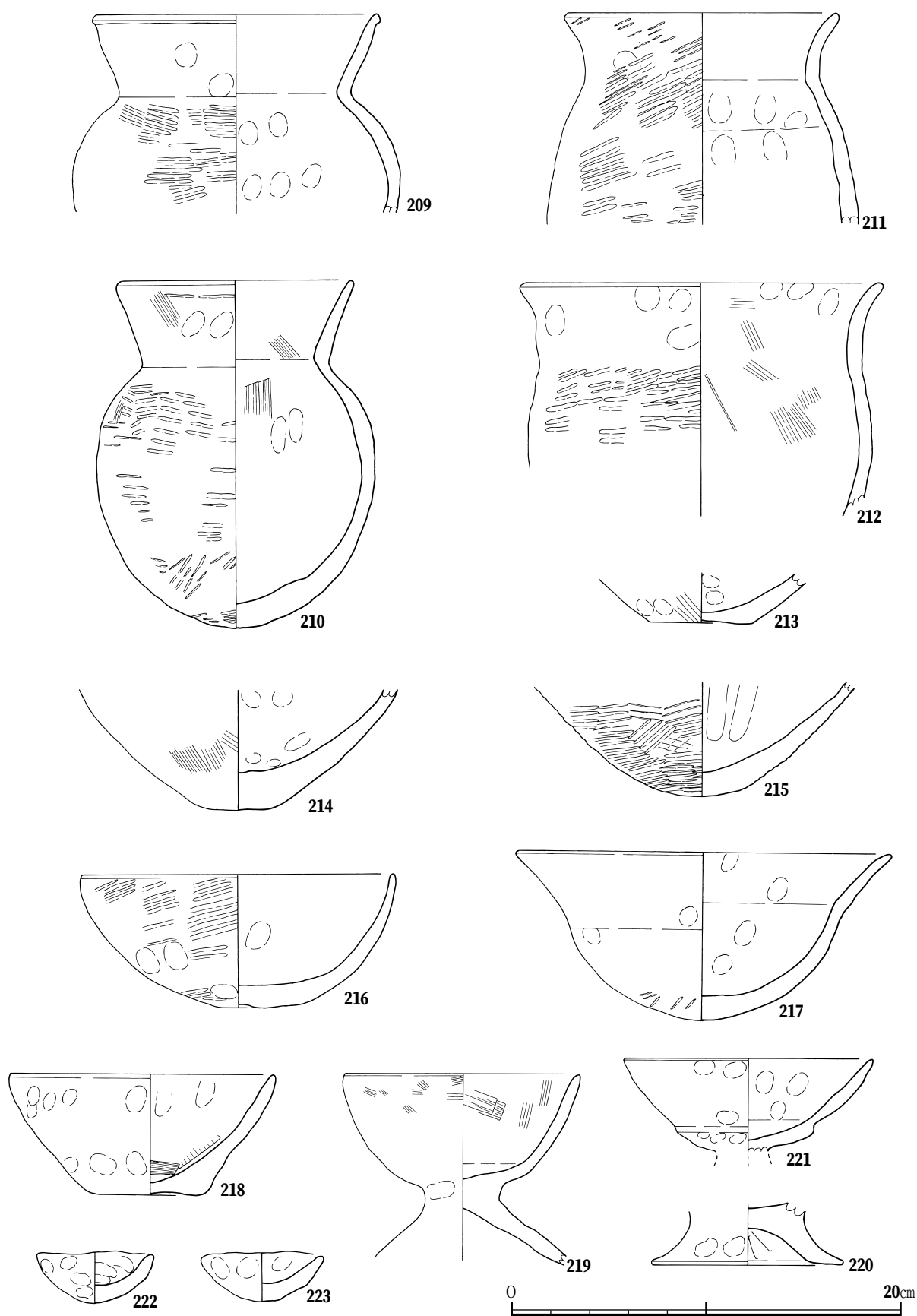
遺物集中ブロック8（第69図、第70図－233～243）

調査区南東部に広がる土器の一群で、**2**区では最も遺物が集中するブロックである。掘り込み遺構は伴わず、標高**3.3～3.4m**の高さで水平分布している。東西約**11m**、南北約**5m**の範囲で遺物を検出したが、更に調査区外に伸びるとみられる。

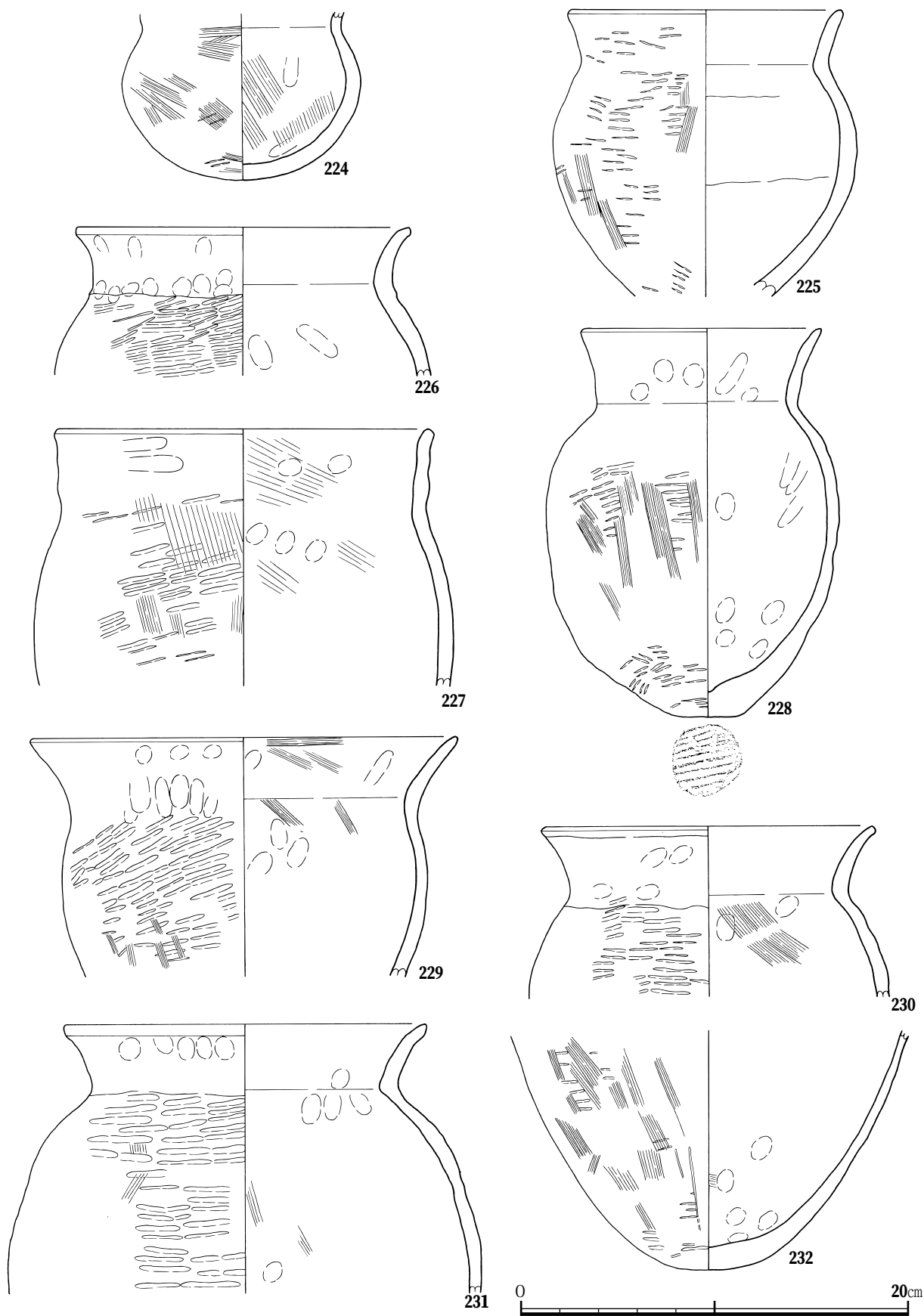


第67図 遺物集中ブロック8位置図

遺物には壺、甕、鉢、高杯の土器の他、木製品が認められる。特に土器の集中する部分には、多くの炭化物や骨片も確認できた。またブロック**8**の土器の出土状態は、ブロック東部と西部では



第68図 遺物集中ブロック7出土遺物実測図



第69図 遺物集中ブロック 8 出土遺物実測図

若干の差異が認められる。ブロック東側の土器は破片が大きめで、扁平な円礫を伴う。西側の土器群は土器の破片が非常に細かく、特に**224**、**235**、**241**の周辺は**1**cm未満の土器の破片が集中する。炭化物の集中ははっきりとしたものは認められず、炭化物は散在した状態で検出されている。

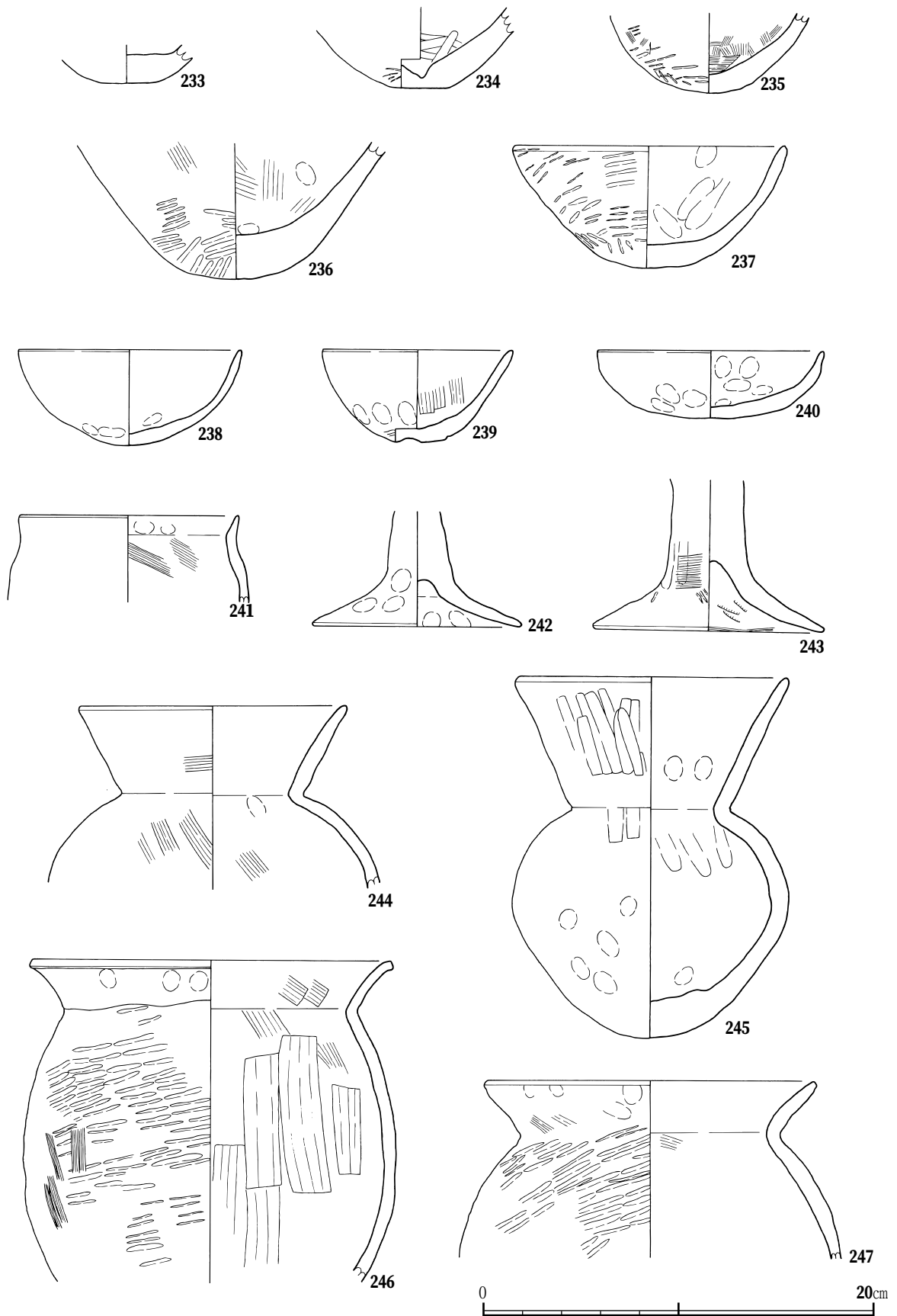
器種は壺、甕、鉢、高杯で構成される。そのうち**232**を除いた全ての土器胎土に、赤色風化砂粒が含まれている。

224は丸底の壺で、**E**類にあてはまる。口縁部は欠損しているが短めの口縁を持ち、最大径は胴部中位にあるとみられる。外面はタタキ成形後、粗いハケを施す。内面はハケ調整後、頸部付近はナデ調整を施す。

225～**231**は甕である。明確に分類できるのは甕は**A**－**2**類、**A**－**3**類、**B**類、**C**類である。**1**区で多くみられた**A**－**1**類にあたるのは、**226**、**230**とみられるが、胴部は復元できなかった。**228**は**A**－**2**類の甕で、胴部はあまり広がらずに立ち上がり、器高に対して口縁部が長く伸び、緩く外反する。外面は横位のタタキ成形後、胴部には部分的にハケ調整、口縁部や胴部下半はナデ調整が施されている。平底で、外底面にもタタキ目が残る。口縁部は内外面とも、ナデ調整を施す。**229**は、口径値が胴径値を凌ぐ**A**－**3**類に分けられる。外面は左下がりのタタキ成形後、下胴部には部分的にハケ調整、口縁部はナデ調整を施す。内面はハケ、ナデ調整を行う。内外面ともに指頭圧痕が多く残る。**231**は**B**類で、口縁部はくの字状に屈曲外反し、胴部は球形を呈するとみられる。外面は横位のタタキ成形後、胴部にハケ、口縁部にナデ調整を施す。内面はナデ調整を施すが、口頸部の粘土接合部に指頭圧痕が残る。**C**類には**227**があたり、口縁部はほとんど屈曲せずに直線的に立ち上がり、胴部は緩く膨らむ。外面は左下がりのタタキ成形後、頸部から胴部にかけて部分的にハケ調整を施す。口縁端部は指ナデの痕が残る。内面はハケ調整である。全般的に調整は雑である。**232**～**236**は甕の底部とみられるが、**235**は鉢の可能性もある。甕の底部には平底、丸底が認められる。

237～**241**は鉢である。鉢は**A**－**1**類、**A**－**2**類、**B**類、**D**類がみられる。**239**は**A**－**1**類、**237**、**238**は**A**－**2**類である。**237**は器面に横位、左下がりのタタキ目が残るが、その他の鉢にはタタキ目はみられず、ハケ目あるいは指頭圧痕が残る。底部は平底、丸底がみられる。**B**類の**240**は皿状の器形を呈し、器面に指頭圧痕が多く残る。**241**は口縁部が若干屈曲する鉢形を呈するとみられるため、**D**類に分類した。調整は内外面ともナデ調整を施すが、内面にハケ目がわずかに残る。甕同様バリエーションに富むが、突出して多いものはみられない。

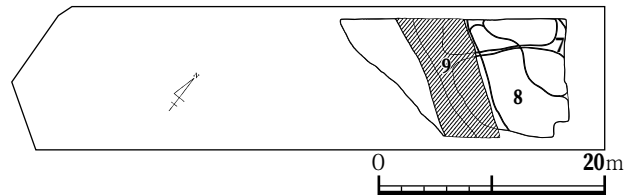
242、**243**は高杯の脚部である。脚柱部は中実で裾部は屈曲して広がることから、いずれも**B**類にあたる。調整は大部分ナデ調整であるが、**243**は外面は裾部にタタキ目とみられる痕が、内面にはハケ目が僅かに残る。



第70図 遺物集中ブロック8・9出土遺物実測図

遺物集中ブロック 9（第70図ー244～247、第72図）

調査区中央部を北西から南東の方向に、帯状に分布する遺物の集中である。ブロック 9 は検出長約 11m、幅約 5m を測る。掘り込み遺構は確認されず、標高 3.3～3.4m の高さで遺物が出土している。ブロックの北側が 3.4m 前後と高く、南西に向かって 10cm 程地形的に落ち込んでいることが分かる。遺物密度は低めである。



第71図 遺物集中ブロック 9 位置図

遺物の集中部は、円礫集中 3 を挟んで更に北と南に分けられるようである。どちらも密度は低いものの、約 5～6m の範囲に環状に遺物が出土している。また南北の遺物集中内の器種構成をみると、どちらにも直口壺、煤の付着した甕、鉢、砥石があり、他のブロックでみられた器種構成と大差はみられない。

遺物は壺、甕、鉢、手捏土器の他、砥石、叩石、用途不明石製品、木製品が出土している。また出土遺物の約半数の胎土に赤色風化砂粒が認められ、その大半は円礫集中から南の遺物集中にみられる。

壺は F 類が検出されている。244、245 はいずれも直口壺である。244 は内外面ともハケ調整の後ナデを施す。外面には壺であるにも関わらず、煤が付着しており、煮炊きに用いられたとみられる。245 は口径値と胴径値がほぼ同じで、口縁部は長く上外方に広がる。内外面ともナデ調整を施すが、外面は幅狭の板状工具痕が残る。どちらもナデ調整が大半を占める。

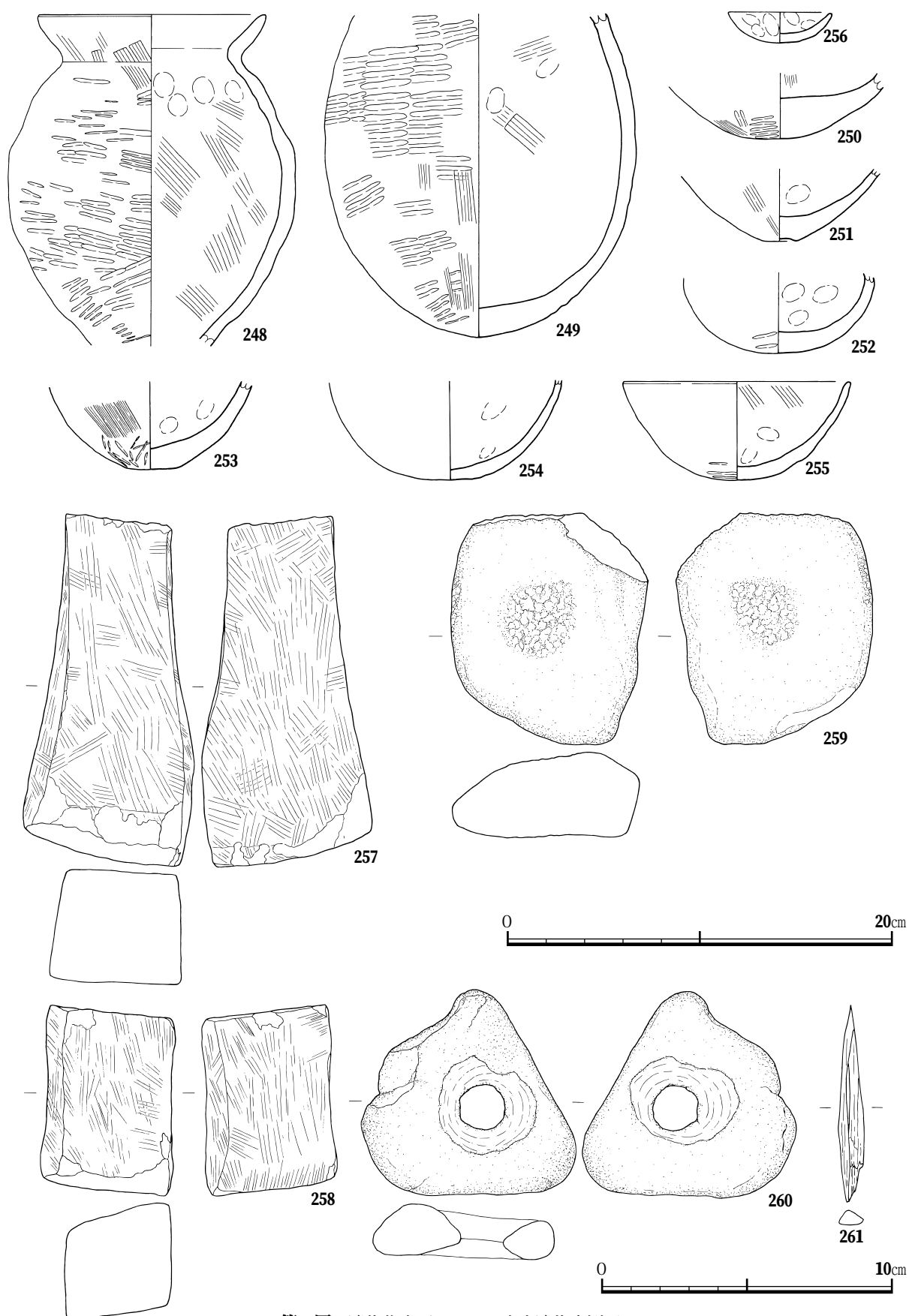
246～250 は甕である。甕は主に調査区の北側で出土しており、A-1 類が認められる。246 は A-3 類に近い。いずれも横位、または左下がりのタタキ成形後、部分的にハケ、ナデ調整を施している。また内面は 248、249 のようにハケ目が残るものや、246 のように板状工具の痕がみられるものもある。250 は甕の底部とみられる。底部は平底と丸底がみられるが、平底の底径は非常に小さく、そのまま置いて使用するには安定性に欠ける。

251～255 は鉢とみられる。ただし口縁から底部まで復元図示できたのは 255 だけであり、252 は壺、253 は甕の底部である可能性もある。255 は A-2 類に分けられ、底部より内湾気味に立ち上がり口縁に至る器形を呈する。外面底部にタタキ目が、内面口縁部にハケ目がわずかに残るが、内外面ともナデ調整を施している。底部は丸底である。鉢の調整はタタキ目、ハケ目がわずかに残るが、全体的にはナデ調整を施している。また底部は平底と丸底がみられる。

256 は手捏土器で、浅い小皿状を呈する。257 の砥石から約 20cm 東で出土した。

ブロック 9 では石製品、木製品も出土している。257、258 は仕上げ砥石で、四面に使用痕がみられる。259 は叩石で、炭化物集中 22 のやや上面から出土した。両面に敲打痕がみられる。本来は円礫を利用したものともみられるが一部欠損しており、表面は被熱によって赤色化している。260 は用途不明の石製品で、砂岩礫の中央部に 1 孔両側から穿孔している。

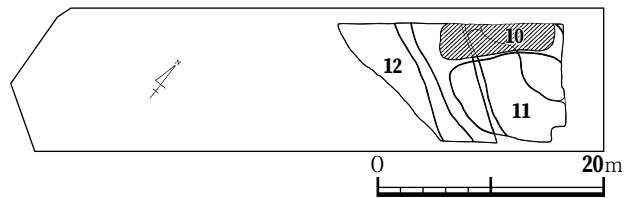
261 は基部が欠損してるが刺突具、あるいは木鏃とみられる木製品である。先端は尖らせ、断面三角形を呈する。



第72図 遺物集中ブロック9出土遺物実測図

遺物集中ブロック10（第75図－262～264）

調査区東部北端に集中するブロックで、ブロック7の下層にあたる。東西約6m、南北約3mの範囲で遺物は出土する。ただしブロックの中心は、調査区外に延びるとみられる。掘り込み遺構には伴わず、標高3.2～3.3mの高さで遺物が出土する。出土密度は薄く、甕3点が復元図示できたにとどまる。そのうち胎土に赤色風化砂粒が含まれるのは、264である。

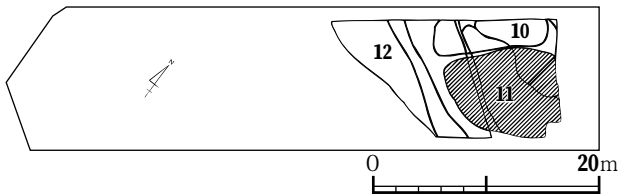


第73図 遺物集中ブロック10位置図

262、263は甕A-1類に、264はA-3類に分けられる。262は口縁部がくの字状に屈曲して上外方に外傾する。最大径は胴部中位にある。外面は口縁部はハケ調整、胴部は左下がりのタタキ成形後、下胴部には部分的にハケ調整を施す。内面はハケ調整の後、雑なナデを行う。263の調整は、外面は口縁部ハケ調整、胴部は左下がりのタタキ目が残る。内面には粘土接合部に指頭圧痕が残る。口径値が胴径値を凌ぐ264は、口縁部が頸部で屈曲し上外方に外傾する。口縁端部は面状に仕上げる。外面は横位のタタキ成形後ハケ調整、内面は口縁部に多くハケ目が残る。

遺物集中ブロック11（第75図－265～275）

調査区南東部の直径約9mの範囲に、遺物集中が認められる。掘り込み遺構には伴わず、標高3.2～3.3mのレベルで遺物が出土している。ブロックの北東側で標高3.3m、南西側で3.2mと10cmほど南西部では地形が落ち込んでいる。遺物の密度は高く、土器とともにブロックの中央部では炭化材も検出されており、更に近接して桃核も1点出土している。遺物は甕、鉢、甗が出土している。また図示できた全ての土器の胎土に、赤色風化砂粒が認められた。

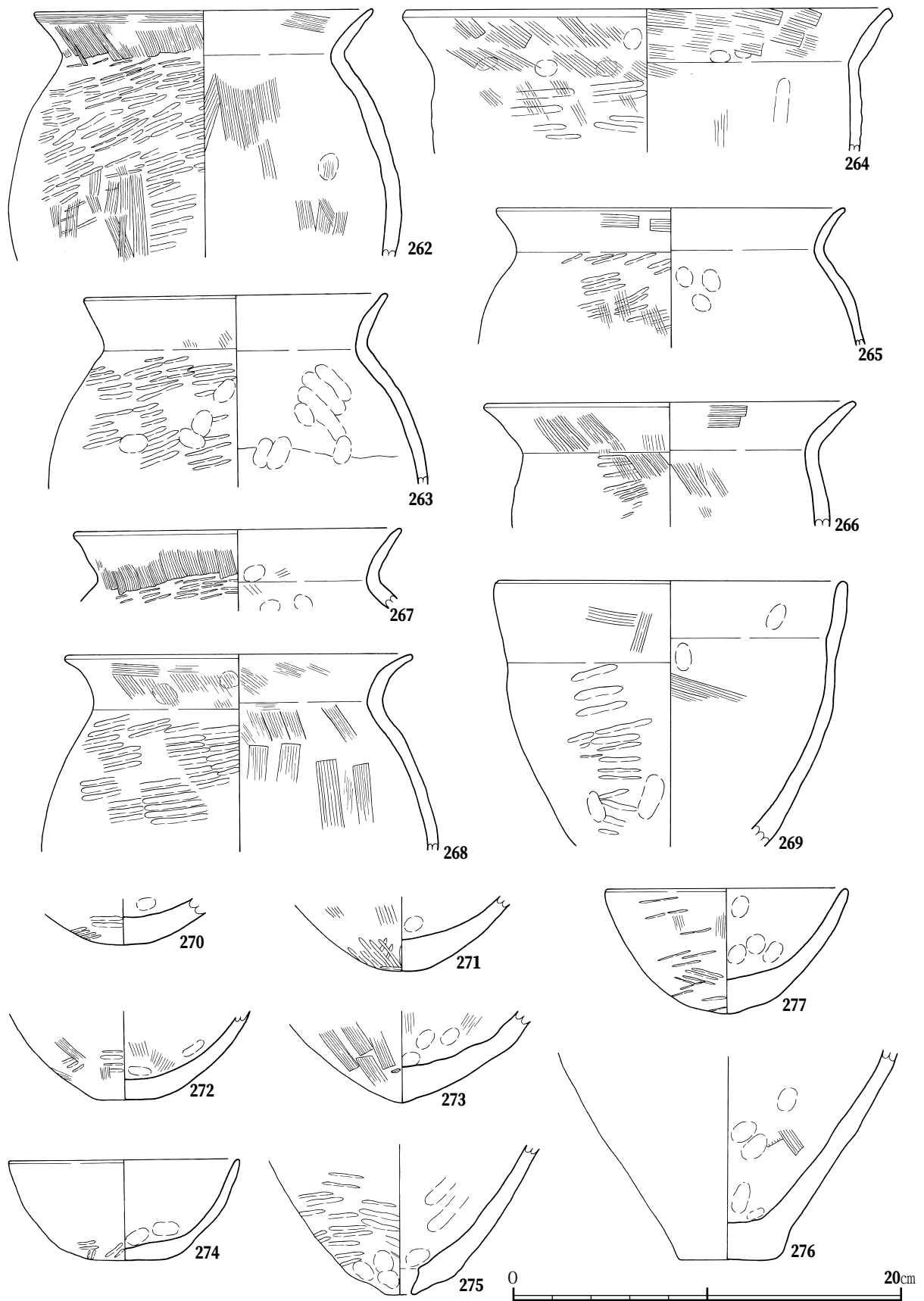


第74図 遺物集中ブロック11位置図

265～269は甕である。甕はA-1類、A-3類、C類がみられる。A-1類は268で、口縁部はくの字状に屈曲して外反する。外面は左下がりのタタキ成形後、部分的にハケ調整を施す。内面にもハケ目が残る。266は口径値が胴径値を凌ぐ器形で、A-3類にあたる。口縁部はくの字状に屈曲して外反し、口縁端部は丸くおさめる。外面は左下がりのタタキ成形、口縁部にはハケ調整を施す。内面にはわずかにハケ目が残る。269はC類の甕である。口縁部はほとんど屈曲せずに直線的に立ち上がり、胴部は緩く膨らむ。最大径は口縁部にある。調整は粗雑で、タタキ成形後部分的にハケ、ナデ調整を施す。270～273は甕の底部とみられ、平底と尖底がある。またC類を除く甕の器表面には煤が付着している。

274はA-2類の鉢で、平底の底部より内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。内外面とも摩耗が著しく詳しい調整は不明であるが、底部にタタキ目、底面には粗いハケ目が残る。

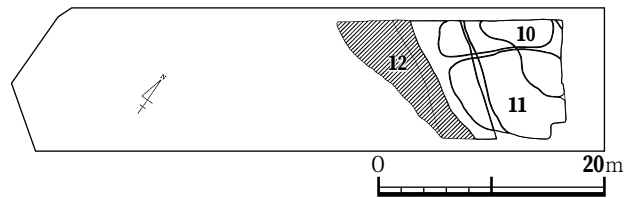
275は甗である。外面は右下がりのタタキ成形、内面はナデ調整とみられる。



第75図 遺物集中ブロック10~12出土遺物実測図

遺物集中ブロック12（第75図－276・277）

調査区中央部の標高**3.1**～**3.2**mの高さで確認された遺物の集中である。ブロック**9**よりやや西にずれ、検出長約**11**m、幅約**2.5**mの帯状に土器が出土する。遺物は土器、礫、木製品が出土している。そのうち復元図示できたのは、甕**1**点、鉢**1**点である。



第76図 遺物集中ブロック12位置図

276は甕の底部で、平底の底部から上外方に向かって直線的に胴部が広がる。外面は摩耗により調整不明であるが、内面はハケ目が若干残る。**277**は**A-1**類で、深めの椀形を呈する。器壁は厚めで、外面には左下がり、右下がりのタタキ目とハケ目が残る。内面には指頭圧痕がみられる。

(5) 包含層出土遺物

第III～IV層出土遺物（第77図－278）

第III～IV層は古墳時代初頭の遺物包含層である。ブロック状にまとまって出土した遺物は、祭祀との関連が考えられることから、遺物集中ブロックで述べることにし、ここでは遺物ブロックから離れた地点で出土したものについて取り上げる。

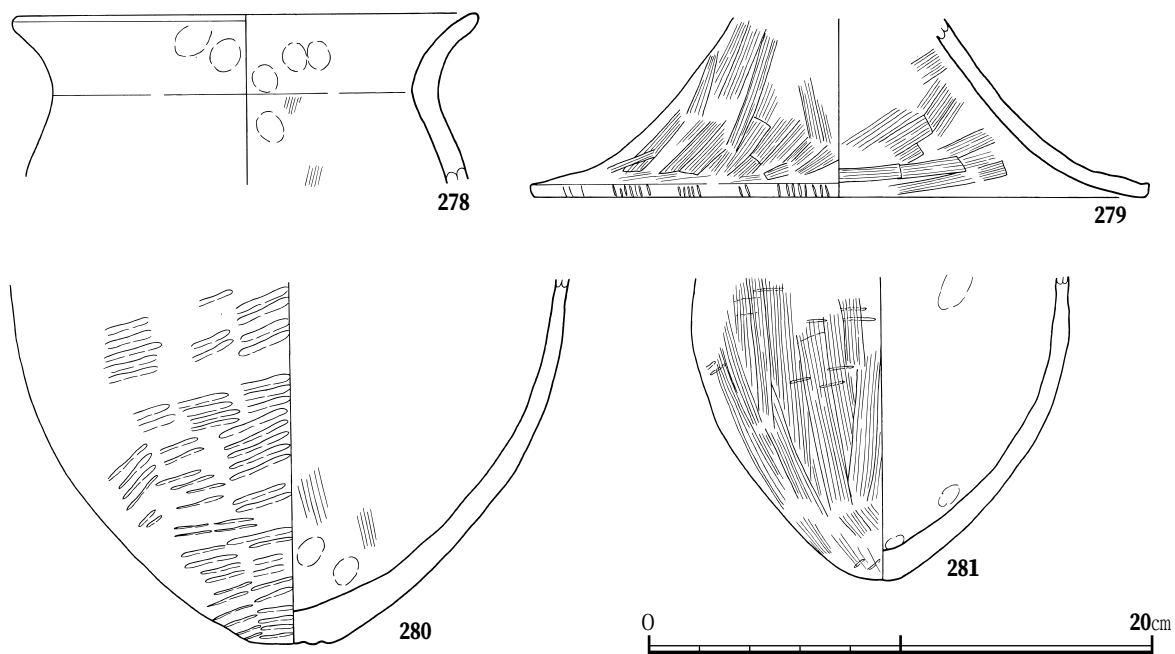
278は甕の口縁部で、くの字状に屈曲する器形を持つ。内外面とも摩耗が著しいが、内面にハケ目、指頭圧痕が残る。器形、調整からみて土師器とみられる。**SX1**の上層より出土した。

第VI層出土遺物（第77図－279～281）

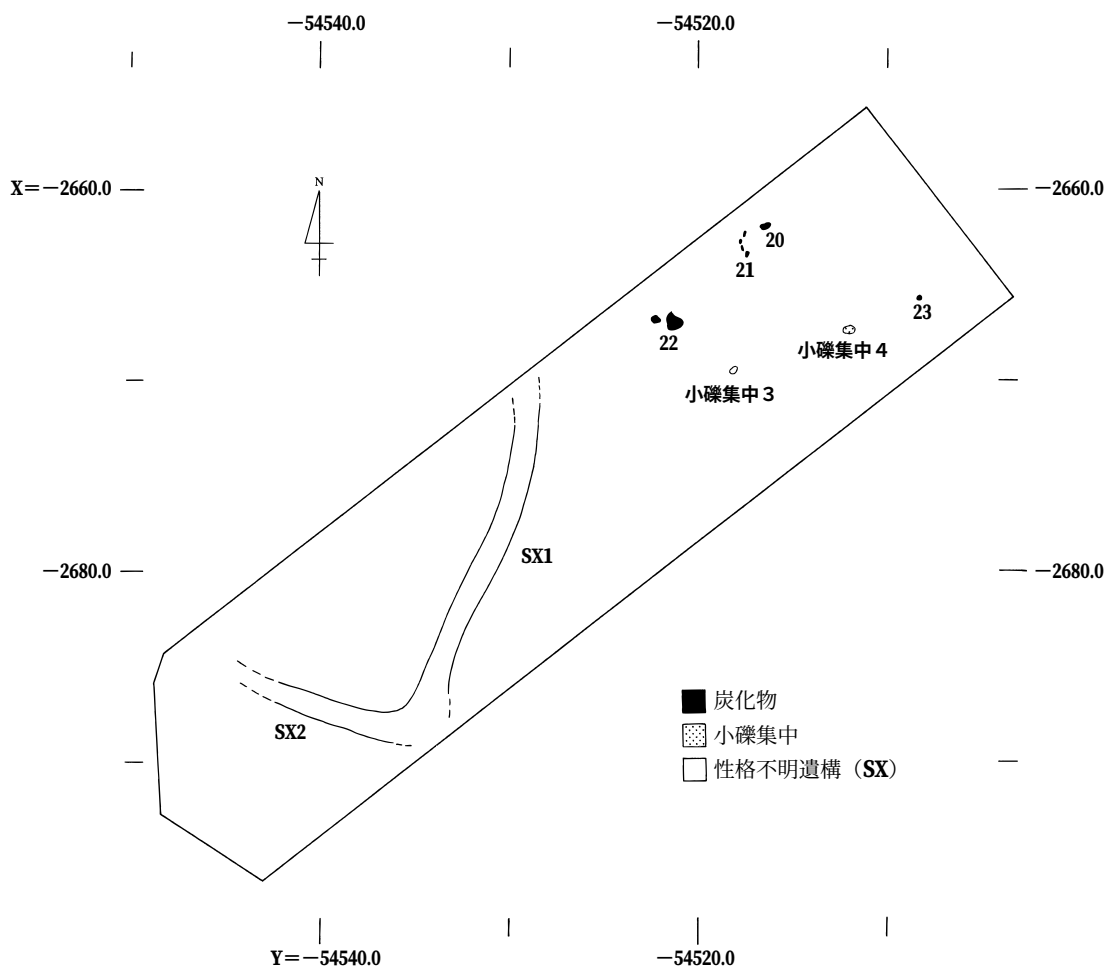
第VI層も古墳時代初頭の遺物包含層とみられる。ただし出土遺物、及び層序からみて、第III～IV層よりはやや古い時期のものと言える。

280、**281**は甕の底部である。**280**は外面には左下がりのタタキ成形を施す。下胴部はタタキ目が潰れていることから雑なナデ調整を施したとみられる。内面はハケ、ナデ調整である。**281**は外面に僅かにタタキ目が残るがハケ調整が顕著である。内面はナデ調整を施す。

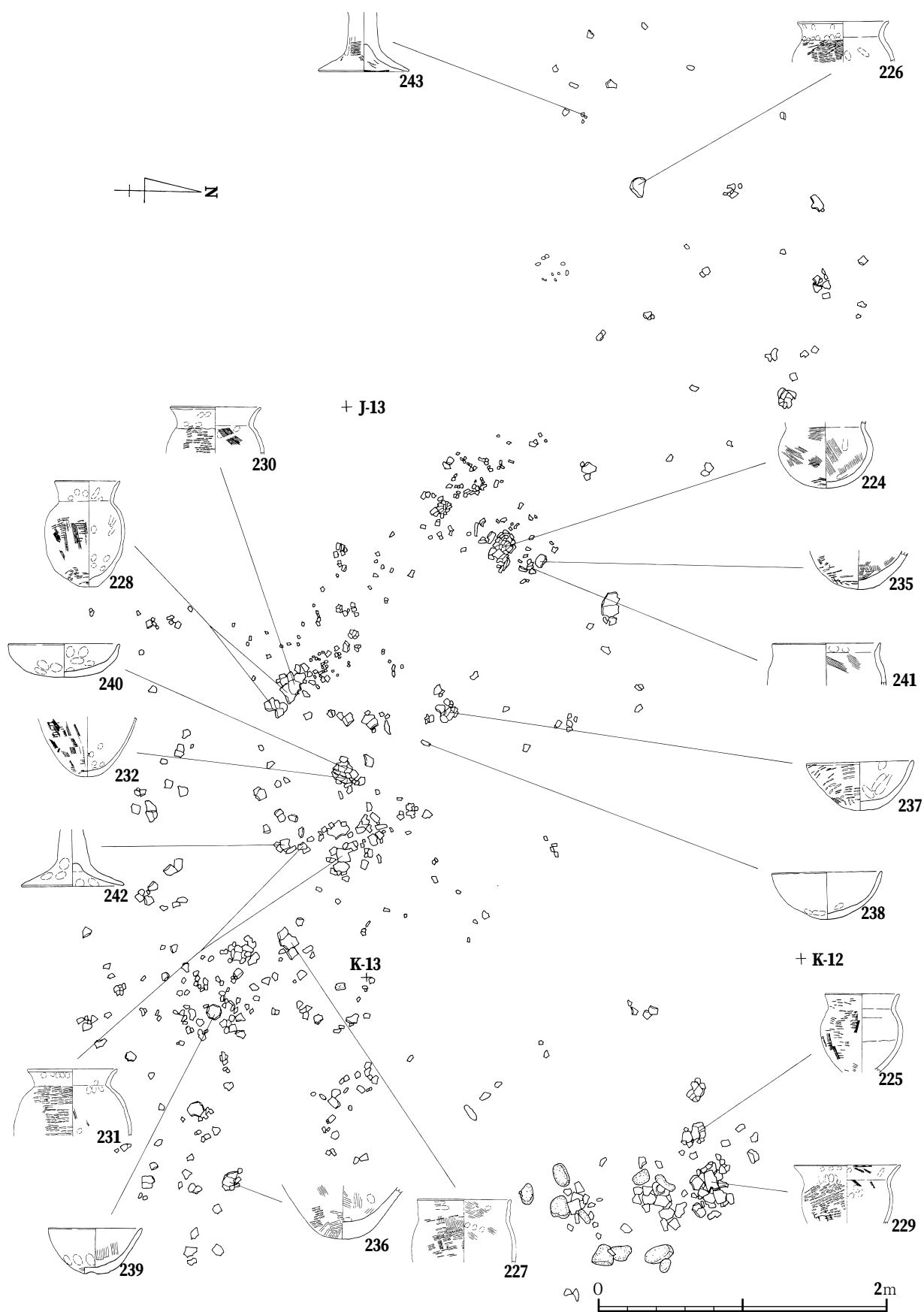
279は蓋である。内外面ともハケ調整が著しく、端部はナデ調整の後、ハケ原体を用いて**5**～**8**本の刻みを施す。第VI層出土であるが、弥生時代後期のものとみられる。



第77図 2区第Ⅲ～Ⅳ・Ⅵ層出土遺物実測図



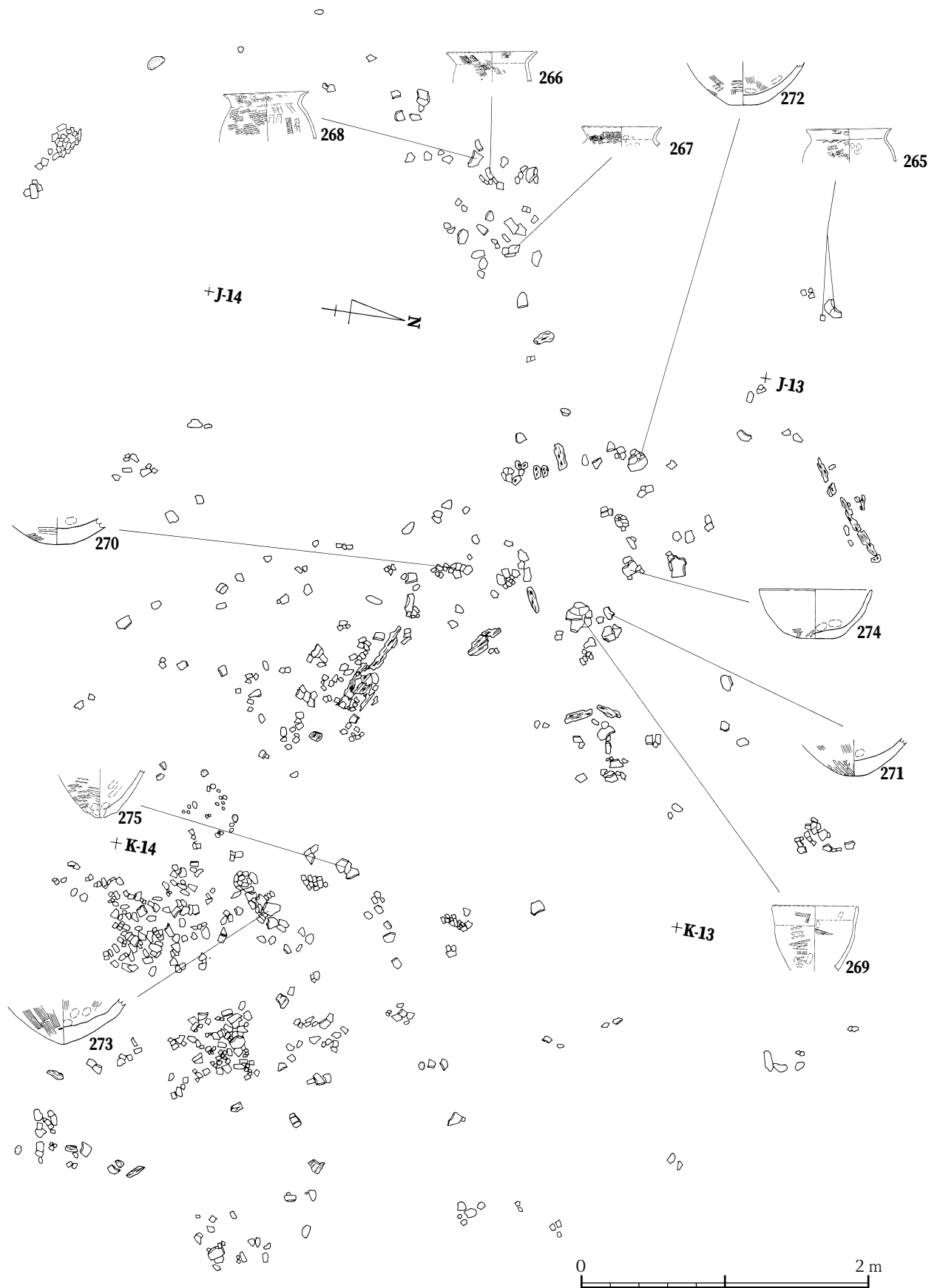
第78図 2区遺構分布図



第79図 遺物集中ブロック8出土遺物分布及び接合関係図



第80図 遺物集中ブロック9出土遺物分布及び接合関係図



第81図 遺物集中ブロック11出土遺物分布及び接合関係図

表3 1区土器観察表

遺物番号	出土地点	器種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
1	炭化物集中5	手捏土器	口径7.4 器高2.9 丸底	内外面ユビ調整。	4mm以下の黒雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 明褐 外面 明赤褐	
2	炭化物集中10	甕	口径16.4 残高5.9	内外面とも器壁が剥落しており、調整不明。	8mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内面 ぶい橙 外面 橙	
3	炭化物集中10	鉢	口径12.9 器高5.5 丸底	内面はハケ調整。外面はわずかにハケ目が残る。	3mm以下の砂粒	良好	内面 橙 外面 ぶい黄橙	
4	遺物集中17層	壺	口径19.0 残高3.4	内面は器壁が摩耗しており調整不明。外面はハケ、ナデ調整。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 橙	
5	遺物集中17層	甕	残高26.7 胴径29.0	内面はハケ及び幅狭の工具を用いた調整。外面は横位のタタキ成形後、下胴部は部分的にハケ調整。	5mm以下の砂粒	良好	内外面 褐灰	
6	遺物集中17層	甕	口径14.4 残高6.6	内面はナデ、外面は横位のタタキ目が残る。	5mm以下の砂粒	良好	内外面 ぶい橙	
7	遺物集中17層	甕	口径15.4 残高6.8	内面ナデ調整。外面はタタキ目残り、口縁部は横ナデ調整。	7mm以下の石英、多くの砂粒	良好	内外面 橙	
8	遺物集中17層	甕	口径13.6 残高12.5 胴径16.4	内面は摩耗気味で、胴部に若干ハケ目が残る。外面口縁部はナデ。頸部以下は横方向のタタキ成形の後、胴部に部分的なハケ調整を施す。	6mm以下のチャート、石英、砂粒	良好	内外面 ぶい黄橙	
9	遺物集中17層	甕	口径17.6 残高6.3	内外面とも器壁の剥離が著しいため、詳しい調整不明。外面は頸部以下に右下がりのタタキ目が残る。口縁端部は指頭押圧。	5mm以下の砂粒	良好	内面 褐灰 外面 橙	
10	遺物集中17層	甕	口径17.0 残高8.5	内面は丁寧なナデ調整。口縁部は叩き出し成形後、ナデ調整。	5mm以下の砂粒が少量	良好	内面 橙 外面 ぶい橙	外面煤付着。
11	遺物集中17層	甕	口径19.0 残高10.4	内面はハケ、ナデ調整。外面は頸部以下に左下がりのタタキ目が残る。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 ぶい黄橙 外面 橙	外面煤付着。吹きこぼれ痕あり。
12	遺物集中17層	甕	口径18.2 残高15.3 胴径18.6	内面ナデ調整。外面は口縁端部より横位のタタキ成形。下胴部は板状工具で調整を行う。	5mm以下の砂粒	良好	内面 ぶい黄橙 外面 橙	外面煤付着。
13	遺物集中17層	甕	口径18.6 残高14.1 胴径19.8	内面口縁部ハケ、頸部以下はハケ、ナデ調整。外面は頸部以下に横位のタタキ目が残る。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
14	遺物集中17層	甕	口径11.5 残高7.1 胴径14.0	内面はハケ調整の後、口縁部はナデを施す。外面は口縁端部より横位のタタキ成形。胴部には部分的にハケ調整を施す。	4mm以下の雲母、チャート、砂粒	良好	内面 褐灰 外面 ぶい橙	外面煤付着。
15	遺物集中17層	甕	口径15.3 残高6.2	内面はナデ調整。外面は胴部に横位のタタキ目が残る。口縁端部には指頭圧痕が残る。	5mm以下の砂粒	やや不良	内面 明褐 外面 褐灰	
16	遺物集中17層	甕	口径14.2 残高6.1	内面はハケ、ナデ調整。外面は胴部に横位のタタキ目が残る。	4mm以下の砂粒	やや不良	内面 褐灰 外面 橙	
17	遺物集中17層	甕	口径16.4 残高6.0	内面はナデ、ハケ調整。外面は横位のタタキ成形。	5mm以下の砂粒	良好	内面 褐灰 外面 ぶい橙	
18	遺物集中17層	甕	口径13.5 残高7.1	内面はハケ、ナデ調整。外面は胴部に横位のタタキ目が残る。口縁部には指頭圧痕が多く残る。	4mm以下の砂粒	良好	内面 ぶい黄橙 外面 灰黄褐	外面煤付着。
19	遺物集中17層	甕	口径14.4 残高11.0	内面は比較的丁寧なハケ、口縁端部はヨコナデ調整を施す。外面は胴部に横位のタタキ目が残る。	5mm以下のチャート、赤色風化砂粒	良好	内面 灰 外面 ぶい黄橙	外面煤付着。
20	遺物集中17層	甕	口径15.6 残高16.0 胴径18.8	内面は丁寧なナデ調整。口縁部はハケ目が残る。外面は横位のタタキ成形後、部分的に幅狭の工具でナデ調整を施す。口縁部は横ナデ。	4mm以下のチャート、石英、砂粒	良好	内面 明褐灰 外面 橙	外面煤付着。
21	遺物集中17層	甕	口径13.8 残高15.0 胴径17.5	内外面とも器壁の摩耗が著しい。外面は横位のタタキ成形後、口縁部には雑な横ナデ調整を施す。	7mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内面 灰褐 外面 橙	
22	遺物集中17層	甕	口径16.7 残高19.6 胴径19.1	外面は横位、または右下がりのタタキ成形後、胴部に部分的にハケ調整を施す。	3mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 浅黄橙 外面 ぶい橙	外面煤付着。
23	遺物集中17層	甕	残高4.7 丸底 ?	比較的丁寧な調整で、内面はナデ、外面はタタキをナデ消した後ハケ調整を施す。	5mm以下の砂粒	良好	内面 ぶい黄橙 外面 ぶい橙	
24	遺物集中17層	甕	残高7.9 底径6.0	内面はナデ調整。外面は底面までタタキ目が残る。内外面とも器面調整は雑である。	1cm以下の砂粒	良好	内面 黒褐 外面 褐灰	
25	遺物集中17層	甕?	残高3.2 底径2.4	内面はハケ調整後、ナデ消し。外面には左下がりのタタキ目残り、部分的にハケ、ナデ調整を施す。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 褐灰 外面 ぶい褐	
26	遺物集中17層	甕	残高2.9 底径3.8	内面はナデ調整。外面はタタキ成形後、ナデ調整。胴部は部分的にハケ調整。外底面にタタキ目が残る。	7mm以下の砂粒	良好	内面 浅黄橙 外面 ぶい橙	
27	遺物集中17層	甕	残高6.1 底径3.6	内面はナデ調整。外面は底面まで横位のタタキ目が残る。	7mm以下の砂粒	良好	内面 褐灰 外面 橙	
28	遺物集中17層	甕	残高4.8 底径4.2	内面ナデ調整。外面は横位、または左下がりのタタキ目が残る。	7mm以下の砂粒	良好	内面 ぶい黄橙 外面 灰黄褐	
29	遺物集中17層	甕	残高5.9 底径3.6	内面ナデ調整。外面はタタキ成形後、一部ナデ調整。	6mm以下の砂粒	良好	内面 褐灰 外面 灰白	
30	遺物集中17層	甕	口径16.0 器高22.5 胴径17.5 尖底	内面ハケ調整。外面は横位のタタキ成形後、頸部はハケ、口縁部と底部はナデ調整を施す。外底部にはあばた状の窪みが数箇所認められる。	2mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。

表3 1区土器観察表

遺物 番号	出土地点	器 種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
31	遺物集中1 17層	甕	口径 16.8 器高 24.7 胴径 19.6 丸底	内面は口縁部から上胴部はハケ、口縁端部及び胴部はナデ調整を施す。外面は左下がりのタタキ成形後、下胴部は幅狭の工具で部分的にナデ調整を施す。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 灰黄褐 外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
32	遺物集中1 17層	甕	口径 17.8 器高 26.5 胴径 22.2 底径 3.9	内面ハケ、ナデ調整。外面は横方向、または右下がりのタタキ成形後、下胴部に部分的に粗いハケを施す。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	外面煤付着。
33	遺物集中1 17層	甕	口径 14.0 器高 26.3 胴径 20.9 底径 3.8	内面は口縁部から上胴部までハケ目が残る。外面は横または右下がりのタタキ成形後、口縁部は横ナデ、下胴部は部分的にハケ調整を施す。	6 mm 以下の石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
34	遺物集中1 17層	鉢?	残高 3.0 底径 2.2	内面ナデ調整。外面はタタキ成形後、ナデ消し。比較的丁寧な調整で、器壁も薄め。	4mm以下の砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 明褐灰	
35	遺物集中1 17層	鉢?	残高 3.8 丸底	内面ハケ、ナデ調整で、内底部にハケ目が残る。外面は底面までタタキ目が残る。	5mm以下の砂粒	良好	内面 橙 外面 にぶい橙	
36	遺物集中1 17層	鉢	口径 14.8 器高 7.7 底径 3.6	内面ナデ調整。外面は底面までタタキ目が残る。口縁端部は平らに仕上げる。	5mm以下の砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
37	遺物集中1 17層	鉢?	残高 7.2 底径 3.3	内面ナデ調整。外面は左下がりのタタキ目が残る。底部の中央は指で両側からつまんだような窪みがある。	5mm以下の砂粒	良好	内外面 橙	
38	遺物集中1 17層	鉢?	残高 6.9 底径 4.0	内面ナデ調整。外面には横、または右下がりのタタキ目が残る。外底面にもタタキ目残る。	7 mm 以下の石英、砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 にぶい赤橙	外面煤付着。
39	遺物集中1 17層	鉢	口径 13.4 器高 5.8 底径 5.0	内面ハケ、ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、体部はナデ調整。外底面は2度以上タタキ成形が施される。	5mm以下の砂粒	やや不良	内面 灰白 外面 にぶい橙	
40	遺物集中1 17層	鉢?	残高 5.2 底径 4.6	内面ナデ調整。外面はタタキ成形後、部分的なハケ調整を施す。器壁は薄めである。	5mm以下の砂粒が少量	良好	内外面 にぶい橙	
41	遺物集中1 17層	鉢	口径 13.9 残高 7.6	内面は丁寧なナデ調整。外面は左下がりのタタキ目が残る。	5mm以下の砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	
42	遺物集中1 17層	鉢	口径 12.8 器高 6.8 丸底	内面ハケ、ナデ調整。外面はタタキ目が残る。底部には板状の工具で、粘土を削り取った痕がみられる。	5mm以下の砂粒	やや不良	内面 灰白 外面 橙	
43	遺物集中1 17層	甕	口径 14.5 器高 9.2	内面ハケ、ナデ調整。外面は底部まで左下がりのタタキ目が残る。全体的に雑な調整である。	8mm以下の砂粒	不良	内面 褐灰 外面 橙	焼成前穿孔。
46	遺物集中2 17層	壺	口径 18.0 残高 3.9	内外面ともナデ調整。	5mm以下の黒雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	外面煤付着。
47	遺物集中2 17層	甕	口径 16.0 残高 6.5	内面は板状工具で調整後、ナデを施す。外面は横位のタタキ成形後、ナデ調整。口縁部は横ナデ。	5 mm 以下の石英、砂粒	良好	内面 明褐灰 外面 にぶい褐	外面煤付着。
48	遺物集中2 17層	甕	口径 15.4 残高 14.0 胴径 17.4	内面は口縁部横ナデ、胴部にはハケ目が残る。外面は口縁部はナデ調整後下胴部に部分的にナデ、幅狭の工具を用いた調整を施す。	3mm以下のチャート、長石、砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	内外面煤付着。
49	遺物集中2 17層	甕	口径 16.8 残高 6.0	内面ナデ調整。指頭圧痕が粘土接合部に残る。外面は胴部に横位のタタキ目残る。	5 mm 以下の砂粒、黒雲母	良好	内外面 にぶい橙	
50	遺物集中2 17層	甕	口径 14.2 残高 8.0	内面ナデ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、口縁部は雑なナデを施す。	4mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
51	遺物集中2 17層	甕	口径 16.6 残高 9.1	内面はハケ目が残る。口縁部はナデ調整。外面はナデ調整を施す。	6mm以下の石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 灰 外面 にぶい赤褐	外面煤付着。
52	遺物集中2 17層	甕	口径 14.8 残高 15.0 胴径 17.3	内外面ともナデ調整で、口縁部外面は横ナデ調整を施す。外面には板状工具の痕が残る。	3mm以下の黒雲母、砂粒	良好	内面 灰黄 外面 橙	外面煤付着。
53	遺物集中2 17層	甕	口径 15.2 残高 14.8 胴径 18.6	内面はハケ目がわずかに残る。外面は横位、または右下がりのタタキ成形後、下胴部には部分的にハケ、ナデ調整を施す。	5mm以下のチャート、砂粒	不良	内外面 橙	外面煤付着。
54	遺物集中2 17層	壺または甕	残高 15.0	内面ハケ調整で、指頭圧痕が多く残る。外面は左下がりのタタキ成形後、頸部にナデ調整を施す。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
55	遺物集中2 17層	甕	口径 13.8 器高 15.3 胴径 13.8 底径 3.6	内外面ともハケ、ナデ調整を施す。口縁部はナデ。底部は摩耗しており調整不明。	5mm以下のチャート、石英、砂粒	良好	内面 橙 外面 にぶい橙	内外面とも煤付着。内面は食物残滓か。
56	遺物集中2 17層	甕	口径 17.0 器高 21.6 胴径 17.2	内外面とも摩耗が著しい。外面は横位のタタキ成形後、下胴部に部分的にハケ調整を施す。	6 mm 以下の石英、砂粒	やや不良	内外面 橙	
57	遺物集中2 17層	甕	口径 14.4 器高 23.9 胴径 17.4 丸底	内面には指頭圧痕、ハケ目が残る。下胴部には帯状にあばた状の剥離痕が認められる。外面は左下がりのタタキ成形後、口縁部は横ナデ、下胴部はナデ調整を施す。	3mm以下の砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい橙	内外面とも煤付着。
58	遺物集中2 17層	甕	残高 4.2 底径 4.0	内面はハケ、ナデ調整。外面は右下がりのタタキ成形を施す。	4mm以下の砂粒が少量	良好	内外面 にぶい橙	
59	遺物集中2 17層	甕	残高 2.2 底径 3.5	内面はハケ調整。外面は底面までタタキ目が残る。	4mm以下の砂粒	良好	内面 褐灰 外面 にぶい黄橙	
60	遺物集中2 17層	甕	残高 7.0 底径 4.4	内面はハケ、ナデ調整。外面は底面までタタキ目が残る。比較的丁寧な成形である。	1cm以下の砂粒が少量	良好	内面 褐灰 外面 橙	内外面とも煤付着。

表3 1区土器観察表

遺物番号	出土地点	器 種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
61	遺物集中2 17層	甕	残高 7.5 底径 2.3	内面はナデ調整で、指頭圧痕が多く残る。外面は横位のタタキ成形後、部分的にハケ調整を施す。	1cm以下の砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	内外面に煤付着。
62	遺物集中2 17層	甕	残高 7.7 底径 2.5	内面ハケ調整。外面は横位のタタキ成形後、ハケ、ナデ調整を施す。外底面にタタキ目が残る。	6mm以下の砂粒	良好	内面 黒 外面 にぶい黄橙	
63	遺物集中2 17層	甕または壺	残高 8.3 底径 2.4	内面ナデ調整。外面は底面までのタタキ成形後、下胴部は縦方向にミガキに似た調整を施す。	8mm以下の石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	
64	遺物集中2 17層	甕	残高13.5 底径 3.3	内面ハケ、ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、一部ハケ、ナデ調整を施す。外底面にタタキ目が残る。	8mm以下の石英、砂粒	良好	内面 黄灰 外面 灰白	外面煤付着。
65	遺物集中2 17層	甕	残高17.5 底径 4.0	内面はナデ調整。外面は底面までのタタキ成形後、雑なナデ調整を施す。	1cm以下の石英、砂粒	良好	内面 灰黄 外面 橙	
66	遺物集中2 17層	甕	残高20.0 胴径19.8 底径 4.0	内面は丁寧なナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、下胴部に部分的にハケ状の調整を施す。外底面にタタキ目残る。	4mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 灰黄	外面煤付着。内面には1cm大のバッチ状の煤が付く。
67	遺物集中2 17層	鉢	口径10.2 残高 5.6	内面はハケ、ナデ調整。外面はハケ目が残るが摩耗が著しい。頸部に指頭圧痕が残る。	4mm以下の石英、チャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
68	遺物集中2 17層	鉢	口径13.4 器高 6.1 底径 2.5	内面はハケ目が残る。外面は左下がりのタタキ成形後、雑なナデ調整を施す。	6mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 橙 外面 灰黄	
69	遺物集中2 17層	鉢	口径12.2 残高 6.8	内面はハケ、ナデ調整。外面は底面近くまでタタキ成形を行う。上胴部は横位のハケ、ナデ調整を施す。	8mm以下の砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 褐灰	
70	遺物集中2 17層	甌	口径12.4 器高10.7	内面はハケ目が残る。外面は横位、左下がりのタタキ成形後、ハケ、ナデ調整を施す。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 明黄褐 外面 灰黄褐	
71	遺物集中3 17層	壺	口径16.5 残高 5.9	器壁の剥落が著しいが、内面はナデ調整と思われる。外面は比較的丁寧なナデ調整。	7mm以下の砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 にぶい黄橙	
72	遺物集中3 17層	甕	口径16.0 残高10.4	内面はナデ調整。外面は横位のタタキ目が残る。口縁部は横ナデ調整。	7mm以下の石英、砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	外面煤付着。
73	遺物集中3 17層	甕	口径15.6 残高 6.4	内面はナデ調整。外面は胴部に左下がりのタタキ目が残る。口縁部はナデ調整を施す。	5mm以下の長石、砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	
74	遺物集中3 17層	甕	口径16.4 残高15.1 胴径18.6	内面は丁寧なハケ調整後、口縁部は内外面とも横ナデを施す。胴部外面は横位のタタキ目が残る。	5mm以下の砂粒	良好	内面 灰白 外面 にぶい橙	外面煤付着。
75	遺物集中3 17層	甕	口径15.0 残高14.2 胴径19.0	内面ナデ調整で、指頭圧痕が多く残る。外面は底面までのタタキ成形後、口縁部はナデ調整を施す。	6mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 明褐灰 外面 橙	
76	遺物集中3 17層	甕	残高 6.0	内面は斜方向にハケ調整。外面は口縁部には横ナデ調整を施し、胴部は横位のタタキ目が残る。	5mm以下の砂粒が少量	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
77	遺物集中3 17層	甕?	残高 3.5 底径 2.3	内面はナデ調整。外面はタタキ成形後、胴部に部分的にハケ、またはナデ調整を施す。	4mm以下の砂粒	良好	内面 灰黄褐 外面 にぶい橙	
78	遺物集中3 17層	甕	残高 4.1 底径 3.8	内面はナデ調整。外面は底面までのタタキ成形後、部分的にハケを施す。	6mm以下の石英、砂粒	良好	内外面 橙	
79	遺物集中3 17層	甕	残高 3.7 底径 2.0	内面は丁寧なナデ調整。外面は器壁の剥落が著しいため、調整不明。	4mm以下の石英、砂粒	やや不良	内面 にぶい橙 外面 にぶい黄橙	
80	遺物集中3 17層	甕	残高 4.3 底径 2.7	内面はハケ調整。外面は底面までのタタキ成形後、下胴部は部分的にハケ、ナデ調整を施す。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 灰黄褐 外面 にぶい赤褐	内外面煤付着。
81	遺物集中3 17層	甕	残高 7.8 底径 2.8	内面ナデ調整。外面は底面までのタタキ成形後、下胴部は部分的にハケ調整を施す。	5mm以下の石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 橙 外面 にぶい橙	外面煤付着。
82	遺物集中3 17層	甕	残高39.6 胴径41.0 底径11.2	内面は板状工具を用いた調整。全体的にあばた状に器壁が剥落。外面は横位のタタキ成形後、上胴部にはハケ、下胴部には幅狭の工具を用いた調整を施す。外底面はナデ調整を施す。	3mm以下の石英、砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
83	遺物集中3 17層	甕または鉢	残高 4.1 底径 2.9	内面ナデ調整。外面は左下がりのタタキ目が残る。外底面はナデ調整を施す。	7mm以下の砂粒	良好	内面 橙 外面 明赤褐	
84	遺物集中3 17層	甕	残高 4.0 底径 3.6	内面はナデ調整。外面は2度以上のタタキ成形後、ハケを施す。外底面にタタキ目残る。	3mm以下の砂粒	良好	内面 灰黄褐 外面 にぶい橙	
85	遺物集中3 17層	甕	残高 7.0 底径 4.0	内外面ともナデ調整を施す。外底面の調整は雑である。	1.3cm以下の砂粒	良好	内外面 橙	
86	遺物集中3 17層	鉢	残高 4.9 底径 3.6	内面はハケ調整。外面は横位のタタキ成形後、ナデ調整を施す。底部にはタタキ目残る。	6mm以下の砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	
87	遺物集中3 17層	鉢	残高 4.1 底径 3.0	内面ハケ、ナデ調整。外面はタタキ成形後、ナデ調整を施す。外底面にはタタキ目が残る。	5mm以下の石英、チャート、砂粒	良好	内面 灰白 外面 にぶい黄橙	
88	遺物集中3 17層	鉢	口径15.0 残高 5.2	内面ハケ、ナデ調整。外面は横位、左下がりのタタキ目が残る。	3mm以下の砂粒	良好	内外面 灰黄	
89	遺物集中3 17層	鉢	口径12.2 器高 6.0 底径 2.0	内面はハケ、ナデ調整。外面はタタキ成形後、ハケ調整を施す。	4mm以下の石英、砂粒	良好	内外面 にぶい褐	
90	遺物集中3 17層	鉢	口径13.8 器高 7.5 底径 3.7	内面は丁寧なナデ調整。外面はタタキ成形後、口縁端部は横ナデを施す。底部はやや凹み気味である。	8mm以下の石英、水晶、砂粒	やや不良	内外面 橙	
91	遺物集中3 17層	鉢	口径16.2 器高 7.4 底径 3.3	内面はハケ、ナデ調整。外面はタタキ成形後、ハケ、ナデ調整を施す。	6mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
92	遺物集中3 17層	鉢	口径15.4 器高 5.8 底径 3.5	内面はハケ、口縁部は横ナデを施す。外面は横位のタタキ成形後、ナデ調整。底部にタタキ目が顕著に残る。	4mm以下の砂粒	やや不良	内面 灰白 外面 橙	外面煤付着。

表3 1区土器観察表

遺物 番号	出土地点	器 種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
93	遺物集中3 17層	鉢	口径 15.9 器高 6.0 底径 2.4	内面ナデ調整。外面はタタキ成形後、部分的にハケ調整を施す。	5mm以下の石英、砂粒	良好	内外面 橙	
94	遺物集中3 17層	鉢	残高 2.6 底径 3.8	内面は摩耗のため調整不明。外面はタタキ成形後、部分的にナデを施す。タタキは比較的目的が細かい。	5mm以下の石英、砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 にぶい褐	
95	遺物集中3 17層	鉢または甕	残高 2.6 丸底	内面ナデ調整。外面はハケ、ナデ調整を施す。	3mm以下の砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
96	遺物集中3 17層	鉢	口径 11.2 器高 11.3 胴径 12.0 底径 2.8	内面ナデ調整で、指頭圧痕が多く残る。外面は底面までのタタキ成形後、底部を残してナデ調整を施す。	3mm以下の砂粒が少量入る。非常に精緻な胎土。	良好	内外面 橙	
97	遺物集中3 17層	高杯	残高 9.9 底径 16.5	内外面とも器面が摩耗しており、調整は不明。	8mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内外面 橙	
99	遺物集中4 17層	壺	口径 14.0 残高 7.9	内面は摩耗が著しく調整不明。外面は胴部に横位のタタキ目が残る。口縁部ナデ調整。	胎土には5mm以下の砂粒	やや不良	内面 褐灰 外面 橙	
100	遺物集中4 17層	壺	口径 18.0 残高 5.7	内外面ともナデ調整。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内面 褐灰 外面 橙	
101	遺物集中4 17層	壺	口径 14.8 器高 30.4 胴径 25.6 底径 1.6	内面ナデ調整。胴部外面は横位、左下がりのタタキ目が残る。口縁部はナデ、下胴部にはハケ状の調整が部分的に施される。	3mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 明褐 外面 橙	
102	遺物集中4 17層	甕	口径 13.2 残高 15.0 胴径 13.9	内面はハケ、ナデ調整。外面はタタキ成形後、雑なハケ、ナデ調整を施す。口縁端部はヨコナデによって平らに仕上げる。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
103	遺物集中4 17層	甕	口径 13.6 残高 7.5	内面はナデ調整。外面はハケ、ナデ調整を施す。	6mm以下の石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 橙 外面 にぶい橙	
104	遺物集中4 17層	甕	口径 16.2 残高 9.2	内面はハケ、幅狭の工具による調整が行われる。外面はハケ、ナデ調整を施す。	3mm以下の砂粒が少量	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	外面煤付着。
105	遺物集中4 17層	甕	口径 18.6 残高 13.8 胴径 21.6	内面はハケ、口縁部は横ナデを施す。外面は幅狭の板状工具での調整が若干みられる。	7mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	外面煤付着。
106	遺物集中4 17層	甕	口径 16.4 残高 9.8	内面はナデ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、口縁部は横ナデ調整を施す。	6mm以下の砂粒	やや不良	内外面 橙	外面煤付着。
107	遺物集中4 17層	甕	残高 30.8 胴径 34.4 底径 5.0	内面はハケ、ナデ調整。指頭圧痕が多く残る。外面は横位のタタキ成形後、下胴部にハケ調整を施す。	1cm以下の石英、砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内面 にぶい橙 外面 橙	
108	遺物集中4 17層	甕	口径 15.2 残高 11.4	内面は粗いハケ調整。外面は胴部に横位、右下がりのタタキ目残る。口縁部は横ナデ、胴部は部分的にナデ調整を施す。	5mm以下の砂粒	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
109	遺物集中4 17層	甕	口径 17.0 残高 11.2	内面はハケ、ナデ調整。外面は横位、左下がりのタタキ成形後、口縁部は雑なナデを施す。	9mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	外面煤付着。
110	遺物集中4 17層	甕	口径 16.3 器高 24.9 胴径 20.5 底径 3.9	内面はハケ、ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、口縁端部はナデによって平らに仕上げる。下胴部は部分的なハケ調整を施す。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	外面煤付着。
111	遺物集中4 17層	甕	残高 4.9 底径 3.8	内面ナデ調整。外面は底面までのタタキ目残る。	5mm以下の砂粒が少量	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	内外面煤付着。 内面粉痕あり。
112	遺物集中4 17層	甕	残高 11.7 底径 4.0	内面ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、一部ナデ調整を施す。	5mm以下の砂粒	良好	内面 黒 外面 橙	底部内面は食物残滓？が付着。
113	遺物集中4 17層	甕または鉢	残高 6.7 丸底	内面ハケ、ナデ調整。外面はタタキ成形後、下胴部は部分的にナデ調整。外底面にはタタキ目が残る。	4mm以下の砂粒が少量	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
114	遺物集中4 17層	甕または鉢	残高 6.2 丸底	内面はナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、下胴部にナデ調整を施す。	5mm以下のチャート、石英、砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 黄灰	
115	遺物集中4 17層	甕	残高 7.8 底径 2.7	内面ハケ、ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、部分的にナデ調整を施す。外面底部にタタキ目が残る。	4mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 橙	内外面煤付着。
116	遺物集中4 17層	甕	残高 8.3 底径 3.8	内面はヘラナデ。外面は胴部にハケ調整を施す。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 赤褐	
117	遺物集中4 17層	甕	残高 17.1 胴径 26.8 丸底	内面はハケ、ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、下胴部にハケ状の幅狭の工具を用いた調整を施す。底部にはタタキ目が残る。	1cm以下の砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
118	遺物集中4 17層	鉢	口径 9.0 残高 2.8	内面ナデ調整。外面はハケ目が残る。内外面とも比較的丁寧な調整を行う。	5mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
119	遺物集中4 17層	鉢	口径 12.6 器高 5.3 底径 3.8	内面ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、口縁部はヨコナデ、底面はナデ調整を施す。また外底面にはケズリに似た調整が認められる。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 明赤褐 外面 橙	
120	遺物集中4 17層	鉢	口径 12.4 器高 3.9 丸底	内外面ともにナデ調整を施す。指頭圧痕が多く残っており、ユビ成形とみられる。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
121	遺物集中4 17層	鉢	口径 16.0 器高 6.6 丸底	内面ハケ調整。外面は横位のタタキ成形後、底部にはハケ調整を施す。	4mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい橙	
122	遺物集中4 17層	鉢	口径 13.9 器高 7.7 丸底	内面ナデ調整。外面はタタキ成形後、雑なナデ調整を施す。	3mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	

表3 1区土器観察表

遺物番号	出土地点	器 種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
123	遺物集中4 17層	鉢または甕	残高 7.6 底径 4.0	内面はナデ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、ハケ調整を施す。	7mm以下の砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	
124	遺物集中4 17層	甕	口径13.3 器高10.4	内面ハケ目が残る。外面は口縁端部から左下がり、横位のタタキ成形後、底部はナデを施す。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒が少量	良好	内面 にぶい赤褐 外面 にぶい橙	焼成前穿孔。
125	遺物集中4 17層	甕	口径12.8 器高 9.4	内面はハケ、ナデ調整。外面は左下がりのタタキ目が残る。	1cm以下の砂粒	良好	内外面 にぶい橙	焼成前穿孔。
126	遺物集中4 17層	高杯	残高 8.6 底径13.3	内面は比較的丁寧なナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、ナデ調整を施す。	7mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
127	遺物集中4 17層	高杯	残高 5.6 底径14.0	内外面ともにナデ調整を施す。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
128	遺物集中5 17層	壺	口径19.6 残高17.5	内面はハケ、ナデ調整で、粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。外面は胴部に横位のタタキ成形後、ハケ、ナデ調整を施す。	6mm以下の長石、砂粒	やや不良	内外面 橙	
129	遺物集中5 17層	甕	口径29.6 残高20.2 胴径30.0	内面ハケ調整。外面は胴部に横位のタタキ目残り、口縁部はハケ調整を施す。	7mm以下の石英、砂粒	やや不良	内外面 橙	
130	遺物集中5 17層	甕	口径16.2 残高 9.1	内面は口頭部に横位のハケ調整。外面は左下がり、右下がりのタタキ成形後、部分的に粗いハケを施す。	6mm以下の砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
131	遺物集中5 17層	甕	口径16.0 残高10.2	内面は摩耗が著しく調整不明。指頭圧痕が残る。外面は左下がりの成形を施す。口縁部はナデ調整。	6mm以下のチャート、石英、長石、砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
132	遺物集中5 17層	甕	口径20.2 残高22.0 胴径22.0	内面ハケ調整で、上胴部はナデ調整を施す。胴部外面は横位のタタキ目が残る。口縁部はナデ、下胴部はハケを部分的に施す。	5mm以下の石英、砂粒	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
133	遺物集中5 17層	甕	口径16.6 残高13.3 胴径22.2	内面ナデ調整で、口縁部はハケを施す。外面は横位のタタキ成形後、下胴部は部分的に雑なハケ、ナデを施す。外面底部にはタタキ目が残る。	6mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。 No.134と同一個体。
134	遺物集中5 17層	甕	残高15.3 丸底	内面ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、雑なハケ、ナデ調整を施す。外面底部にはタタキ目が残る。	6mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 明赤褐 外面 橙	
135	遺物集中5 17層	甕	残高 9.7 底径 2.7	内面は摩耗が著しい。外面は底面まで横位のタタキ目が残る。下胴部には部分的にハケ調整が施される。	6mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 橙	
136	土器集中1 15層	高杯	残高 8.1 底径11.3	内外面とも器壁が摩耗しており、調整不明。	3mm以下のチャート、長石、砂粒	不良	内外面 にぶい橙	
137	土器集中2 15層	甕	口径14.0 残高16.8 胴径19.2	内外面ともナデ調整。	1cm以下の砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい橙	外面煤付着。
138	土器集中2 15層	鉢	口径12.2 器高 5.9 丸底	内面はナデ調整。外面は器壁が摩耗しており、調整不明。	5mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内面 にぶい橙 外面 明褐灰	
139	土器集中2 15層	高杯	残高 7.4 底径10.2	内外面ともナデ調整。杯部と脚柱部には指頭圧痕が残る。	8mm以下の砂粒、1mm以下の長石	良好	内外面 橙	
140	土器集中3 15層	甕	口径18.0 残高18.3 胴径20.6	内面はナデ調整。外面はハケ、ナデ調整を施す。内外面とも指頭圧痕が多く残る。	6mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 灰褐	
141	土器集中3 15層	鉢	残高 4.0 底径 3.6	内外面ナデ調整。	5mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
142	土器集中3 15層	高杯	口径21.2 器高16.6 底径13.8	杯部は内外面とも横ナデ調整を施す。脚部は脚柱部外面に縦方向にハケ目がわずかに残る。内外面ともナデ調整。	7mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
143	土器集中3 15層	高杯	口径16.0 残高 9.3	内外面ともナデ調整。	5mm以下の黒雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
144	土器集中3 15層	須恵器 甕	残高22.5 胴径30.0 底径 8.6	内面はナデ調整の痕が見られるが、指頭圧痕が多く残る。外面は格子状のタタキ目。頸部は回転ナデ調整。	1mm以下の砂粒	良好	内外面 灰	
146	15層	甕	口径15.6 残高 8.9	内外面とも器壁の摩耗が著しく、調整は不明である。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
147	15層	甕	口径15.0 残高12.0 胴径15.6	内面はナデ調整だが、粘土接合面が残る。外面は器壁の摩耗が著しい。	5mm以下の赤色風化砂粒	やや不良	内面 橙 外面 にぶい橙	外面煤付着。
148	15層	甕	口径13.4 器高23.2 胴径17.3 底径 6.0	内面はハケ目が残るが、大半はナデ調整である。外面はタタキ成形後、ハケ、ナデ調整を施す。粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。	2mm以下のチャート、雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 灰褐	外面煤付着。
149	15層	甕	残高13.5 胴径15.6 底径 2.2	内面はハケ、ナデ調整。外面は横位、左下がりのタタキ成形後、下胴部にはナデ調整を施す。	8mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
150	15層	甕	残高 4.5 底径 4.1	内面はナデ調整。外面はハケの後、幅狭の工具を用いてナデ調整を施す。	2mm以下の雲母、長石、角閃石、砂粒	良好	内面 黄灰 外面 にぶい橙	内外面煤付着。 外面はパッチ状に付く。
151	15層	鉢または甕	残高 2.6 底径 4.4	内外面ともナデ調整。外面にはハケ目がわずかに残る。	5mm以下のチャート、砂粒	やや不良	内面 にぶい橙 外面 灰黄褐	
152	15層	甕	口径13.2 残高 5.2 丸底	内外面とも器壁が剥落しており、調整不明。	2mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内外面 にぶい橙	

表3 1区土器観察表

遺物 番号	出土地点	器 種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
153	15層	鉢	口径 10.2 器高 6.2 底径 2.1	内外面とも器壁の摩耗が著しく、調整不明。	5mm 以下の砂粒、 赤色風化砂粒	やや不良	内外面 灰黄褐	
154	15層	台付鉢	残高 4.3 底径 9.1	内外面ともナデ調整で、外面にはヘラナデ調整を施す。	3mm 以下の石英、 チャート、砂粒、 赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
155	15層	高杯	口径 17.4 残高 7.4	内外面ともナデ調整を施すが、指頭圧痕が多く残る。	5mm 以下の長石、砂 粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
156	15層	高杯	口径 16.8 残高 9.9	内外面ともナデ調整を施す。脚部との接合部付近には指頭圧痕が多く残る。	5mm 以下の砂粒、 赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
157	15層	高杯	残高 6.8 底径 11.2	内外面ともナデ調整を施す。杯部との接合部に指頭圧痕が残る。内面は、粗いヘラナデ調整を施す。	6mm 以下のチャート、 砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
158	15層	高杯	残高 5.8 底径 9.0	内面は粗いヘラナデ調整を施す。外面はヘラナデにより、面取りのように仕上っている。裾部は内外面ともナデ調整である。	2mm 以下の石英、 長石、砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	
159	15層	高杯	残高 8.6	杯部は内外面ともナデ調整。脚部との接合部には指頭圧痕が残る。脚部内面は粗いヘラナデ、外面はナデ調整を施す。	6mm 以下の長石、 石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
160	15層	高杯	口径 17.6 残高 14.8	内外面ともにナデ調整を施すが、指頭圧痕が多く残る。	5mm 以下の砂粒、 赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
161	15層	高杯	残高 6.6	内面は粗いナデ調整、裾部及び外面は、丁寧なナデ調整を施す。	5mm 以下の砂粒、 赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	脚裾部の内外面に煤が付着。
162	15層	手握土器	口径 7.0 器高 6.6 底径 3.1	内外面とも指頭圧痕が多く残る。	8mm 以下の砂粒、 3mm 以下の石英、雲母、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
163	15層	手握土器	残高 2.8 底径 2.6	内外面とも指頭圧痕が多く残る。器壁は厚手である。	3mm 以下の砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
164	15層	手握土器	口径 5.6 器高 2.2 底径 1.6	内外面とも指頭圧痕が多く残る。器壁は薄手である。	6mm 以下の砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
165	16層	甕	口径 16.0 残高 10.0	内面はナデ調整で、口縁部にハケ目が若干残る。外面は横位のタタキ成形を施す。口縁部はナデ調整。口縁端部はナデにより平らに仕上げる。	5mm 以下のチャート、 砂粒	良好	内面 橙 外面 にぶい黄橙	
166	16層	甕	口径 20.4 残高 14.5 胴径 23.7	内面ハケ調整、外面は横位のタタキ成形を施す。口縁部には指頭圧痕が多く残る。	5mm 以下のチャート、 砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい橙	
167	16層	甕	口径 15.7 器高 25.4 胴径 18.8 丸底	内面はナデ調整だが、粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。外面はタタキ成形後、底部はヘラナデを施す。口縁部には指頭圧痕が残る。	5mm 以下の砂粒、 赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
168	16層	甕	残高 14.0 底径 3.2	内面はハケ、ナデ調整。外面は横位、左下がりのタタキ成形後、胴部中位に部分的にハケ調整を施す。	1cm 以下のチャート、 砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 灰黄褐 外面 にぶい橙	
169	16層	甕	残高 2.8 底径 4.6	内面はナデ調整。外面はハケ目がわずかに残る。	2mm 以下の石英、砂 粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい褐 外面 にぶい橙	
170	16層	甕	残高 2.8 底径 4.0	内面はナデ調整。外面はタタキ目が残る。	8mm 以下のチャート、 砂粒	良好	内面 にぶい褐 外面 浅黄橙	内面煤付着。
171	16層	甕	残高 4.4 底径 3.0	内面はハケ、ナデ調整。外面は底部までタタキ目が残る。	6mm 以下の砂粒	良好	内面 灰黄褐 外面 にぶい橙	内面に煤、食物残滓付着。
172	16層	高杯	残高 6.4 底径 12.8	脚部内側はナデ、一部粗いヘラナデを施す。外面及び裾部はナデ調整。	5mm 以下の砂粒、 赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	裾部内外面に煤が付着。
173	16層	鉢	口径 13.2 器高 6.5 底径 4.8	内面はナデ調整。外面はタタキ成形後、口縁部にヨコナデを施す。	2mm 以下の雲母、 長石、 8mm 以下の赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	
174	16層	鉢	口径 10.4 器高 5.0 底径 2.6	内面はハケ、ナデ調整を行う。外面はタタキ成形後、ハケ調整を施す。	3mm 以下の石英、 砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
175	16層	鉢	口径 10.4 残高 4.0	内外面ともナデ調整で、指頭圧痕が残る。	6mm 以下の長石、砂 粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 明褐灰	
176	16層	手握土器	口径 8.4 器高 4.0 丸底	小型の鉢状の器形を呈する。内外面とも指頭圧痕が多く残る。	4mm 以下の雲母、 赤色風化砂粒	良好	内面 橙 外面 にぶい橙	
177	16層	手握土器	口径 5.7 器高 5.0 底径 2.8	器壁は薄く、内外面に指頭圧痕が多く残る。	5mm 以下の砂粒、 赤色風化砂粒	良好	内外面 黄灰	
178	16層	手握土器	残高 1.4 底径 2.6	器壁は薄い。	3mm 以下のチャート、 長石、砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	
183	22層	甕	口径 16.0 残高 5.6	内面は口縁部にハケ目が残るが、大半はナデ調整である。外面は頸部の粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。	5mm 以下のチャート、 砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
184	22層	甕	口径 16.0 残高 2.7	内面は摩耗が著しく調整不明。外面は口縁端部はヨコナデにより平らに仕上げる。指頭圧痕が多く残る。	3mm 以下のチャート、 砂粒	良好	内面 橙 外面 にぶい橙	外面煤付着。

表4 2区土器観察表

遺物番号	出土地点	器 種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
209	遺物集中7 3～4層	甕	口径14.4 残高10.4 胴径16.8	内面ナデ調整で、粘土接合部に指頭圧痕が残る。外面は胴部に横位のタタキ目残り、口縁部はナデ調整を施す。	6mm以下のチャート、長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい橙	
210	遺物集中7 3～4層	甕	口径11.8 器高18.1 胴径14.4 丸底	内面は口縁部はナデ、頸部はハケ調整を施す。外面はハケ、ナデ調整を施すが、横位、左下がりのタタキ目が残る。	4mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 灰黄 外面 灰白	
211	遺物集中7 3～4層	甕	口径13.8 残高11.0	内面は粗いナデ、口縁部は横ナデを施す。粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。外面は左下がりのタタキ目残り、口縁部は雑なナデ調整を施す。	7mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
212	遺物集中7 3～4層	甕	口径18.0 残高11.2 胴径17.7	内面は粗いハケ、ナデ調整を施す。外面は胴部に左下がりのタタキ目残り、口縁部はナデ調整を施す。	7mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄褐 外面 にぶい橙	外面煤付着。
213	遺物集中7 3～4層	甕または鉢	残高 2.7 底径 5.2	内面ナデ調整。外面はハケ、ナデ調整を施す。	5mm以下の雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい褐	
214	遺物集中7 3～4層	甕	残高 6.3 底径 3.4	内面ナデ調整。外面はハケ目が若干残る。	5mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
215	遺物集中7 3～4層	甕	残高 6.0 丸底	内面ナデ調整。外面は横位のタタキ目が残る。外底面はナデ調整を施す。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 明褐灰	外面煤付着。
216	遺物集中7 3～4層	鉢	口径16.0 器高 6.9 丸底	内面ナデ調整。外面は口縁端部まで左下がりのタタキ目残り。体部下半はナデ調整を施す。外底面はタタキ目残り。	6mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
217	遺物集中7 3～4層	鉢	口径18.0 器高 8.8 尖底	内外面ともナデ調整で、指頭圧痕が残る。外面底部にはタタキ目残り。	1cm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
218	遺物集中7 3～4層	鉢	口径13.4 器高 6.3 底径 5.6	内面はハケ状の調整痕が残る。外面は粗いナデ調整を施すが指頭圧痕が多く残る。	8mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
219	遺物集中7 3～4層	台付鉢	口径11.8 残高 9.9	内外面ともハケ、ナデ調整を施す。	5mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい橙	
220	遺物集中7 3～4層	台付鉢	残高 3.2 底径 9.8	台部内面は雑なハケ、ナデ調整。外面はナデ調整を施す。	6mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 灰白	
221	遺物集中7 3～4層	高杯	口径12.8 残高 4.9	内外面ともナデ調整。内面は比較的丁寧、外面は指頭圧痕が多く残る。	6mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい褐 外面 にぶい橙	
222	遺物集中7 3～4層	手捏土器	口径 5.6 器高 2.6 丸底	小皿状を呈する。	6mm以下の雲母、砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	
223	遺物集中7 3～4層	手捏土器	口径 6.2 器高 2.6 丸底	小皿状を呈する。	5mm以下の石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
224	遺物集中8 3～4層	壺	残高 8.8 丸底	内面はハケ、頸部はナデ調整を施す。外面はタタキ成形後、粗いハケ、ナデ調整を施す。	7mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい褐	
225	遺物集中8 3～4層	甕	口径14.0 残高15.0 胴径15.8	内面はナデ調整だが、粘土接合部が顕著に残る。外面は横位のタタキ成形後、胴部には部分的にハケ調整を施す。下胴部は被熱のためか器壁の剥落が著しい。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
226	遺物集中8 3～4層	甕	口径17.2 残高 7.8	内面は丁寧なナデ調整。外面は横位、左下がりのタタキ目残り。口縁部は雑なナデ調整を施す。頸部に指頭圧痕が多く残る。	3mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
227	遺物集中8 3～4層	甕	口径19.2 残高13.5 胴径21.8	内面ハケ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、頸胴部に部分的にハケ調整を施す。口縁部に指ナデの痕残る。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	不良	内面 浅黄橙 外面 にぶい橙	外面煤付着。
228	遺物集中8 3～4層	甕	口径12.2 器高20.3 胴径15.1 底径 3.6	内面ナデ調整。指頭圧痕が多く残る。外面は横位のタタキ成形後、胴部に部分的にハケ調整を施す。外底面にタタキ目残り。口縁部は内外面ともナデ調整。	4mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
229	遺物集中8 3～4層	甕	口径22.0 残高12.5 胴径18.8	内面はハケ、ナデ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、下胴部に部分的にハケ調整を施す。口縁部はナデ調整で、頸部に指頭圧痕が多く残る。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
230	遺物集中8 3～4層	甕	口径17.0 残高 9.0	内面はハケ、ナデ調整。外面は胴部に横位のタタキ目残り。口縁部はナデ調整を施す。	5mm以下の長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
231	遺物集中8 3～4層	甕	口径18.6 残高14.1 胴径24.6	内面はハケ目が僅かに残る。外面は横位のタタキ成形後、部分的にハケ調整を施す。口縁部はナデ調整。	6mm以下のチャート、砂粒、赤色砂粒	やや不良	内外面 明褐灰	外面煤付着。
232	遺物集中8 3～4層	甕	残高12.6 底径 3.3	内面ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、ハケ、ナデ調整。底面にタタキ目残り。丸底化が著しい。	5mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 橙	内外面に煤付着。
233	遺物集中8 3～4層	甕	残高 2.0 底径 3.2	内面ナデ調整。板状工具痕残り。外面は底部にタタキ目残り。	1cm以下の雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい褐 外面 にぶい赤褐	
234	遺物集中8 3～4層	甕	残高 4.2 底径 3.0	内面は幅狭の工具による調整。外面は底部にタタキ目残り。外面は器壁の摩耗が著しい。	6mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 オリーブ黒 外面 にぶい褐	
235	遺物集中8 3～4層	甕または鉢	残高 4.2 丸底	内面は丁寧なハケ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、部分的にハケ調整を施す。	3mm以下の石英、長石、砂粒、6mm以下の赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	底部外面に煤付着。
236	遺物集中8 3～4層	甕	残高 7.0 丸底	内面ハケ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、部分的にハケ、ナデ調整を施す。	5mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 灰	

表4 2区土器観察表

遺物 番号	出土地点	器 種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
237	遺物集中8 3～4層	鉢	口径13.8 器高 6.5 丸底	内面ナデ調整。外面は底面までタタキ目が残る。	6mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
238	遺物集中8 3～4層	鉢	口径11.8 器高 5.0 丸底	内外面とも摩耗が著しく、調整不明。底部内外面に指頭圧痕が残る。	4mm以下のチャート、石英、砂粒、赤色風化砂粒	不良	内面 灰黄 外面 灰白	
239	遺物集中8 3～4層	鉢	口径 9.8 器高 4.8 底径 2.8	内外面とも摩耗が著しい。内面はハケ調整。外面は底部にタタキが若干残る。	6 mm 以下の 砂粒、赤色風化砂粒	不良	内外面 にぶい橙	
240	遺物集中8 3～4層	鉢	口径11.6 器高 3.5 丸底	内外面ともにナデ調整を施す。指頭圧痕が多く残っており、ユビ成形とみられる。	4mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
241	遺物集中8 3～4層	鉢	口径11.2 残高 4.5	内面は板状工具による調整痕が残る。外面はナデ調整。	5mm以下のチャート、石英、雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 灰黄	
242	遺物集中8 3～4層	高杯	残高 6.0 底径10.6	内外面ともナデ調整で、指頭圧痕が多く残る。	2mm以下の黒雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
243	遺物集中8 3～4層	高杯	残高 7.9 底径11.5	内面はハケ、ナデ調整。外面は裾部に横位のタタキ目が若干残る。脚柱部はハケ、ナデを施す。	5mm以下のチャート、長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
244	遺物集中9 3～4層	直口壺	口径13.6 残高 9.5	内面はハケ、ナデ調整。外面は胴部にハケ目が若干残る。口縁部はヨコナデ調整。	5mm以下の黒雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
245	遺物集中9 3～4層	直口壺	口径13.6 器高18.8 胴径14.2 丸底	内面はナデ調整で、粘土接合部に指頭圧痕が残る。外面は幅狭の工具を用いた調整が施される。	5mm以下の黒雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
246	遺物集中9 3～4層	甕	口径18.4 残高16.7 胴径19.2	内面は口頸部がハケ、胴部は板状工具でナデ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、胴部に部分的なハケ調整を施す。	5mm以下のチャート、石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄 外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
247	遺物集中9 3～4層	甕	口径16.8 残高 9.3	内面ナデ調整。口縁部は器壁の剥落が著しい。外面は胴部に左下がりのタタキ目が残る。口縁部は若干ハケが残る。	5mm以下の砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
248	遺物集中9 3～4層	甕	口径11.8 器高17.5 胴径15.0	内面は粗めのハケ調整。粘土接合部に指頭圧痕が残る。外面は胴部に方向の異なるタタキ目が残る。口縁部は斜め方向にハケ調整を施す。	7mm以下のチャート、砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい橙	外面煤付着。
249	遺物集中9 3～4層	甕	残高17.0 胴径16.2 丸底	内面は粗いハケ、ナデ調整。外面は横位、左下がりのタタキ成形後、下胴部に部分的にハケ調整を施す。	8mm以下の砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	底面にあばた状の剥離痕あり。
250	遺物集中9 3～4層	甕	残高 3.5 底径 2.0	内面はハケ、ナデ調整。外面は底面を除いてタタキ目、ハケ目が残る。	7mm以下のチャート、砂粒	良好	内外面 黄灰	
251	遺物集中9 3～4層	鉢	残高 3.8 底径 1.6	内面は指頭圧痕、外面にはハケ目が残る。内外面とも摩耗が著しい。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい橙	
252	遺物集中9 3～4層	鉢	残高 4.3 丸底	内外面とも摩耗が著しく、調整不明。内面には指頭圧痕が残る。	6mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	
253	遺物集中9 3～4層	鉢または甕	残高 4.6 底径 2.4	内面ナデ調整。外面はタタキ成形後、ハケ調整を施す。	5mm以下のチャート、長石、砂粒	良好	内面 灰黄 外面 黄灰	
254	遺物集中9 3～4層	鉢	残高 5.2 底径 3.0	内外面とも器壁の剥落が著しく、調整は不明。	4mm以下のチャート、石英、砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内面 にぶい橙 外面 橙	
255	遺物集中9 3～4層	鉢	口径11.8 器高 5.2 丸底	内面ハケ、ナデ調整。外面底部にタタキ目が残る。	7mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 灰黄	
256	遺物集中9 3～4層	手捏土器	口径 5.4 器高 1.7 丸底	内外面ともユビ成形。	5 mm 以下の 石英、砂粒	良好	内面 黄灰 外面 にぶい橙	
262	遺物集中10 6層	甕	口径17.4 残高13.0 胴径20.4	内面はハケ、ナデ調整。外面は左下がりのタタキ成形後、下胴部に部分的にハケ調整を施す。口縁部は縦横にハケ調整を施す。	5mm以下の砂粒	良好	内面 黄灰 外面 橙	外面煤付着。
263	遺物集中10 6層	甕	口径15.4 残高10.0	内面は粘土接合部に指頭圧痕が多く残る。外面は左下がりのタタキ目が残る。口縁部はハケ、ナデ調整。	7mm以下の砂粒	良好	内面 灰黄褐 外面 にぶい黄橙	
264	遺物集中10 6層	甕	口径25.0 残高 7.5	内面はハケ、ナデ調整。外面は横位のタタキ成形後、ハケ調整を施す。	7mm以下のチャート、長石、砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	
265	遺物集中11 6層	甕	口径18.0 残高 7.3	内外面とも器面の摩耗著しい。外面は左下がりのタタキ成形後、ハケ調整を部分的に施す。口縁部はハケ、ナデ調整。	5 mm 以下の 砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
266	遺物集中11 6層	甕	口径19.0 残高 6.5	内面はハケ、ナデ調整。胴部外面は左下がりのタタキ目が残る。口縁部はハケ調整を施す。	4 mm 以下の 長石、砂粒	良好	内外面 にぶい橙	外面煤付着。
267	遺物集中11 6層	甕	口径16.8 残高 4.2	内面はハケ目が若干残るが、摩耗が著しく調整不明。外面は口縁部はハケ調整、胴部には左下がりのタタキ目が残る。	5 mm 以下の 砂粒、赤色砂粒	良好	内外面 橙	外面煤付着。
268	遺物集中11 6層	甕	口径17.8 残高 7.2	口縁部内外面はハケ、ナデ調整。胴部内面はハケ調整を施す。胴部外面は左下がりのタタキ目が残る。	8mm以下の石英、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	外面煤付着。
269	遺物集中11 6層	甕	口径17.8 残高13.9 胴径17.1	内外面とも摩耗が著しい。内面はハケ目が残る。外面は口縁部にハケ、胴部にタタキ目が残る。	6mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい黄橙	

表4 2区土器観察表

遺物番号	出土地点	器種	法量(cm)	特 徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
270	遺物集中11 6層	甕	残高 2.4 底径 2.4	内面はナデ調整。外面は横位のタタキ目が残る。	4mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
271	遺物集中11 6層	甕	残高 3.9 底径 2.4	内面は摩耗が著しく調整不明。外面は底面から下胴部はタタキ、上部はハケ調整。	1cm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 黄灰	外面煤付着。
272	遺物集中11 6層	甕	残高 4.6 底径 3.2	内面はハケ、ナデ調整。外面はタタキ成形後ハケ、ナデ調整を施す。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 灰黄 外面 浅黄橙	
273	遺物集中11 6層	甕	残高 4.8 尖底	内面はハケ、ナデ調整。外面はハケ調整後、部分的にナデを施す。調整は雑。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 にぶい褐	外面煤付着。底部に粉痕あり。
274	遺物集中11 6層	鉢	口径12.0 器高 5.3 底径 3.6	内外面とも器壁の摩耗が著しい。外面底部にはタタキ目が残る。	5mm以下のチャート、長石、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
275	遺物集中11 6層	甕	残高 7.9	内面ナデ調整。外面は横位、右下がりのタタキ成形で、底部には指頭圧痕が多く残る。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 浅黄橙	焼成前穿孔。
276	遺物集中12 6層	甕	残高11.0 底径 5.1	内面はハケ、ナデ調整。外面は摩耗が著しく調整不明。	8mm以下のチャート、黒雲母、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 橙 外面 にぶい橙	内面底部に煤付着。
277	遺物集中12 6層	鉢	口径12.4 器高 6.6 丸底	内面は器壁摩耗が著しく、調整不明。外面はタタキ成形後、若干ハケ調整を施す。	8mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	やや不良	内面 にぶい橙 外面 橙	外面口縁端部に煤付着。
278	3～4層	甕	口径18.2 残高 6.7	内外面とも器壁の摩耗が著しく調整は不明であるが、ハケ目、指頭圧痕が残る。	4mm以下の砂粒、赤色風化砂粒	良好	内外面 にぶい橙	
279	6層	蓋	口径24.4 残高 7.0	内外面ともハケ調整を施す。端部はヨコナデによって平らに仕上げた後、5～8本単位で刻みを入れる。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい黄橙 外面 橙	
280	6層	甕	残高14.1 底径 3.4	内面はかなり摩耗しており、調整は不明。底部付近に指頭圧痕、胴部にハケ目がわずかに残る。外面はやや左下がりのタタキ成形で、底面にもタタキ目が残る。下胴部には若干ナデ調整が見られる。	6mm以下の砂粒	良好	内外面 にぶい褐	内外面に煤付着。
281	6層	甕	残高11.9 底径 1.4	内面はナデ調整。外面は底部にタタキ目が残るが、胴部は丁寧なハケ調整を施す。	5mm以下のチャート、砂粒、赤色風化砂粒	良好	内面 にぶい橙 外面 橙	

表5 1・2区石器観察表

遺物番号	出土地点	器種	法量(cm、g)	特 徴	備 考
44	遺物集中1 17層	叩石	全長 7.71 全幅 4.84 全厚 4.89 重量 428.8	自然の円礫を用いる。両面に敲打痕が認められる。砂岩製。	
45	遺物集中1 17層	石庖丁	全長 7.25 全幅 4.91 全厚 1.3 重量 51.5	両端に挟りが入る。A面は自然面が残る。B面は細部調整が行われるが、刃部は特別に作り出していない。使用痕は認められない。砂岩製。	
98	遺物集中3 17層	砥石	全長 21.2 全幅 10.8 全厚 5.19 重量 1.72kg	砂岩製で、荒砥石、または中砥石とみられる。4面に使用痕がみられる。	
145	土器集中3 15層	石製品	全長 4.4 全幅 2.9 全厚 1.25 重量 18.2	砂岩の円礫を用いる。1面に2孔が認められるが、これらは貫通はしていない。	黄白色の凝固したものが表面に付着。
179	1区 17層	石製品	全長 7.6 全幅 6.32 全厚 1.2 重量 53.5	剥片に若干の調整を加える。自然面が残る。石庖丁を意図したものか？ 泥岩製。	
257	遺物集中9 3～4層	砥石	全長 12.48 全幅 5.96 全厚 4.6 重量 514.7	断面方形を呈する。上端部は1/3ほど欠損している。4面に使用痕が認められる。仕上げ砥石。石材は凝灰岩か？	
258	遺物集中9 3～4層	砥石	全長 6.74 全幅 4.26 全厚 3.79 重量 167.5	断面方形を呈する。泥岩製の仕上げ砥石。4面に使用痕がみられる。	
259	遺物集中9 3～4層	叩石	全長 12.2 全幅 10.3 全厚 4.4 重量 888.8	砂岩の円礫で、一部欠損している。両面に敲打痕が認められる。赤色化しており、被熱によるものとみられる。	
260	遺物集中9 3～4層	石製品	全長 7.33 全幅 7.5 全厚 1.8 重量 117.5	砂岩の円礫が使用され、中心よりややずれた位置に両端から穿孔を施す。孔径は1.5cm。用途は不明である。	

表6 1・2区木製品観察表

遺物 番号	出土地点	器 種	法量 (cm)	樹 種	特 徴
180	1区17層	杭	全長 11.8 全幅 7.4 全厚 2.5	不明	分割材。杭先のみ。先端部を加工して尖らせる。
181	1区17層	柱 根	全長 38.5 全幅 11.9 全厚 10.4	桜?	丸太材。樹皮が若干残る。先端部を加工し、平らに仕上げている。
182	1区17層	柱 根	全長 30.2 全幅 14.2 全厚 10.2	桜?	丸太材。樹皮が若干残る。先端部を加工し、平らに仕上げている。
185	SX1	板状木製品	全長 175.3 全幅 8.3 全厚 3.1	不明	若干の加工痕がある。
186	SX1	丸木状木製品	全長 234.8 全幅 7.0 全厚 7.0	不明	若干加工痕がある。建築材として使用か?
187	SX1	建築材	全長 233.4 全幅 15.0 全厚 7.8	不明	丸太材。若干加工痕がある。
188	SX2	丸木状木製品	全長 150.0 全幅 8.0 全厚 6.8	不明	若干加工痕がある。
189	SX2	建築材	全長 285.6 全幅 19.2 全厚 2.3	コウヤマキ?	板材で中央部と側縁近くに、各3個の孔を両面から穿つ。
190	SX2	建築材	全長 242.2 全幅 19.4 全厚 2.8	コウヤマキ	板材で中央部に1孔、側縁近くに2孔あり、両面から穿つ。
191	SX2	用途不明品	全長 26.2 全幅 1.1 全厚 1.3	不明	先端部が炭化。火を受けたものか。
192	SX2	用途不明品	全長 24.0 全幅 2.0 全厚 1.2	不明	先端部に斜方向の加工痕あり。
193	SX2	用途不明品	全長 21.6 全幅 2.2 全厚 1.8	不明	分割材。杭か? 先端部欠損。
194	SX2	杭	全長 23.8 全幅 2.4 全厚 2.0	不明	分割材。杭の両端は欠損。
195	SX2	杭	全長 45.2 全幅 4.7 全厚 2.8	不明	分割材。断面△形に近い。先端部は欠損。
196	SX2	杭	全長 35.7 全幅 4.3 全厚 2.6	不明	分割材。先端部を斜方向に加工して尖らせる。
197	SX2	杭	全長 33.7 全幅 2.6 全厚 1.6	不明	分割材。先端部を斜方向に加工して尖らせる。
198	SX2	用途不明品	全長 37.5 全幅 2.5 全厚 2.0	不明	分割材。杭か? 先端部欠損。
199	SX2	杭	全長 38.6 全幅 3.4 全厚 2.8	不明	分割材。先端部は斜方向に加工する。
200	SX2	杭?	全長 42.3 全幅 4.0 全厚 3.9	不明	丸太材。表皮は削られている。杭の上端面が炭化。先端部は欠損。
201	SX2	杭?	全長 50.4 全幅 3.9 全厚 2.3	不明	分割材。先端部欠損。
202	SX2	杭?	全長 49.0 全幅 5.0 全厚 4.0	不明	分割材。先端部欠損。
203	SX2	杭	全長 51.5 全幅 4.5 全厚 4.3	不明	丸太材。表皮は削られている。杭の上端面が炭化。先端部は加工して尖らせる。
204	SX2	杭	全長 62.6 全幅 5.3 全厚 4.0	不明	節を残したままの丸太材を使用。杭の先端部を斜方向に加工し尖らせている。
205	SX2	杭?	全長 58.6 全幅 4.7 全厚 4.6	不明	分割材。杭として使用したとみられるが、先端部欠損。
206	SX2	用途不明品	全長 59.5 全幅 4.5 全厚 4.0	不明	分割材。両端部に加工痕あり。

表6 1・2区木製品観察表

遺物 番号	出土地点	器 種	法量(cm)	樹 種	特 徴
207	SX2	杭	全長 73.8 全幅 4.9 全厚 4.1	ヒノキ属	丸太材。表皮は削られている。先端部を斜方向に加工し尖らせている。
208	SX2	用途不明品	全長 41.2 全幅 20.3 全厚 4.0	コウヤマキ	板材。先端部を両面から斜方向に加工している。一面は炭化が著しい。
261	2区6層	刺突具	全長 6.9 全幅 0.7 全厚 0.5	不明	先端部を加工して尖らせる。断面△形。基部は欠損。木鏝の可能性もあり。

第Ⅴ章 まとめ

1. 調査成果から

具同中山遺跡群Ⅴは北東の**1区**から南西の**2区**へと落ち込む地形を呈していた。そしてやや微高地上に位置する**1区・2区**東半部からは祭祀遺構が、後背低地へと落ち込む**2区**西半部からは**SX1・2**とした木製品を伴う遺構が検出された。これまでの調査成果からも、微高地上で祭祀が行われていたことは指摘されており、今回はそれを追認する形となった。

2区西半部で検出された**SX1・2**は、黄褐色を呈する酸化鉄が帯状に堆積した層で、酸化鉄堆積層を掘り抜いた下層からは、ほぼ並行して列状に木製品が出土している。また両遺構は調査区南端部で接している。**SX**にみられる酸化鉄の堆積は、当時この部分が空気に触れていた、つまり他より高い位置にあったことを意味している。調査区の土層は西に行くに従いシルトから粘土質へと変化し、グライ化も認められることから、地下水変動域である後背低地を水田として利用している可能性が想定できた。このような鉄分やマンガンの堆積は水田によくみられるものである。**SX**の下層から出土した木製品であるが、畦畔の補強のため土台に棒状の丸木や木製品を敷設する例があることから、同様の用途に使われた可能性もある。以上のことから**SX1・2**は畦畔で、その間の遺物を全く出土しない部分が水田跡であると考え、土壌サンプルを採取して植物珪酸体分析にかけた。しかしながら分析結果から**2区**西半部が水田跡であるとは断定しにくいと、可能性として提示しておくに留めたい。また**2区**の土層中には藍鉄鉱が含まれるなど、当時から湿地状を呈していたとみられる。板材を杭で固定したその上に土を盛り、道として利用したとも考えられるが、何の目的で作られた道であるかなどの疑問も残る。

本調査区で検出された炭化材、木製品は各々炭化材同定、樹種同定を行った。これにより建築材、燃料材など用途に応じて樹種の選別が行われていたことが明らかとなった。建築材を転用されたとみられる**SX2**出土の板状木製品（**189**）や杭（**204**）には、耐水性があり加工が容易なコウヤマキや、同様に耐久性・耐水性に優れたヒノキ属などの針葉樹を使用している。また煮炊きが行われたとみられる炭化物集中部周辺では、長時間の煮炊きが可能な広葉樹が使用されている。

今回の調査で出土した遺物の総点数は約**2万7,200**点で、そのうち土器が**2万7,000**点以上、自然礫を除く石器が**9**点、木製品が**30**点の他、骨片も若干ながら炭化物中より出土している。また**1・2区**とも、弥生時代終末期～古墳時代初頭にかけての遺物が全体の**86%**と主体を占めている。これらは祭祀に伴うものと考えられることから、本遺跡における祭祀形態の解明の一助になると考えられる。また微高地と後背低地での土地利用の違いなど、そのあり方が若干ではあるが明らかとなったことは大きな成果であったと言える。

2. 出土土器について

(1) 土器の分類

調査**1・2区**から出土した第Ⅶ層、第Ⅲ～Ⅳ層、第Ⅵ層の遺物は、弥生時代終末～古墳時代初頭のものとみられる。ここでは両調査区の遺物を一まとめにして、土器の形態分類を行っていく。

この分類は、前章の冒頭で述べたものであり、遺構と遺物の本文中で用いた分類と対応する。

壺

A類：口縁部がラッパ状に外反し、胴部は球形を呈するとみられる。器面にタタキ目、ハケ目が残るが、大部分はナデ消している。(71、128)

B類：口縁部が直立気味に立ち上がり、胴部は球形を呈するとみられる。器壁にタタキ目が残る。(99)

C類：胴径に対し口径が比較的小さなもの。器面調整は甕と同様に、タタキ成形後ハケ調整を施す。(101)

D類：二重口縁壺。(4、46、100)

E類：丸底の小型壺で、器面にタタキ目、ハケ目が若干残るが、大部分はナデ消している。(224)

F類：直口壺で、器面はハケが残るものもあるがナデ調整が施される。(244、245)

甕

A類：口縁部がくの字状に屈曲し、長胴形の胴部を有するとみられる。器面はタタキ成形で、口縁部までタタキが残るものと、ナデ調整を行うものがある。また下胴部以下にハケ調整を部分的に行うものが多い。**A類**は更に**1～3**に細分する。

1類：最大径が胴部にあるもの。(8、22、30～33、48、53、57、74、75、108、110、132、133、248、262、268)

2類：最大径が胴部にあり、口縁部が長く延びるもの。(20、21、210)

3類：最大径が口径にあるもの、あるいはそれに近いもの。**211**のように頸部の屈曲が弱いものもみられる。(9、72、106、129、211、229、264、266)

B類：口縁部がくの字状に屈曲し、球形に近い胴部を有するとみられるもの。(13、19、51、109)

C類：頸部がほとんど屈曲せずに立ち上がり、胴部はあまり膨らまないもの。(212、227、269)

鉢

A類：底部が平底ないしは丸底で、椀状を呈する。器面にはタタキ目が残るもの、タタキ・ハケ目が残るもの、ハケ目のみ残るものがある。さらに**A類**は器高÷口径によって**1～3**に細分される。

1類：器高÷口径が**0.5**以上の、深めの器形のもの。(36、41、42、69、90、122、239、277)

2類：器高÷口径が**0.4**以上～**0.5**未満のもの。ただし**218**は平底であるが、器面に指頭圧痕が多く残ることから新しい様相とみられる。(39、68、91、119、216、218、237、238、255、274)

3類：器高÷口径が**0.4**未満の、浅めのもの。(92、93、121)

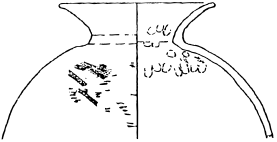
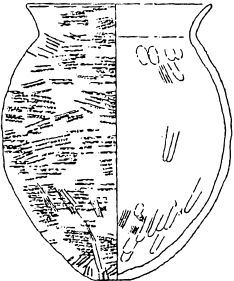
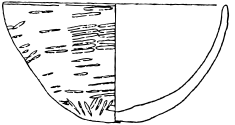
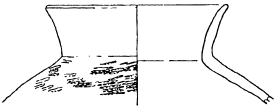
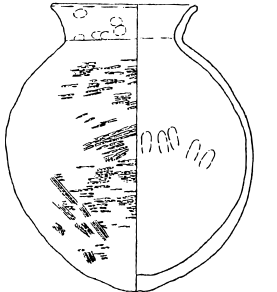
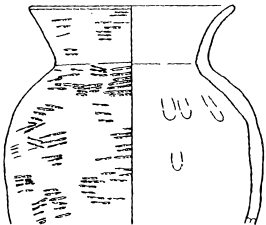
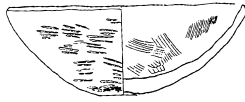
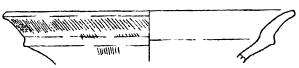
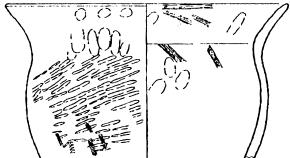
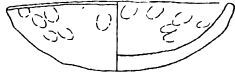
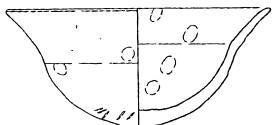
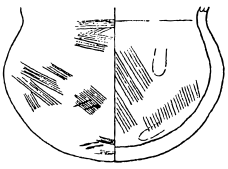
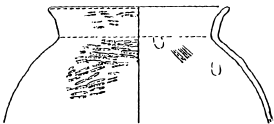
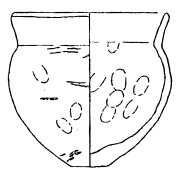
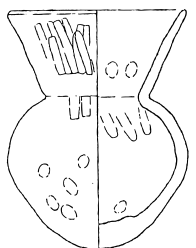
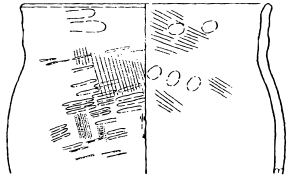
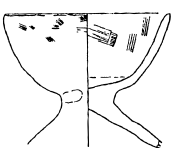
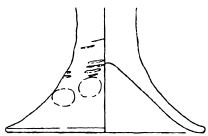
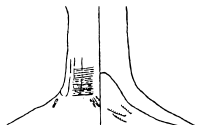
B類：底部が丸底で皿状を呈する。器面には指頭圧痕が多く残る。(120、240)

C類：底部は丸底で、口縁部が大きく外反するもの。器面には指頭圧痕が多く残る。(217)

D類：口縁部が若干屈曲するもの。(67、96、241)

E類：台付鉢。器面にはハケ目が若干残るが、大部分はナデ消し。(219、220)

表7 土器分類表

壺		甕		鉢	
A 類		A-1 類		A-1 類	
B 類				A-2 類	
C 類		A-2 類		A-3 類	
D 類		A-3 類		B 類	
				C 類	
E 類		B 類		D 類	
F 類		C 類		E 類	
				高 杯	
				A 類	
				B 類	

高杯

杯部は**1**点のみしか復元できなかったなので、脚部のみ分類を行う。

A類：脚柱部は中実で、裾部が屈曲せずに広がる。(97、126)

B類：脚柱部は中実で、裾部は屈曲した後に広がる。(242、243)

以上、壺、甕、鉢、高杯の順で形態・調整から分類を行った。出土遺物は大きめに弥生時代終末～古墳時代初頭のものと考えられるが、更に土器の器種形態、調整から新旧に大別することが可能とみられる。次にこれらの各器種ごとの分類のうち、土師器に近い新しい様相を呈していると思われるものを抜き出していき、各層の新旧をつける目安としたい。

壺の分類で形態・調整から土師器とみられるのは、**D**類、**E**類、**F**類である。どちらも古墳時代にみられる器形で、器面調整もナデ消しを多用している。**D**類は**1**区の遺物集中ブロック**1・2・4**で出土しており、ヒビノキⅢ式に類似したものもみられる。**E・F**類は、**2**区の第Ⅲ～Ⅳ層ブロック**7～9**より出土している。

甕は**A-2**類、**A-3**類、**B**類、**C**類が新相にあたるとみられる。特に**A-2**類、**A-3**類、**C**類と類似した器形の甕が、中村市西ノ谷遺跡の古墳時代前期の層からも出土している。これらの甕は口縁部が他に比べてやや長めであり、これも新相の特徴の一つである可能性もある。甕**C**類は全て**2**区のブロック**7・8・11**から出土している。

鉢は**B**類、**C**類が新相としてあげられるだろう。**B**類は皿状を呈し、器面の指頭圧痕が顕著ななどの特徴を持つ。また**C**類は**217**の**1**点のみであるがタタキ成形後ナデ消しており、指頭圧痕が多く残る。調整方法からみて新しい様相のものともみられる。**B・C**類のうち、**120**を除く土器は**2**区のブロック**7・8**から出土している。また**D**類に分類した**96**も器面に指調整の跡が顕著に残っており、調整からすると新しい様相と言えるだろう。

高杯の出土は僅少であるため比較するのは難しい。**A**類は全て**1**区から、**B**類は**2**区から出土しており、**1**区の出土土器が**2**区より古いとすれば、**A**類が古相と言えるだろう。

これらの遺物は既に第Ⅳ章で、各調査区ごとにブロックに分けて図示しており、**1**区第Ⅶ層がブロック**1～6**、**2**区第Ⅲ～Ⅳ層が**7～9**、第Ⅵ層が**10～12**に分けられる。各調査区、各ブロック出土遺物の構成比は表**8、9**の通りである。また調査区ごとにみていくと、**1**区出土土器は器種構成に甕が多く、**A-1**類に属するものが主体を占める。祭祀に関連する土器としては高杯、手捏土器が若干みられるのみである。また調整では甕、鉢ともにタタキ目が底部まで残り、ハケ調整も部分的にみられるものが多かった。それに対し**2**区出土土器は甕がやや多いものの、鉢、高杯の増加傾向が見られる。また石製品にしても用途不明ではあるが祭祀との関連が考えられるようなものが出土している。祭祀遺物の存在は、前時期よりも更に祭祀具として発展し、古墳時代へと続くと考えられる。また調整からみると、器壁にタタキ目が残るものもみられるが、その後ハケ、ナデ調整によって消されたもの、粘土接合面が残り指頭圧痕が多くみられるものが多くなる。土器の器形も壺**E・F**類、甕**C**類のように新相を呈するとみられるものが出土している。

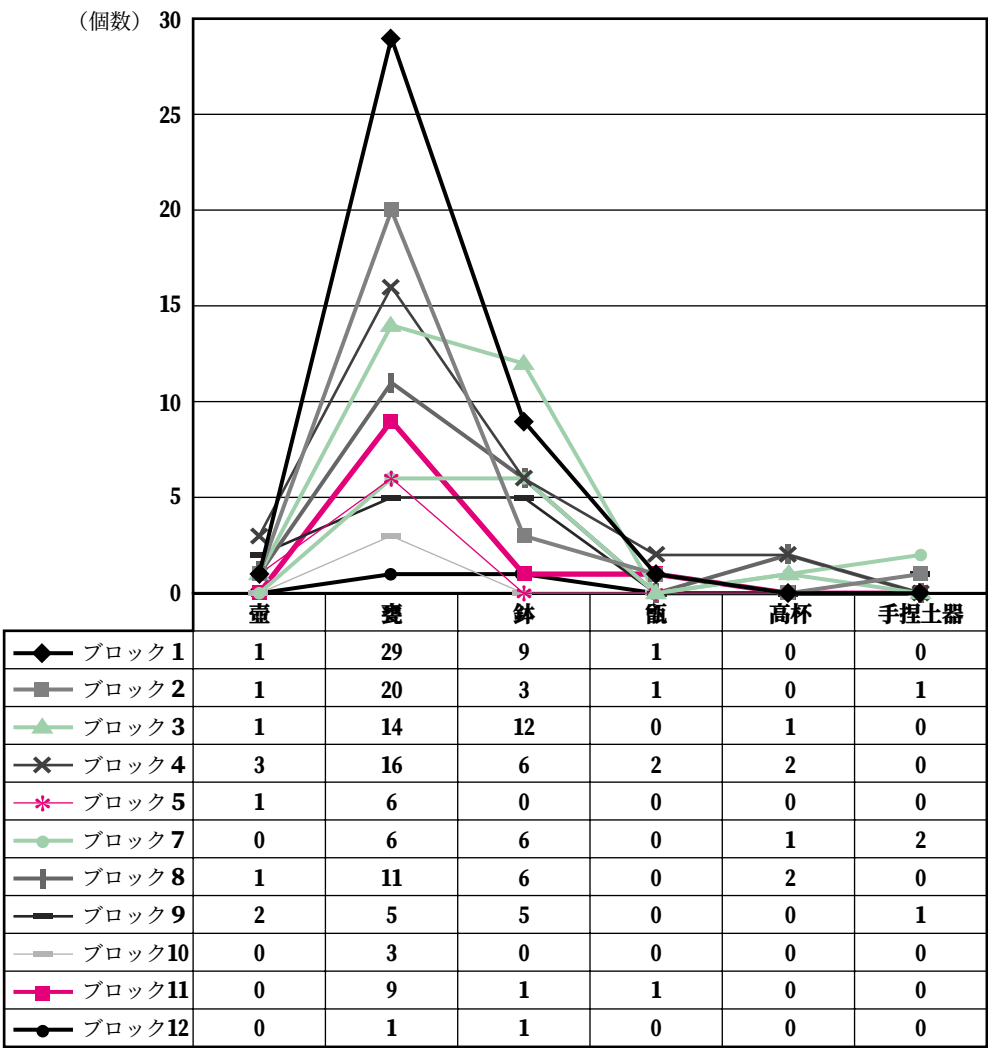


表8 遺物集中ブロック出土土器の器種構成比グラフ

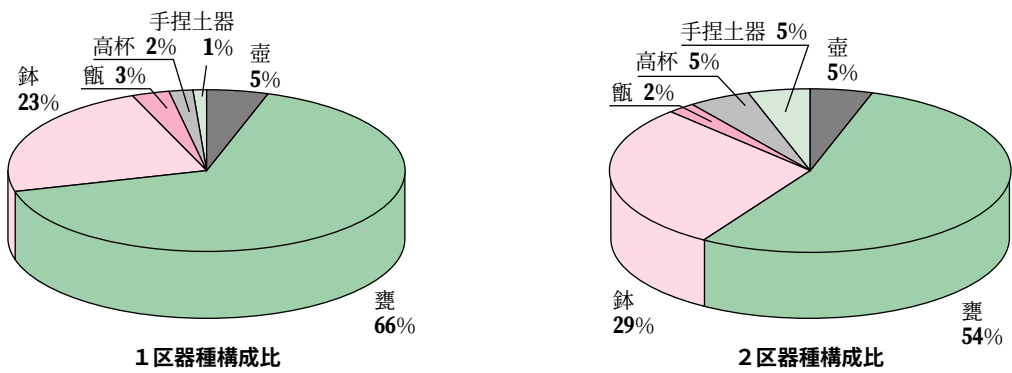


表9 1・2区器種構成比グラフ

以上のことから、**1区**出土土器は弥生時代終末～古墳時代初頭、**2区**出土のものは古墳時代初頭の遺物と考えるのが妥当であろう。

(2) 土器胎土にみる赤色風化砂粒

本調査区出土の土器胎土には、しばしば赤色に風化した砂粒が混和材に認められる。本調査区の遺物集中ブロック**1～12**出土土器のうち、器種の分かるものの胎土を観察した結果、各調査区・遺物集中ブロックで赤色風化砂粒の含有率に差があることが確認できた。

弥生時代終末～古墳時代初頭とみられる**1区**の遺物集中ブロック**1～4**では、胎土に赤色風化砂粒が含まれる土器は**2～4割**程度にとどまる。そのうちブロック**4**では例外的にタタキ成形後、ハケ、ナデ調整を多用した土器の小集中がみられ、**1例**を除いて胎土には赤色風化砂粒が含まれていた。これが時期差なのか集団差なのかは不明である。ただしブロック**4**全体での赤色風化砂粒含有率は**4割**程度である。ブロック**5**では、土器の広がり方が更に調査区の北側に延びていく可能性があるが、調査区内の土器の胎土には赤色風化砂粒を含むものは見られなかった。またブロック**6**では復元図示はできなかったが、破片の観察から赤色風化砂粒を含むものは少量であることが分かった。また古墳時代初頭とみられる**2区**では、第Ⅲ～Ⅳ層のブロック**7・8**では**9割**以上、ブロック**9**で**5割**、第Ⅵ層のブロック**11**では出土土器の全てに赤色風化砂粒が認められた。**2区**出土土器の中で胎土に比較的赤色風化砂粒が含まれなかったブロック**9**は、**1区**同様に甕の底部近くまでタタキ目が残るなど、調整に古い様相が見られる。

これらのことから、弥生時代終末～古墳時代初頭には赤色風化砂粒を含む土器は各ブロックとも**2～4割**程度であったのに対し、**1区**よりは新相とみられる古墳時代初頭の**2区**での割合は、**5割**以上～全ての土器胎土に赤色風化砂粒を含むものまでみられ、増加傾向にあることが窺える。また本調査区で出土した**5世紀以降**の土師器の場合、若干少なくなるものの**8割**近くの土器胎土に赤色風化砂粒が認められた。古墳時代に移行するにつれて土器胎土には、赤色風化砂粒が多く認められるようになると言える。

また赤色風化砂粒の生成要因については、土器焼成時の温度や土器の器厚などの変化の他、混和材採取地が変わるなどの原因が考えられる。つまり弥生時代から古墳時代の過渡期に、このような変化の要因が生じたと考えられるのである。

3. 具同中山遺跡群Vにみられる礫の特徴

今回の調査では弥生時代終末～古墳時代初頭とみられる層から、土器片とともに多くの礫が出土した。これらの礫は石質、重量、出土状態のあり方などに各々の傾向が看取されるため、本調査区出土の礫について若干ではあるが考察を行ってみたい。

(1) はじめに

四万十川の支流、中筋川の左岸に位置する具同中山遺跡群周辺は、四万十川の出水時には逆流現象が起りダムアップする氾濫原として、近年まで被害を被ってきた地域である。このような

自然環境は、調査区が機能した時代から大きな変化はなかったとみられる。調査区で確認された土層からは、増水によりダムアップはするものの、その流速は急激ではなかったことが窺える。緩やかな流れによって礫が運ばれてくるとは考え難く、今回の調査で確認された礫群についても人為的に持ち込まれた可能性もある。そのためこれらの礫群自体を、何らかの意味を持つ遺構として捉えることとした。

また小礫集中以外に、まとまりはないものの**5 kg**を超える礫や、被熱により赤色化あるいは煤の付着したもの、及び石器類が認められる。これらは明らかに人の手によって持ち込まれたものとみられる。

(2) 礫の種類

本調査区で確認された礫の**9**割以上は円礫であり、そのほとんどが四万十川などの河原で容易に採取できる河原石である。ただし炭化物集中**1**の上面で検出された礫は、重量が**5 kg**を超える泥岩とみられ、大きさや摩耗度の低さからみて、四万十川下流域の河原での採集としては珍しいと言えるだろう。

石質からみていくと、持ち込まれた礫のほとんどは砂岩で占められ、例外的に礫岩、泥岩、頁岩、チャートなどの堆積岩、火成岩である花崗岩及び軽石が認められる。また**1**点ではあるが主に中央構造線沿いで産出される緑色岩が確認されている。現在四万十川下流域でも砂岩、泥岩、礫岩、チャートは多くみられるが、それ以外の石は少量か皆無に近い。また緑色岩に関しては具同中山遺跡群周辺には産出する地域がなく、どこから持ち込まれたものかは不明である。

次に調査区内で検出された礫の大きさであるが、礫を調査区ごとに重量によって分類すると表**10・11**のようになる。**1**区及び**2**区第Ⅵ層は、同様の傾向がみられ礫は**30 g**までのものが全体の約7割を占め、比較的小さなものが多く、**30 g**以上からは徐々に少なくなっていく。圧倒的に多いのは**10 g**未満の小礫で、全体の**5**割弱と約半数を占める。ただし**2**区の第Ⅲ～Ⅳ層では**30 g**未満は5割程度で、**100 g**以上のものが多いのが特徴的である。これは遺物の上下移動だけでは片付けられず、礫を持ち込む際に意識的に選別が行われたと考えられる。時期が下がるにつれ、多量の小礫から、大きな礫へと指向が変化しているようである。

(3) 礫の出土パターン

本調査区でみられる礫の出土パターンには**4**種類がみられる。それらは、①他の遺物とともに散在して出土するもの、②土器と近接して出土するもの、③炭化物・焼土集中に伴うもの、④礫のみが集中して出土するものに分けられる。以下各々のパターンにみられる特徴について上げていく。

①他の遺物とともに散在して出土するもの

本調査区で検出された礫の多くは、このパターンに含まれる。他の遺物（主に土器片）とともに出土するが、礫自体にまとまりはない。また重量も決して一様ではないため、礫の出土状態自体に何らかの意図を見出すのは難しい。また自然礫の他に砥石（**98**、**257**、**258**）、石庖丁（**45**）、用途不明石製品（**260**）など石器類が多く出土している。

②土器と近接して出土するもの

これは土器と礫が約10cm以内と近接して出土している例で、**1区**で**6箇所**、**2区**では**1箇所**認められる。パターン**2**に見られる礫は、**80g**を超える比較的重量のあるものが多いのが特徴である。そのうち**1区**のブロック**1**では叩石（**44**）が出土している。

また礫と近接する土器の中には、一個体がその場で潰れた形で出土したものが多かった。こういった土器の出土状態は、同じ調査区で出土している**5世紀以降**の古墳時代の出土遺物に比べ、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器の破片が全体的に小さいという点と合わせて興味深い出土状態と言える。そこには、意識的に土器を破碎する儀礼的なものが存在した可能性も考えられる。

ただし**2区**の出土例は、土器片、礫とともに炭化物も周辺にあることから、**1区**での出土状態とは若干様相が異なる可能性もある。

③炭化物集中に伴うもの

主に**10g**未満の小円礫が多く、**1・2区**合わせて**5箇所**で検出された。ただし炭化物集中**1**のように、炭化物の上に礫が乗った状態で出土する例もみられる。またこれらの礫の多くは被熱により赤色化し、煤が付着している場合もある。

④礫のみが集中するもの

礫がある一定の範囲に集中し、土器など他の遺物を伴わない状態で出土する。こういった出土例は**1・2区**とも**2箇所**ずつ検出されている。小礫集中**1～4**にみられる礫の重量は、集中**1**で**1～35g**、集中**2**では**10g**前後、集中**3**は**20～55g**、集中**4**は**1～15g**と比較的軽量のものが多い。特に小礫集中**3**は出土状態からみても、同程度の重量の礫を意識的に集めたように見受けられる。また小礫集中**1～3**は、炭化物の集中に伴うものでないため被熱の痕跡も認められない。周辺には他の遺物も少なく、礫の重量も近似していることから、独立した遺構として存在した可能性も考えられる。

(4) 焼礫について

本調査区で検出された焼礫は、主として**10g**以下のものと**100g**以上のものが多くみられる。これらの礫は赤色化、あるいは煤が付着しており、被熱によるものとみられる。そのうち**10g**以下の焼礫は炭化物の集中に伴う例がほとんどであるため、礫の全面が赤色化しているものが多い。

100g以上の礫の場合、赤色化あるいは煤の付着は礫の全面ではなく、部分的なものがほとんどである。これらの礫も炭化物周辺部で検出されており、被熱を受けているとみられる。

(5) まとめ

以上の点から**1区**と**2区**では礫の出土状態も若干ながら異なることが判明した。(3)であげた出土例のうち、**1区**では①～④の全ての出土例が認められた。それに対して**2区**では、②の土器と近接して出土する例は**1例**を除いて見あたらなかった。また④の礫のみが集中する例でも、**1区**の場合は比較的礫が散在していたのに対し、**2区**の小礫集中**3**などは意識的に置かれたかのようにまとまって出土してる。このような違いはバリエーションと言うよりも、時期差、あるいは性格

差として捉えるべきであろう。

土器からみた時期関係では、**1区第XVII層**が古相で、**2区第VI層**、**2区第III～IV層**がそれに続くと思われる。この点を合わせて考えると、礫の出土状態は多彩なバリエーションから、時期とともに徐々に変化していると言えるだろう。また礫が祭祀に関連する遺物と捉えることができるならば、これら礫の出土状態の変化は、祭祀形態の変化に伴うものとも考えられる。

表10 1区第XVII層出土礫の重量別統計表

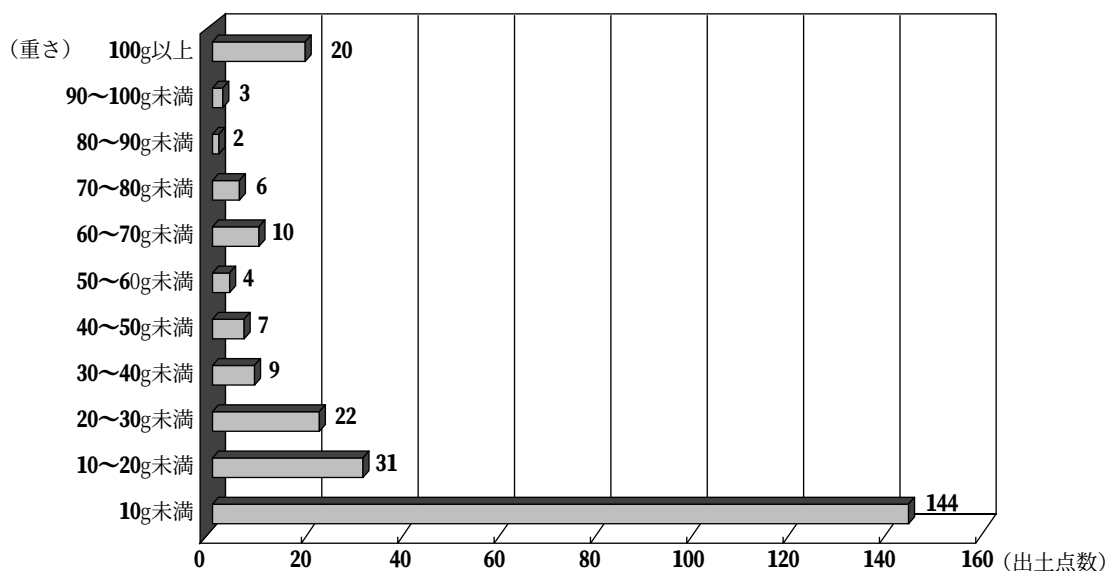
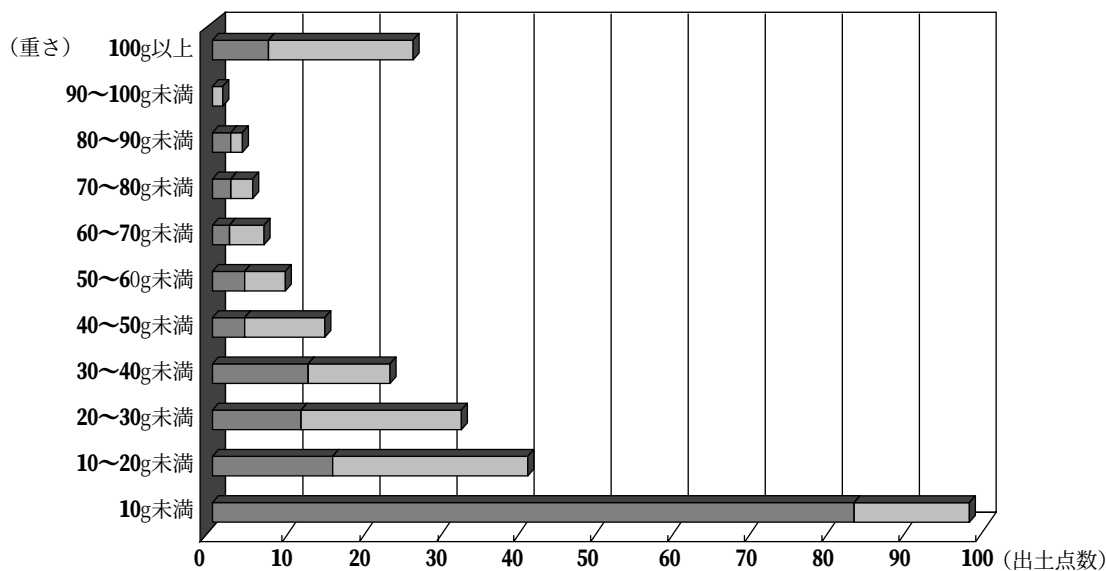


表11 2区第III～IV層・VI層出土礫の重量別統計表



	10g未満	10～20g未満	20～30g未満	30～40g未満	40～50g未満	50～60g未満	60～70g未満	70～80g未満	80～90g未満	90～100g未満	100g以上
■III～IV層	14	24	20	10	10	5	4	3	1	1	20
■VI層	80	15	11	12	4	4	2	2	3	0	5

4. 四万十川流域の祭祀遺跡 ―主に石を用いた祭りについて―

具同中山遺跡群は、高知県下でも最大規模の祭祀遺跡である。祭祀の主体となるのは古墳時代で、これまでの調査で多くの祭りの跡が確認されている。また**1991**年度の具同中山遺跡群の調査では、弥生時代の祭祀跡とみられる遺構が数基検出されている。今回の調査でも弥生時代終末期の祭祀的性格を持つ遺構・遺物が検出されており、具同中山遺跡群で祭祀が行われた時期は弥生時代まで遡ることは明らかである。

高知県の祭祀遺跡に関する研究は古墳時代を中心に既に行われている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。本項では先学の研究を参考に、具同中山遺跡群をはじめとする四万十川下流域の祭祀遺跡について、時代ごとにみていきたいと思う。本調査区で石を用いた祭祀跡とみられる遺構が検出されていることから、特に石を配するものに重点を置くこととした。

さて、論を進める前に祭祀遺跡の定義について若干触れておきたい。大場磐雄氏は祭祀遺跡とは「神祭りを行ったことを考古学上から立証し得られる跡」との見解を示されている⁽⁴⁾。考古学上それが神祭りであったかを立証することは難しいが、非日常的な遺構や遺物のあり方が認められるもの、祭祀遺物とされるものが出土する遺跡、これらを祭祀遺跡とし論を進めることとする。

(1) 縄文時代

石を用いた祭りである配石遺構は、縄文時代から四万十川流域でも確認されている。ただし西日本の配石遺構は東日本のそれと比べ、小規模で数的にも少ないと言える⁽⁵⁾。

現在四万十川流域で確認されている配石遺構を持つ遺跡には、愛媛県北宇和郡広見町岩谷遺跡、高知県幡多郡西土佐村大宮・宮崎遺跡などの遺跡があげられる。また、中村市国見遺跡でも縄文時代の集石遺構が**2**基検出されているが、祭祀との関連は不明である。

岩谷遺跡は四万十川中流域、支流広見川左岸の河岸段丘上に所在し、縄文時代後期を主体とする遺跡である。配石遺構は全部で**5**基検出されており、出土遺物から後期中葉～後葉に構築されたものと考えられる。最大のもので径**4.6m**を測り、形状は円環状、円環状列石、集石、組石状を呈する。配石を構成する礫は拳大から人頭大のものが用いられる。これらの配石遺構内からは焼土や木炭片が出土している。また第**4・5**配石遺構は、**10cm**以下の小礫を中心として石が配されている点は興味深い⁽⁶⁾。

大宮・宮崎遺跡は四万十川中～下流域の支流、目黒川右岸の河岸段丘裾野に発達する低地に立地する。縄文時代後期を主体とする遺跡で、**19**基の配石遺構が確認された。形状は調査者によって**A～D**類に分けられ、**A**類：円環状を呈し内部に**1～2**個の石を配するものと配さないもの、**B**類：円環状を呈し内部に石を散在配置するもの、**C**類：**U**字状を呈するもの、**D**類：環状が崩れ不定形のものとされている。そのうち主体を占めるのが**A**類である。これら配石遺構の構築時期は後期中葉の平城Ⅰ式に初現があり、後期後葉の片粕式期に増加する。そしてその次の伊吹町式の段階には**13**基の配石遺構が存在し、この時期がピークであったと考えられる。更に検出された配石遺構のうちの**2**基からは晩期土器も出土しており、伊吹町式段階で最盛期を迎えた配石遺構

の構築はその後衰退をしつつも、晩期の突帯文期まで存続していたことが明らかとなった。宮崎・大宮遺跡では住居跡など生活に関する遺構は確認されておらず、調査者は本遺跡の性格を共同祭祀場と考えている⁽⁷⁾。

一般的に配石遺構などの儀礼施設や儀具は、縄文中期末から後期（中には晩期まで）に盛行し、弥生時代への移行に伴い姿を消すと言われる。こういった傾向は四万十川流域の様相とも符合する。四万十川流域の配石遺構は、現在のところ後期中葉に初現があり、後期後葉にかけて盛行し、晩期には衰退していくとみられる。今後の調査によって初現の上限は更に遡る可能性もある。また宮崎・大宮遺跡では晩期の祭祀の痕跡を見ることができ、それも配石遺構**19**基中**2**基と前時期に比べ著しく減少する。

儀具として用いられたと考えられる石棒は、宮崎・大宮遺跡では第**11**号配石からの出土が確認されている。これは後期後半以降に多い住居跡外出土例の一つである。石棒が出土した配石遺構**11**号は、出土土器から後期後葉に構築、使用されたものとみられる。この配石遺構からは晩期土器などは全く出土せず、宮崎・大宮遺跡では石棒を用いた祭祀は晩期まで引き継がれることはなかったと考えられる。同じ四万十川下流域に所在する中村貝塚では、縄文時代晩期の粘板岩製の石剣が出土している⁽⁸⁾。この石剣は一側縁にのみ刃部があり、柄部には沈線を施している。柄部に施された格子状の沈線は、それ自体に儀具として何らかの意味があったとも考えられるが、同様の格子状のモチーフを持つ深鉢が出土していることから、同じ格子状のモチーフを使う土器集団によって製作されたものと考えられる。

縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての遺跡である入田遺跡では、配石遺構などの祭祀跡は確認されていないが、石棒状石器が表面採集されている⁽⁹⁾。この石棒状石器の用途は不明であるが、祭祀と関連するものの可能性もある。その一方で稲作が行われていたことを示唆する遺物が出土していることから、入田遺跡は縄文時代の要素を残しながらも、弥生時代へと移り変わる過渡期の様相を呈していると考えられる。

(2) 弥生時代

四万十川流域の弥生時代の祭祀については、遺跡数も少なく不明瞭な点が多いと言える。特に弥生時代前期の祭祀遺跡の調査事例は、皆無と言ってよいだろう。縄文時代晩期から弥生時代前期は時代の変換期にあたり、稲作の本格的な開始など大陸からの新しい文化の受容期である。そうした社会情勢の変化の中で、祭祀形態にも何らかの混迷があったとも考えられる。弥生時代中期については、**2000**年に中村市教育委員会によって古津賀遺跡群ナルザキ地区の調査が行われ、竪穴住居跡を含む集落遺跡が確認されているが、当該期の祭祀については依然不明な状況である。

四万十川下流域で再び祭祀と関連する遺跡が出現するのは、弥生時代後期になってからである。中村市石丸遺跡、山路遺跡から銅矛が出土しており、当該期に青銅器を用いた祭りが行われていたことは明らかである。また**1991**年度の具同中山遺跡群の調査では祭祀跡として、土器とともに焼土・炭化物の集積、集石が検出されている⁽¹⁰⁾。弥生時代後期になると中村市でも、四万十川、中筋川流域を中心に遺跡数が増加する傾向にある。

石丸遺跡は中筋川左岸の川辺に立地する。銅矛は昭和**26**年の中筋川堤防造成工事の際発見されたもので、中広形銅矛Ⅰ式が出土している。

一方山路遺跡で出土した銅矛は中広形銅矛Ⅱ式で、高知県下に広く分布する型式である。山路遺跡は四万十川右岸の山丘上に立地し、中世の山路城跡の一面を占める。銅矛が出土したため埋納遺跡とされているが、発掘調査によって出土したものではなく確証はない。出土した銅矛は穂部先端が欠損しており、近い場所に後世穿たれた孔が左右に認められる。これらは御神体などを神殿につるす双孔と同一であることから、山路の集落付近で発見されたものが、中世に山路城の城八幡で祭られていた可能性も考えられる¹⁰⁰。

高知県西部で銅矛の出土が確認されているのは、中村市と高岡郡窪川町である。高知県西部地域は銅矛の分布圏に入り、九州勢力との関係が従来より指摘されてきた。しかしながらより西に近く、四万十川の下流域に位置する中村市内での青銅器の出土数は2点にとどまるのに対し、上流域の窪川台地では高知県出土の約半数を占める銅矛の他、銅戈**3**本が出土しており、圧倒的に窪川台地に青銅器が集中している。同じ水系において、両地域間にみられるこのような銅矛の偏重はどのような要因によるものであろうか。

まず各流域の遺跡の立地及び特徴を見ていくことにする。中村市と窪川町は四万十川という同じ水系の下流域と上流域である。下流の渡川大橋から上流の銅矛出土地付近まで河川長で約**90**km離れており、上、中、下流域では遺跡の立地などに大きな違いが認められる。下流域は中村平野など比較的広い平野部があり、**200**を越える遺跡が確認されている。これらは時代的に偏重はあるものの、縄文時代から近世に至る各時代の遺跡が認められる。その中には弥生時代の遺跡も**30**遺跡前後あり、四万十川、中筋川、後川などの川沿いに立地する。弥生時代の遺跡は比較的小規模で、核となるような集落遺跡は現在のところ確認されていない。一方四万十川が蛇行を繰り返す中流域では、この水系に多く発達している河岸段丘上に縄文時代の遺跡が立地し、丘陵、尾根上を中心に中世の城跡が多く認められる。四万十川中流域では縄文時代、中世の遺跡が圧倒的多数を占め、弥生時代の遺跡は皆無であるのが興味深い。中流域の発掘調査はほとんど行われておらず、弥生時代四万十川上流と下流をつなぐ地域として今後の調査が期待される。窪川町を中心とする四万十川上流域では、川沿いに縄文時代、弥生時代の遺跡が、丘陵部には中世の城跡が多く認められる。弥生時代の遺跡は支流同士、または本流と支流の合流点、及び川の蛇行の内側に多く所在しており現況は田畑である。遺跡数は**50**遺跡程度と四万十川下流域に比べ少ないが、弥生時代の遺跡は**18**を数え、割合からすると多くなる。また銅矛出土地周辺に弥生時代の遺跡が集中するのが特徴である。これらの遺跡の中には弥生時代中期～後期にかけての標式土器である、神西式土器の出土した神西遺跡がみられる。

次に銅矛祭祀についてであるが、銅矛祭祀は大陸文化の伝播の後に始まった、農耕（特に水田耕作）を生業とする人々の祭りであったと考えられる。出土した銅矛は埋納したとみられる状態のものが多く、威信財としてではなく集団の祭りで使われたことは間違いなさだろう。農業生産力の高さが富の余剰を生み出し、それによって力を蓄えた有力者が人心掌握のために青銅祭器を求める、という構図が成り立つとすれば、両地域にみられる青銅器の偏重の要因の一つとして農業生産力の

較差が考えられるのではないだろうか。弥生時代の考古資料から両地域の農業生産力を測ることは不可能であるため、中世の文献史料を元に両地域の耕作面積を大まかにではあるが割り出すことにした。資料には全県下的に行われ、総合性の高い長宗我部地検帳を中心に用いた¹¹⁰²⁾。

現在の中村市の大部分を占める幡多郡中村郷・山田郷と、現在の窪川町にあたる高岡郡仁井田郷の耕地面積は、中村郷・山田郷では田が約**1,360町**、畠は約**408町 8反**を測る。対して仁井田郷では田約**962町 2反**、畑作は気候的に適さなかったようで畠約**95町 5反**と前者に比べ少ない。ただし長宗我部地検帳で明らかになるのは田畠、屋敷地などの検地面積であり、実際の生産量についての記載は無い。長宗我部地検帳が等級と等級別地高が石盛の役割を果たしたことが特徴であることから、更に収穫量と関連するとみられる両地域の上（上々）、中、下（下々）田の等級別地高の統計をとると、中村郷・山田郷では上（上々）田：中田：下（下々）田＝**2：3：5**、仁井田郷では**1：3：6**となる。開墾されたばかりの水田は上田とはなり難く、仁井田が「新田」から転訛したと言われるように、古代末以降の新田開発により水田として利用され始めたことが、地検帳からも窺える。仁井田郷における耕地面積は、長宗我部の地検後では約**2～3倍**の伸びが認められる。ただし田一枚分の面積は狭く、総合的な耕地面積も狭い。等級からみても下田が**6割**を占め、中世段階においても収穫量は低かったことが窺える。

また山田郷森沢村（現中村市森沢）の場合は、田一枚分の面積に分、勺などの細かい単位が認められず、代の単位でも**10代**、**20代**などといった端数のない面積のものが比較的顕著であった。こういった傾向は上田・中田に多く見られ、中村郷（旧中村町周辺）でも同様に看取できる。

以上のことから、中世においては四万十川上流域より下流域のほうが米の収穫量は優勢であったことは明らかである。中世にみられる両地域の較差が、そのまま弥生時代に適応できるかどうかは不明であるし、収穫量の高低だけでは測れない付加価値が存在したのかもしれない。しかし単に農業生産力の高い地域が青銅器の集中地域とはならないということが想定できる。

ただし上の収穫量の対比は風水害の無い場合に限ってのことであり、その年の自然状況によっては収穫量の較差も縮まった可能性もある。四万十川流域では長年水との戦いを強いられてきた。中村市では古くは万治元年（**1658**）**9月16、17日**の大風雨洪水によって幡多郡の田地約**8,000石**が被害を受けたことが『御家年代略記』に記されている。また寛文**6年**（**1666**）**8月4、11、15日**の洪水によって、中村の田畑**3万石**が被害を受けている（『徳川実紀』）。またこれほどの大被害ではないものの、洪水は度々付近の集落を襲ったとみられ、**1658年**以前にもこのような被害はあったはずである。弥生時代後期から四万十川下流域の洪水多発地帯でみられる、祭祀行為の意図するところも無関係ではないだろう。

(3) 古墳時代

古墳時代に入ると具同中山遺跡群、古津賀遺跡を中心に、多くの祭祀遺構が検出されることとなる。それらの多くは中筋川、後川といった四万十川支流の川沿いに立地しており、いずれも近年まで洪水被害を受けた地域である。

具同中山遺跡群では**4世紀～6世紀**を中心に、多くの祭祀跡とされる遺構がこれまでの調査で

確認されている。これらの祭祀について出原恵三氏は『考古学研究』の中で、祭祀形態をⅠ～Ⅴ類に分類されている¹³⁾。出原氏は5世紀後半を境に形態のあり方に大きな差異があるとし、Ⅰ類の川岸の斜面・溝・川底に多量の遺物がみられる祭祀形態を古く位置づけられた。そして5世紀後半以降の祭祀についてはⅡ～Ⅴ類があり、水平面に一定の祭祀空間が設定されるという共通の特徴を持つ。そのなかでも祭祀遺物を多く用いて比較的狭隘な空間で祭祀を行うⅡ・Ⅲ・Ⅴ類と、これらに比べて広い空間を占め日常什器が遺物の主体を占めるⅣ類に分けられている。

古津賀遺跡では1986年度の調査で12箇所の祭祀跡が確認されている。古津賀遺跡での祭祀は5世紀後葉に開始され、6世紀前葉に盛行期を迎える。その後祭祀は6世紀中葉には衰退していき、後葉には終息するといった変遷を辿る。出原氏の分類に依ると古津賀遺跡の祭祀形態は第Ⅱ類、つまり祭祀空間として方形状に周囲を囲む柱を伴うものから始まる。具同中山遺跡群でみられた河川の斜面や溝・川底などに廃棄する例は認められない。

また、具同中山遺跡群より1km下流には前述の石丸遺跡があり、5世紀代のものとみられる住居跡2棟、炭化物・焼木などが検出されている。住居跡の1棟からは高杯、深鉢形土器の他、手捏土器、石製白玉が炉跡付近から出土しており、火に関する屋内祭祀の可能性が指摘されている¹⁴⁾。

(4) 古代～中・近世

具同中山遺跡群では1989、1990年の調査で、集石遺構が25基検出された。また具同中山遺跡群の対岸に所在するアゾノ遺跡では、長径1.47m、短径0.7mを測る中世の配石遺構が1基検出されている。10～15cmの河原石と須恵器片が敷きつめられ、大部分は炭化物に覆われていた。築造時期は14世紀後半から15世紀前半とみられる。ただしこれらの集石遺構・配石遺構中には墓の可能性のあるものも含まれており、祭祀と関連するものかは不明である。

具同中山遺跡群の対岸に所在する風指遺跡では、斜面堆積から緑釉陶器が出土している。これは報告者によって官制の祭祀の可能性が指摘されている¹⁵⁾。律令祭祀に使用されたと考えられる祭祀遺物には、古墳時代から続く土馬、斎串、鳥形、武器形などの他、新たに人形の木製品がみられるようになる。1996年度に調査された具同中山遺跡群Ⅰの自然流路からは、武器形木製品が、中筋川を挟んで対岸にあたる船戸遺跡の自然流路からは人形、武器形の木製品とともに呪符も出土している¹⁶⁾。

(5) まとめ

以上、縄文時代から中・近世にかけて、四万十川流域の祭祀遺跡について若干ではあるがまとめてみた。四万十川流域では、縄文時代後期～晩期まで祭祀遺構である配石遺構が認められるが、弥生時代前期から中期にかけては祭祀の有無自体が不明瞭となる。弥生時代前期は新しい文化の受容期であり、中期には高地性集落が出現するなど、社会的に不安定な時期にあたる。祭祀の不明瞭さの背景には、こういった社会的な変容があったと考えられる。弥生時代後期になると南四国では青銅器を用いた祭りが現われる。ただし銅矛祭祀の行われた場所や、それに伴う祭祀遺物は不明である。また銅矛の埋納地については今後の課題である。次に祭祀の跡が確認されるのは

弥生時代後期からであり、この時期の祭祀形態は古墳時代のそれと類似している。弥生時代には既に祖型があった可能性が高い。

祭祀形態の変化の裏には、生産力の向上に伴う社会の発展などの要因がある。また祭祀を執り行う人物も、時代とともに変わっていったと考えられる。興味深いことにそういった変化の中で、四万十川流域では縄文時代から川辺での祭祀跡が連綿とみられるのである。

5. 具同中山遺跡群Vの位置付け

前項では四万十川下流域の遺跡にみられる祭祀の変遷についてみてきた。それでは弥生時代終末～古墳時代初頭の祭祀関連遺跡とした本調査区は、祭祀の変遷の中でどのように位置付けられるであろうか。

今回の調査では**1・2区**合わせ**34**箇所の炭化物集中とともに、遺物がまとまって出土した。遺物はその出土状況から、大まかに**12**ブロックに分けることとした。またこれら遺物集中部付近には住居跡などの掘り込み遺構は伴わず、屋外で行われた祭祀であったと考えられる。炭化物集中部に関しても堆積は薄く、居住施設に伴う屋外炉のような石組み施設も検出されていない。

遺物の集中は微高地上にあり、後背低地に落ち込むに従い遺物は全くみられなくなる。そして土壌のグライ化が著しい地点では、日常生活と関連するとみられる遺構（**SX1・2**）が検出されている。**SX1・2**の性格は明確ではないものの、この土地が祭祀のみに使用された場所ではなかった可能性がある。微高地上で出土した遺物には、一個体で検出された甕の周辺で叩石など拳大の円礫が出土する例がある。本調査区で出土している弥生時代終末～古墳時代初頭のものとみられる土器片は、他の時代のものと比較しても非常に細かな破片であることから、意図的に破砕行為が行われた可能性も考えられる。意図的な破砕とは多くの場合、祭祀行為の一つと言える。これらのことを考え合わせると、遺物集中部は生活の場ではなく、祭祀を執り行う場所であった可能性が高いのである。

次に**12**ブロックに分けられた出土遺物についてみていくと、遺物は土器、石製品、木製品、骨片などがあるが、主体となるのは土器である。土器は壺、甕、鉢、甑、高杯、手捏土器である。これらの土器の器種構成には偏りがあり、弥生時代終末～古墳時代初頭とみられる**1区**では、壺**5%**、甕**66%**、鉢**23%**、甑**3%**、高杯**2%**、手捏土器**1%**と、甕が突出して多い。今回復元図示できなかった土器片なども、甕の器壁に見られる調整痕や煤の付着から甕とみられるものが多く、甕の占める割合は更に増えるものと考えられる。一方古墳時代初頭とみられる**2区**では壺**5%**、甕**54%**、鉢**29%**、甑**2%**、高杯**5%**、手捏土器**5%**と、**1区**に比べ甕が減少し鉢が増加するのが特徴である。また微量ではあるが高杯も増加傾向にある。それでも甕が全体の**5割**に達し、甕に次いで出土点数の多いのが鉢である。また**1・2区**とも出土遺物のうち甕、鉢の占める割合は、**1区**で**9割**近く、**2区**では若干甕が減るものの**8割**を占める。祭祀遺物と言えるものは全体の**1割**にも満たず、**9割**以上は日常什器である。また炭化物集中**17**からは加飾した壺の粘土帯とみられる細片が出土しているほか、東阿波型土器など地域間交流を考える上で貴重な搬入資料も出土している。

本調査区のような器種構成は、当該期の住居跡で多く見られるものである。高知県西部地域では現在のところ住居跡が確認されていないため、県中央部の住居内出土遺物と比較してみることにする。南国市小籠遺跡の発掘調査では、弥生時代後期終末～古墳時代初頭の住居跡**16**棟が検出されている¹⁷⁾。小籠遺跡の遺構別土器組成表と比較してみると、土器組成は本調査区で支脚が見られない点以外はほとんど変わらない。特に器種構成比は弥生時代後期終末の**ST9**（壺**7.6%**、甕**51.5%**、鉢**37.9%**、高杯**3.0%**）や古墳時代初頭の**ST20**（壺**9.8%**、甕**60.7%**、鉢**27.6%**、支脚**1.8%**）と類似する点が多くみられる。また相違点としては、小籠遺跡の場合壺の比率が**32%**を超える住居跡や、甕を数量的に凌駕する住居跡もみられるが、本調査区において壺は非常に希少で、鉢についても増加傾向が認められるが甕を凌ぐほどではない。また焼成前穿孔の甑が少量であるが確認される、などがあげられる。しかしながら概ね類似した構成比を示す。また同じく南国市金地遺跡の住居跡（**ST3**）からは壺、甕、鉢、甑、支脚、台石、鉄鏃が出土しているほか、春野町西分増井遺跡で検出された古墳時代初頭の住居跡（**ST8**）からも、壺、甕、鉢、高杯、手捏土器が出土している。

以上県中央部の住居跡から出土した遺物と、具同中山遺跡群Vで検出された遺物の器種構成には類似点が多く認められた。支脚の有無、構成比の較差などは、若干の時期差、地域差、あるいは遺跡の性格差などが考えられるだろう。また小籠遺跡、具同中山遺跡群Vともに、異なる性格の遺構から手捏土器や砥石、叩石と言った遺物が出土しているのは興味深い。また**1**区の遺物集中ブロック**1**からは石庖丁が**1**点、**2**区の遺物集中ブロック**8**では基部の欠損した刺突具（あるいは木鏃）とみられる木製品が出土しており、生業と関連の深い遺物が僅かではあるが認められる。

それでは本調査区で行われた祭祀とは、どのような性格のものであったのだろうか。時代は若干異なるが、出原氏の祭祀の分類に沿って考えれば、本調査区の祭祀形態はI・IV類の折衷型と言えるだろう。まず祭祀の空間であるが、掘り込み遺構が認められないことから祭祀行為はほぼ水平面で行われており、土層堆積、検出状況からみて遺物は原位置をほとんど動いていないと考えられる。これはIV類の特徴であるが、本調査区では祭場としての明確な空間の存在は確認できなかった。ただし**2**区の第Ⅲ～Ⅳ層では、遺物集中部から若干離れた場所に**20～55 g**と比較的大きさの揃った円礫の集中が確認されている（小礫集中**3**）。これらの円礫はもともと遺跡内にあったものではなく、河原などから拾ってきたものと考えられる。つまりこれらの石は、選別され人の手によって持ち込まれた可能性が高いのである。祭祀の場で出土したことを考え合わせると、何らかの祭祀行為に使用されたと言えるだろう。この円礫集中**1～3**は遺物の集中部とはやや離れていることから、一つの祭祀空間を形成していた可能性はある。また器種構成からみると本調査区出土遺物のうち、祭祀と関連する土器や祭祀遺物は**1**割にも満たず、日常什器で占められていることがあげられる。これはI類、IV類にみられる共通の特徴である。

これらの点から具同中山遺跡群の本調査区内では、古墳時代初頭から出原氏のIV類に類似した祭祀形態が現われていると言えるのではないだろうか。そして遺跡の立地条件、遺物の出土状況、出土遺物からみて、本調査区で行われた祭祀は広義の農耕祭祀と言えるだろう。

註

- (1)岡本健児『郷土考古学叢書 2 高知県の考古学』吉川弘文堂 1966
- (2)井本葉子「高知県の祭祀遺跡について」『高知の研究 1 地質・考古篇』清文堂 1983
- (3)出原恵三「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀」『考古学研究 第36巻第4号』1990
- (4)大場磐雄編集『神道考古学講座第1巻 前神道期』雄山閣 1983
 小野真一『考古学ライブラリー10 祭祀遺跡』ニュー・サイエンス社 1982
 祭祀遺跡の定義については以上の文献を参考とした。
- (5)塚原正典『考古学ライブラリー49 配石遺構』ニュー・サイエンス社 1987
 ここでの配石遺構についての定義は、塚原正典氏の論に則り「石を配して作られた遺構の中で、祭祀目的など非日常的な目的に使用されたもの」とし、この呼び方は縄文時代についてのみ使用することとする。
- (6)岩谷遺跡発掘調査団『岩谷遺跡』1979
- (7)木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』高知県幡多郡西土佐村教育委員会 1993
- (8)高知県『高知県史』1968
- (9)中村市『中村市史』1969
- (10)岡本健児「高知県発見の銅矛について」『高知の研究 1 地質・考古篇』清文堂 1983
 高知県『高知県史』1968
- (11)示野昇編『長宗我部地検帳 幡多郡中』高知県立図書館 1965
 示野昇編『長宗我部地検帳 高岡郡下の二』高知県立図書館 1964
- (12)『角川日本地名辞典 39高知』角川書店 1986
- (13)同註(3)
- (14)同註(2)
- (15)出原恵三・松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡 アゾノ遺跡』高知県教育委員会 1989
- (16)松田直則・伊藤強・山崎正明・武吉眞裕・竹村三菜『具同中山遺跡群Ⅰ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
 出原恵三・松田直則・曾我貴行・坂本憲昭・武吉眞裕・竹村三菜『船戸遺跡』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996
- (17)出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『小籠遺跡Ⅱ』財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996
- (18)江戸秀輝・前田光雄・松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群 第二分冊』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992

付論 1

具同中山遺跡群Vの自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

具同中山遺跡群Vは中筋川左岸に立地し、古墳時代の河川祭祀で注目される具同中山遺跡群の北西部に位置する。今回の発掘調査区は微高地から低地へ落ち込み始める部分に位置する。発掘調査の結果、微高地にあたる**1～2区**東部では弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が面的に確認されており、祭祀跡の可能性が考えられている。また、低地にあたる**2区**西部では畦畔に用いたと考えられる木材の出土などから水田域としての土地利用状況が推定されている。

今回の自然科学分析調査では、当時の低地の土地利用状況や環境に関する情報を得ることを目的として、低地で珪藻分析と植物珪酸体分析を実施する。また、祭祀跡から出土した炭化物について炭化材同定と灰像分析を行い、燃料材として利用された植物の種類について検討する。

1. 低地の土地利用状況に関する検討

1-1. 試料

調査地点は、**2区**西部の**SX1・SX2**である。**2区**西部では下位に木道や基礎部に利用されたと考えられる木製品を伴う畦畔がみられ、上位には畦畔の影響を受けて酸化鉄が集積したと見られる溝状の**SX1・SX2**が検出されている。**SX1・SX2**は、調査区の南部で直交した状態にある。このような発掘調査所見から、弥生時代後期には今回の調査区が具同中山遺跡群の北西縁辺部にあり、後背湿地では水田稲作、微高地上では河川祭祀や農耕に関連した祭祀が行われた可能性が指摘されている。

SX1・SX2の土層断面には粘土やシルトを主体とした堆積物がみられ、含有物の様子や層相から大きく第Ⅰ層～第Ⅶ層に区分される。このうち第Ⅳ層は水田とみられる層、第Ⅱ層には酸化鉄が濃集している。分析試料は、**SX1・SX2**の土層断面から採取された**18点**である（表1）。この中から、珪藻分析では水田層とみられる第Ⅳ層を挟む**4点**、および第Ⅱ層の酸化鉄濃集部より採取された**1点**の合計**5点**を選択した。植物珪酸体分析では、水田層前後の土層を複数地点で検討するために**17点**を選択した。（図版第54、55図参照）

1-2. 分析方法

(1)珪藻分析 試料を湿重で約**7 g** 秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥した後、プリウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は光学顕微鏡で油浸**600倍**あるいは**1000倍**で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻の半分以上が残存するものを対象に**200個体**以上を同定・計数する。種の同定では、Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b)、Krammer (1992)、Reichardt (1995)、

表1 1・2区の分析試料

試料 番号	調査 区名	遺 構	位 置	層 位	調査項目				備 考
					D	P O	炭	灰	
1	2区	SX 1	東	第Ⅱ層		●			炭化物の混入
2	2区	SX 1	東	第Ⅲ層		●			炭化物の混入
3	2区	SX 1	東	第Ⅳ層		●			水田面？
4	2区	SX 1	西	第Ⅱ層		●			炭化物の混入
5	2区	SX 1	西	第Ⅲ層		●			炭化物の混入
6	2区	SX 1	西	第Ⅳ層		●			水田面？
7	2区	SX 1	西	第Ⅳ層		●			水田面？
8	2区	SX 2		第Ⅲ層	●	●			斑状
9	2区	SX 2		第Ⅳ層	●	●			水田面？
10	2区	SX 2		第Ⅴ層	●	●			斑状
11	2区	SX 2		第Ⅵ層	●	●			炭化物の混入
12	2区	SX 2		第Ⅶ層		●			炭化物の混入
13	2区	SX 2		第Ⅴ層		●			斑状
14	2区	SX 2		第Ⅵ層		●			炭化物の混入
15	2区	SX 2		第Ⅶ層		●			炭化物の混入
16	2区	SX 1~2		第Ⅲ層		●			斑状
17	2区	SX 1~2		第Ⅳ層		●			水田面？
18	2区	SX 1		第Ⅱ層	●				酸化鉄の沈着が著しい
19	2区	祭祀跡	T21周辺				●		炭化材
20	1区	祭祀跡	T 1					●	炭化物の混じる土壌
21	1区	祭祀跡	T18					●	炭化物の混じる土壌
22	2区	祭祀跡	T23					●	炭化物の混じる土壌
		合 計			5	17	1	3	

※炭化物集中は便宜上Tと略す。

Lange-Bertalot & Metzeltin (1996)、Lange-Bertalot et al. (1996)、Metzeltin & Witkowski(1996)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示し、環境指標種については内容を示す。

(2)植物珪酸体分析

湿重 5 g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W，250KHz，1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を含む組織片について、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表および組織片と植物珪酸体群集図で示す。

1-3. 結果

(1) 珪藻分析

結果を表 2 に示す。

各試料からの産出個数は0~6個体と少なく、珪藻化石の破片が若干産出するに過ぎない。試料番号10（第Ⅴ層）・11（第Ⅵ層）では、水生珪藻が認められる。

表 2 2 区 SX1・SX2 の珪藻分析結果

種 類	生 態 性			環 境 指標種	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層
	塩分	pH	流水		18	8	9	10	11
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	—	—	—	1	2
Achnanthes cf. inflata (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	T	—	—	—	—	2
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalo	Ogh-ind	al-il	ind		—	—	—	—	1
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB, S	—	—	—	—	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	—	—	1	2	—
海水生種合計					0	0	0	0	0
海水?汽水生種合計					0	0	0	0	0
汽水生種合計					0	0	0	0	0
淡水生種合計					0	0	1	3	6
珪藻化石総数					0	0	1	3	6

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性
Ogh-ind : 貧塩不定性種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性
al-bi : 真アルカリ性種
al-il : 好アルカリ性種

C.R. : 流水に対する適応性
r-ph : 好流水性種
ind : 流水不定性種
l-ph : 好止水性種

環境指標種

S : 好汚濁性種 U : 広適応性種 T : 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T. 1995)

R : 陸生珪藻 (RA : A 群, RB : B 群, 伊藤・堀内, 1991)

(2) 植物珪酸体分析

結果を表 3、図 1 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また、検出個数の少ない試料も見られる。栽培植物のイネ属は各層から検出され、この中には葉部に形成される短細胞列もわずかに認められる。検出個数は概して少ないが、水田面の可能性が指摘される SX1~2 の試料番号17（第Ⅳ層）、あるいは酸化鉄の濃集する SX1 東の試料番号 1（第Ⅱ層）では、機動細胞珪酸体の検出個数が多い。

各層からは、イネ属の他にタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出されるが、その中ではタケ亜科の産出が顕著である。

1-4. 考察

2 区西部の SX1・SX2 の埋積物からは、珪藻化石はほとんど検出されなかった。植物珪酸体は保存状態が悪かったものの比較的多くの化石が確認された。その中ではタケ亜科が卓越していた。タケ亜科の植物珪酸体は、それ以外のイネ科植物の珪酸体に比較して風化に強く、また個体あたりの生産量が多いことがこれまでの研究から指摘されている（近藤ほか, 1986 : 杉山ほか, 1986）。したがって、今回のタケ亜科の卓越は、保存状態が悪かったことを考慮すると、他のイネ科植物

表3 2区SX1・SX2と祭祀跡の植物珪酸体分析結果(1)

種 類	SX1東			SX1西			SX2										SX1～2中			T 1	T 18	T 23	
	1 第Ⅱ層	2 第Ⅲ層	3 第Ⅳ層	4 第Ⅱ層	5 第Ⅲ層	6 第Ⅳ層	7 第Ⅳ層	8 第Ⅲ層	9 第Ⅳ層	10 第Ⅴ層	11 第Ⅵ層	12 第Ⅶ層	13 第Ⅴ層	14 第Ⅵ層	15 第Ⅶ層	16 第Ⅲ層	17 第Ⅳ層	20	21	22			
イネ科葉部短細胞珪酸体																							
イネ族イネ属	2	1	—	2	—	1	2	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—			
タケ亜科	19	24	280	280	16	240	390	410	54	197	208	164	215	219	150	271	22	8	157	180			
ヨシ属	—	—	1	2	2	2	4	2	—	1	2	—	—	2	—	4	1	—	2	—			
ウシクサ族コブナグサ属	—	2	—	—	—	—	1	2	4	—	—	—	1	1	2	—	1	—	—	—			
ウシクサ族ススキ属	2	—	5	3	—	7	10	8	1	4	6	—	4	5	5	6	3	3	2	12			
イチゴツナギ亜科	6	6	—	—	3	2	—	—	7	2	2	3	1	2	27	2	3	5	1	5			
不明キビ型	17	16	47	49	17	60	93	66	26	29	33	16	29	46	47	43	13	12	20	34			
不明ヒゲシバ型	1	—	8	6	1	5	14	20	—	6	4	8	4	4	11	12	1	1	5	3			
不明ダンチク型	4	7	25	16	11	28	39	61	12	30	22	62	31	40	40	41	15	10	45	32			
イネ科葉身機動細胞珪酸体																							
イネ族イネ属	20	8	2	1	3	2	1	—	3	—	—	1	1	—	3	1	11	5	—	—			
タケ亜科	46	34	141	93	16	89	85	119	22	114	122	36	154	105	29	111	41	30	48	101			
ヨシ属	—	—	1	—	1	1	1	—	—	1	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—			
ウシクサ族	2	—	5	5	—	4	8	4	—	8	10	—	9	8	—	3	—	1	—	—			
不明	32	19	10	12	6	15	16	27	5	12	6	4	17	13	5	10	19	12	10	7			
合 計																							
イネ科葉部短細胞珪酸体	51	56	366	358	50	345	553	569	104	269	277	254	285	319	283	379	59	39	232	266			
イネ科葉身機動細胞珪酸体	100	61	159	111	26	111	111	150	30	135	138	41	181	127	37	126	71	48	58	108			
総 計	151	117	525	469	76	456	664	719	134	404	415	295	466	446	320	505	130	87	290	374			
組 織 片																							
イネ属短細胞列	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
タケ亜科短細胞列	—	—	1	4	—	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—			
ススキ属短細胞列	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
不明キビ型短細胞列	—	—	1	2	—	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			

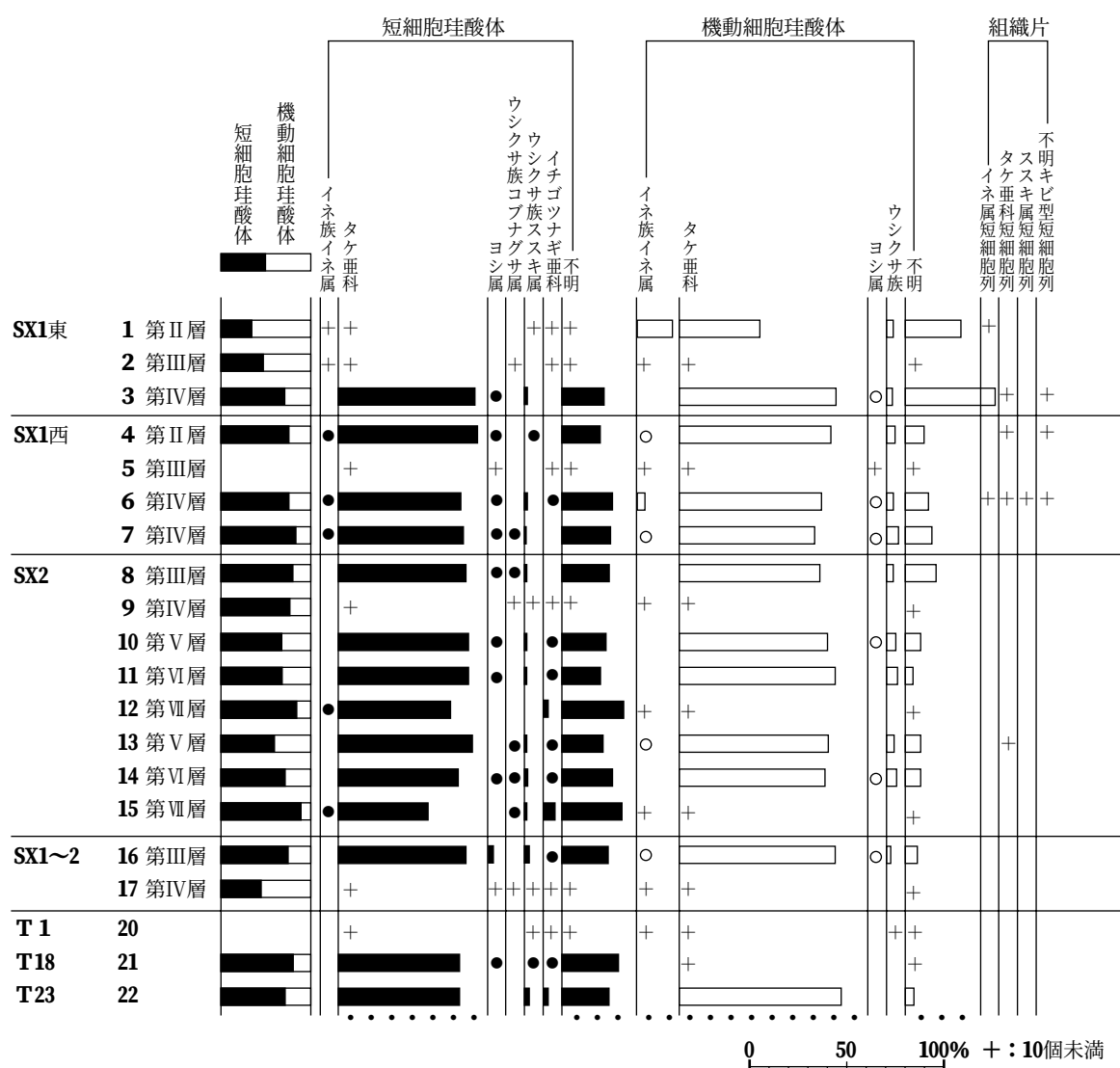


図1 SX1・2および祭祀跡の珪酸体群集と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+の記号で示す。

由来の植物珪酸体が分解消失したことで過大に評価された結果と考えられる。

栽培種のイネ属に由来する植物珪酸体が各層から検出されたが、化石数は少なかった。ただし、上記したように植物珪酸体の保存状態が悪く、タケ亜科以外の種類が過小に評価されている可能性が高い。したがって、2区西部の低地部では水田稲作が行われていた可能性がある。特に水田面の可能性が指摘されているSX1~2の第IV層、あるいは酸化鉄の濃集するSX1東の第II層では機動細胞珪酸体の検出個数が多く、その可能性は高いと思われる。また、第V層・第VI層は、水生珪藻が僅かながらも産出したことから、水成堆積物である可能性が考えられる。

なお、検出された植物珪酸体の種類から少なくとも、低地周辺にはタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族などイネ科植物が分布していたことが推定される。また、先に行った具同中山遺跡群Ⅲ-1堆積物での花粉分析結果を考慮すれば、イネ科の他にはミクリ属などの水生植物の生育が考えられる。

2. 祭祀跡出土炭化物の種類

2-1. 試料

調査対象は、1区・2区の祭祀跡と考えられる炭化物集中より出土した炭化材4点、および炭化物3点である。

2-2. 分析方法

(1)炭化材同定

木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(2)灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物遺体や植物が燃えた後の灰には珪化した組織構造が植物珪酸体列などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）。そのため、珪化組織片の産状により、当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

今回の試料を観察したところ、炭化物とともに土壌も混入していたため、前述の植物珪酸体分析の手法により珪化組織片を得ることとした。

2-3. 結果

(1)炭化材同定

炭化物集中1の2点（T1 ①，②）は、散孔材の道管配列を有する広葉樹材であるが、保存が悪いために樹種の同定には至らなかった。一方、炭化物集中21付近の炭化材1は常緑広葉樹のスダジイ、炭化材4は常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属に同定された。以下に、各種類の木材組織の特徴などを記す。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*） ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai） ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は3～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

(2)灰像分析

結果を表3、図1に示す。各試料からは、珪化組織片が全く認められない。なお、SX1・2試料と同様に保存状態の悪い単体の植物珪酸体は検出され、タケ亜科の産出が顕著である。

2-4. 考察

祭祀跡と考えられる炭化物集中より出土した炭化材には常緑広葉樹のアカガシ亜属とスダジイが認められた。いずれも堅い材質を有し、薪炭材としてよく利用される。今回の結果から、祭祀跡と考えられる炭化物集中部では、堅い材質を有する木材が燃料材として利用されていたことが推定される。

燃料材については、本遺跡の**1997**年度調査において、古墳時代初頭の祭祀跡に伴う配石遺構 **SX-10**より出土した炭化材について調査が行われている（未公表）。そこではムクノキなどの広葉樹が見られ、燃料材として選択的に利用されていた可能性が指摘されている。今回の結果は、この結果とは異なることから、用材選択に違いがあったことが指摘できる。しかし、点数が少ないため、現時点では種類構成の違いを断定することはできない。なお、確認された**2**種類は、共に暖温帯常緑広葉樹林の主構成種であり、高知県内でも海岸付近の常緑広葉樹林等で普通に見ることができる。このことから、燃料材は周辺に生育していた樹木を利用したことが推定される。

一方、灰像分析では、イネ科組織片は認められず、検出された単体の植物珪酸体組成も先述した**2**区西部の**SX1・SX2**地点と同様の産状を示したことから、局地的に供給されている種類を見いだすことができなかった。そのため、今回の試料からは燃料材として利用された植物の種類を特定することはできなかった。

引用文献

Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, **10**, p.35-47.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌**6**, p.23-45.

Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND **26**, p.1-353., BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K & Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil **1**, Naviculaceae. Band **2/1** von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, **876**p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K & Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil **2**, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band **2/2** von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, **536**p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K & Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil **3**, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band **2/3** von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, **230**p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K & Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil **4**, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band **2/4** von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, **248**p., Gustav Fischer Verlag.

近藤練三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, **25**, p.31-64.

Lange-Bertalot, H., Kuelbs, K., Lauser, T., Noerpel-Schempp, M. & Willmann, M. (1996) Dokumentation und Revision der von Georg Krasske beschriebenen Taxa. *Iconographia Diatomologica* **3**, 358p., Koeltz. -Koenigstein.

Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. (1996) Oligotrophie-Indikatoren. **800** Taxa repraesentativ fuer drei diverse Seen-Typen. *Iconographia Diatomologica* **2**, 390p., Koeltz. -Koenigstein.

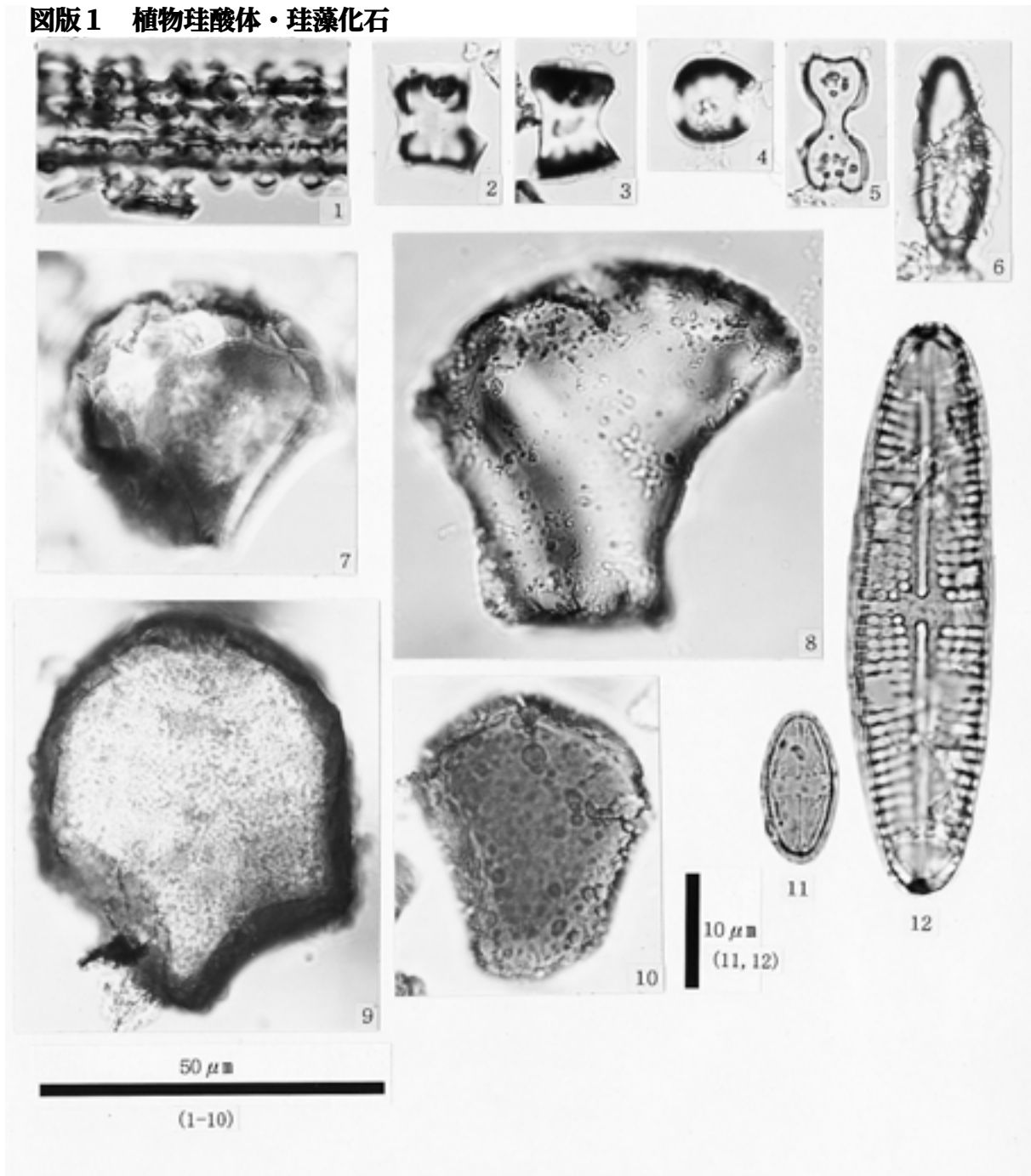
Metzeltin, D & Witkowski, A. (1996) Diatomeen der Baeren-Insel, Suesswasser-und marine Arten. *Iconographia Diatomologica* **4**, 287p., Koeltz. -Koenigstein.

パリオ・サーヴェイ株式会社 (1993) 自然科学分析からみた人々の生活(1). 慶應義塾藤沢校地 埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, p347-370, 慶應義塾.

Reichardt, E. (1995) Die Diatomeen (Bacillariophyceae) in Ehrenbergs Material von Cayenne, Guyana Gallica (1843). *Iconographia Diatomologica* **1**, 107p., Koeltz. -Koenigstein.

杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. *考古学と自然科学*, **19**, p.69-84.

図版1 植物珪酸体・珪藻化石



- | | |
|---|--|
| 1. イネ属短細胞列 (試料番号 1) | 2. コブナグサ属短細胞列 (試料番号 9) |
| 3. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号 3) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号 16) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号 7) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号 15) |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号 2) | 8. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号 3) |
| 9. ヨシ属機動細胞珪酸体 (試料番号 7) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料番号 7) |
| 11. <i>Navicula mutica</i> Kuetzing (試料番号 10) | 12. <i>Achnanthes crenulata</i> Grunow (試料番号 10) |

付論2

具同中山遺跡群V出土木製品の樹種調査結果

(株)吉田生物研究所 汐 見 真
京都造形芸術大学 岡 田 文 男

1. 試料

試料は具同中山遺跡から出土した建築土木材3点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹2種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* S. et Z.)

(遺物NO.190、208)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柁目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州（福島以南）、四国、九州（宮崎まで）に分布する。

2) ヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)

(遺物NO.203)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柁目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州（福島以南）、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊藤隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
島地 謙・伊藤隆夫「図説木材組織」地球社（1982）
島地 謙・須藤彰司・原田浩「木材の組織」森北出版株式会社（1982）
伊藤隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅳ」京都大学木質科学研究所（1995～）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）

◆使用顕微鏡◆

Nikon
MICROFLEEX UFX-DX Type 115

表1 具同中山遺跡群Ⅴ出土木製品樹種同定表

No	品 名	樹 種
190	板 状	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
208	板 状	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
203	角柱状	ヒノキ科ヒノキ属

版 圖



調査区遠景（香山寺山腹より）



調査区遠景（東上空より）

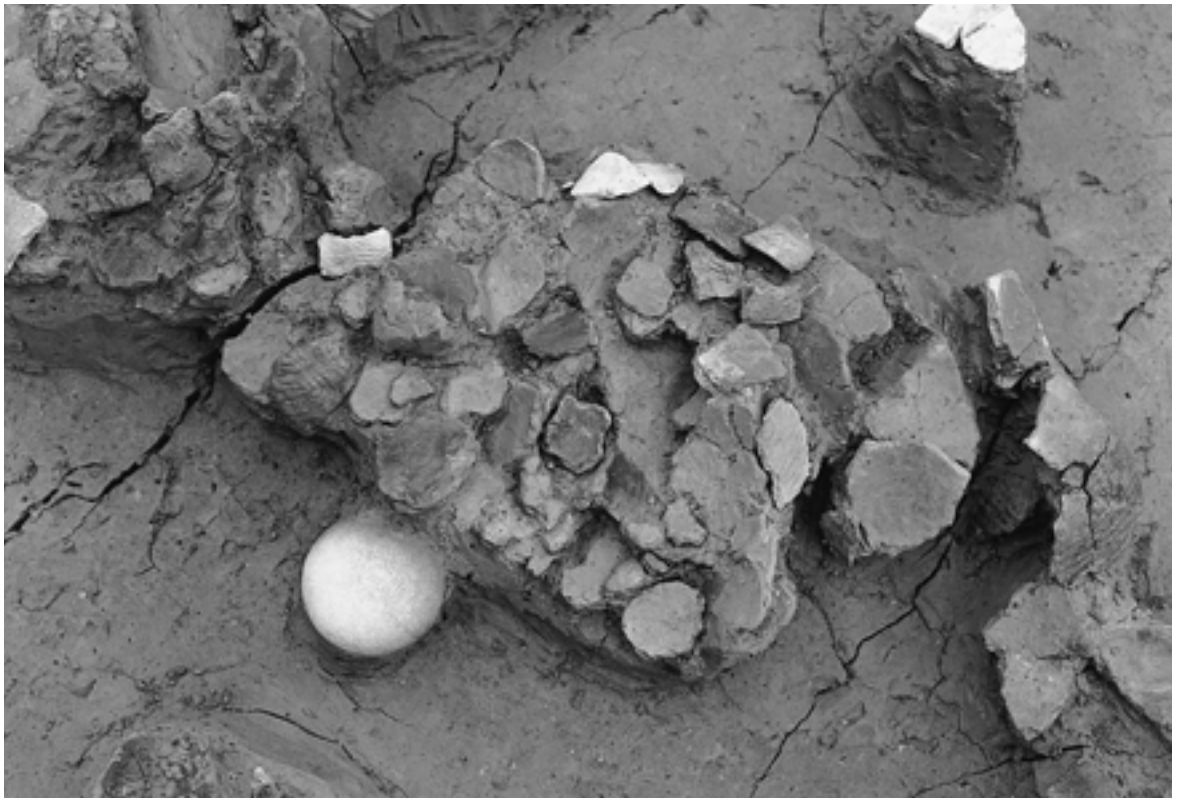
図版2



1区第XVII層遺物出土状態（西より）



1区第XVII層遺物出土状態（東より）



1区遺物集中ブロック1 (8、44)



1区完掘状態 (西より)

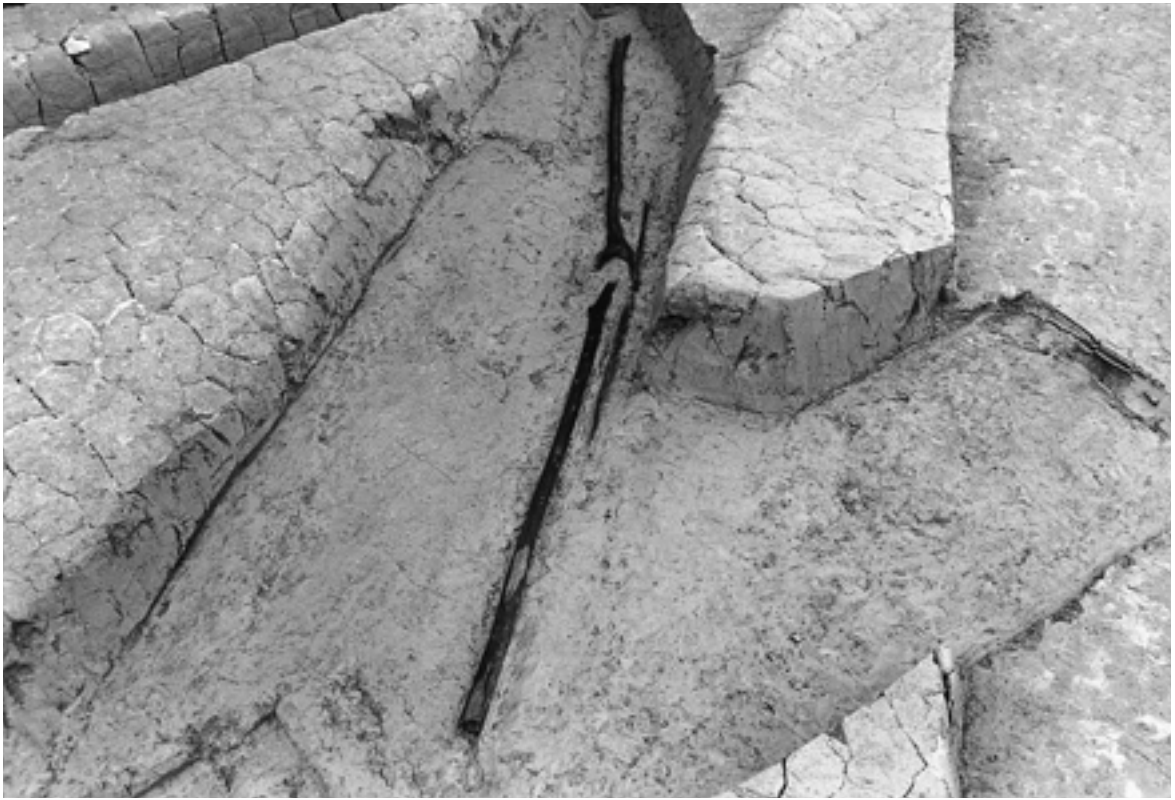
図版4



2区第Ⅲ～Ⅳ層遺物出土状態（東より）



2区第Ⅵ層遺物出土状態（東より）



2区 **SX1**木製品出土状態（南より）



2区完掘状態（東より）

図版6



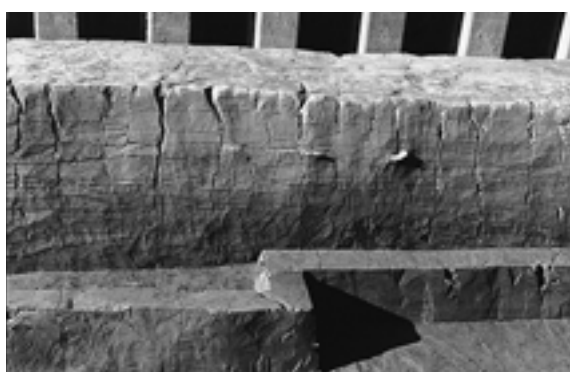
1区東壁セクション（西より）



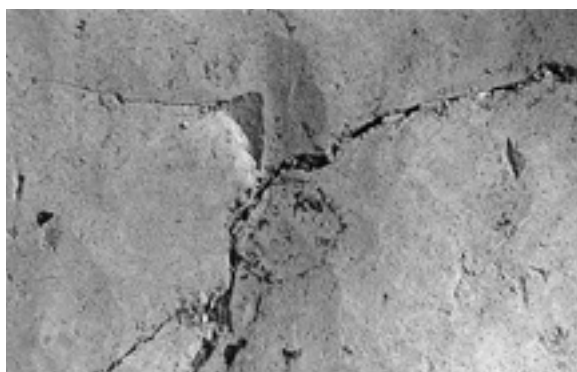
1区北壁セクション・東部（南より）



1区北壁セクション・中央部（南より）



1区北壁セクション・西部（南より）



P1検出状態（西より）



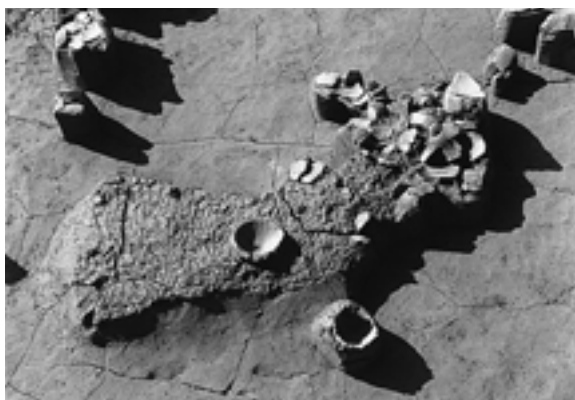
P1半裁セクション（西より）



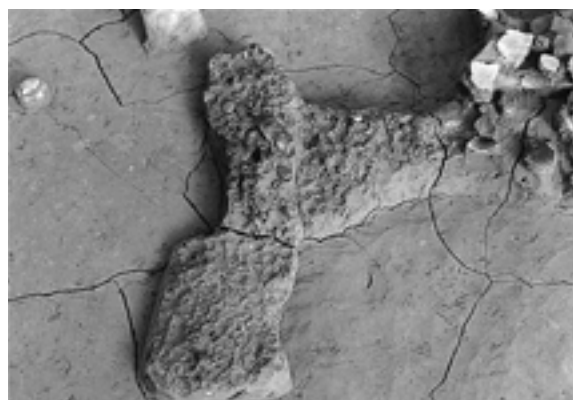
炭化物集中1（北より）



炭化物集中1半裁セクション（東より）



炭化物集中**10**（北より）



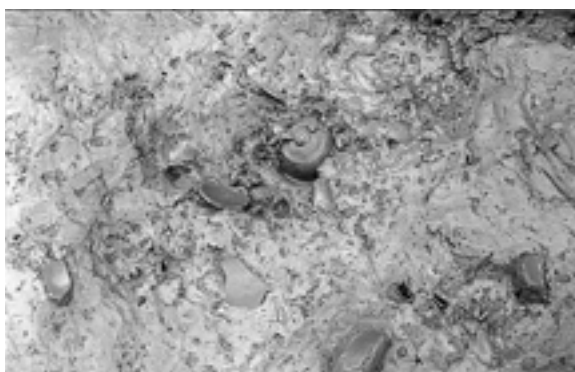
炭化物集中**15**（西より）



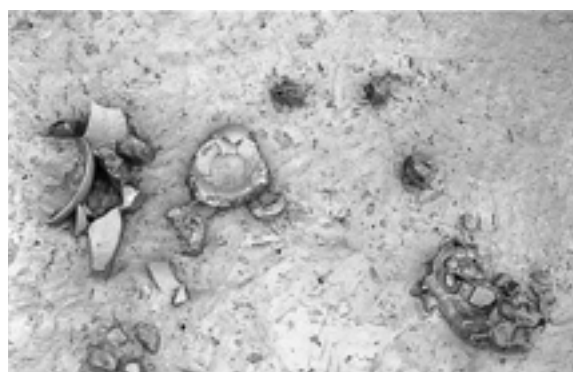
炭化物集中**11**半裁セクション（西より）



柱根検出状態（**181**）



土器集中**3**（東より）



土器集中**3**（西より）



1区第XVII層遺物出土状態（西より）

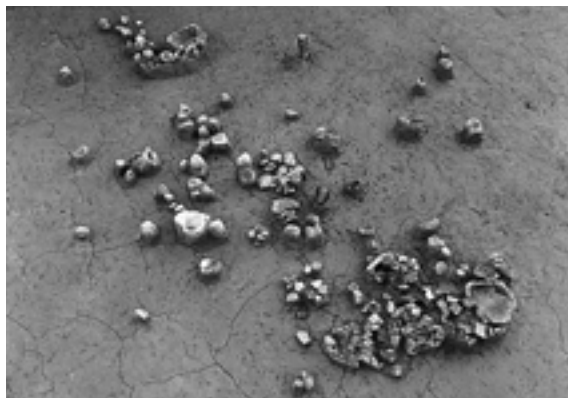


遺物集中ブロック1・全体（北より）

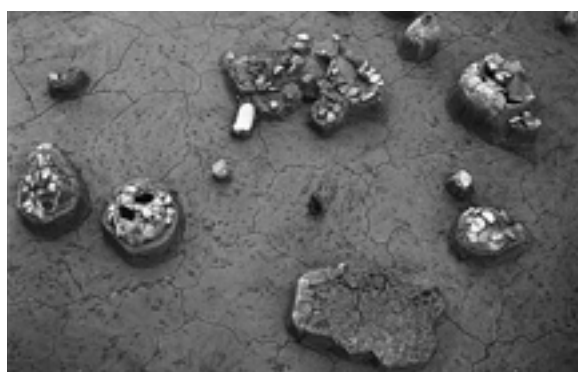
図版8



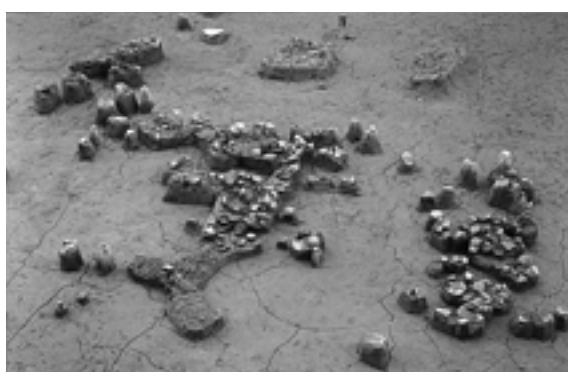
遺物集中ブロック1 (南より)



遺物集中ブロック2 (北より)



遺物集中ブロック4 (東より)



遺物集中ブロック4 (北より)



遺物集中ブロック5・全体 (南より)



遺物集中ブロック6 (北より)



1区第XXII層遺物出土状態 (西より)



1区第XXII層甕出土状態 (184)



2区北壁セクション・東部（南より）



2区北壁セクション・中央部（南より）



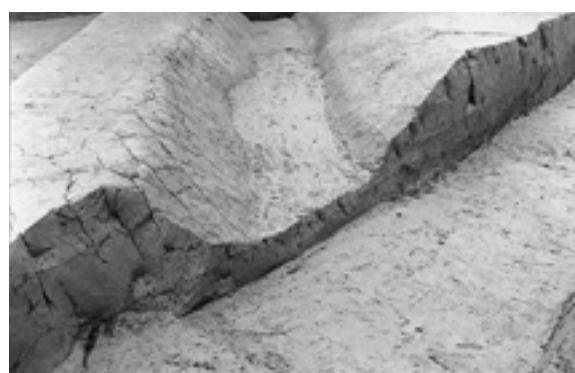
SX1検出状態（南より）



SX1・2検出状態（西より）



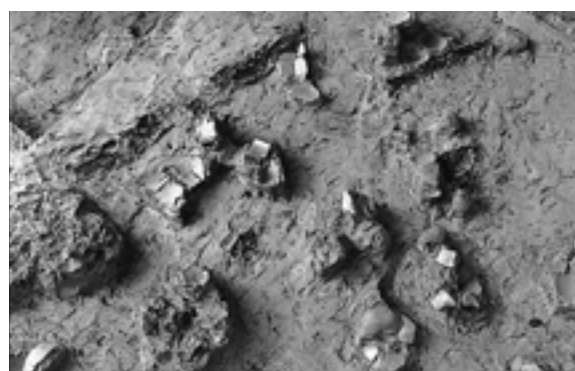
SX1・2南壁セクション（北より）



SX1～2中央トレンチ南壁セクション1（北より）



SX1～2中央トレンチ南壁セクション2（北より）

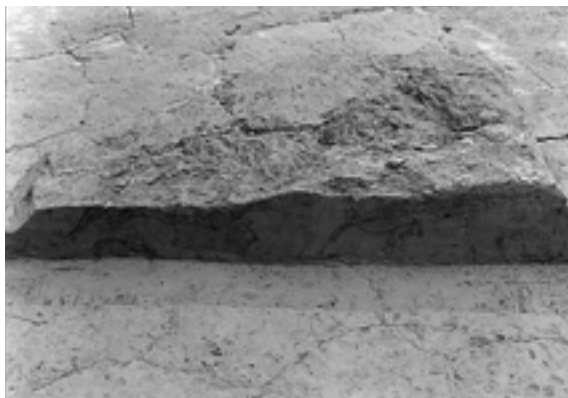


炭化物集中**21**（南より）

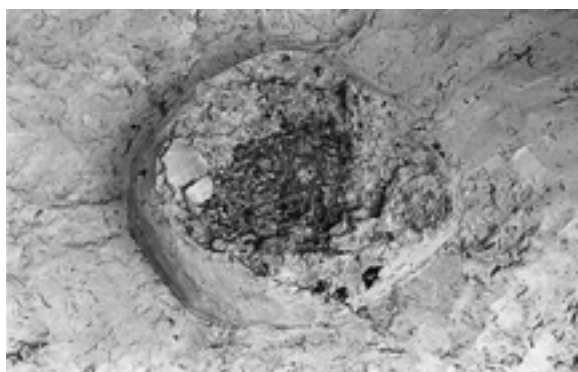
図版10



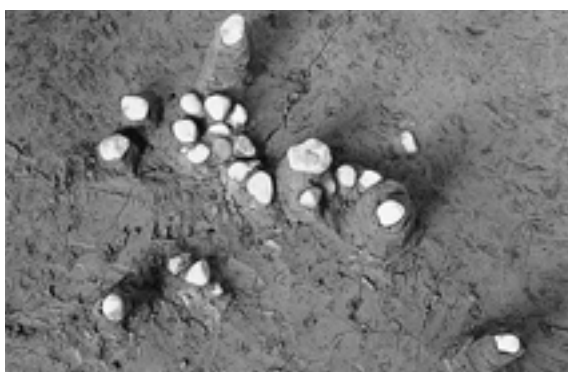
炭化物集中**22**（南より）



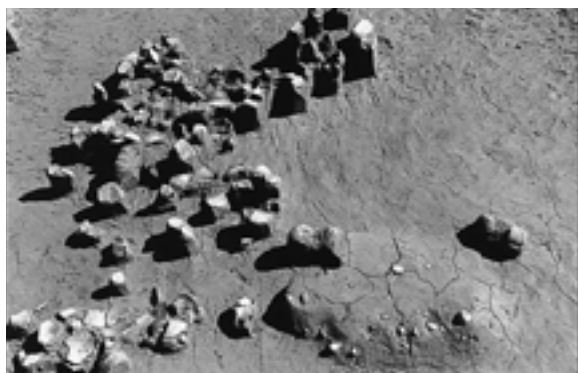
炭化物集中**22**半裁セクション（西より）



炭化物集中**23**（北より）



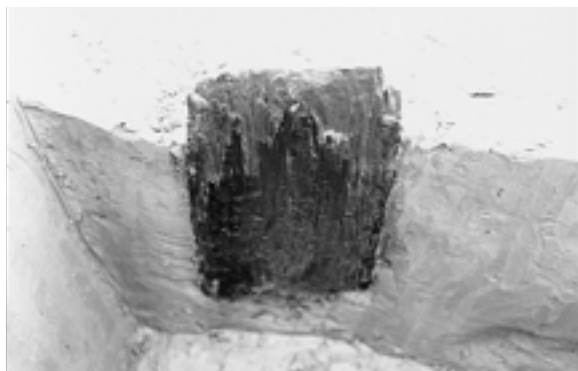
円礫集中**3**（南より）



円礫集中**4**・遺物集中ブロック**11**（東より）



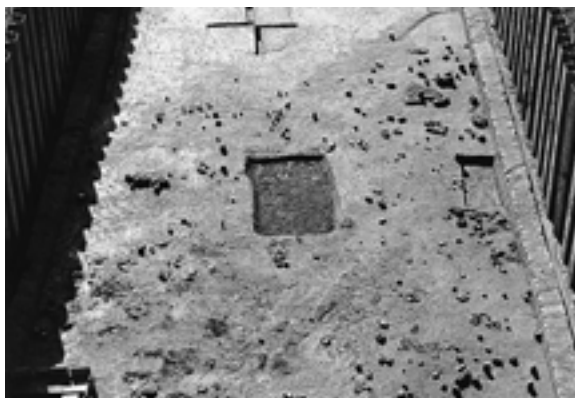
SX2木製品出土状態（**189**、**190**、**204**、**207**）



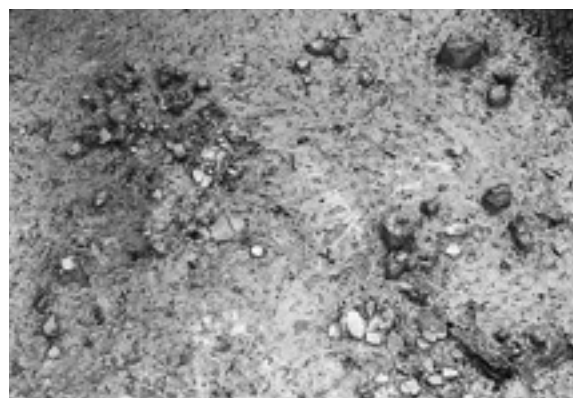
SX2木製品出土状態（**208**）



SX2杭出土状態（**200**、**203**、**204**、**207**）



2区第III~IV層遺物出土状態（東より）



遺物集中ブロック 8（東より）



遺物集中ブロック 8（南より）



遺物集中ブロック 8（東より）



石製品出土状態（260）



2区第VI層遺物出土状態（北より）

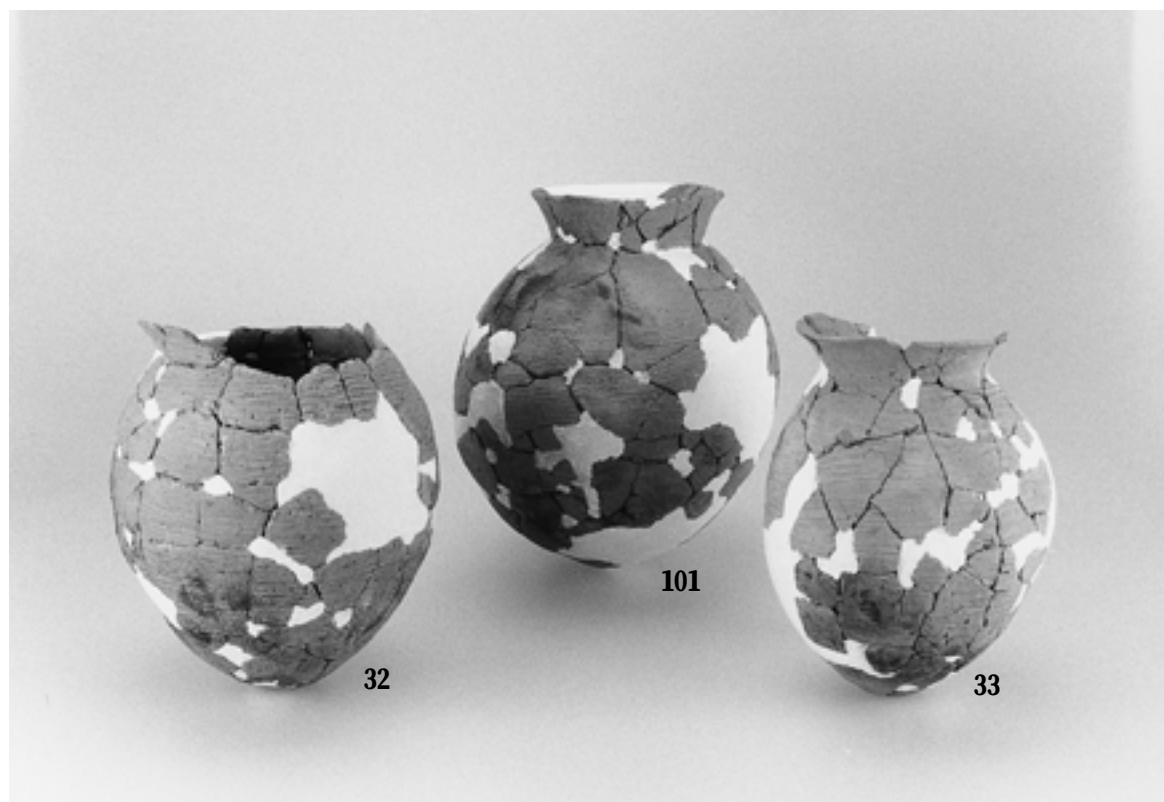


遺物集中ブロック11（北より）



SX2下完掘状態（西より）

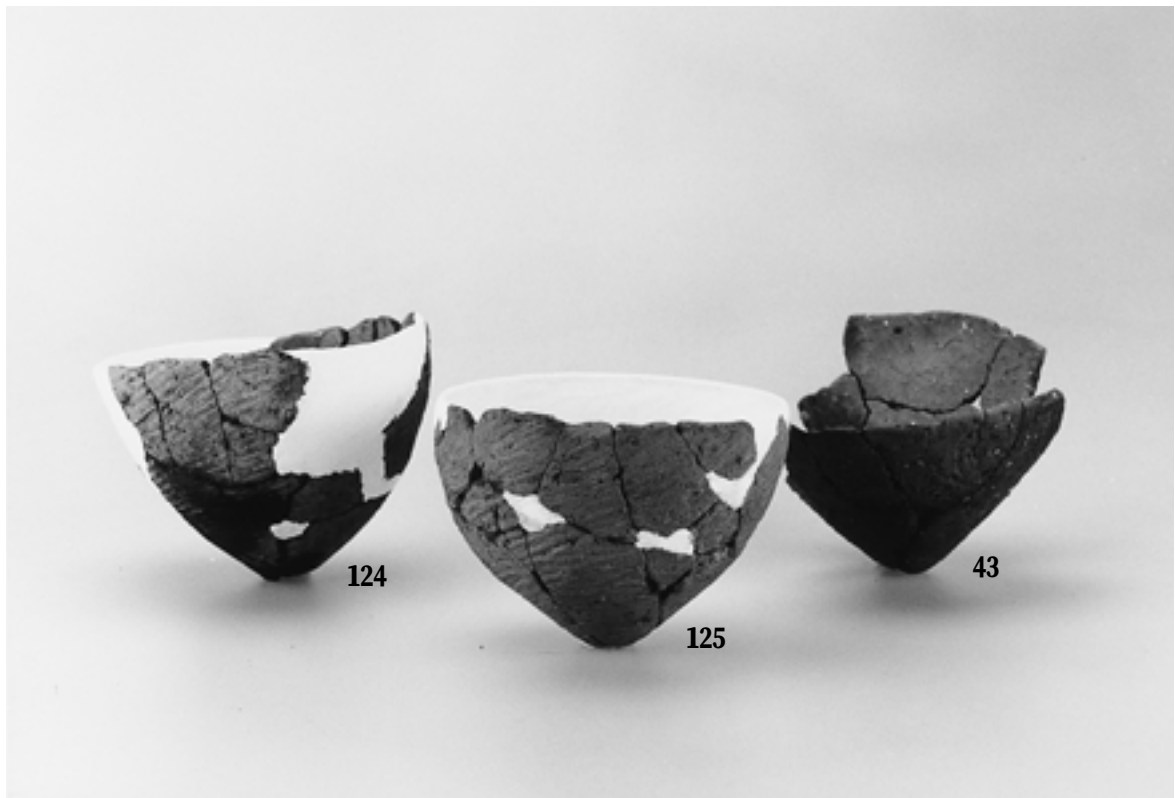
図版12



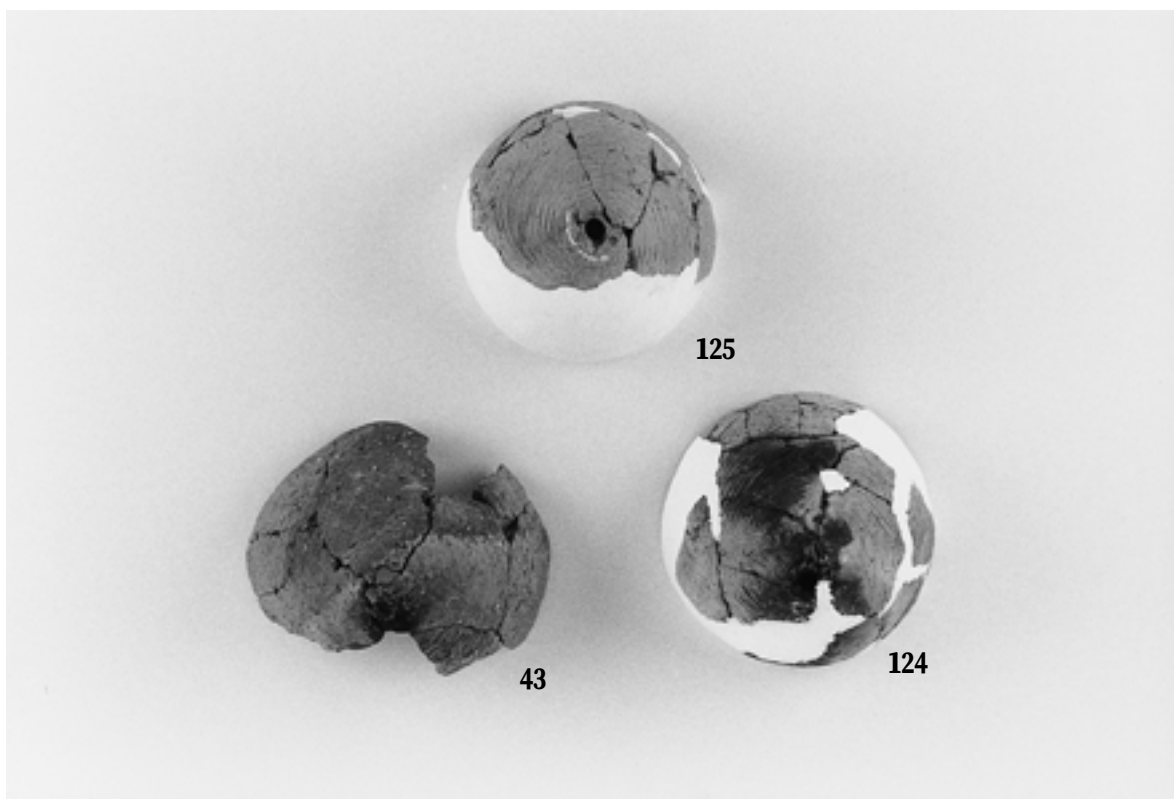
1区遺物集中ブロック出土土器（壺・甕）



1区遺物集中ブロック出土土器（鉢）

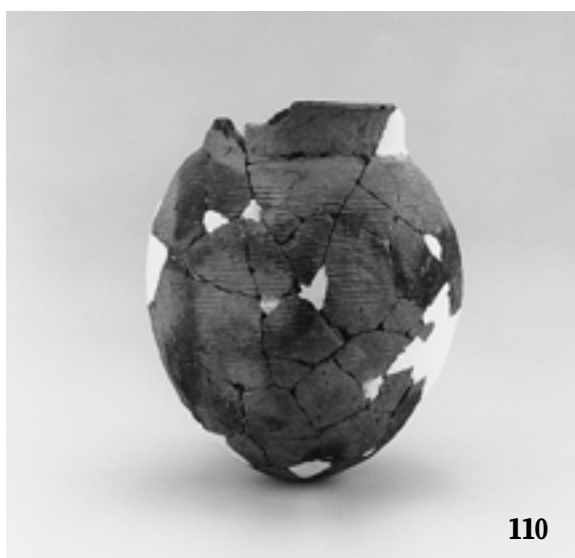
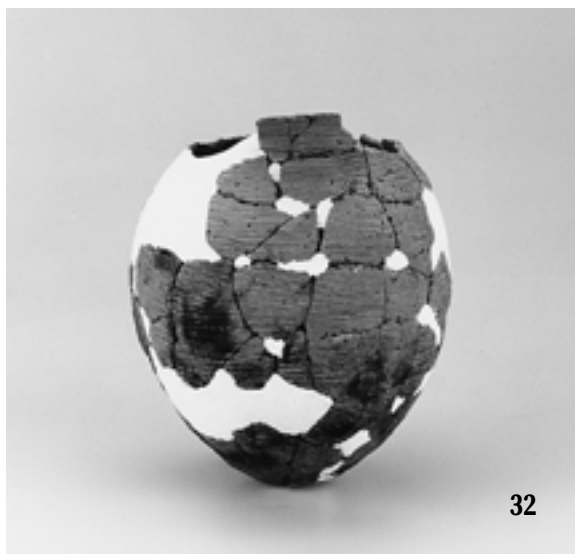
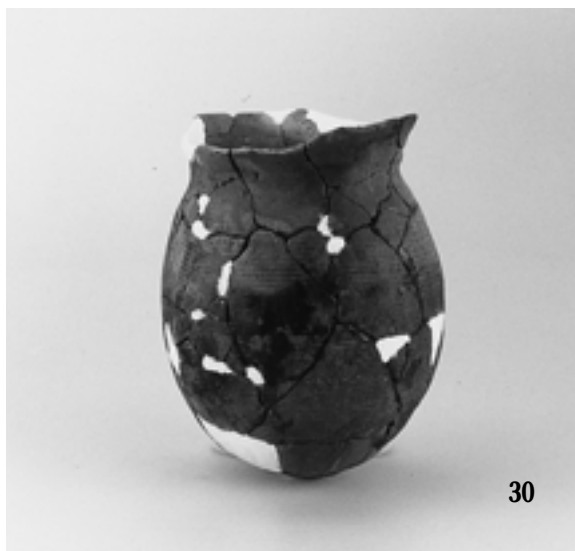
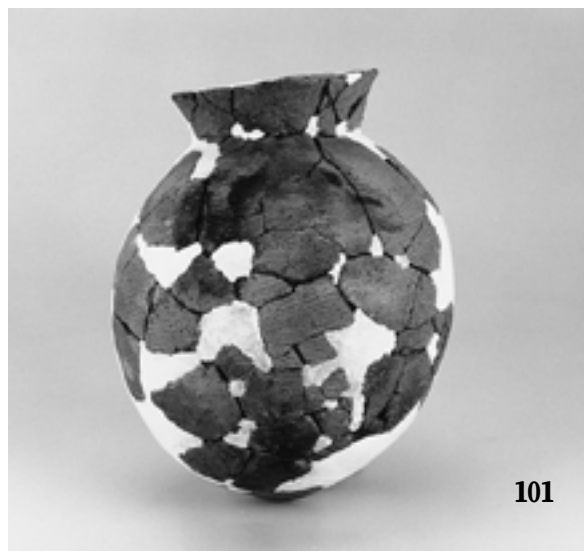


1区遺物集中ブロック出土土器（甑）



1区遺物集中ブロック出土土器（甑）

図版14



1区遺物集中ブロック出土土器（壺・甕）



55



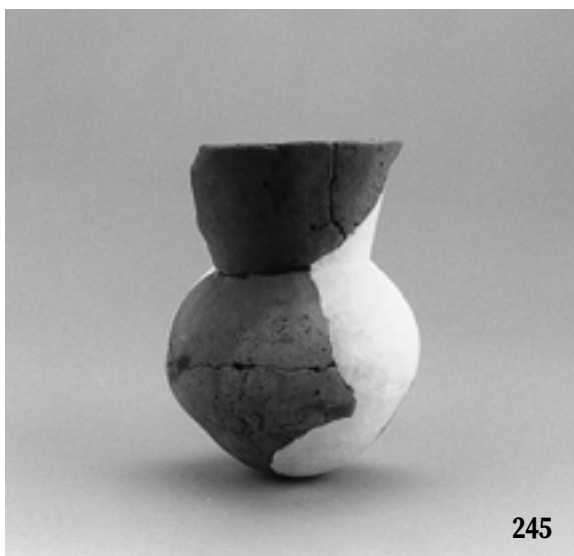
56



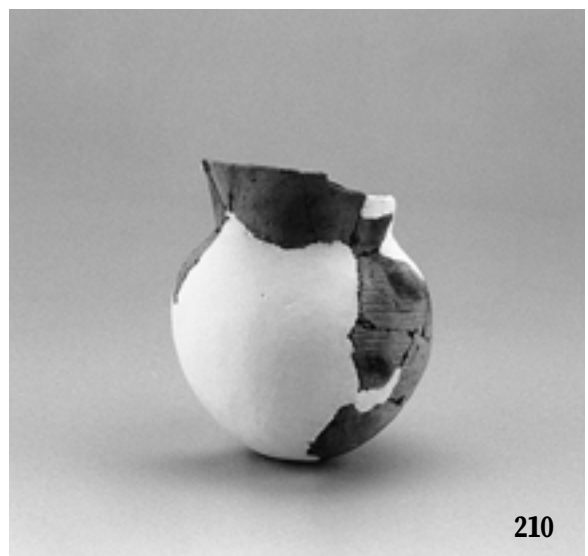
167



148

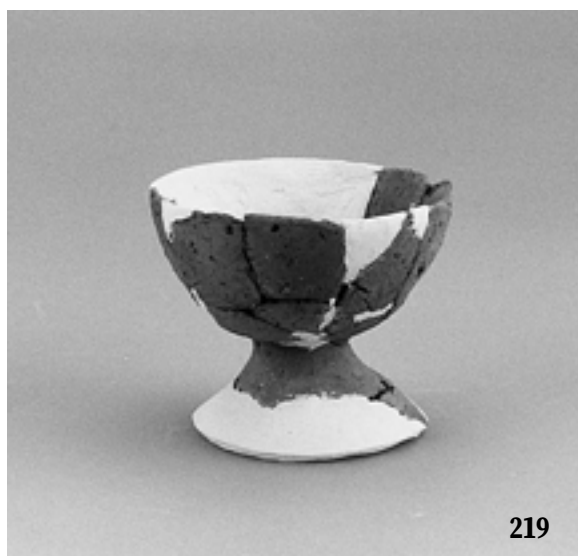
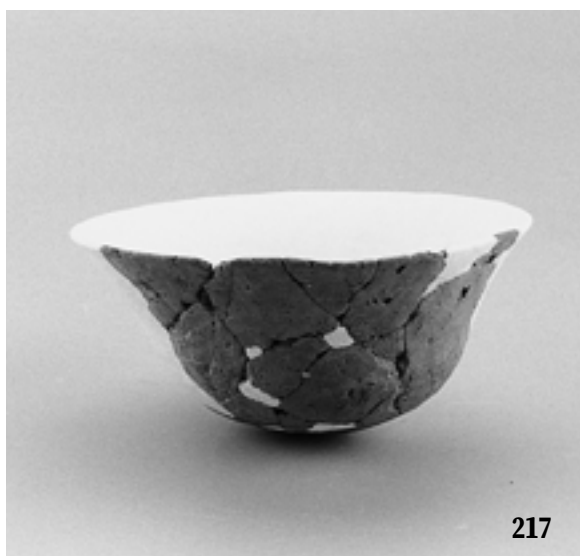
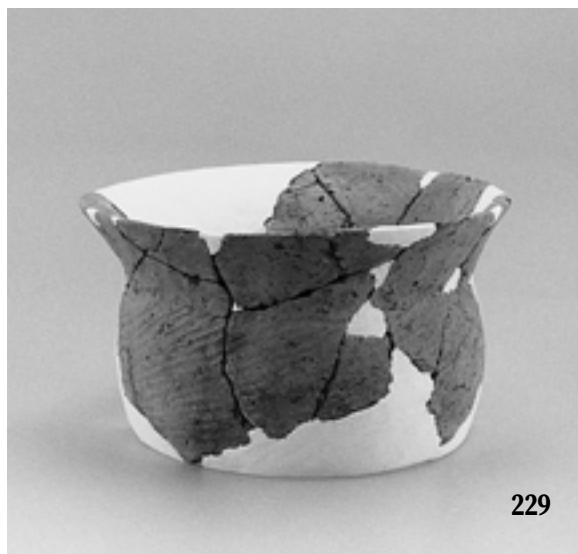
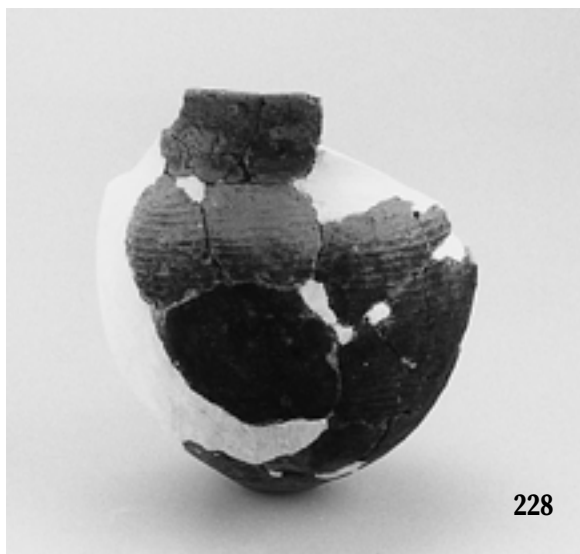
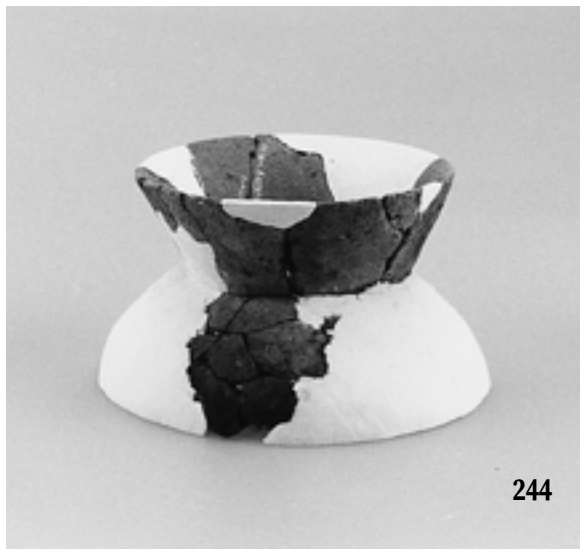


245



210

1・2区遺物集中ブロック出土土器（壺・甕）

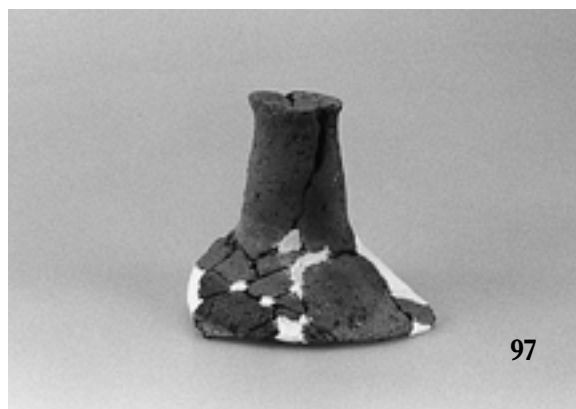
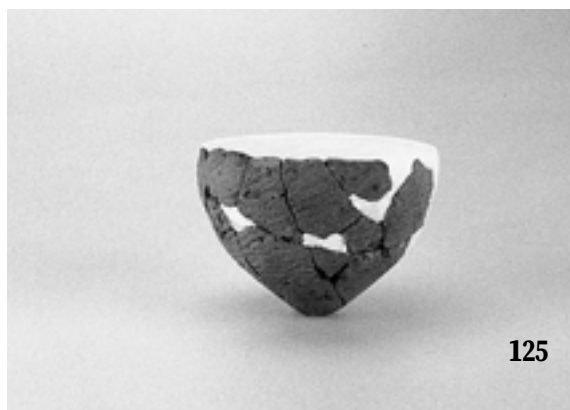
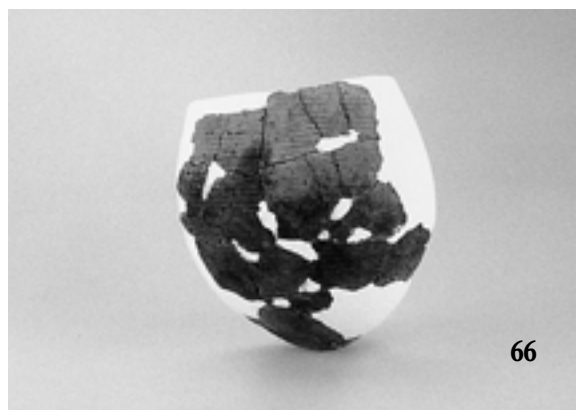
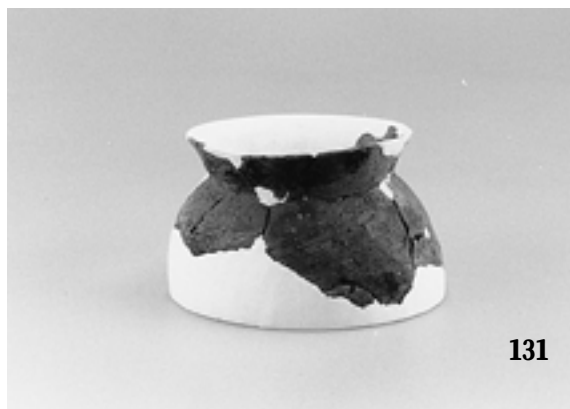


2区遺物集中ブロック出土土器（壺・甕・鉢）

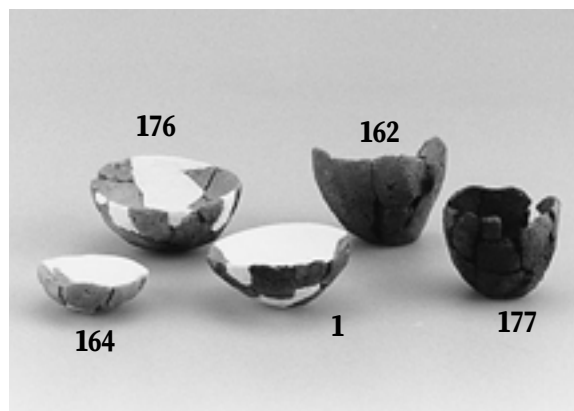
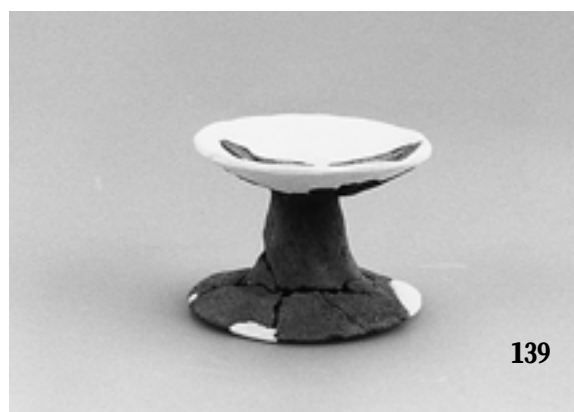
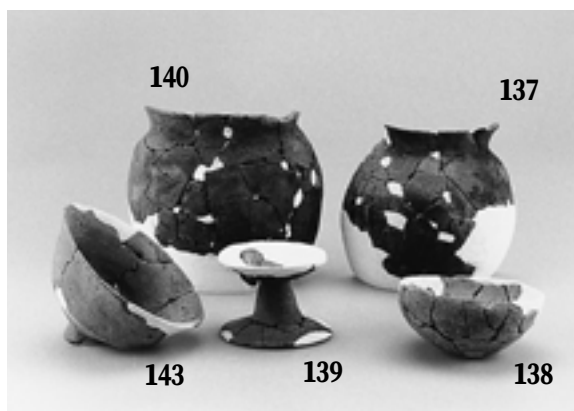


1区遺物集中ブロック出土土器（壺・甕）

図版18

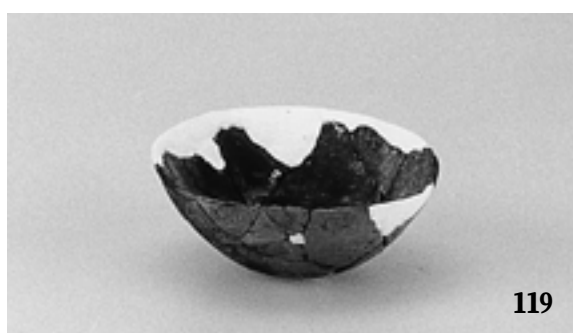
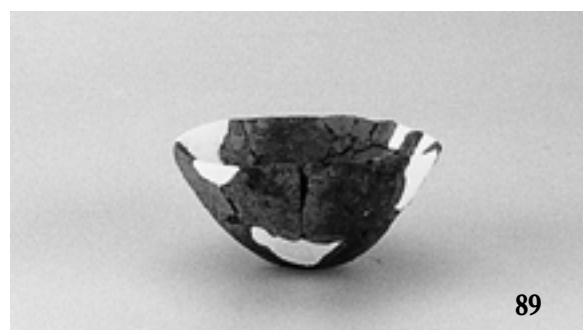


1区遺物集中ブロック出土土器（甕・鉢・甑・高杯）

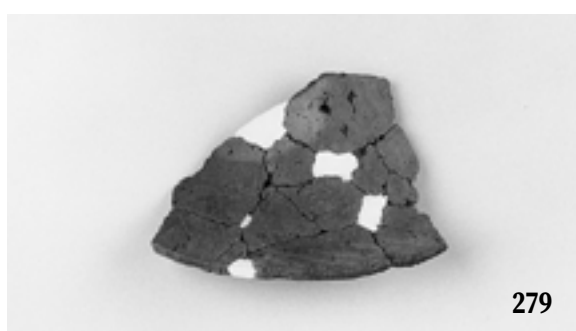
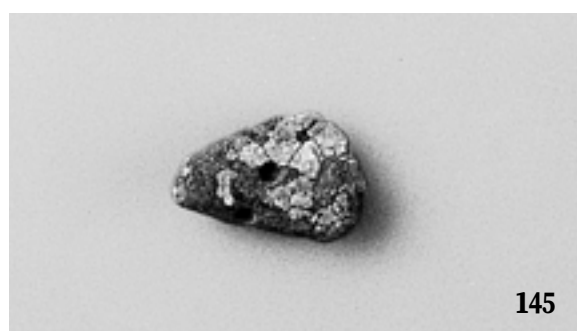
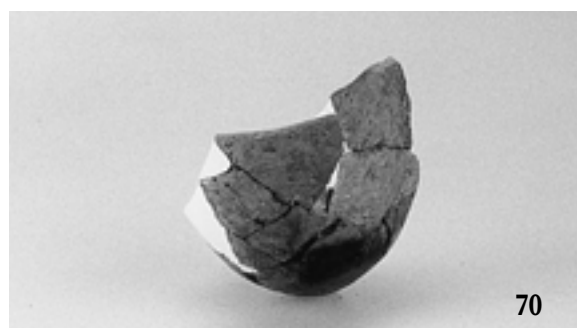
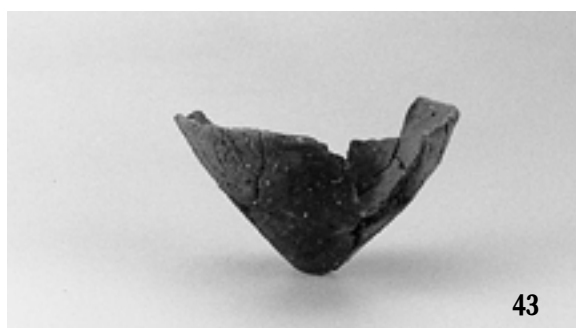


1区土器集中・第XV層出土土器（甕・鉢・高杯・手捏土器）

図版20



1区遺物集中ブロック出土土器（鉢）



1・2区遺物集中ブロック・土器集中・包含層出土遺物

図版22



224



218



216



220



239



237



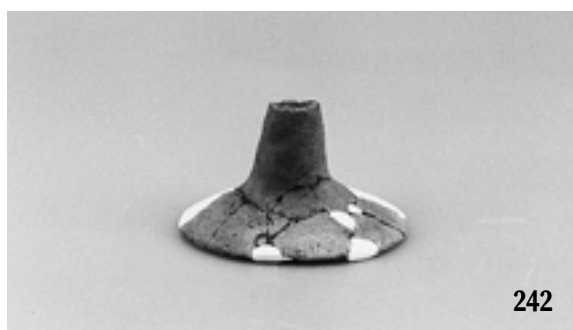
240



274



277

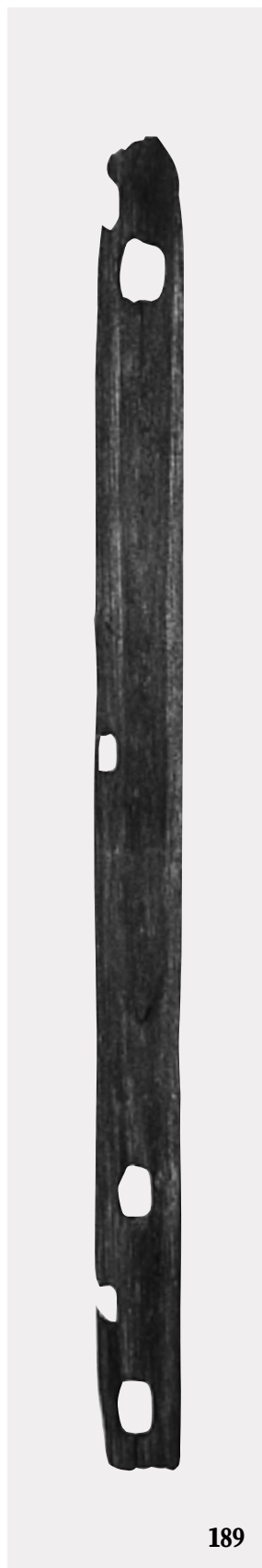


242

2区遺物集中ブロック出土土器（壺・鉢・高杯）



1・2区遺物集中ブロック・包含層出土石器





图版26



SX2出土杭



1・2区遺物集中ブロック・包含層出土木製品

報告書抄録

ふ り が な		ぐどうなかやまいせきぐんご						
書 名		具同中山遺跡群Ⅴ						
副 書 名		県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号		第58集						
編 著 者 名		小野由香						
編 集 機 関		(財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター						
所 在 地		〒783-0006 高知県南国市篠原南泉1437ー1						
発 行 年 月 日		2001年 3月16日						
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所 在 地	市 町 村	遺跡番号	。 ’ ”	。 ’ ”		m ²	
ぐどうなかやま 具同中山 いせきぐん 遺 跡 群	こう ち けん 高 知 県 なか むら し 中 村 市 ぐどうなかやま 具同中山	39207	070052	32 ° 58 ’ 28 ”	132 ° 55 ’ 09 ”	1998年 10月 1 日 ～ 1999年 3月19日	2,838m ²	県道中村 下ノ加江 線道路建 設
所収遺跡名		種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
具 同 中 山 遺 跡 群		祭祀跡	弥生時代後期 ～ 古墳時代初頭	祭祀関連遺構 {ピット 1 炭化物集中40 円礫集中 4 遺物集中ブロック12 性格不明遺構 2		弥 生 土 器 土 師 器 須 恵 器 木 製 品 石 製 品	自然堤防から後 背低地へ向かう 緩傾斜面部に祭 祀関連遺構、性 格不明遺構を確 認。	
			古 墳 時 代	土器集中 3				

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第58集

具同中山遺跡群 V

—県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書—

2001年3月16日

発 行 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印 刷 弘文印刷株式会社